ムシウタ

泉海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ムシウタ

【Ｎコード】
Ｎ８２６９Ｎ

【作者名】
泉海斗

【あらすじ】
特環に入り、戦闘能力の向上に励む佑介。
中央支部での生活を送る中で、そこの闇の核心に触れてしまう。
地下にあった巨大な繭。
そして隔離施設の謎の人物。
次々と明かされる闇。
そして佑介に襲い掛かる死黒虫の恐怖。
不死の虫との対面で死黒虫の新の正体が暴かれようとする。
執筆中『夢戻る銀槍』。

それは最高で、最悪の始まりのボーイ・ミーツ・ガール・・・。
執筆予定『夢求める勇者』プロット作成中。
『夢咆哮す悪魔』
桜架市にて現れた始まりの三匹の大喰い。
特環とむしばねがついに共闘。
そこに現れる銀蝶。
そして夢朽ちたとき、悪魔は空に向かって咆哮する。
それは最高で最悪の終末へと誘うボーイ・ミーツ・ガール・・・。
『夢狩る死神』
始まりの三匹のアリア・ヴァレイ。
最後の寝床に行き着く。
しかしそこは最強最悪の虫憑きの王・・・否死神の元だった。
少年少女たちは虫のいない明日を手にするために死神に立ち向かう。
それは最高で新たな世界の始まりを告げるボーイ・ミーツ・ガール・・・。

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　０（前書き）

まだ完結していない作品が多いですが勢いで書いてしまいました。
平行して書いていきますので、コメント・評価待ってます！！

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　０

季節は冬となり、ここ赤浜市にも雪が降り始めていた。

少年相場佑介は赤浜市の有名進学校の赤浜第一高等学校に通っていた。

防寒対策か黒のコートにマフラーを着込んでいる。

それでも吐き出す息は白い。

「おはよう佑介。今日もお早い登校だね」

後ろから背中を叩いて挨拶してきたのは。

「舞華か。おはよう。そういうお前も早いじゃないか」

幼馴染の谷岡舞華だった。

現在時刻７時３０分と登校完了時刻８時３０分にまだ１時間ある。

佑介はただ近いセンター試験の勉強をしたくて早くから図書館に向かおうとしていたのだった。

そういう舞華はすでに推薦で専門学校に合格を決めていた。

そんな彼女は幼馴染としてまだ有名大学へと進学を目指している佑介を元気付けようと毎日一緒に登校しているのだった。

そんな佑介はもともと勉強ができた。

しかしそれは自分がしたいからではなく親が教育熱心だからだった。

だからいつも逃げたいと思っていた。

しかし彼には逃げ場がなかった。

勉強机しか自分の居場所がなかった。

小さい頃から勉強をしなさいといわれ続け、それが当然だとずっと思っていたのだった。

しかしそんなある日、幼稚園のときだったか小学校への入学試験勉強をしているとき、母親からお小遣いをもらってこっそりと漫画を買いに行った。

それが当時に彼にとっての至福の時だった。

買った漫画は誰にも見つからないようにと屋根裏に隠していた。

そんなある日、買った漫画を持って帰宅していた。

するといつも通るときに見る公園で一人の女の子がぽつんとブランコに乗っていたのだ。

そんな彼らが目が会うとその子は顔に笑みを浮かべてこちらに走ってきた。

何事だろうと固まっていたら、いきなり腕をつかまれて公園に引き

込まれた。

それが佑介と舞華の出会いだった。

その時お互いに自分たちのことを話し合った。

幼かったために本当にどうでもよいこと・・・しかし彼らにとってはまた別の至福の時間だった。

佑介にとっては親以外と話す初めての相手・・・それも女の子。

彼女の話す外の世界にドンドン引き込まれていった。

それからというものこっそりと外に出ては彼らは一緒に遊んだ。

もちろん佑介は汚れるわけには行かないので遊具とかおままごとがほとんどだった。

それから高校までは同じところへは通えなかった。

それでも暇なときはあって一緒に遊んだ。

そのときは舞華の友達が一緒だったり、佑介の友達が一緒だったり。

高校は舞華が懸命に努力して合格した。

それからは一緒に登校したり、デートまがいのお出かけなどもけっこうした。

この登校もずっと続けられている。

当たり前になってきた二人。

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　０

そんな舞華はずっと佑介の大して恋心を抱いたいた。

しかし文武どちらも優れている佑介に恋心を抱いているのは舞華だけではなかった。

それにこんな次期だから告白しても重荷になるしかないのではとずっと悩んでいたのだった。

今までも何度もチャンスがあったが自信が持てずにどうしても固まっていえなかったのだ。

「今年ももうすぐおしまいだな・・・」

佑介が唐突に話しかける。

「今年も一緒に大晦日過ごすんだろ??今回はどっちに家にだっけ??」

毎年片方に家に集まって正月を過ごすのが知り合ってからの恒例行事だった。

このおかげで教育一本だった佑介の両親が柔らかくなったのは言うまでもない。

図書館に入って勉強を始める佑介。

そんな彼の横顔を見ながら舞華は専門学校から出されていた課題を

はじめる。

佑介は勉強中は音楽を聴きながらするので話しかけられないのである。

しばらくすると図書館を利用する人たちが増えてきた。

そんな後ろで下級生だろうか、女の子たちの話し声が聞こえてきた。

「ねえねえ知ってる??この前の爆発事故だけど、あれって虫によるものなんだって～」

「「え～!?まじ～??」」

虫・・・。

十年くらい前から日本に現れた謎の生物。

姿形が虫と似ているためにそういわれているのだ。

しかしその無視は少年少女たちに取り付く危険な存在らしい。

さらに取り付かれたら最後・・・特別な施設の送られて二度と普通の生活はできないらしい。

そのことから虫とは人間から忌み嫌われているのだった。

そんな虫たちと同様に噂になっているのが。

特別環境保全事務局・・・通称特環。

虫憑きを保護し、特別な施設へと搬送している組織らしい。

それらと相対する存在が。

むしばね・・・いわゆる虫憑きたちのレジスタンスだ。

そんことを考えている舞華には人には言えないことがあった。

『どうしたんだい舞華??元気がないじゃないか。もしかしてさっきの話のことかい??』

舞華の頭に響いてくる声。

その主こそ虫・・・始まりの三匹の一匹であるアリア・ヴァレイ。

舞華が受験する中学三年になったときに取り付いたのだ。

その時願ったのは。

“佑介のそばにいたい”

ただそれだけだった。

それに反応したのか、アリアが取り付いたのだった。

始めはどん底まで落ち込んだ。

まさか自分が噂の虫憑きになってしまうなどとは思わなかったからだ。

しかしアリアから色々なことを教えてもらった。

自分がいなくなると虫憑きではなくなること、その代わりにほかの人が虫憑きになるということ。

そして自分との関わった記憶はすべて忘れると言うことだ。

それを聞いた舞華は幾分から苦になったのを覚えている。

「なんでもないよアリア。大丈夫」

姿は見えないが心の中に居ることは分かる。

そんなアリアに対して笑顔を見せながら言った。

「そろそろ行くか」

佑介がイヤホンをとりながら言った。

見ると終了時刻の五分前だった。

「そうだね」

舞華も片づけをして二人で教室へと足を運んだ。

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　１

そんな日から早くも時間が過ぎて行った。

今日はクリスマス。

世界中が湧いていることだろうと佑介は自身には関係ないと割り切りながらもどこか寂しく思っていた。

そんな彼の隣には幼馴染の舞華がいる。

佑介は百八十ｃｍを超えているためにないかとは頭三・四つ違うのだ。

そんなでこぼこコンビが今日も図書館に向かって歩いていた。

ついてからすぐに佑介はこの前受けた模試の判定を見ていた。

「Ａか・・・」

何とか予定の学校はすべてＡ判定を取れていたので安堵する。

それを後ろから見ていた舞華は賛辞を送る。

「相変わらず佑介はすごいね。このまま行けば不通に合格できるんじゃない？？」

それでもやってみなきゃわからないときを緩めない佑介。

根のつめすぎで倒れてしますのではと心配な舞華。

そんな佑介に気晴らしになるかと思い思い切っていってみる。

「佑介・・・今日クリスマスじゃない。だから私と買い物行かない??たまにはゆっくりしてもいいかと思うんだけど」

言われた雄介は呆気にとられた表情の後渋い表情になる。

受験はもう目の前である。

確かにたまには肩の荷を下ろしたいとも思うが・・・。

どうしても一歩を踏み出せない。

「う・・・ん」

唸るだけで答えが出ない。

いつもなら喜んでなどといっていくものだが時期が時期だからだろうか。

はっきりしない自分がもどかしい。

「どうかな・・・??」

上目づかいのダブル攻撃が来る。

思わずのけぞってしまう。

ここまでさせておいて断るのは男としてどうだかという変な考えに至ったため・・・。

「分かった・・・行くよ」

了承した。

「よかった」

そのときの舞華の笑顔は今までとは違い少し心配の色が混じっていた。

どうやら根をつめている自分を心配してくれていたのだろうかと勝手な予想を立てた佑介だが、あながち間違いではなかった。

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　１

そんなわけで放課後となり、いったん二人は家に帰って着替えることにした

もちろん待ち合わせ場所に舞華が選んだのは思い出のある公園である。

舞華の家のほうが近いために先についていたのだった。

『今日はいつもよりも表情が柔らかいね。最近は悩んでいたようだから』

「そうだね」

アリアの言うとおり舞華は最近悩んでいた

それは日に日に疲れが見える佑介のことであり、近づきつつあるクリスマスのことだった。

これからは遠く離れてしまう。

友達としてこのまま終わってしまうのではないかと不安だったのだ。

それに心にずっと抱いていた佑介に対する恋心をそのままにしておくのはなんだかもったいないと思っていた。

それなら思い切って吐き出してしまおう。

そう思っていた矢先のクリスマス。

舞台は完璧だった。

あとは自分が自信を持っていえるかどうかだった。

「楽しみだな・・・」

『笑顔が戻ったね。後は舞華が思いをぶつければいいのさ』

アリアが優しく励ましてくれる。

アリアはいつも舞華を気にしてくれていた。

そんな舞華が嬉しさ気分で待っていると後ろから雪を踏む音が近づいてきた。

佑介が来たのかと思い、振り返ってみた。

しかしそこにいたのは佑介ではなかった。

「あなたは・・・??」

そこにいたのは真っ赤なコートを着たサングラスをかけた女性だった。

その女性は舞華をじっと見たまま口を開く。

『そこにいるのでしょう??アリア・ヴァレイ・・・』

大きく心臓が跳ねたのが分かった。

動悸が激しくなり、息苦しくなる。

直感でこの人物は危険だと思った。

「誰なんですか・・・あなたは??」

『大食い・・・とでも言っておきましょうか』

『舞華・・・こいつも始まりの三匹だよ』

「な!?」

思わず声をあげてしまう。

『久しぶりねアリア・ヴァレイ。またいい住処を見つけたようね』

『まあね、君も転々と夢を食らってるようだね』

舞華には想像もできないスケールの話である。

『あなたのお友達??恋人さん??いい夢をお持ちのようね』

舞華には誰のことだかさっぱりだった。

しかし、そんな舞華を無視して話は続く。

『横取りはしないでねアリア・ヴァレイ。アンなのは久しぶりだから。それにもうすぐいい頃合ね』

『それは保障できないな大食い・・・。早い者勝ちさ』

『またあなたに夢を食べられたら困ったものよ。あの時だってそうだったじゃない』

遠い昔のことを思い出しているのだろうか。

アリアが口を開かない。

『そろそろ彼がきそうね。どちらがいただけるか分からないけれども、今回は私がいただくわよ』

『だからそれはできないな。僕だってあんな美味しい夢を食べられないのは辛い』

「夢・・・誰の??」

その質問にはアリアは答えなかった。

しかしその代わりとして大食いがにやりと笑って言う。

『もうすぐ来る男の子よ。あなたの幼馴染だったかしら??』

それだけで十分だった・・・。

「佑介・・・??」

その名前しか出てこなかった。

確かに最近佑介からはいいにおいがしていた。

それは最初スプレーデモしているのだろうとしか考えたいなかったが。

どうしても気になってしょうがなかった。

どうしても佑介のほうに眼が行ってしまう。

そのたびにどうしたのかと聞かれたりもした。

自分には分からなかったが今こうして話を聞いて分かった。

「私が佑介の夢を食べたがってる??」

それを聞いて大食いはにやりと笑って消えて行き。

アリアは痛いほどの沈黙を保っていた。

そうしてすぐに佑介が走ってくる音がした。

時間内に間に合っていた。

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　１（後書き）

評価・コメント待ってます！！

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　２

先ほどから舞華の様子がおかしいことを佑介は感じ取っていた。
しかし聞かれてはまずいことかもしれないために聞くことは遠慮していた。

「今度はこっち行ってみよ」

佑介を引っ張ってはしゃぐ舞華。
まるで小さな妹と歩いているかのような感じだった。

「分かったよ。そんなにはしゃぐなよ。子供みたいだぞ」

「そんなことといわないでよ。確かに佑介といればわたしたちは兄妹に見られるかもしれないけどさ・・・」

なんだかちょっと悲しそうな顔になった。
何か悪いことでも言ってしまったのだろうかと不安になる。
色々なところを回った。
ご飯を食べたり、デザートを食べ比べしたり。
ショッピングではおそろいのネックレスを購入した。
そして時間はまさに深夜零時に近づきつつあった。

大きなモミの木に色とりどりに飾り付けされたツリーの前に来ていた。

その場には多くのカップルがいた。

「佑介・・・」

自分の名前が呼ばれて振り向く。

そこには顔を赤くしてうつむいた舞華がいた。

なんだろうか止まっていると。

決心したかのように勢いよく顔を上げる。

そして・・・。

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　２（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　２

舞華は今必死に覚悟を決めていた。

今日言わずに今後絶対にいう機会はないと自分に言い聞かせていた。

そんな舞華にアリアは優しく語り掛ける。

『舞華が良かれと思ってやることなんだから自信を持って言えばいいのさ。君は誰よりも佑介と一緒にいたんだ。彼のいいとこ悪いとこはされよりも分かるはずさ。逆に彼も君のことを分かっている。これほど強いカップルはいないさ』

それを聞いた舞華に決心がようやくついた。

「ありがとうアリア。おかげで決心できたよ」

アリアは何も言わなかったが最後まで一緒にいてくれるだろう。

決心した舞華は顔を上げた。

「佑介・・・」

目の前に彼がいる。

覚悟は決めたはずだと自分を奮い立たせる舞華。

そして・・・。

「これから佑介に聞いて欲しいことがあるの」

佑介は真剣だった。

そんな彼をじっと見つめて言う。

「私谷岡舞華ははじめてあったときから相場佑介のことが好きでした。私と付き合ってください」

頭を大きく下げた。

今は彼の表情が見えない。

一体どんな表情をしているのだろうか。

困った顔??笑った顔??

不安だった・・・。

これが最後のチャンスだから。

今日で初恋がどうなるかが決まるのだから。

「顔・・・上げてくれないか??」

佑介が優しく話しかける。

一瞬びくりとしてしまうが、ゆっくりと顔を上げる。

そこにはにっこりと笑った佑介がいた。

小さい頃から本当に嬉しいときにしか見せない彼の笑顔。

ずっと一緒にいた彼女だからこそ分かる。

「俺も・・・俺相場佑介は谷岡舞華が小さい頃から好きでした。だから俺からもお願いします。付き合ってください」

涙が出てきたのが分かった。

無言のアリアも喜んでくれているようだった。

本当に幸せになった気がした・・・否本当に幸せになった。

そしてこれで自分の夢がかなったと思った。

そして新たな夢ができた・・・佑介と一緒に生きて行きたい。

そんな大きな夢ができた。

そんな彼らの至福の時間をぶち壊す大きな爆発音がした。

「なんだ??」

佑介の慌てる声。

そして上を見ると大きなコンクリートの塊の雨が降ってくる。

「きゃあぁぁぁ!!」

思わす悲鳴を上げる。

「舞華！！」

舞華の上に覆いかぶさる佑介。

大きな音とともに舞華の意識は切れた。

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　２（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢見始める者　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　０

夜雪が降りしきる中、とあるビルの屋上には多くの黒いコートを着てゴーグルを着けた人々が集まっていた。

彼らは特別環境保全事務局の人々である。

彼らがこの赤浜市にきているのには理由があった。

「全く何をぼうっと空を見ているんだい??かっこう」

スーツ姿でいかにもリーダーに見える青年が空を見上げている少年に話しかけた。

少年は嘆息し。

「なんでもねえよ・・・」

そっけなく返す。

青年は少年の横に立ち。

「あのときのことでも考えているのかい??」

あのときのことと言うワードにピクリと反応する。

それを見逃さなかった青年はにやりと笑う。

しかしそれはただ反応を見て、彼がどんな心境なのかを知るためで

あって、けして笑うためではなかった。

吐く息が白い。

したではたくさんの人々がクリスマスを楽しんでいる。

「もう彼女は欠落者だ。ふゆほたるはもういない」

そうだとはわかっていても彼は思い出してしまう。

あのときの少女とのわずかな会話を。

お互いの夢を語り合ったときのことを。

「今回ここに君を読んだ理由は分かるよね・・・かっこう?」

笑みを絶やさずに話しかける青年。

彼にとってはまだほかにきた理由はあるのだが・・・。

「大喰いが現れたこと・・・新たな虫憑きが現れて、そいつがむしばねに回収される前にこちらで保護する・・・だろ?」

興味を示したのは前者のみであって、後者は全く興味がなさそうだった。

しかし彼らは知らない。

ここには始まりの3匹のうち2匹がいるということを。

「むしばねのリーダー・・・レイディー・バードと対等に戦えるのは君だけなんだよ・・・かっこう」

同化型の虫憑きで、火種1号に指定されている少年・・・かっこう。

今回の敵であるむしばねのリーダーであるレイディー・バードもまた火種1号指定だったのだ。

今回は彼女も来ているという事で青年は格好を収集したのだった。

「虫憑きに関しては兜にでも任せればいいだろ・・・。俺は大喰いを倒す」

決意に満ちた言葉だった。

そんな彼を青年は誇らしげに見て。

「彼らを倒せるのもまた君だろう。最強の虫憑きとして君臨している君だ。さぞかし激しい戦いになるだろうね」

始まりの3匹がどれほどの力を持っているのかを知っているかっこう、だからこそ彼は強くならなければならなかった。

「しかし勝負事は何があるか分からない。君には保険として参加して欲しい。もしかすると全面対決になりかねないからね・・・。彼女はああ見えて血の気が多いから」

青年は格好の肩に手を置いて、健闘を祈るとつぶやき、他のメンバーの中に溶け込んでいった。

そんな青年を見送らずにただ空を見ているかっこう。
後ろでは特環のメンバーがぞろぞろと移動を開始していた。
一人の男が近づいてきた。
「何だ兜??」
かっこうがちらりと一瞥してまた空を見ながら彼の名前を言う。
「何かあったら頼むぞ」
兜はそれだけを伝え、自身も移動を開始した。
かっこうは嘆息してから自分の武器である自動式拳銃をホルダーにかけ自身も移動を開始する。
「行くか・・・」
そうつぶやいて人々が楽しく闊歩する繁華街へと移動する。

夢見始める者　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント待ってます！！

夢見始める者　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　１

また別のビルの屋上には少年少女たちが集団で集まっていた。

彼等はむしばねという特環に対するレジスタンスである。

彼等がここに来たのは特環と同じくここで生まれたと言う新たな虫憑きの回収、仲間にすると言うことだった。

彼等は特環に対して抗うための力を集めていた。

つまり仲間の増加である。

活動範囲を徐々に広げて虫憑きたちを引き込んできた。

そのときに特環と激しい戦闘になっていた。

彼等は戦闘訓練を受けているわけではないので後手に回りやすい。

そんな彼らの中でも人気は異彩を放ち、かつ力強いのがレイディー・バードである。

むしばねのリーダーであり、創設者。

仲間のみなは彼女を尊敬し、ついてきているのだ。

「レイディー・・・本当にこんなところに虫憑きがいるのかい？？」

仮面をかぶった少年が、これまた仮面をかぶった少女に話しかける。

レイディーと呼ばれる少女は。

「大丈夫よセンティー。ここの近くの仲間が集めてくれた情報によれば確かなんだから。心配しなくてもいいのよ」

センティーという心配している少年に優しく答える。

二人の後ろにはこれまた仮面をかぶった少年少女たちがいた。

中には小学生らしき子もいる。

皆虫憑きだった。

しかし彼等はみすみす特環に捕まり、欠落者として生きていくよりも、虫憑きたちが不安なく生きられる世界にしようとしているむしばねとして戦いたいと思っている。

いつでも行けるという態勢である。

「大きな戦闘はなるべく避けたいものね・・・。こんなところで仲間を減らしたくないから」

しかしそれでも彼等は不安な顔一つしない。

きっとレイディーが守ってくれると信じているからだ。

もちろんレイディーもそのつもりでいた。

はらはらと雪が降ってくる。

そろそろむこうも動き出すだろうと感じ取ったレイディー。

「各自打ち合わせしたとおりに動いて。けして一人で戦おうとはしないで。いいわね」

彼女の言葉に反対するものは一人としていなかった。

クリスマスムードに包まれるここ赤浜市・・・。

まだ誰もここが戦場になるとは思っていない・・・。

大きな音を立ててビルが崩れていく。

したでは悲鳴が聞こえてくる。

むしばねたちがむこうを見ると、特環が何かを追い回して戦っているのが見えた。

「行くわよ!!」

レイディーの言葉に反応し、むしばねが動き出す。

夢見始める者　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント待ってます！！

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　３

コンクリートの破片が崩れる音で気がついた舞華。

周りはひどく静かであった。

遠くのほうではなにやら轟音が響いているが、ここの静寂を破るには足りなかった。

白煙が立ち上り、人々が倒れている。

あまりの痛みでうめく人もいた。

そんな彼らを舞華が見ることがで傷の、思わず顔を背けてしまう。

『怪我はないようだね。よかったよ』

先ほどまでだんまりを決め込んでいたアリアが口を開いた。

「一体何が起きたの??いきなりビルが吹っ飛んだと思ったらこんなことになっちゃって・・・」

せっかくのクリスマスが台無しだと落胆する。

「それより佑介は??」

慌てて周りを見る。

しかし立ち上がろうとしてもどうしても足が大きな瓦礫に埋まって

動けない。

「取れない～」

必死に引っ張っても痛いだけであった。

「どうしよう・・・」

そんなときにぐらりと瓦礫が動いた。

なんだろうと思い見てみると下には・・・。

「佑介！！」

瓦礫から彼女を守るように潰されていた佑介がいた。

額からは血を流し。

生きていることが不思議なくらいだった。

「佑介！！佑介！！」

彼の名を呼んでも痛みで言葉が出てこない。

息も絶え絶えだった。

しかしそんな悲惨な状況下で舞華は感じていた。

死に体の佑介から感じられる極上なご馳走に匹敵する香りが・・・

濃厚な甘さの香りが・・・。

これが彼の夢なのだろうと無意識に思った。

『これは一刻を争うね。危険な状態だ』

アリアが冷静に分析する。

救急車や消防車のサイレンの音が聞こえてくるが、いつここに来てくれるかは分からない。

舞華は焦った。

このままでは恋人の佑介が死んでしまうと。

せっかく結ばれたばかりだと言うのにこんなのはあんまりだと思う。

そんな焦る舞華の後ろで瓦礫がさらに動く音がした。

すると突然足が軽くなったのだ。

一体なんなのかと振り返ると佑介が必死に立ち上がりながら舞華の足を押さえていた瓦礫を持ち上げていたのだった。

たじろぐように後ろに下がる舞華。

ようやく足が抜けきると、安堵の表情を浮かべた佑介から一気に力が抜けた。

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　３（後書き）

コメント待ってます！！

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　３

大きな音がしたと思ったら佑介の体に一気に瓦礫が押し付けられた。

一気に肺の酸素が抜ける。

内臓が圧迫され、所々は潰れた。

そのため口からは吐血する。

骨も何本も持っていかれ、動くたびに全身に電気が走ったかのような痛みがした。

それでも佑介は満足していた。

自分の大切な彼女を守れたのだから。

初めて彼が感じた自分の価値・・・。

大切な人を守れる存在・・・。

それが彼の存在価値であり、そのような存在であり続けることが夢になった。

今日このクリスマスの夜に・・・。

そしてそれは達成された。

消えて行く自身の命の灯火を感じていた。

そんな中でもっとやりたかったことが次々と浮かんでくる。

そんな色々な場面での彼等はいつも笑顔だった。

大切な人の笑顔を守りたい・・・。

それが彼の新たな夢である。

しかし目の前の彼女は困惑した表情で、涙顔である。

「佑介!!佑介!!」

何度も必死に自分の名前を呼んでいる。

返事をしたくても声が出ない。

痛みが走ってそれどころではなかったのだ。

大丈夫だからといってあげたかった。

しかし痛みがそれを許さない。

次第に眠気が激しくなってきた。

痛みも次第に和らいでくる。

そしてゆっくりと瞳が閉まる。

彼が最後まで見ていたのは舞華の笑顔ではなく・・・涙だった。

心の中で言った・・・。

「ごめん・・・君の笑顔を守れなかった」

それが届くことはなかった。

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　３（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　４

だんだんと冷たくなっていく佑介に名前を呼びかけ続ける舞華。

後ろから足音が聞こえたために振り向くとそこには。

「大喰い・・・」

夕方にあったままの姿の大喰いが現れたのだった。

『あなたのせいで美味しいご馳走がなくなっちゃったじゃない。どうしてくれるの??』

佑介を見ながら残念そうに言う。

しかし彼女からはまた別のご馳走があるからと全く佑介の死を気にしていない。

そんな大喰いに向かって走り出す。

「ふざけるな!!」

拳を構えて殴りかかる。

それもありあの力を付加した青い光をまとわせたものを。

それが大喰いの頬にぶち込まれた。

虫の力を借りた舞華の力で大喰いは向こうの店に壁に叩きつけられ

た。

口の中を切ったのか、血が出ていた。

しかし笑みは絶えない。

『あなたに力じゃ私には勝てないわ』

そんなことは分かっていた。

かつてそのことをアリアに聞いていたからだ。

自分は戦闘向きではないと・・・。

しかし佑介が死にに行くところに現れた、さらには彼を食べられないご馳走扱いしたのには我慢がならなかったのだ。

『舞華・・・これ以上彼女を怒らせるのはまずい。今度は君も殺されるよ』

アリアが忠告する。

顔は笑っているが後ろのオーラと言うものが恐ろしいほど逆立っていた。

身震いを覚えた舞華。

構えていた拳をゆっくりと下ろす。

それを確認すると大喰いはきびすを返して暗い闇の中へと消えてい

った。

そしてすぐに佑介の元に。

しかしすでに彼は冷たくなっていた。

すでに心臓は止まり。

つまり死んでいたのだった。

「いやあぁぁぁぁぁ！！」

叫びとともにとめどなくあふれてくる涙。

佑介の顔に抱きつきながら泣きじゃくる。

それでも彼からは極上の匂いが漂ってくる。

こんなことをこんな状況で思うとは自分はどうかしてしまったのではないかと思う。

しかし彼はもう笑ってくれない。

手をつないでくれない。

話しかけてくれない。

そんなこの現実が嫌になってきた。

『舞華・・・彼の夢を食べよう・・・』

アリアがぽつりと言った。

かつて始めてアリアとあったときに聞いた。

彼の虫憑きとなった人物はまた別の人物の夢を食べて、その人物を虫憑きにすると言うことを。

そして自信はその人物とアリアのことを記憶から忘れると言うことも。

それはつまり舞華が佑介のことを忘れることであり、初恋がなかったことになる。

せっかくかなった初恋が幻想となるのだ。

舞華は首を縦にふれなかった。

それでもアリアが説得してくる。

『彼が死んでもいいのかい??君は悲しみを乗り越えられるかい??』

即答できた・・・無理だと。

『それなら君がやることはただ1つだ。彼の夢を食べるんだ』

しかしそれはすぐには承諾できない。

佑介には死んで欲しくない・・・でも忘れたくない。

そんな矛盾が彼女を苦しめる。

時間はもう少ししかない。

『急がなきゃ君は後悔するかもしれないよ??それが君にとって良かれと思うならば何も言わない。しかしだね、ひとは生きていく中で傷つくものなんだ。そしてその傷に堪えられない人間はいない』

しかし例外もいる。

自分のように自信がないものもいる。

『君が忘れてしまってもいつかきっと思い出す』

「それは・・・本当??」

藁にもしがみつく思いだった。

『いつかは分からないけどきっと思い出す』

アリアの言葉には優しさと力強さがあった。

声は自分のものなのだが。

今日2度目の覚悟を決めなければいけないのかもしれないと思った。

目の前で死んでいる恋人を守るために。

そしていつか思い出し、自分の夢をかなえるために。

「私は佑介の夢を食べる・・・」

そう決意すると青い光が舞華を包んだ。

すると佑介の体が光るとゆっくりと青いオーラみたいなものが漂ってきた。

それは極上な香りがした。

もはや我慢ができなかった。

それを貪るかのように食らっていく。

涙を流しながら、食らっていく。

そして光が失せる頃には佑介に生気が戻り始めていた。

生き返ったのだった・・・虫憑きとして。

彼を地獄の世界に落としてしまった。

彼の人生を狂わせてしまった。

そんなことを考えながら舞華はゆっくりとまぶたを閉じていく。

急激な眠気とともに、自分の中からアリアがいなくなっていくのが感じられた。

そして最後にアリアは。

『彼の夢はあのときのものと同じくらい極上の味がした。きっと彼と同じくらい強くなる。そして彼は夢をかなえる』

それを聞いて舞華は意識を手放した。

最後に見たのは瓦礫を起こして起き上がった佑介の姿だった。

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　４　（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　４

起き上がった佑介の目の前にはたくさんの怪我人がいた。

慌てて辺りを見るが恋人の舞華の姿はなかった。

「舞華・・・??」

自分は助けたあとに死んだはずだった。

しかし今は確かに生きている。

それがなぜだかは知らないが・・・。

しかしすぐにその理由が分かる。

彼の肩には黒い物体が乗っていた。

虫だった・・・。

ぎちぎちと歯を鳴らしている虫。

彼は一気に自分の今いる状況、自分の存在に気づく。

虫憑きの争いに巻き込まれ、自身も虫憑きにされた。

彼の描いていた夢が消えて行きそうになる。

一気に日常が黒く塗りつぶされる。

そんな佑介はふらふらと歩き始める。

いまだ爆音が止まらない彼方へと。

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　４（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　５

ただ歩いている佑介。

何が彼をそこに誘っているのかは分からない。土煙が消えない場所に来ていた。

時々足をとられるのは倒れた黒いロングコートの人々がいるからだった。

どうやらここで虫憑き同士の戦いが行われていることを知った。

無防備な格好で来てしまったので何か武器になるものはないかと探すが特にめぼしいものはない。

仕方なくそこら辺に落ちていた棒を拾う。

すると虫が彼の右腕にくっつくと触手を出して同化し始める。

あまりの痛みに悲鳴を上げる佑介。

ようやく収まったかと見てみると自身の右腕ではなくなっていた。

肩からは牙みたいなものが突き出し、腕の表面には何やら奇妙な肌触りのものがまきついていた。

そして持っていた棒にも異変が起きていた。

真っ黒に染まり、強度が極限まで上げられていた。

そしてゆっくりと爆音が鳴り響くほうへ向く。
そこには悲鳴を聞きつけてきたのだろうか、何人かの特環が来ていた。

「何ものだ貴様!!なぜ貴様が虫を持っている!!」

「連絡します。謎の同化型の虫憑きを発見!!応援を要請します!!」

なにやら仲間に応援を頼んでいるようだった。

しかし今の佑介には今自分には勝ちがあるのかを知りたかった。
大切な人の笑顔を守れるのかを何より知りたかった。

だから構えた。

目の前にいる奴を倒そうと。
二人の虫憑きは一斉に虫を弾丸のごとく佑介に放ってきた。

しかし虫憑きとなった佑介には止まって見えた。

「な!?」

二人の虫憑きは驚いた声を出す。

それを跳躍してかわすと、一気に虫を叩き潰した。

強度抜群の棒に叩き潰された虫は消えていき、虫憑きはばたりと倒れるとピクリとも動かなくなった。

欠落者になったのだろうと確信した。

「うおおぉおおおおおお！！」

そしてまだ体のほてりが納まらない佑介。

「ぎいいいいっいいいいい！！」

当たりかまわず棒をたたきつける。

「あぐあああぁぁぁぁっぁぁぁぁ！！」

信じられない力が加わり、地面が陥没してクレーターができる。

ビルを叩いて破壊したりもした。

一体何件のビルを潰したのだろうか。

向こうからは次々と足音が聞こえてくる。

いつの間にか爆音が消えていた。

戦いが集結したのだろうと思った。

これ以上の長居は無用だと判断し、急いで走ってこの場を離れる。

虫の力なのか、跳躍力が格段に上がっており。

ビルからビルへと移動して帰宅した。

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　５（後書き）

コメント待ってます！！

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　６

帰宅してから急いで舞華に連絡した。

しかし帰ってきたのはあなたとは付き合いはないという不思議な返事だった。

一体どういうことだろうと思い電話してみた。

そうしたら絶望が彼を襲った。

彼女は佑介のことを知らないと言うことだ。

佑介が小さいとき公園でであったことをいっても知らないの一点張り。

それ以外にもさまざまな思い出を話した。

しかし彼女には待ったく身に覚えがないということだった。

記憶喪失にでもなったのかと今どこにいるのか聞いてみると家にいるということだった。

一体どういうことだと思う。

自分は突然虫憑きにされ、舞華は自分のことを知らない。

彼を絶望と疑問が襲う。

帰宅後彼は何もやる気が起きずにベッドに崩れ落ちた。

朝登校すると教室ではなにやら騒がしかった。

友達に聞いてみると。

「谷岡が転校した」

ということを言われた。

どうやら家の都合らしい。

結局何も彼女にいえなかった。

自分が彼女の彼氏だと言うことを。

自分たちは恋人同士だということを。

自分の初恋はなんだったんだと思ってしまう。

幻想だったのか??っと思ってしまう。

授業は普通に受けた。

しかしどこか色あせてしまった日常。

その原因は分かっていた。

自分の横に彼女がいないと言うこと。

ただそれだけで世界ががらりと変わってしまったのだった。

それだけ佑介にとっては大きな存在だった。

放課後になって塾へと足を運ぶ。

この時期になってくるともう問題を解くだけになってきた。

しかしどうしても彼の頭から離れないものがあった。

“大切な人の笑顔を守る”

それは自分があの時持った目標・・・夢??

自分にはそんな価値があるのだろうか。

こんな暗い世界に連れ込まれても、まだ自分はいつもどおりの生活をしていていいのだろうかと。

そう自問自答していた。

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　６（後書き）

コメント評価待ってます！！

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　５

舞華は今日引っ越すことになった。

父親の仕事先が遠くになるためだった。

舞華がここに来たのも仕事の都合だった。

ここで過ごしたことは確かに彼女の宝物。

友達にはもう電話で連絡してある。

最後の楽しい会話もできた。

そしてまだ時間があると言うことで散歩に出かけた。

ついたのは佑介との思い出の公園。

しかし彼女にはそれに関する記憶はない。

しかし心は覚えているらしく、懐かしさと、隣への寂しさがあった。

誰かが傍にいつもいてくれたような気がしてならなかった。

しかし誰なのかはわからない。

両親であるかもしれないし、友達かもしれない。

その中に佑介の名前は出てこなかった。

「この気持ちは・・・？？」

やはり気になるらしい。

しかし・・・。

「ここでの思い出はここまで・・・。心に鍵をかけておこう。そうすればこのもやもやはなくなるかも」

そう言って鍵をかける。

そして2度とあけられることのない心の金庫には佑介との今までの思い出が見えない形で放り込まれたのだった。

夢見始める者　舞華　ＰＡＲＴ　５（後書き）

コメント・評価随時待ってますのでよろしくお願いします！！

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　７

佑介は走っていた。

向かう先は舞華の家。

まだ出発していないらしく、間に合った。

彼はここで完全にけりをつけようと考えていた。

そして彼女が・・・舞華が出てきた。

知らない佑介がいることに不審者を見るような目で見てくる。

それが本当に覚えていないんだと言うことを如実に物語っていた。

「こんにちは」

佑介が挨拶した。

まるで朝登校して、すれ違った知り合いにするかのように。

「こんにちは」

舞華もいつもの元気な声で返してくれた。

「昨日いきなりメールとか電話してごめんね。別に嫌がらせしたかったわけじゃないから。どうやら人違いらしかったね」

謝る佑介。

しかし心では泣いていた。

もうあの頃には戻れないと。

決心したはずだったのに。

心の自分は涙が止まらなかった。

「今日引っ越すんですね。友達になりたかったのに」

「そうですね。あなたとならいい友達になれそうですね」

その友達という言葉がきつかった。

今にも走って帰りたいとも思った。

しかし必死に踏みとどまる。

「あなたは知らないかもしれませんが、僕はあなたからたくさんの思い出を貰ったんです。だから今日はお礼を言いたくてここに来ました」

何のことだろうという顔をしている舞華。

「たくさんの思い出をありがとう・・・舞華」

そう言って走り出した佑介。

後ろからはまってと声がかかるが止まらなかった。

否止まれなかった。

止まってしまえば終わりにするという決意が崩れてしまいそうだったから。

息を切らせたまま家の中へ入り、自室へと移動する。

ベッドに倒れこむとこれからのことを考え始めた。

相場佑介という少年は一度この世から去っているのだ。

だからここにいる相場佑介と死んだ相場佑介は違う。

だったらなんなのか。

答えは簡単だった。

今までの生活を一新して旅に出ようと考えた。

うわさでは特環とかむしばねとか言う組織があるらしい。

そこには自分と同じような少年少女たちがいるとも聞いている。

なら自分の知りたいことを知ろうと思った。

虫とはなんなのか。

なぜ戦わなければならないのか。

こんな自分にも価値はあるのだろうか。

そして彼には夢がある。

叶え切れなかった夢が・・・。

“大切な人の笑顔を守る“

きっと舞華は自分とは違う人と幸せになるだろう。

そして佑介自信もいい加減割りきらなければいけなかった。

初恋は終わったのだと・・・。

ただの淡い幻想だったのだと・・・。

否確かに初恋は実現した。

確かに前の相場佑介が体感している。

だったら今の相場佑介はどうだろうか・・・。

また新たな出会いがあるかもしれない。

そこで出会った人の笑顔を今度こそはと意気込む。

思い立ったら吉日。

早速準備に取り掛かる。

リュックには財布と通帳、サバイバルナイフ、携帯と充電器。

その他に筆記用具などを詰め込んだ。

もはや自分には勉強道具など必要なかった。

これからは自分の目に映るものが参考書なのだから。

外はすっかり暗くなっていた。

時刻は深夜。

誰もが寝静まっている頃。

書置きを置いて相場佑介は旅に出る。

この日、相場佑介は夢を確信した。

そのために旅に暗闇へと一歩を踏み出した・・・。

2度と戻ることのない日常に別れを告げて・・・。

夢見始める者　佑介　ＰＡＲＴ　７（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢見始める者　THE　OTHER　PART　3

ここは桜架市特別環境保全事務局東支部本部である。

そこに一人の青年が立っていた。

周りには最高峰の科学技術の結晶たちがある。

そんな彼が眺めているのは桜架市に取り付けられた監視カメラだった。

しかしそれほど興味花飯岡時たまあくびなどをしている。

彼はとある人物を待っていたのだった。

自動ドアが開かれその人物が入ってきた。

「遅いじゃないかかっこう。遅刻だよ」

入ってきたのはかっこうと呼ばれる少年だった。

しかし赤浜市での少年とは違っていた。

どこかの中学の制服を来たどこにでもいるような平凡な顔をした少年。

特徴的なところは特になく、あるとすれば頬に伴奏工がついているくらいだった。

「そんなこと言うなよ土師。帰ってきてからすぐの呼び出しだ。少しは大目に見ろよな」

「まあそう怒るなかっこう。君はまだ知らないだろうが、我々が赤浜市で回収した・・・つまり君が欠落者にした新しい虫憑き以外にもあそこにはいたらしいんだ」

「それは知らなかったな」

全く興味なさそうに言うかっこう。

「それでだ・・・ほかの局員に聞くと何でも同化型らしいじゃないか」

「なに!?」

かっこうが食いついた。

彼も同じ同化型だからだ。
それに同化型は強力な虫憑きが多い。
成虫化されればただではすまない。

「ようやく聞く気になったね。彼らの話では局員が2人やられたらしいよ。その場面は誰も見ていないが、応援が駆けつけたときにはもういなかったらしい。暴走でもしたのかね・・・あたりがクレーターだらけだったらしいね」

かっこうを見て。

「やつの力は計り知れないが、倒せるのは君しかいないだろう。まあ、その虫憑きがわれわれに協力してくれれば嬉しい限りだけれどね」

そう言って土師という青年は部屋をあとにした。

一人残されたかっこうは拳を握り締めた。

忘れられない彼の過去。

新たに現れた虫憑きも同じ経験をしたのだろうと考える。

しかし彼はほかの虫憑きからおそれられる悪魔である。

そんな1人の虫憑きに同情する気はなかった。

かっこうもまた部屋を出て行った。

そして翌年彼が高校生になって出会うことになる・・・。

かつて自身の手で欠落者となったふゆほたる・・・杏本詩歌に。

（完）

夢見始める者　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　３（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢しまう宝箱　プロローグ（前書き）

ＥＰＩＳＯＤＥ　２　が完成しました。
少しづつ投稿していきますので、コメント・評価をよろしくお願いします！！

夢しまう宝箱　プロローグ

がたごとと列車が揺れる。

朝だからか通勤する人が大勢いた。

そんな中に一人の少年が座って黙って外を見ていた。

彼の視線の向こうには彼が依然いた赤浜市が見えている。

しかしそれももう今日で見納めだった。

なぜなら彼は朝早くから家を出て旅を開始したからだ。

年が変わり学校は新学期を迎えているだろうこの季節。

桜が少しずつだが咲き始めていた。

「これからどうするか・・・」

当てもなくただ答えを探しに旅に出た少年。

彼は虫憑きだった。

クリスマスの日に恋人を守るために崩れてきた瓦礫の下敷きとなり死んだ。

しかしなぜだか起きてみると生きていたのだった。

しかし一緒にいた恋人はいなく、自身の肩には虫がいた。

その時彼は知った。

自分は虫憑きになったのだと。

そして2度と日常には帰れないのだと。

そして彼ははじめて虫憑き同士で戦った。

そのときの感覚は覚えていない。

おそらくは無意識で戦っていたのだろう。

暴走していた。

そして彼には追い討ちをかけるかのような悪夢が起きる。

クリスマスの日に恋人同士となった彼女が彼のことを知らないといったのだ。

一体何のことだかさっぱりだった。

一切の記憶がなく、自分との思い出がなくなっていた。

まるで自分は幻想を見ていたのかと思った。

これは現実ではなく夢ではないかとも思った。

しかし現実は現実だった。

彼女は何も覚えていない。

しかも彼女は都合で引っ越すといった。

最後の別れをしようといった。

そして別れの言葉とともに、たくさんの思い出をくれたことに感謝した。

彼女が友達になってくれたから自分でいられたからだ。

しかしそんな淡い初恋は自分が虫憑きになってしまったことで終わってしまった。

しかしもうくよくよしていられなかった。

自分の夢を叶えるために。

少年は旅をすることを決めた。

そして虫とは何かを知りたいと思った。

だからこうして旅を始めた。

景色はビルが多くなってきた。

どうやら都市に入ったようだった。

アナウンスが狩間市についたことを知らせた。

ぞろぞろと出て行くサラリーマンたちの流れに乗って少年も出て行く。

少年相場佑介の旅は始まったばかりだ。

夢しまう宝箱　プロローグ（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　０

佑介の旅の最初に選んだのは赤浜市から北に数十キロはなれたところにある狩間市だった。

赤浜市よりはどちらかと言うと田舎に近い市であり、現代的なものといってもコンビニが立っているくらいで、周りのほとんどは田んぼや畑だった。

こんなところで何かヒントがあるとは思えなかったが、ためしということできたのだった。

ゆっくりもできるし、もしかしたら田舎だと言うことで逃げてきている虫憑きもいるかもしれないと思ったのだった。

ここで虫憑きの事件がありましたかなどと聞いてもおいそれと話す人などいるわけがないと思った。

だからこそしばらく滞在して風邪に流されてくるうわさに頼るしかないと現在は思っていた。

「腹減ったな・・・」

朝は何も食べてこなかったために、おなかの虫が鳴いていた。

「こんなときに襲われたらいちころだな・・・」

佑介は悲鳴を上げるおなかを抱えながら近くにあったコンビニへと入っていった。

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢しまう宝箱　茜　ＰＡＲＴ　０

市内の公立中学に通う阪松茜はいたって普通の女の子だ。

スタイルなどは女子中学生の平均だが、同学校内でかわいいと評判になるくらいかわいい素顔を持っていた。

性格はいたって男女わけ隔てなく明るく接するものだった。

だから学校内では彼女に好意を持つ男子が多かった。

しかし裏を返せば彼女を妬む者もいた。

全員が同学年の女子生徒だった。

それも少し荒れている性格の持ち主たち。

いつも陰では彼女に対して嫌がらせを行っていた。

執拗な脅迫メール、内ズックを隠したり、泥を持ったりは日常茶飯事。

教師から何か手伝いを言い渡されたときはいつも彼女に押し付ける。

机に落書き、それも彫刻等でのいたずらであるから何度も机を交換しなければいけなかった。

しかしそんないじめを受けていながら茜はいつも笑顔だった。

そんな彼女を影から心配する男子生徒もいた。

そんな心ある生徒は茜を影ながらサポートした。

そんな彼らのサポートを知っているからこそ茜はいつも笑顔でいられた。

自分にはまだ助けてくれる人がいる。

みんなと楽しく普通の生活ができていると感じていた。

しかしそんな彼女に対するいじめはまだ続いていた。

夢しまう宝箱　茜　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　１

コンビニに向かい朝食を購入していく。

中はいたってどこにでもあるコンビニ。

しかし田舎だからだろうか、あまり利用客はいなかった。

いるとしても昼食買いの中高生くらいだった。

中をぐるぐる回って手軽な価格のものを購入していく。

貯金通帳は一応持ってきたが、それがいつ切れるか分からない。

だから何か短期でできるバイトがないか、求人票などをとってみていた。

会計を終えて外に出ようとした。

すると中には女子中学生の集団がたむろしていた。

どう見てもまじめな生徒ではないことを容姿から見てはっきりしていた。

ピアスはもちろんのこと、髪の毛を派手な色に染めていた。

しかも化粧をする子もいれば派手な付け爪をつけている子もいた。

そんな中にいたって普通の女の子がいた。

なんであんな普通の子がこんな集団といるのか理解できなかった。

しかし次の行動で彼女たちとどういう関係なのかがはっきりした。

夢しまう宝箱　茜　ＰＡＲＴ　１

茜は朝早く家を出ていつもどおり学校へ向かっていた。

しかし登校の途中いじめグループと遭遇してコンビニにつれてこられたのだった。

ニヤニヤと笑う彼女たち。

その彼女たちの表情を見て茜は確信した。

自分に犯罪を犯させようとしているのだと。

そして彼女の人気を落とそうとしている。

なんとも幼稚な手だった。

しかし彼女には抗える力がなく、流されるままつれてこられた。

中には店員一人と高校生くらいの少年、近隣の高校生二・三人くらいだった。

一人が耳元でとってくるものをささやく。

しかし茜は一向に動こうとしなかった。

仕方ないと思ったのか、グループ全員で中に茜を連れて行った。

盗もうとしている化粧品の近くには求人票を見ている学生らしき男

性がいた。

しかし彼女たちの動きには全く興味はなさそうだった。

「早くやりなよ」

後ろからささやくように言ってくる。

体がびくっと震えた。

これからすることへの恐怖からだろうか。

それともこれをすることで怒ることへの恐怖からだろうか。

彼女は鞄をぎゅっと抱きしめた。

中には箱のようなものが入っていた。

そしてみんなで標的を見ている不利をして死角をつくり、茜がとりやすいようにした。

心臓が破裂しそうなくらい脈打っている。

そしてゆっくりと手を商品に伸ばした。

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　２

女の子の手が商品に近づく。

まあ、購入するんだろうなとそれくらいにしか考えていなかった。

このときはまだ。

確かにまじめそうには見えない生徒たちもいるため、一応目は光らせていた。

そして最悪なことにそれを鞄の中入れようとしたのだった。

佑介はそれを見過ごすわけには行かないと、すぐにその子の手をつかんだ。

そしてすぐに店員に向かって。

「万引きです！！」

大きな声を出す。

それを聞いて慌てて逃げ出す生徒たち。

しかし彼女たちを出る前に佑介はみな捕まえてしまった。

店員に感謝され、余っていた弁当などの商品をただでいただくことができた。

それに加えて店員に一言言っておいた。

「あのおとなしそうな子はただ無理やりやらされたようです」

そう耳打ちしておいた。

はじめはおどいた顔をしていたが、今にも泣きそうな彼女を見た店員は分かりましたと承諾してくれた。

それを聞いて安心した佑介は商品のたくさん入った袋を持って外に出て行った。

それから何時間立っただろうか。

一日中市を回ってみたものの、虫に関する情報はほとんど皆無だった。

とぼとぼと歩いているとたどり着いたのは今朝方朝食などを購入したコンビニだった。

そこには今朝方捕まったおとなしそうな女の子がちょこんと座っていた。

手のひらには小箱が握り締められている。

その中身を見ながらニコニコと微笑んでいる姿にかつての恋人の姿を重ねてみてしまった。

「もう・・・会えないのにな・・・」

決別したはずの気持ちがまたぶり返してきた。

抑えたくても抑えきれないこの気持ち。

それと格闘しながらも、佑介は彼女に近づいていく。

「やあ、今朝方は大変だったね」

話しかけられた女の子はびくりと震えて佑介を見る。

すぐに自分たちを通報した人物だと分かったのだろう。

「そんなに強くは追求されなかっただろう??」

なぜそんなことを??という顔をする。

それもそうかと佑介。

知らないやつにいきなり通報されたかと思いきや、その奴にいきなり話しかけられる。

誰がそんなやつにほいほいと話すだろうか。

「おかげさまで僕は未遂で終わることができたよ」

口を開いてくれた。

「僕が帰ろうとしたら、店員さんが教えてくれたんだ。あなたが僕に強く攻めないでくれって言っていたと」

確かに自分が言った。

あんなおとなしそうな子が、あの中で浮いている子が自分からやるとは思わなかったからだ。

案の定彼女から聞くと彼女はあのグループからいつもいじめを受けているらしい。

それがエスカレートして今回のことにつながったのだと。

彼女たちは謹慎処分となり、家から一歩も出られない生活に入ったらしい。

目の前の女の子だけは反省文で済むこと担っているらしい。

教師たちも彼女のことはよく判っているし、いじめを受けていることも知っていた。

何かしてあげたかったがなかなか手を出せなかったらしい。

しかし今回いじめグループのほうから自滅してくれたために一気に重い罰を与えることとなったのだという。

彼女は学校に行くやみんなから心配されたらしい。

何もしてあげられなくてごめんだとか、今度何かあったら言ってくれと言われたりしたらしい。

彼女の周りにはそんな大切な仲間がいるのだと佑介も嬉しくなった。

そんな彼女が穢れずに住んでよかったと心底安堵していた。

そんな彼女と話すうちになんだか気が合うと感じていた。

夢しまう宝箱　茜　ＰＡＲＴ　２

手に取ろうとしたところで後ろから男の声がした。

「万引きです」

自分のしようとした事がばれたのだ。

「やば逃げろ」

ほかの子達は急いで逃げ出そうと走り出した。

しかし、通報した少年がすぐに技をかけて捕まえていく。

すぐに店長らしき人が来て奥の部屋に少女たちを連れて行く。

中に入ると皆ふてくされていた。

「あんたのせいで捕まっちゃったじゃん??どうしてくれるの??」

一人が睨みながら行ってきた。

そういわれても彼女にはどうしようもない。

ほかの子達も睨んでくる。

もう逃げ出したいという収束感にかられた。

店長らしき人が外で通報した少年となにやら話している。

するとあまり物だろう物を手渡していた。

少年は喜んで全部貰っていた。

少しは遠慮すればいいのにと思ったがこんな自分が言える立場ではないとすぐに思った。

そしてしばらく話し込んだ店長が入ってきた。

そのあとに警察の人も入ってきた。

生徒たちはふてくされてむっつり顔。

「君たちなんで万引きなんてやろうと思ったのかな??」

しかし誰も口を開かない。

「何か言わなきゃずっとこのままだよ??学校にも親御さんにも電話してるから黙ってると迷惑が拡大するだけだよ??」

店長は優しく話しかける。

警察の人はなにやらカルテに書き込んでいる。

先ほど名前など個人情報を書き込んだものだ。

だんまりを決め込んで３０分がたった。

それでも店長は機嫌を変えずに笑顔を崩さない。

他のメンバーは痺れを切らし始めたのかいらいらしていた。

そんなわけで隣の生徒が茜を小突いて説明させようとしていた。

迷う茜。

どう説明すればよいのか分からないのである。

まさかやれと言われましたなんていったとしても信じては貰えずに、彼女たちからはさらにいじめがエスカレートするに違いないと思った。

話すように促す店長。

早く言えとせかす彼女たち。

板ばさみに苦しむ茜。

とうとう我慢できずに。

「すいませんでした・・・。ぼくが欲しいといったからです・・・」

言ってしまった・・・もうこれでおしまいだと思った。

「よく言ってくれたね。分かった。今日はもう帰っていいよ」

店長は笑顔で言った。

警察の人も会釈して帰っていった。

まさかこんな簡単に終わるとは思わなかった茜は呆然とコンビニに立っていた。

一体なぜこんなにも簡単に終わったのか理解できなかった。

それになぜか茜以外の生徒だけが来ていた先生方に学校へ連れて行かれたのだった。

彼女たちも一体どういうことなのか理解できていないという顔だった。

そして外に出るときに店長から通報した男性が茜を強く怒らないで欲しいといったらしい。

なんでも茜が自身がやろうとしたのではないと弁解してくれたのだという。

それを聞いて何もいえなかった。

夕暮れの空の下、鞄の中から小箱を取り出した。

彼女の大切なもの、中には彼女の思い出のものばかり。

「これは・・・初めてのプレゼントだよね・・・」

それはきれいな髪留めだった。

彼女が小学の時代に好きだといわれた少年にバレンタインのお返しだということでホワイトデーに貰ったのだ。

そのときからつけるようになったものだが、彼が転校してしまい、今は全く音沙汰なしなってしまったことでつけなくなったのだった。

そのほかにもプリクラ、手紙、その他たくさんのものが入っていた。

「今どうしてるかな・・・」

過去を振り返っても仕方がないし、その人も新しい彼女でも見つけているだろうと思った。

それでも捨てきれないこの思い出の品々。

彼との者だけではない。

両親とのものもあるし友達との者もある。

入るものはすべて中に大切に入れていた。

彼女の望み・・・それはこの中に入りきらないほどの思い出をつめること。

だからもっと楽しい生活がしたいのだが・・・あの陰湿ないじめさえなければと思ってしまう。

向こうから足音が聞こえてきた。

顔は上げなかったが男の人らしい。

すると・・・。

「やあ、今朝は大変だったね」

ふと顔を上げるとそこには通報した男性が立っていた。

なぜそこにいたのかは分からないが彼はもう何も気にしていないという感じだった。

ここを逃したら一生会えないと思い、思い切って言ってみた。

「今朝方はありがとうございます。おかげでぼくはそれほど起こられなかったよ」

いつもの調子で感謝してみる。

「あはは、君面白いね」

何が面白いのだろうと思った。

いきなり笑い出したかと思ったら意味の分からないことを言い出す。

すると隣に座り込んで小箱を見つめた。

「これ・・・相当大事にしてるんだな」

隣に座った男・・・佑介は話しかけた。

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　３

少女・・・茜の手には小箱が握られていた。

相当大事にしているのかあまり傷がなかった。

それにしてもなぜ学校までもってきているのかが分からなかった。

「大事なものなんだね」

佑介は尋ねてみる。

「そうだよ・・・。これはぼくの今までの思い出が詰まってるんだ」

茜は優しそうな瞳を投げかけていた。

それはかつての恋人と同じだった。

中に入っているものを懇切丁寧に説明してくれた。

すると時間があっという間に過ぎてしまい、あたりは真っ暗になっていた。

春だが夜はまだ肌寒い。

佑介は早く今日の宿でも探そうと立ち上がろうとすると。

「ん??」

袖が引っ張られる感じがしたので振り向くと茜がつかんでいたのである。

それも顔を赤く染めてまるで小動物を優しく包むように袖をつまんでいた。

「ごめん・・・。でもまた彼女たちが来たら・・・ぼく」

どうやら連れて行かれた彼女たちが仕返しをしに来るかもしれないという不安があるらしい。

携帯で親に佑介も行くということを伝えると、最初は渋っていた親たちだが、今朝方助けてくれた人だというとすぐに了承してくれたようだ。

二人並んで茜の家に向かうこととなった。

真っ暗な帰り道を外灯が僅かに照らす道を歩く。

これでは不安になるのも無理ないと思った佑介。

隣に佑介がいることで少しは安心しているようだった。

しばらく歩くと普通の一軒家にたどり着いた。

中に挨拶をして入ると中からすぐに両親が出てきて茜のことを抱きしめていた。

いじめで苦しんでいたことを分かってあげられなくてごめんと何度も謝っていた。

茜を母親が部屋に連れて行くと父親が佑介を中に案内し、ご飯が並んだ今に招待された。

「卿は娘を助けてくれて本当にありがとう」

頭を下げてお礼を言ってきた。

「いえいえ、人助けは当然のことです。それにお嬢さんはそんなことを自分からするような人には見えませんでしたから」

佑介も挨拶を済ませる。

まだ未成年だからということでお酒は自粛したがみんなが集まったところで乾杯となった。

それから色々なことを話した。

佑介が今は家を出て進学せずに旅をしていること。

夢があるということ。

それを何とか叶えたいと思っていることなど色々だ。

みんなとはすぐに打ち解けられて楽しい時間を過ごすことができた。

茜の父親が止まるところがないならば茜の家庭教師をしながらここにいてくれないかといってきた。

突然のことだったが皆も了承していることから甘えることとなった。

夕食を済ませて部屋に戻ることとなった。

家庭教師の仕事は明日からで、今日はゆっくりと休むこととなった。

佑介自身も今日1日色々なことがあったためにどれがいいと思った。

「おやすみ」

「おやすみ～」

元気に部屋に入っていった茜。

あれだけ元気があってかわいいならばもてるだろうし、逆に妬まれるだろうと思った。

実際にそうであり、その結果が今回のことになったのだ。

しかしそれも今日でおしまい。

茜も明日からは今まで以上に楽しい生活が始まるだろう・・・そう佑介は思った。

明日も情報収集がある。

疲れを取るためにも寝ようと部屋に入っていった。

夢しまう宝箱　茜　ＰＡＲＴ　３

「おっはよ～」

元気な挨拶から始まる今日という朝。

茜にとっては新しいスタートだった。

それもあのいじめから解放されたのだから。

「おはよう」

それに新しい家族もできた。

彼の名は相場佑介。

理由は分からないが旅をしているようだ。

「おはよう茜、佑介くん」

父親の雅俊がいつもの笑顔で返してくれた。

「おはよう二人とも。よく眠れたかしら??」

朝食をもってやってきたのは母親の優衣だった。

そうして楽しい1日が始まった。

学校までは今日も何かの情報集めに出かけるという佑介と一緒に学

校の途中まで歩いていた。

「いってきま～す」

元気に言って学校へと向かって行く。

学校では茜を心配する人がたくさんいた。

大丈夫だったかや何かあったら言えよなっとかみんな茜のことを気遣ってくれた。

それがとても嬉しかった。

先生も茜の心のケアとしてカウンセラーを呼んでくれていたらしく、放課後はカウンセリングを受けることとなった。

先生や生徒たちには飛び切りの笑顔で感謝した。

そんな彼女がこの学校を明るくしているのだった。

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　４

今日もあたりを散策してみたがこれといった情報はなかった。

しばらくぶらつくかと思い、あたりを歩いていると廃工場に行き着いた。

なんとも不気味な感じがする場所。

すると奥からなにやら口論が聞こえてきた。

不審に思った佑介は中へと静かに入っていく。

真っ暗な中を歩いていくと、うっすらと明かりがついたところに行き着く。

隠れてみてみるとそこにはクリスマスの日に佑介に襲い掛かってきたやつらと同じ格好をした男が三人の私服姿の中学生か高校生と対峙していた。

「おいおい俺達三人相手に一人とは特環もなめてくれるじゃねえか」

一人の男が叫ぶ。

しかし目の前の黒コートの・・・少女だろうか。

全く顔色を変えずににやりと笑う。

勝つ自信があるのだろうか、しかしまだ彼女の虫は出ていない。

それに比べて男三人はすでにそれぞれの虫を出していた。

「何笑ってるんだ??あぁ??」

「余裕綽々だな～??」

ゆっくりと近づく男たち。

「そうやって要らない時間を作ってるからあんたたちむしばねはよわいんだよにゃ」

なんともおかしな語尾の少女だが、なんだか嫌な感じだった。

「ふざけやがって～!!」

そう言って男たちが襲い掛かる。

しかし少女はにやりと笑うと。

「もう襲いにゃ。あんたたちはもう死んでるにゃりよ」

そういった瞬間男たちに異変が起きる。

「何だこの粉は!!」

金色に輝く粉が空気中に舞っていたのだ。

彼女の方には金色に輝く蝶がいた。

その粉に当たった虫たちは次第に麻痺したように体が動かないようで地面に落ちてしまった。

同じくして虫憑きたちもまた地面に突っ伏してしまった。

「これは・・・一体」

うめき声にしか聞こえない声。

うまく呂律が回らない。

「にゃはは、あなたたちの最後の遺言はにゃにかな?? 今なら聞いてもいいにゃりよ??」

「クソヤロウ・・・」

「おんにゃのこに対してそれはないにゃりよ～」

そう言って一人の虫を踏み潰した。

嫌な音がした。

するとその虫憑きはうめき声も出さずにそのまま声を出さなくなった。

「ああ・・・そんな・・・」

絶望に打ちひしがれた男の声。

もう残された時間は少ないことを感じ取ったのだろう。

「にゃはは、またね」

そう言ってまた踏み潰す。

そしてまた声も出さずに倒れる。

残った一人はもう恐怖で声も出ていない。

「欠落者になるのは怖いにゃ??」

しかし声は出ない。

頷く力もない。

佑介はそれを見ているしかない。

「にゃはは、もう思い残すことはにゃいね〜」

「!!」

目を見開いた男は虫をつぶされそのまま動かなくなった。

「にゃはは〜こちら中央支部のたまさにゃりよ〜。むしばね殲滅完了にゃり〜」

ニコニコと笑う少女。

しかし佑介にはその少女・・・たまさが恐ろしくてたまらなかった。

虫を殺されれば欠落者となるということを知った佑介。

足音をさせずにそこを去った。

その日から佑介は周囲にいわゆる黒コートの人物がいないか注意していた。

茜の家では普段どおりに過ごして、夕方からは家庭教師として勉強を教えていた。

「ここは・・・」

「これはこうですかね??」

「早々それでオッケー」

お互いに意見を言い合いながら勉強をしている。

茜はもともと成績はいいほうだが、家庭教師に佑介がついたことでさらに上向きになった。

模試でも今まで以上の成績をとることができ、このまま行けば有名高校にも進学ができるとこまで行くことができている。

先生方も褒めてくれて茜は嬉しかった。

毎日の佑介との勉強の時間も一緒に話すのも楽しかった。

だから一緒にいたいと思うようになった。

佑介もまた楽しかった。

確かに何かに追われる身であることを自覚したときは怖かった。

しかし家にいるとき、そして一緒に登校するときは本当に楽しかった。

茜を一人の女性としてみるようになっていた。

彼女の言動の一つ一つが気になるようになった。

夢しまう宝箱　茜　ＰＡＲＴ　４

毎日が楽しいと思っている茜。

今日も明るく言っていますといって佑介とともに学校へと登校した。

途中で別れた二人。

学校ではいつものとおり、楽しく友達と生活していた。

それに手帳にはハートマークがついていた。

「日曜日は佑介とデート」

ウキウキ気分で土曜日まで過ごしていた。

そんな楽しみな時間はあっという間に来てしまう。

今日は楽しみだったデートの日。

今日のために買っていた服を着て弁当を作って準備完了だった。

両親もそんな元気になった茜を見て嬉しそうだった。

「それじゃあ行ってくるよ～」

「行ってきます」

元気よく出て行く2人をほほえましく見送る両親。

そんなわけで初デートとして二人が来たのは動物園だった。

弁当の入ったバスケットを佑介が持って、パンフレットを持った茜がどこに行くかを決めていった。

「こんどはこっちだよ～」

「おいおいそんなに走るなよ」

笑顔の茜を追いかける佑介。

そんな風にして動物たちを見て行く佑介たち。

彼らにとって本当に幸せな時間だった。

そんな時間が過ぎて行き、昼食となった。

「ちょっと飲み物買ってくるよ」

「いってらっしゃ～い」

そう言って佑介がドリンクコーナーに走っていった。

見渡すと周りにはたくさんのカップルたちがいた。

キスしているカップルもいたがまだ自分たちには早いかなっと引っ込んでしまう茜。

でもたくさんの思い出をこれから佑介と作って行きたいと思った茜。

今日も持ってきた小箱。

「今日はどんな思い出が入るのかな～」

にっこりと笑いながら小箱をなでる茜。

後ろから足音がしたために佑介が帰ってきたのだと思い振り返った。

「ゆうす・・・け・・・」

しかしそこにいたのは佑介ではなく眼鏡をかけた女性だった。

茜は直感でこの助成は危険だと感じた。

すぐにでも逃げて佑介のところに行かなければいけないと思った。

しかし体が動いてくれなかった。

「あなたの夢はおいしそうね」

にっこりと笑う女性。

おびえた瞳で見るしかできない茜。

「何なんですかあなた・・・」

「あなたの夢・・・私に頂戴」

ゆっくりと近づく女性。

「ひ・・・ゆうすけ・・・」

助けを呼びたくてもなぜか声が出ない。

そして震える手から小箱が落ちてしまう。

「あ！！」

小箱からは大切な者たちが転がり出る。

急いで入れなおしたくても体が動かない。

「なんで??なんで??」

理解できないこの状況。

焦る茜。

そして大切な思い出たちに触れたのは紛れも泣く謎の女性。

「いい思い出たちね。ねえ、あなたの夢を聞かせて??」

再度問う女性。

もはやされるがままであった。

口から無意識のうちに出てくる夢・・・。

「私の夢は・・・」

「さあ・・・」

手を伸ばす女性。

「私の夢は・・・この小箱いっぱいに思い出を詰め込むこと」

そういうと茜から茜色のオーラみたいなものが出て女性がそれを食らっていく。

「おいしい夢をありがとう」

そう言って女性は去っていく。

すぐに人ごみの中に消えて言った。

しばらくすると佑介が走って戻ってきた。

「ごめんごめん、込んでたからって茜??どうした??」

顔色が悪い茜を心配する佑介。

下には大切にしていた小箱が落ちていて中身が散らばっていた。

「茜!?どうしたんだ一体!!」

急いで肩を抱く佑介。

「大丈夫だよ・・・。なんでもないの・・・」

何かにおびえているのは丸分かりだが、自分にいいたくないことなのだろうと察したのか佑介は何も問い詰めなかった。

佑介が買ってきたジュースを飲み、落ち着いた茜。

楽しみにしていた昼食の弁当も、先ほどのことがあってなんだか味気なかった。

会話もなんだかかみ合わずに、申し訳なく思った。

「疲れたのか??」

弁当を食べ終わってから佑介が聞いてきた。

けして疲れたわけではないが先ほどの謎の女性とのやり取りが気になっていたのだった。

先ほど茜が小箱を落としたときも周りの人は全く気がついていないようすだったし、まるで2人だけが違う世界に来ていたかのように思っていた。

「ううん、大丈夫だよ～。心配かけてごめんね～」

なるべくいつものように返すがどこか違うのだろう、佑介の不安な表情は変わらなかった。

「何かあったら俺に言えよ??相談に乗るからな」

そう言って次どこに行こうかという話になった。

これ以上聞こうとはしなかった。
どうやら茜の心境を思ってのことだろう。

まだ回っていない動物のゲージへ向かうことになり、不安を少しでも和らげようとしているのか佑介は茜の手を握って歩いた。

茜もなんだか少し気持ちが楽になった気がした。

なんだか気持ちがぽかぽかと暖かかった。

これが好きな人といるときの気持ちなのだと感じた。

ずっとこうしていたいと思った。

そうして2人は日が暮れるまで動物園中を回った。

気に入った動物をバックに通行人に頼んで写真を取ってもらった。

それも何枚とったのか分からないくらいだ。

そんな幸せ気分で佑介と茜は真っ暗な夜の道をしっかりと握り合って帰宅の途についた。

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　５

帰宅すると茜は挨拶してすぐに部屋に入っていった。

楽しんでくれていたようだから佑介も嬉しかった。

茜の両親からはこれからもよろしくとお願いされてこちらこそを礼儀として返しておいた。

しかし自分がいなくなっていたときに何があったのか。

それだけが気になっていた。

何かにおびえる茜。

ふと特環に襲われているむしばねという集団のメンバーとの顔と似通っていたように思った。

しかしすぐにそれは否定した。

まさか茜が虫憑きだなんて・・・。

ありえないと考えた。

明日からまた情報収集が始まる。

見つからなくなればまた別のところに行かなければならなくなる。

それはまた彼女を悲しませることになる。

難しい状況だと頭を悩ませる佑介。

しばらく考えていたが、今日の疲れが一気に襲ってきて眠りに落ちた。

翌日いつものように朝食を４人でとっていた。

しかし茜はいつもと違う雰囲気をかもし出していた。

なんだか自分と同じ感じだと佑介は思った。

しかしそれがなんなのか。

まだ彼には分からなかった。

学校へ向かう通学路。

いつものように徒歩で歩く。

会話は次の日曜日のデートの場所。

晴天で桜が満開であった。

桜が風になびかれると花びらが舞い、それが茜の頭にちょこんと着地した。

「えへへ、ぼくに似合ってるかな??」

頭に乗っかった桜をさしながら言う。

「ああ、似合ってるよ」

そう笑顔で言う佑介。

通学路の途中で別れた二人。

なぜか周りの友達から浮いた雰囲気をかもし出している茜の背中を佑介は心配そうに見ていた。

夢しまう宝箱　茜　ＰＡＲＴ　５

学校へ向かう間も友達との会話が楽しいと感じていた。

いじめもなくなり生き生きとした学校生活が続けられている。

桜も満開に近くなりこれから散っていくのだろうとなんだか感慨深くなる。

それよりも今日も学校を楽しもうと張り切る茜であった。

授業の合間の休み時間。

自販機でジュースを購入していた茜の元に見知らぬ女の子がやってきた。

「はじめましてなのにゃ工藤茜さん。私となりのクラスの魅原木澪というにゃりよ」

「は・・・はあ」

いきなりおかしな語尾の少女が話しかけてきた。

「その魅原木さんがぼくになんのようですか??」

ジュースを両手で包みながら持つ茜。

手が震えているのが感じられた。

「怯えなくてもいいにゃ。ただ聞きたいことがあるだけにゃ」

「聞きたいこと??」

不安げに聞いてみる茜。

それを見てニコニコしている澪。

「そうにゃ。単刀直入に聞くにゃ。君虫憑き??」

最後の言葉を言った澪の声がひどく冷たかった。

一瞬答えそうになったがやっとのところでとどめた。

しかし足ががくがくと震える。

ばれたのかと胸がずきりと痛んだ。

「その様子だと・・・」

言わないで!!・・・そう思った。

彼女から見た茜はそれはひどく狼狽しているだろう。

それが自分でも分かった。

自分がひどく焦っているということを。

「にゃはは、そんなに焦らなくてもいいにゃりよ。君が虫憑きだってことは分かってるんだからにゃ」

「どうしてそんなことを言うの・・・??」

「それはこの狩間市に大喰いちゃんが現れたからにゃ。私が気配を追って着たらあなたのところにいたにゃりよ。一気に潰そうかとも思ったにゃけれどもにゃ。あまりに人が多かったからにゃりよ。黙ってみてたにゃ」

全部知られていたらしい。

それに彼女の気配を追っ手という言葉から彼女も虫憑きなのだと確信した。

彼女からはまだ危険な感じはしないが、いつ襲われるか怖かった。

「大喰いって・・・あの女性のこと??」

「そうにゃりよ。あいつはわたしたち虫憑きにとって敵にゃりよ。あいつらのせいでわたしたちは虫憑きにされたにゃ。全くいい迷惑にゃりよ」

うんざりとした顔をしている澪。

この空間だけが断絶されたかのように静かだった。

誰かが来てもいいのに、いるのは茜と澪だけだった。

のどがひどく渇く。

昨日の女性がいるから自分は虫憑きにされた。

そんなことを願ってもいないのに勝手にされてしまった。

そんな大喰いに対して憎悪をが湧き上がる。

「なんで私が虫憑きにならなきゃいけなかったの・・・」

ポツリとこぼす茜。

その目は虚ろだった。

必死に答えを欲している目であった。

「そんな質問はみんな同じにゃりよ」

ぴしゃりといわれ、思わずびくっと震えてしまう。

澪の目は真剣だった。

相変わらず語尾はおかしいが・・・。

「みんなそれぞれ夢があるにゃ・・・。それを奴らはえさにしてるにゃよ」

確かにあの時茜は自分の夢はなんなのかと聞かれた。

あの時はなんとなく言ってしまった。

しかしその結果がこれだ。

いまさら後悔したところで何にもならない。

「夢を忘れたくないために戦い続ける・・・夢を叶えるために戦い続ける・・・。それが虫憑きにゃ。それにわ多氏も虫憑き。夢なんて本当に小さなことだったにゃ。でもそんな夢も食べてしまう奴ら・・・。だからそんなやつらを私は殺す」

殺気に満ちた瞳。

ひどくどす黒い瞳。

そんな闇が少女からあふれていた。

彼女の過去に何があったかは茜には分からない。

しかしけして恵まれていたわけではないことは分かっていた。

なぜなら彼女はとても寂しそうな瞳になっていたから。

「私はこの都市に派遣されたものにゃ。あなたに忠告するにゃりよ。おとなしく特環に身柄を明け渡すにゃ」

「え・・・」

身柄を明け渡す・・・つまりはもうここに入られないということ。

そんなことは茜にとってありえないことだった。

せっかく手に入れた幸せな日々。

佑介との勉強やデート、会話など。

たくさんの思い出がある日常。

それらをすべて捨てなければいけないなど彼女にはできなかった。

「忠告を守らない場合にはあなたの虫を殺すにゃ」

淡々と言う澪。

しかし言葉には重みがあった。

「でも・・・ぼくは・・・」

そんなことはできないといいたかった。

でも虫を殺されたあとに何が待っているのか。

得体の知れない恐怖が彼女の体を蝕む。

がくがくと震える足。

「いいかんにゃ??私たちの組織は何百何千といるんだからにゃ。逃げようなんて考えるにゃよ」

脅迫じみた告白。

もう茜は何もいえなかった。

ただ悲しかった。

いじめられた日々。

周りからは励まされたけれどもそれは全く解決にはならなかった。

自分が笑っていれば誰も傷つかない。

傷つくのは自分で十分を思っていた。

そしてとうとう未遂までしてしまった。

しかしそこで踏みとどまれたのは佑介がいてくれたからだ。

佑介が茜を絶望のふちから救い出してくれた。

彼との出会いが彼女を変えた。

まったく違う世界が見えるようになった。

しかしそんな楽しい日々が一人の少女によって終わろうとしている。

なんともならないこの状況。

ここでチャイムが鳴ったために教室に戻ることになった。

すれ違うとき。

「逃げるなんて考えないほうがいいにゃ」

ぼそりとつぶやいた澪。

心臓を握られた感じがした。

そして教室に帰るとすでに先生が着ていた。

「どうした工藤??遅れてくるなんて珍しいな」

「すいません～。ちょっとともだちとはなしこんじゃってね～」

何もなかったかのように振舞う茜。

授業もいつものように進んでいく。

しかし終わりとは突然やってくる。

放課後友達と下校していた。

分かれ道の向こうには今日も情報集めで出かけていた佑介の姿があった。

「それじゃあね～」

別れを言って佑介のいるところに走った。

「きゃー!!」

いきなり友達の悲鳴が聞こえた。

どうやら信号無視をしたトラックが突っ込んできたのだった。

その子はあまりの恐怖に動けない。

今から走って行っても間に合うわけがない。

彼女との遊んだ日々が思い出される。

たくさん話したことも思い出される。

それがなくなってしまう。

思い出がなくなってしまう。

「嫌・・・」

トラックと激突寸前。

「いやあぁぁぁっぁぁ！！」

茜の悲鳴が響き渡った。

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　６

「ふぅ・・・」

今日も情報なしだった。

どうやらもうここには虫憑きはいないのかもしれない。

そう思って佑介は茜と待ち合わせしている場所へと移動した。

夕日で赤く染まった空を見る。

桜がほとんど散ってしまった木々が陳列している。

夏が来るんだなっと近い未来を思い描いている。

近くに海があった。

そこに茜と行こうと考えた。

そうすれば茜の水着を見られる。

これでも男であるから女性に興味がないわけではない佑介。

楽しみの一つが水着であった。

「どんなのきるのかな・・・」

そんなことを考えながら待ち合わせ場所へと急ぐ。

つくとまだ茜は着ていないようだった。

時間までまだ少しあるので待つことにした。

しばらく景色を見ながら待ってると茜の笑い声が聞こえてきた。

どうやら友達と来たようだ。

途中で分かれて佑介のほうに走ってきた。

しかし途中で。

「きゃー！！」

女の子の悲鳴が聞こえた。

するとトラックが信号を無視して突っ込んできたではないか。

ここで佑介が虫を使えば何とかなるが、こんなところで日常を壊したくない。

すでに壊れてしまったが、この楽しい日々を壊したくない。

そう思っているとドンドン近づく。

「やばい！！」

佑介が叫ぶと同時に。

「いやあぁぁぁぁっぁぁぁ！！」

茜の悲鳴とともに、青い光が輝いた。

「うわ！！」

思わず目をつぶってしまう佑介。

数秒後目を開けてみるとそこは。

「なんだこれ・・・。氷・・・？？」

地面が凍っていた。

向こうには転んだ少女の前でトラックが氷付けになっていた。

おそらく中の人は生きていないだろう。

ピクリとも動かないからだ。

その少女はただ一点を見据えて震えていた。

トラックに惹かれる恐怖は去ったが、新たな恐怖が表れたのだった。

「虫だー！！」

少女は叫んだ。

すると次の瞬間周りの人々が悲鳴を上げて逃げ惑う。

そこにいたのは・・・。

虫と忌み嫌われるレッテルを貼られたのは・・・。

「どうして・・・」

彼の目には信じたくないものが映っていた。

彼が守りたいという笑顔を持ったものが映っていた。

彼にたくさんの笑顔と思いでをくれたものが映っていた。

「どうしてだよ・・・茜」

そこに絶望に打ちひしがれた茜の呆然としている姿があった。

夢しまう宝箱　茜　ＰＡＲＴ　６

みんなが自分が虫憑きだということを知ってしまった。

そして逃げ惑う人々。

さっきまで友達だって子に近づくと。

「来ないでよ!!」

拒絶された。

そんなことよりも傷つく言葉。

「来ないでよ!!この化け物!!」

「え・・・」

自分は化け物??と何がなんだか分からなくなる。

そして皆が逃げ惑っていることからもう自分の居場所がなくなってしまったことを悟った。

そして追い討ちをかけること。

「どうしてだよ・・・茜」

「佑介・・・ぼく・・・・」

何もいえなかった。

絶望に染まった瞳で自分を見ているからだ。

茜は悟った。

もう佑介も自分を救ってくれない。

佑介も自分を化け物扱いする。

家族も同じ。

自分を忌み嫌い、追い出そうとする。

あの澪という少女が属する特環にでも彼女を売り渡すだろう。

そんな悲しいことをされるくらいだったら。

「生き延びてやるもん！！」

そう言って逃げ出した。

「茜！！」

自分の名前を読んでくれる大切な人。

しかし彼女はもう信じられなかった。

あんな目で見られたら誰でもそうなってしまう。

走って走って走りまくった。

彼女の近くには青い光を輝かせた虫がいた。

それを見る人々は逃げ惑う。

そのたびに思い出が壊れていく。

小箱の中身がどうなっているかはそんな余裕はなかった。

痛む胸の痛みを我慢しながら走り続ける。

そしてついたのは廃工場だった。

「待ってたにゃ・・・」

目の前に現れたのは魅原木澪だった。

「ここが君の墓場だにゃー」

黒いコートを着込み、ゴーグルをつけた少女。

「澪ちゃん・・・」

恐怖に染まった声を絞り出す。

しかし少女は指を横に振る。

「ちっちっちだにゃー。私は今魅原木澪ではないにゃりよ」

「え？？」

一体何のことを言っているのかわからない茜。

「あなたを討滅するもの・・・「たまさ」だにゃー」

そういうと彼女の方から金色の光を放つ虫が現れた。

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　７

「茜・・・どこ行ったんだ??」

佑介は走っていった茜を追っていた。

しかし所々で氷付けになった道があり、走れないところがあったのだ。

「ここで何したんだ・・・??」

先ほどは友達を守りたいから虫が反応した。

しかしここでは全く何も怒った形跡はなく、ただ人々が怯えているだけだ。

どうやら何かの拍子に能力が発動したとしか考えられなかった。

「ちくしょう・・・」

舌打ちをしながら携帯に電話してみる。

コール音がするが全く出る気配がない。

何度もかけなおした。

しかし結果は同じ。

「何してるんだ茜のやつ??」

電話を勢いよく切ると再び走り始める。

「茜・・・」

いじめに遭ってもめげない強い女の子。

「茜・・・」

自分が助けてあげた女の子。

「茜・・・」

彼女は虫憑きの自分を受け入れてくれた女の子。

「茜・・・」

笑顔がかわいい女の子。

「茜・・・」

勉強についてきてくれる家庭教師として教え甲斐のある女の子。

「茜・・・」

自分が今までで2度目にデートした女の子。

「茜・・・」

自分と手をつないでくれた女の子。

「茜・・・」

虫つきとなってしまった女の子。

放っては置けなかった。

あんなに自分に夢を叶えるチャンスをくれたのに。

あんなに自分に思い出をくれたのに。

これからだって楽しく一緒にいられると思ったのに。

だから佑介は走った。

肺が潰れようとも止まるつもりはなかった。

しだいに夕暮れが漆黒の闇に包まれ始めた。

そして雨が降ってきたのだ。

なんともいやな雨だった。

時刻は９時。

一体どれだけ走り続けたのだろうか。

「茜・・・」

姿が見えない彼女の名をつぶやく。

「あれだけ親しかった友達に化け物呼ばわりされたら辛いだろうな・・・」

自分が言われてもいやな言葉だと思った。

仕方なくいったん家に帰ることにした。

家につくとそこには黒いコートを来た男たちが5・6人いた。

クリスマスに佑介を襲ってきた男たちと同じ姿だった。

「まさか・・・」

茜を殺そうとしているのでは・・・。

そう思ってしまうと胸が締め付けられた。

中に入ると両親たちが泣いていた。

なぜあの子が虫憑きになんて・・・などと嗚咽交じりにいっていた。

男たちは家の中を調べていた。

まさかと思い、自分の部屋に行くと案の定調べている最中だった。

「あんたら何勝手に人の部屋に入ってるんだ??」

怒気を混じらせながら言う。

しかし彼等は全く動じない。

「ここの娘が虫憑きだと判明した。関係者である貴様が関係しているかもしれないと考えられる場合もあるので調べているのだ」

「貴様の意見など、ここでは通用しない」

なんて無責任なことだろうと思った。

彼等は虫を出して注意深くものを一つ一つ丹念に見ていく。

中には思い出の品々があった。

それを見終わるとそこらへんに投げたのだ。

「貴様～！！」

怒りに我を忘れて殴りかかる。

しかし戦闘に特化しているのか、カウンターを受けてしまい、その場に崩れる。

「今の行動はすまないと謝罪する。しかしわれわれに手を上げることはやめたほうがいい。貴様のような一般人が勝てるとは思うな」

冷たく言い渡された。

確かに虫憑きに普通の人間が敵うはずはない。

しかしそれは佑介が虫憑きで泣ければの話だ。

するとしたから叫び声が。

「各自に連絡!!中央支部「たまさ」が例の虫憑きと戦闘中!!援護に向かう!!」

「了解!!」

いきなり部屋から出て行く人々。

こうして入られないと佑介も家を出る。

すると。

「佑介くん・・・」

後ろには茜の両親がいた。

「茜をどうか頼む・・・。あの子は君のことが大好きなんだ・・・」

「だからね・・・。茜を救えるのは佑介くんしかいないの」

涙ながらに行ってくる2人。

怖くないはずはないだろう。

しかし元は自分たちの娘。

簡単に捨てることなどできない。

「分かりました・・・俺が茜を守ります！！」

そう言って佑介は走りだす。

曲がり角を曲がったところで男たちの姿が見えるとすぐに肩の辺りに黒い虫を現す。

ずっと姿を現せていなかった佑介の虫。

それが足に同化すると化け物のような足となった。

少し力を入れると地面が陥没し、次の瞬間大きく跳躍した。

一気に男たちの頭上に到達した佑介。

焦る男たちに向かってけりを入れる。

「おらおら！！」

人は一撃で気を失い、虫をゴミのように粉砕するとその場から墜落する。

あっという間に2人を欠落者にした。

「何だ、もう追ってこないのか」

しかし安心ができなかった。

ここにいないものはすでに茜の元に行っているからだ。

「待ってろ茜！！今行く！！」

再び地面を陥没させ空へと跳躍した佑介だった。

夢しまう宝箱　茜　ＰＡＲＴ　７

激しい戦闘が繰り広げられていた。

たまさが金色のりんぷんを散布し、茜と虫の動きを止めようと罠をはる。

それに対して空間を氷付けにし粉を凍らせる。
しかしわずかに逃れた粉が触れると一瞬だけ動きが鈍る。

そこにほかの虫たちが攻撃を加える。

「ぐぅ！！」

もう何度目かの攻撃受け、ぼろぼろとなった茜が立ち上がる。

たまさの周りにはすでに2人の欠落者が出ていた。

彼等は氷付けで、虫というとすでに氷の像と化し、風化していた。

「にゃはは！！よく戦うにゃー。特環相手にここまでやるとはむしばねの中でもそうはいないよ～」

笑いながらだが、茜の獅子奮迅の戦いに敬意を表するたまさ。

対する茜はふらふらとおぼつかない足をしっかりと地に着けてたまさたちを睨んでいた。

あたりは陥没した地面と、氷付けになった鉄骨だらけ。

いつ崩壊するかも分からないこの廃工場の中で死闘が繰り広げられる。

「にゃはは～！！一気に片をつけるよ～」

そう言ってさらに金色の輝きが増す。

急いで足を引きずり、距離をとる。

「私の思い出を奪わないで！！」

叫ぶと同時に虫の輝きがさらに増し。青い光が広がっていく。

その光が触れたところから一気に氷付けが始まる。

地面から鉄骨・・・。

たまさたちがたっていたところも凍っていた。

「全くおっかない力にゃり～」

そう言ってりんぷんを撒き散らす。

それが建物全体に広がる。味方には当たらないように操作しているようだが、一歩間違えば味方までもが巻き添えである。

だからこそ他のメンバーは彼女に何も言わないのである。

りんぷんから逃げる茜。

しかし全体に回ってしまったりんぷんから逃げられるはずもない。
後ろは壁である。
「ああ・・・あああぁぁ・・・」
恐怖に襲われる茜。
一瞬立ちくらみのようなものを感じる。
すると何かを奪われたかのように体から何かが抜けていく。
それが何かは分からないが、とても大切なものであることには限りなかった。
「どうしよう・・・」
すると茜の虫が輝き、後ろの壁が凍りになる。
それに対して茜が体当たりするとガラガラと崩れて外に出ることができた。
「やった・・・」
ふらふらと逃げ出す茜。
意識は朦朧としていた。
ジャリを踏む音がした。

誰だろうと顔を上げるとそこには絶望の光景があった。

黒いコートを着た男性や女性が何十人といたのだった。

彼らこそが特環中央支部のメンバーである。

「よく逃げたと褒めてあげるにゃー茜。でも逃げたところからあなたの死は決定しているんだにゃー」

残酷な判決が言い渡される。

すでに力の使いすぎで疲弊したからだ。

虫の輝きも微弱なものとなっていた。

こんな状態では逃げることも生き残ることも不可能だった。

「嫌・・・死にたくない・・・」

「大丈夫だにゃー。死というのは虫の死・・・つまり夢の終わりを意味するにゃー」

「夢の・・・終わり・・・??」

涙を流しながら地面に崩れ落ちる茜。

「あなたは欠落者となり・・・一生夢を見ることはなくなるにゃー」

「それって・・・」

「そうだにゃー。思い出なんてないのだにゃー」

「うわあぁぁぁぁっぁあっぁ！！」

それを仰ぎながら涙する茜。

終わりだと思った。

もう自分の夢は終わりだと思った。

たくさんの思い出をこれからもあの小箱の中に入れて生きたいと思っていたのに。

それはもうかなわぬ夢。

それは終わってしまった夢。

「ゆうすけ・・・」

それでも最後に会いたかった。

最後に愛し合えた彼に。

「もういいかにゃー？？」

じりじりと近づく特環の局員たち。

そして満月が雲に隠れたとき・・・。

「かかるにゃー！！」

一斉に局員たちが攻撃を始めた。

そして茜は目を閉じた。

もう開くことはないと思って・・・。

しかし一向に意識が刈り取られる気配はなかった。

確かにまだぼんやりとしている感じはあったが。

すると何かが耳を伝って聞こえてきた。

「何ものだ!!ぎゃあああぁぁぁぁぁぁ!!」

「化け物だぁぁアアアアア!!」

「何やってるにゃりよ!!早く数で押し切りなさいにゃり!!」

「そうは言ってもやつは早すぎます!!数で攻めても一気に吹き飛ばされてます!!」

最後の力を振り絞り、戦闘が行われているほうを見た。

すると私服姿の少年が、真っ黒な長い棒を振り回して局員を吹き飛ばしている。

彼の右手は化け物のように異様なものだった。

しかしその力はどの局員よりもはるかに上だった。

虫をなぎ払い。

りんぷんを旋風を起こして吹き払い。

それが局員に作用してその好きに叩き潰しまくった。

まるで。

「死神・・・」

月光に照らされた彼の姿はまるで漆黒の夜を跳躍し、狩をする死神同然だった。

たまさは変わらない劣勢に顔色を悪くしていた。

しかし茜との視線が合うと。

「まずはあんたから欠落者になるりゃりよー！！」

りんぷんを飛ばし、しれに続いて虫を踏み潰そうとしていた。

彼女自身には作用しないりんぷん。

これ以上動けない茜。

迫るりんぷんとたまさ。

「にゃははっははははっはははあああぁぁぁっぁぁぁ！！」

恐ろしいほどに目を見開いたたまさが襲い掛かる。

声も出せない茜。

そして。

たまさの顔が目の前に現れた。

終わったと確信した。

次こそ終わりだと思った。

しかし一向に襲い掛かってこない。

恐る恐る目を開けると。

そこには瞳に感情をやどしていない欠落者と化したたまさがいた。

近くにいたたまさの虫には槍が突き刺さっていた。

真っ黒に染まった槍が。

向こうにはそれを投擲したものがいた。

死神がいた・・・。

そしてその死神の周りには欠落者となった局員たちがバタバタと倒れていた。

虫たちの残骸が散らばり、感情が皆無となった人々が倒れている。

それらには全く目も留めずにその死神がゆっくりと茜に近づいてきた。

しかし恐怖はなかった。

むしろ懐かしさというか、嬉しさがあった。

だって来てくれたのが。

「ゆうすけ・・・」

相場佑介が虫憑きとして茜の前に現れたのだ。

彼の表情は彼女の無事で安堵していた。

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　８（前書き）

いよいよクライマックス。

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　８

跳躍していくと見えてきたのは黒いコートを着たやつらの大集団だった。

「一体何人いるんだよ・・・」

わずかに身震いした佑介。

しかし彼らが取り囲んでいる真ん中にいるのは確かに茜だった。

よく見えないが崩れ落ちているようだった。

このままではまずいと近くに落ちていた棒を持つ、そして右腕を虫と同化させると棒は黒く染まり、強度が格段に上がった。

「待ってろ茜！！」

そう言って一気に局員たちの後ろに位置を取った。

さすがに気づかれたが、一気に近くにいた局員の虫から叩き潰しにかかった。

慌てて攻撃してくる局員たち。

しかしそれを回転させて一気になぎ払う。

「テメエらの相手をしてる暇はないんだ！！」

叫びながら振り回す。

束でかかってくると一気に体を回転させて、虫たちをなぎ払い。

「おらおらおらあぁぁぁ！！」

りんぷんが来るとそれを望で起こした旋風で相手側に吹き飛ばす。

それを受けた局員たちは次々に麻痺したかのように崩れ落ちる。

まだ意識があるようで何かをつぶやいているが呂律が回っていない。

しかしそれを全く無視して佑介は棒で落ちている虫たちを片っ端から叩き潰す。

バタバタと欠落者と化す局員たち。

しかし彼女の危険が迫っていることをようやく気がついたのは彼女の目の前にたまさが迫っているときだった。

「茜！！」

叫んでみても何も変わらない。

「これじゃあ・・・前と同じだ・・・」

またしても己の無力さを呪うしかないのかと思った瞬間。

右腕から牙が出た。

それを無意識にとりだし、それを棒と融合させ、たまさめがけて投

擲する。

槍は恐るべき速さで飛んで行き、たまさの虫を串刺しにしとめた。

するとたまさはガクリと崩れ落ちた。

欠落者になったのだろう。

向こうでは茜がこちらを向いている。

佑介は茜に向かってゆっくりと歩き始めた。

ゆっくりと会いたかった茜の元へと歩いていく。

彼女の顔がだんだんと鮮明になっていく。

「ゆうすけ・・・」

茜の前に立つと彼女は自分の名前を言ってくれた。

「茜・・・」

お互いの顔を見つめあう。

自然に笑顔になっていた。

「来てくれたんだね・・・嬉しいよぼくは」

「当然だろ??俺はお前の彼氏なんだから」

「それもそうだね・・・。僕たちは心でつながっている」

そうして佑介は茜を抱きしめる。

小さな体だった。

しかし何にも負けない強い心の鼓動が感じられた。

「怖かったんだよ??」

「ああ」

「寂しかったんだよ??」

「ああ」

「辛かったんだよ??」

「ああ」

「もう会えないかと思ったんだよ??」

「ああ」

「ゆうすけ～」

「ああ、俺はここにいる」

小さな女の子が震えていた。

どれだけ怖かっただろう。

どれだけ寂しかっただろう。

どれだけ辛かっただろう。

それを佑介は在るがまま受け入れてあげた。

月の光が彼らを照らす。

土が涙で顔を汚した茜の顔と戦闘後の汗でぐちゃぐちゃな佑介の顔。

その2人の顔が近づく。

あと数センチ・・・。

しかしそれを無常にも引き裂く銃声。

緑色の弾丸が茜の虫を木っ端微塵に吹き飛ばした。

一瞬にして感情を失った茜が無常にも佑介の横を通過していく。

ばさりと地面に倒れた茜。

一体何が起きたのか分からないという佑介。

キスしようとしたらいきなり銃声がして茜の虫が吹き飛び茜が欠落者となった。

銃声・・・。

虫が死んだ・・・。

だから茜は・・・。

「欠落者になった・・・??」

茜の目には涙があった。

それが嬉涙だったのか。それとも・・・。

それを知るすべはない。

後ろでは立ち去る音がする。

茜はもう・・・しゃべっても笑顔を向けてもくれない・・・。

「誰だ貴様あぁぁぁぁっぁぁぁ!!」

激高する佑介。

走っていくとそこにはぽつんと少年が立っていた。

どこにでもいるような少年。

特徴的なのは絆創膏ぐらいだろうか。

手には煙が出た自動式拳銃。

肩には緑色の虫がいた。

特環の局員だとすぐに分かった。

少年の瞳は分からないが表情には感情がない。

ただ任務を完了させたというだけだった。

それに対して佑介の顔には怒りが表れていた。

しかしそれを何とか抑えている。

今戦っても意味はない。

怒りに任せても刃がぶれるだけ。

だからゆっくりと低い声で。

「テメエは誰だ・・・」

ワックスでいじられた佑介の髪が風でなびく。

そして少年は口を開いてこう言った。

「かっこう」

（完）

夢しまう宝箱　佑介　ＰＡＲＴ　８（後書き）

コメント・評価待ってます！！
次回『夢燃やす者』です。
現在執筆中であります。

夢燃やす者　プロローグ

少年・・・相場佑介は欠落者となった少女・・・茜を抱き寄せながら目の前の局員である少年を睨みつけていた。

ようやく会えた二人だったが、目の前の少年がそれを引き裂いた。

少年たちは言葉を交わさずににらみ合う。

まだ当たりは夜の闇に包まれ、廃工場は氷とクレーター、欠落者だらけであった。

異様な空間の中にまともなのは2人。

「なぜ・・・こんなことをした」

目に涙を浮かべながら佑介が尋ねる。

局員の少年は全く興味なさそうにして。

「そう連絡を受けたからだ。やつはおとなしく俺達の忠告に従わなかった。だから反逆したということで討滅したまでだ」

梅雨が近いのか湿気を含んだ風がほほをなでる。

言い終えると再び背を向けて歩き出す。

もう佑介は彼にかける言葉はなかった。

言ったところで茜が戻ってくるわけではない。

欠落者となり生気のない瞳をただ佑介に向けている茜。

ふと唐突に。

「後に俺達の仲間がここにそいつを回収しに来る。殺されたくなきゃさっさとそいつを置いて帰るんだな」

それは彼なりの優しさだろうか。

ぶっきらぼうな言い方でさっさとここを立ち去れと。

そんなこと言われても佑介に茜をそのままにしてはいられなかった。

自分の命を投げ出しても守りたかった存在。

しかしその少女はもう・・・。

「ちくしょう・・・」

地面に思いっきり拳を叩き込む。

何度も叩き込むとそこには深い穴が開く。

まるで彼の心に開いた穴と同じに見えた。

血がにじみ皮がむけていた。

そんな痛みよりもまた大切な人を守れなかった自分のふがいなさか

らの後悔による痛みのほうが大きかった。
また叶えられなかった夢。
ここに来る前に誓ったはずの夢。
それをまた叶えられなかった。
「力が・・・足りないのか??」
自分にはまだ大切な人を守れるくらいの力が足りないのか。
それとも覚悟が足りないのか。
相場佑介は廃工場で答えの見えぬ問いの回答を探していた。
佑介　ＰＡＲＴ　０
しばらく茜を抱いたまま黙っていると局員の人々がやってきた。
呆然としている佑介を無視して茜を連れて行く。
はっと気づき、走り出した佑介の腹に重い拳を打ち込む。
「ぐふ!!」
あまりの痛みに悶絶する。
なにやら回収完了といっていた。

どうやら茜の家にいる仲間に連絡しているようだった。

このまま帰っても彼女の両親にかける言葉が見つからない。

守るといっておきながらそれができなかった。

局員たちはそんな悔しさと後悔に打ちひしがれている佑介など目もくれずに帰っていく。

夜の星空がただ無常に輝いていた。

夢燃やす者　プロローグ（後書き）

第3話開始です。
コメント・評価まってます！！

夢燃やす者　佑介　ＰＡＲＴ　０

佑介はそれからしばらくしてゆっくりと立ち上がった。

すでに朝日が出始めていた。

よろよろと歩きながら居候していた家に向かう。

次第に顔を出す太陽の光がまぶしかった。

思わず目を細める。

太陽のような輝く笑顔。

茜が佑介にくれていた笑顔。

それはもう一生見ることができない。

「茜・・・」

彼女の名をつぶやく。

答えてくれない太陽。

そうして家につくと中にはソファーに座りうなだれている２人がいた。

彼らを見ると本当に茜がいなくなってしまった事を確信した。

「ああ・・・」

自分はまた守れなかった。

「また・・・なのか??」

あれだけ誓っておきながら。

「2人に守ると約束したのに・・・」

茜を局員に欠落者にされてしまった・・・つまり殺されてしまった。

彼らにどのように伝えられたのかは分からないが、もう茜がここに戻ってこないことは伝えられたはずだ。

まだ彼等は佑介が帰ってきたことに気がついていない。

「ただいま戻りました・・・」

元気に言うことはできなかった。

約束を守れなかったのだから当然である。

「佑介くん・・・」

茜の父親が口を開く。

目は泣いていたのか真っ赤だった。

母親のほうも同じだった。

手には濡れたハンカチが握られていた。

「すいませんでした・・・俺にもっと力があれば・・・」

バカ正直に自分は虫憑きですなどとは言わなかった。

「君も見たんだね・・・」

父親が尋ねてきた。

おそらく彼女が欠落者になったところのことだろうと思った。

「茜が・・・死んだということを」

そういう風に伝えられていたのだと知った。

どちらにせよ彼女はもう死んだ同然である。

「はい・・・」

だから佑介は正直に肯定を示す。

すると佑介の視界が一気に反転した。

気がつくと倒れていることに気がついた。

目の前には顔を真っ赤にした茜の父親の姿。

口の中に血が広がる。

どうやら佑介は殴られたようだった。

「あなた！！」

母親のほうはすぐに静止に入る。

父親のほうももう殴る気はないようだった。

殴られた頬を押さえながら立ち上がる。

「すいませんでした・・・」

助けられなくてと続けるつもりであった。

しかし口から出てこなかった。

出したからといって何が変わるわけではなかったからだ。

「殴ったのは君が約束を守れなかったからだ。ふざけるなと言いたいかもしれないが親の気持ちになれば分かるだろう・・・」

確かにふざけるなとは言えなかった。

「話は変わるが君はこれからどうする??」

父親が口を開く。

茜がいなくなったことで家庭教師としてここに居候していた佑介がいる意味はなくなる。

「俺は・・・ここを出ます」

きっぱりと言った。

「そうか・・・」

少し残念そうな顔をしていた。

「君がそういうならばとめはしない。少しばかり寂しいけれどね。君の事を私たちは息子のように思っていたから」

彼らと過ごしたのほんの数ヶ月。

しかしそれだけの絆が出来上がっていたのだ。

「すいません。せっかくそのように思っていただいていたのに・・・」

しかし佑介には旅を続けなければいけなかった。

虫について知るために。

自分の夢を叶えるために。

「昼ごろにでも旅立たせていただきます」

覚悟を決めて瞳で2人を見ていた。

彼らも佑介の覚悟を感じ取ったのか、それ以上は何も言わなかった。

夢燃やす者　魅車　ＰＡＲＴ　０

薄暗い大きな部屋。

巨大なスクリーンとたくさんのパソコン。

さらに最新式の電子機器。

ここは特環中央本部。

しかし彼ら中央支部は先の任務で大きな損害をこうむっていた。

多くいた局員たちを一夜にして大半を失ったのだ。

それもたった一人の虫憑きによって。

「一体何が起きたのかしらね」

嘆息しながらつぶやく女性・・・魅車八重子。

特環副本部長の地位に君臨する女性である。

「これじゃあほかの支部から局員送ってもらわなきゃだめね」

その件に関してはすでに東西南北の支部に連絡しているので問題ではなかった。

そうして大きなスクリーンに映ったたくさんの監視カメラに移る各局員たちから見た映像。

特に目立ったものは映っていない。

「全く何が起きたのかしらね」

その場に居合わせた局員が一掃された。

特別に収集されていた東中央支部の局員・・・かっこうが殲滅したようだったがその場には対象の虫憑きとその恋人らしき男しかいなかったようだ。

それ以外には全く情報がない。

謎の虫憑きの存在。

はじめは殲滅した虫月の少女がやったのかと思ったが映像からしてまったく違うようだった。

それに映ったその謎の人物は暗闇だったためとあまりの早さ、飛ばされる局員が目隠しとなって顔が全く見えなかった。

しかしその映像を見たものは口をそろえていった。

やつは死神だと。

鎌ではないが長い棒のようなものを自由自在に振り回して次々と局員を欠落者にしていく。

特環にいなければ初めはレジスタンス・・・むしばねのものかと思ったが仮面をつけていないことや辺りに仲間がいなかったことから

近場で生まれた虫憑きだということになっていた。

彼女の手にしているカルテにはこうか書かれていた。

赤浜市・狩間市での謎の虫憑き『死神』についての報告書。

とは言うものの有力なものは何も書かれていない。

すると後ろから靴と床がぶつかり合う音がする。

ゆっくりと近づいてくる。

そこに現れたのは特環局員が身につけている黒いコート姿のものではなく、顔面を重ねて貼ったテープで隠した人物だった。長身で燃えるような赤い髪の毛の男。

そして横には男にも女にも見える子供の姿があった。

「いらしていたのですか??ハルキヨ」

魅車八重子は長身の男に微笑みながら言った。

夢燃やす者　ハルキヨ　ＰＡＲＴ　０

異様な気配を漂わせた少年が薄暗い建物を歩いている。

隣には小さな子供がくっついて歩いている。

彼について回る子供。

別に彼はこの子供を嫌っているわけではなく、最大限に利用している。

所詮少年の夢を叶えるための駒にすぎないのだった。

その子もそれを知りながらもついて回っているのではないか。

自動ドアが開くとそこには巨大スクリーンを見上げていた女性がいた。

「来ていたのですか??ハルキヨ」

意味ありげな笑みとともに呼ばれる自分の名前。

フンと鼻を晴らして。

「ただ近くを立寄ったから来たまでだぜ??魅車」

顔面を覆った顔からは表情は読めない。

「側のことは何も無しですか??魅車さん」

横に並んでいた子供が言う。

「あらウメ、ごめんなさいね。またハルキヨにくっついてきたのかしら??」

詫びを入れながら尋ねる魅車。

「まあ、そんなところだ。で??俺に言っておきたいことがあるってどういうことだ??」

目を細めるハルキヨ。

常に単独行動をし、神出鬼没の彼とコンタクトを取れるのはめったにない。

偶然とはいえここに現れた彼には、殲滅部隊の彼にはぜひとも耳にしておいて欲しい情報だった。

「聞いて欲しいの・・・この2つの情報をね・・・」

魅車が手にしていたカルテの下にはさらに新しいカルテが握られていた。

「見せろ・・・。そして説明しろ・・・」

低く殺気のこもった言葉が薄暗い部屋に響いていた。

夢燃やす者　魅車　ＰＡＲＴ　１

魔神・・・否魔人と形容しても差しさわりがないほどに力強さがあふれている目の前の少年。

彼に睨まれると拒否する言葉がなぜかのどから出てこない。

言った瞬間どうなっているか決まっているからだ。

しかし彼女にとってそんなことは関係ない。

彼とは部下と上司の関係。

何を言っても地位的な権力を使えばなんとでもなる。

まあそう何度も通用するようなやつではないが。

「まずはじめに最近になって話題に上がっている謎の虫憑きについてよ」

ハルキヨとウメに対して資料を渡して説明を始める。

資料は後で見ればいいという感じで2人とも魅車を見ている。

「その虫憑きは去年のクリスマスから現れ始めているわ」

「去年のクリスマスって言ったら赤浜市での虫憑き殲滅作戦がありましたね。僕たちは行きませんでしたが東の方々がむしばねと抗戦したそうじゃないですか」

ウメが指を顎につけながら天井を見上げ、思い出しながら言う。

ハルキヨはというと全く興味がないという雰囲気だった。

「その虫憑きはその日に気配をかぎつけた局員2名を欠落者にしているわ。まあ、虫憑きになりたてだったようね。あたりがクレーターだらけだったらしいわ。暴れたのでしょうね」

淡々とあったことを言葉にして彼らに伝えていく。

それを彼等は音として聞いていく。

そんな単調なことが続けられる。

「その時局員のゴーグルに移されていたのがこれだ」

そう言ってポケットから小さなリモコンのようなものを操作する。

大きなスクリーンに映されていた局員たちから送られてくる数多くの映像が切れ、大画面に映し出されたのは黒い影が動き回り、局員に襲い掛かっているところだった。

影の主の顔は分からなかった。

あまりに速さ過ぎて局員の目が追いついていないのだ。

すると後ろに立ったのか、局員の背中の辺りから崩壊して振ってきた瓦礫を踏む音がした。

しかし局員は振り向くまもなく崩れ落ちたのだった。

虫を殺され、欠落者となったのだった。

「早いですね～ハルキヨさん」

ウメが笑顔でハルキヨに話しかける。

「あれくらいは俺達1号指定でもできる。珍しいことじゃねえ」

あっさりと切り捨てる。

「そんなことといわれてもぼくから見ればハルキヨさんたちはすごっ過ぎるんですよ」

ある意味憧れの視線を送るウメ。

しかし本心はいかがなものかとハルキヨはその視線奥にある瞳を見つめる。

その瞳にはかげりは見えないがさらに奥には何があるのだろう。

それ以上は深読みは予想とハルキヨは視線をはずし、再び魅車を見る。

魅車はようやくかという雰囲気を持っていた。

実際何分彼らはお互いを読みあっていたのだろうか。

「そんなわけで彼は確実に上位に食い込む力を持っているわけね」

再びリモコンを操作しながら言う魅車。

「次は最近のものだけれどもその虫憑きが狩間市に現れたの」

「ああ、かっこうさんが借り出されたって言うあれのことですね～。あの人がこんな任務に借り出されるなんてびっくりですよね。ハルキヨさん」

「なまってるんだろ??」

またあっさりと切られる。

「そして最終的に殲滅標的はかっこうが殲滅したわ」

「ほかの局員はどうなったんですか??」

かっこうが借り出されたのはあくまでも保険だった。

近くの赤浜市での事件があったためにもしかしたら近くに現れるかもしれないと思われていたからだった。

そして案の定現れたというわけだった。

「局員が全滅したわ」

感情のない表情で言う魅車。

それを聞いてウメの笑みは引きつり、ハルキヨもわずかに目を細める。

「相当な人数を送り込んだと聞いてますが・・・」

ウメの声がわずかに震えていた。

彼もできないわけでもないが、なりたての虫憑きが実践豊富な局員たちを全滅させた。

それだけでも十分に恐怖を与えていた。

そしてそのときに映像が流される。

彼らの目に映るのは虫たちが次々と叩き潰されたり、突き殺されたりする様子。

なぎ払われ、粉々になっていく虫たち。

それと同時に崩れる局員たち。

月明かりがあっても十分な蛍光量には足りなかった。

速さに追いつけない局員たち。

月光によって映る影はまさに死神だった。

「それでこいつをどうすればいいんだ??」

ハルキヨが聞いてきた。

「殲滅の前に彼をこちら側に引き込むというのが上層部の考えよ」

答えをあっさりと出す魅車。

まあそんなもんだろうという風に肩をすくめるハルキヨ。

「それで・・・??」

ハルキヨが口を開く。

まっすぐに魅車を見て言う。

「次の話題ってのはなんだ??」

夢燃やす者　ハルキヨ　ＰＡＲＴ　１

「珍しく食いつきがいいわね・・・ハルキヨ」

そんなハルキヨを見上げるウメもまたものめずらしそうにしている。

そんな彼らの視線を無視して睨みを強める。

静かなくらいここ中央本部は沈黙を守っていた。

「魅車さん、そろそろお話お願いします。ハルキヨさんの我慢が切れそうなので」

顔に出さなくてもウメにはそれが分かるのだろうか。

表情ひとつ変えないハルキヨを見ても魅車には分からなかった。

しかしウメが笑顔でさあ、早くと催促しているので始めることにした。

「あなたの新しい任務になりそうよ・・・ハルキヨ」

「ほお・・・」

なにやらようやくかと喜びが見えないオーラでひしひしと伝えていた。

痛いくらいの殺気。

そんな殺気を肌でじかに浴びている魅車。

ちりちりと肌を触るこの感じは殺気。

ここまで感じさせるのは一体どれくらいの虫憑きがいるだろうか。

「新たな虫憑きが生まれたという連絡が入ったの。ここから西に位置する獅子奥市にね」

獅子奥市・・・東に位置しているのは東中央支部がある桜架市。

なぜここから遠く離れたい地にあるところに彼が送り込まれなければいけないのか、ハルキヨには意味が分からなかった。

それはウメも同様であって、怪訝そうな顔つきだった。

「あそこは桜架市のほうが近いだろう。なぜ俺様がそんなところまで脚を運ばなきゃならない??」

「そうですよ魅車さん。桜架市にはかっこうさんがいるし、かっこうさんが行くとしたらあさぎさんだってくっついていくじゃないですか??」

かっこう・・・その名を聞いただけでハルキヨの表情に変化が生まれたのを魅車は見逃さない。

彼らが共通で抱えている問題・・・。

「確かに彼らが行けば簡単だけれども最近あさぎはかっこうとはともにいないために彼らを起用するわけには行かないのよ。それにそ

こで監視に当たっていた局員が数日前から音信不通になっていてね、もう１０人を超えているのよ。だから今回の虫憑きは少しばかり厄介そうだから上からの命令で殲滅部隊を起用することになったってこと」

彼らが行動できない理由は分かった。

そして自分が出なければむしばねの勢力が拡大してしまうことも分かった。

「それで??かっこうのやつはどうして??」

「彼のことが気になるの??」

にやりと含みのある笑みを作る。

別に彼とは特別親しいわけでもなく、お互い自分の夢を守り続けている。

しかしあれがあったことから彼とは以前よりも距離が開いているように感じていた。

別に気にしているわけではないが。

「彼はまた別の任務で桜架市を離れているのよ。ほら、桜架市でむしばねと特環の戦闘があったでしょ??あれでかっこうは任務に飛ばされたわけ」

あれは昨年の冬のことだった。

桜架市に現れた欠落者から蘇生したふゆほたる。

彼女を捕獲するという命令が出ていた。

そしてその最中にむしばね率いるレイディー・バードがガーデンのある葉芝市での戦闘を起こしそこにかっこうが向かった。

その戦いでレイディー・バードは成虫化した虫をかっこうに殺されさらに虫に夢を喰いつされ亡くなった。

あそこで彼らに何があったのかは詳しいことは分からない。

ほかの局員たちは全滅し、東中央支部支部長土師は危篤状態で詳しい情報が聞けない。

かっこうもまた魅車に対してそのときのことを全く話そうとはしない。

彼女自身は最重要視されていたふゆほたる捕獲が成功したために聞く必要はないと踏んでいた。

実際に上の者たちもそのことについては糾弾することはなかった。

「そんなわけであなたたち殲滅部隊に頼みたいわけよ。やってくれるわね？？」

まっすぐと笑みを浮かべながらハルキヨの事を見る魅車。

「しかたねえ・・・」

背を向けながら言うハルキヨ。

そして彼の周りには赤い火の粉が舞っていた。

ウメそれを見ながら後に続く。

殲滅部隊ハルキヨに課された任務。

「2匹の虫憑きの殲滅か・・・」

薄暗い通路を赤き魔人が闊歩していた。

夢燃やす者　ハルキヨ　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　０

「お姉ちゃ～ん??朝だよ～」

妹の香奈が二段ベットの上でまだ眠っている姉の美奈を起こしにかかっている。

姉美奈はうめき声を上げながらゆっくりと起き上がる。

そんな普通の高校生の彼女たちは双子なのである。

「おはよう・・・香奈」

まだ眠いまぶたをこすりながら伸びをする美奈。

昨日の夜も大変な重労働だったのだ。

睡眠時間が短い彼女たちの目には大きな隈ができていた。

したでは着替えを始めた妹香奈がいた。

思い体を酷使して美奈もベットを降りて着替えを始める。

下に降りると母が朝食の準備をしていた。

「「おはようお母さん」」

「おはよう二人とも。またそんなに大きな隈作っちゃって・・・。

ホントに大丈夫なの??そんなに夜遅くまで勉強して体壊したら元

も子もないんだからね」

心配そうに言ってくる母。

そんな母に大丈夫だといっておく二人。

彼女たちには普通の人々には言えない顔があった。

いつものように学校に向かう。

「おはよう、美奈さん・香奈さん」

教室にはいると後ろから声がかかった。

そこにいたのは中肉中背の少年だった。

際立って特徴的なところはない街中であっても覚えていないようなどこにでもいる少年だった。

「あ、おはよう薬屋くん」

「おはよう薬屋くん。そんなしけた顔してたら幸せが逃げちゃうよ??あ、それはいつもか」

普通に挨拶を返す美奈と余計なことを言ってくる香奈。

言われた薬屋大助という少年は苦笑いだった。

彼がこの学校に来たのは今年の5月ごろだった。

突然の転校だったのだが、両親の諸事情だったらしい。
人柄がいいためかすぐにクラスのみなとなじむことができた。
「く～すりや！！」
「うわ！！」
後ろから大助の背中を叩いてきたのは同じクラスの滝沢だった。
「痛いな～滝沢。少しは手加減してくれよ」
涙目で言う大助。
そんな彼を見ながら笑っている滝沢。
いつものように中がいい二人。
そうこうしながら自分たちの席に座る。
「知ってる??近くの裏山にある館に出るお化け」
後ろから向日川が言って来た。
学校の裏にある山にもう何十年も昔から誰もすんでいないという古びた館があった。
彼女が聞いた話ではそこには結構なお金持ちが住んでいたらしい。
しかしある嵐の日にとある強盗が警察の追っ手から逃げてきて迷い

込んで館に入ってきたらしい。

彼らを見た館の住人たちを一人残らずに惨殺したということだ。

そんな恐ろしいことがこんなのどかなところで起きていたなんて皆聞いたときは青ざめていた。

その犯人は結局捕まらずに時効を迎えているようだ。

いまさら彼が出てくるわけではないがその館にはあるうわさがあった。

それが向日川が先ほど言っていた館に現れるお化けである。

なんでも夜中になると悲鳴が上がるそうだ。

それも男のときもあれば女のときもあった。

警察などが現場検証をしたものの何も残っていなかった。

それは毎日ではないが週2・3回のサイクルだった。

「そんなことで知りたくないか??」

「何を??」

滝沢の発言に?を浮かべる大助。

それを聞いた滝沢が顔を命いっぱいに近づけていった。

「館のお化けの正体を暴こうといってるんだ～！！」

「はあぁぁっぁぁ！？」

滝沢の突然の思いつきに思わず叫んでしまう。

乗り気ではない薬屋だが向日川は言ってみたいという。

しかし。

「私たちは・・・」

「ちょっとね・・・」

なぜか双子もまた生きたくないに票を入れていた。

なにやら表情が暗くなっていた。

そこに何か嫌な思い出もあるのだろうかと皆思った。

しかし彼女たちはそうではないという。

しかしそれならどうしてだというとなんとなくあそこは危ないということだった。

「それだからこそ冒険魂は燃えるのだぁぁっぁぁぁ！！」

相変わらずのテンションで言う滝沢。

そんな滝沢を押さえ込んでいると担任教師がやってきてホームルームが始められた。

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢燃やす者　ハルキヨ　ＰＡＲＴ　２

ハルキヨとウメの２人は暗い裏山を歩いていた。

木々が所狭しと映えていて光がほとんど差してこない。

全く手入れがなされていないようだ。

「こんなところに本当にいるんでしょうかね～？？ハルキヨさん」

ウメがは供が作るような笑顔を見せながら言う。

そんなハルキヨはウメの言葉にまったく聞く耳を貸さない。

どうでもいい話しに付き合うつもりはなかった。

無視されたがいつものことなのでウメは気にしていない。

魅車から聞かされているのは殲滅対象が二人だということだけだった。

その二人が日中はどう動いているのかハルキヨにはまだ情報がなかった。

昨日は雨が降ったのか地面は泥だらけだった。

二人の靴は泥で汚れて、さらにあるきづらかった。

木々を飛んでいけばらくだが肝心の枝が光が差さないためか成長し

ておらず、細く昨日の雨で脆くなっていた。

そんなわけで苦労してついた館。

大きく歴史を思わせるものだった。

「すごいですね～。こんな森の奥にあるんなら隠れ家にぴったりじゃないですか??たとえばむしばねとか」

しかしすぐに口をつむぐ。

むしばねとの抗戦でレイディー。バードとの戦いでしとめきれなかったのだ。

それをまだ気にしているのかウメをぎろりと睨んできた。

ウメの笑みはわずかにこわばっていた。

中にはいる。

腐った戸のとってはすぐにくずれてしまった。

「何だこれ腐ってるじゃねえか」

少しいらだちながらハルキヨは中に入っていく。

それに続いてウメも入っていく。

中はつたが仲間で侵入していて、コケもびっしりと生えていた。

「これは・・・」

ハルキヨが発見したのは特環の局員が欠落者となって発見されたところだった。

そこだけきれいになっていたのだ。

「うわ！！」

ウメが変な声を出して倒れた。

どうやらコケが下にも生えていたようでそれに足をとられたようだ。

ハルキヨは視線こそ向けたが何も言わなかった。

しかしその視線がさめたものだったためにすぐにウメは壁に手をかけて立ち上がる。

そのときだろうか、壁にあった電気をつけるスイッチを押してしまったのだ。

しかしもう何十年も使われていない館である。

つくはずがないと思われたが。

バチバチっと火花が散ってから明かりが全体につけられたのだ。

「これは一体・・・??」

ウメが困惑気味に言う。

まさか何十年も遣われていないものがつく筈がないからだ。

電線も通っていないここの館。

一体何の怪奇現象であろうか。

「こいつは面白いことになってきたな」

にやりと笑みを浮かべるハルキヨ。

「こいつらの能力は電気だ。“C”と同じだな」

同じく局員の名を出す。

しかしそれだけでは局員たちが次々と欠落者になる理由にはならない。

彼らは戦いに特化したエキスパートである。

そんな彼らが一方的にやられているのだ。

たかが二人の虫憑き。

「それにしてもそんなに争った形跡ってないんですね。一瞬でやられちゃったとか??」

確かにウメのいうとおり、館の中はそれほど争った形跡はなかった。

一瞬で虫を殺せるならば不可能ではないが、それほどの虫憑きなの

だろうか。

もしそうならばハルキヨと同じ1号指定の虫憑きになってもおかしくはない。

そんな時、館の置くまでうろうろ歩いていたウメが。

「ハルキヨさん??変なうわさなんですが、ここって夜になるとたまに何者かの悲鳴が聞こえるらしいですよ」

ウメはハルキヨが顔は上げつとも聞いていることを感じ取った。

「男のときもあれば女のときもある。それの統計取った資料があるんですけれども」

なぜそんなものを持っているのかと疑問に思うが今は関係ない。

それをウメから奪い取り、見てみる。

そこには案の定局員の性別に合わせて聞こえてくる悲鳴の性別がぴったりとあっていた。

ここでの幽霊のうわさは局員たちが戦闘中に上げる悲鳴だったのだ。

しかしその虫憑きたちの正体が分からなければ彼らには手出しができなかった。

それになぜここでだけ局員が欠落者となるのだろうか。

ほかのところではまだ連絡は入っていないようだ。

一体彼らはどうやって局員たちをここに誘い込んでいるのだろうか・・・。

ハルキヨとウメはその場に立ち尽くしていた。

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　１

放課後帰り道だった。

いつものように美奈は香奈と共の帰宅ではなかった。

一人繁華街を歩き、はずれにある工事現場に来ていた。

今日はもう終了しているようで関係者はいなかった。

はずれなために一般の人たちにはほとんど見られない。

それに彼女がここに来たのには理由があった。

「来たわよ」

いつもの明るい彼女と打って変わって冷静な声だった。

工場の影からは数人の男たちが現れた。

その皆が仮面をつけていた。

「来たか・・・紅蓮」

仮面をかぶった男が言う。

「最近面倒になるくらい特環が来てるわね。そっちでは何かあった??」

すると男たちはとたんに顔色を悪くする。

どうしたのかと思い、聞いてみる。

男の一人が搾り出すように言った。

「レイディー・バードが・・・」

悲しそうな顔だ。

「一体どうしたというの??」

異変に気がつき聞いてみる。

「葉芝市で・・・ガーデンでの戦闘で・・・レイディー・バードがかっこうに殺されたんだ」

「え・・・??」

それを聴いた瞬間自分たちの支えがなくなったことを知った。

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価待ってます！！

「そんな・・・」

まさかの情報だった。

あれだけ自分たちの支えとなっていたレイディー・バードが殺されただなんて。

しかも彼女を殺したのが自分たちの敵・・・悪魔・・・かっこう。

あいつは自分たちからどれだけのものを奪えば気が済むのだろうかと唇から血が出るほど強く噛んでいた。

それに最近の特環の活動も活発化してきている。

自分たちの正体がばれてしまっているためにスパイなどが送られているかもしれない。

あの館で一般人には被害が出ないようにはしてきたが、逆に心霊スポットと認識されて、面白半分で見に来るものも増えてきた。

「俺達はほかの地区のやつらにも知らせにいく・・・お前らも特環に捕まらないようにしろよ」

「なんたってお前ら姉妹は特環に対する戦力の１つだからな」

仮面をかぶった男たちが姉妹の力について言う。

連日特環局員を打ち破る力。

虫憑きとして、むしばねの仲でも力のあるほうである彼女たち。

彼女たちはここにいるむしばねたちをまとめるリーダー的存在である。

しかし仲間たちと会うのは本当にたまにしかなく、特環の局員の集団と戦うとなればここでは食い止めることは難しかった。

「私たちはもう少しここにとどまるわ。また厄介なやつらが入り込んだようだからね」

「やるのはお前の勝手だが、死ぬことだけは編めてくれ。これ以上の戦力ダウンはかんべんだかな。そうでなければスノウ・フライを支えるものがなくなる」

「スノウ・フライか・・・」

レイディー・バードがなき今のむしばねの新しいリーダー。

かつての特環を壊滅状態に追い詰めた最強の虫憑き。

しかしそんな彼女もかつては虫に夢を食い尽くされそうになり、その前に悪魔・・・かっこうに欠落者にされたようだ。

しかし彼女はそこから欠落者から蘇生した。

それは自分たち欠落者になることに対して恐怖しているものたちか

らすれば希望だった。

夢は思い出せる。

「彼女ってどんな人なの??私たちはまだ顔も見たことないから」

実形はここから出たことがないためにスノウ・フライがいる現在地に向かうことができないのであった。

「はっきり言ってあんな女の子が最強の虫憑きなのか・・・。はなはだ疑問に思うな」

そこまで弱弱しい姿なのだろうか。

力があっても使いこなせない虫憑き。

彼女の・・・正確に言えば彼女たちの蒸すも確かにそのようなものだ・・・ものだった。

今はそうでもなくなった。

しかしそんな彼らの周りに不穏な空気が流れる。

「誰かに見られてるわね・・・」

ちりちりと肌をこするこの空気。

否殺気だった。

顔を見られるのはまずいと思い、すぐに美奈も仮面をつける。

そして後ろからゆっくりとジャリを踏む音がした。

彼らは一斉に戦闘に構える。

ごくりとつばを飲み込み、緊張が走る。

そして鉄鋼の影から現れたのは特環の黒いコートを着て、ゴーグルをつけた少年だった。

髪は立てられ、その顔は至って普通。

特徴なのは頬の絆創膏だけであろうか。

「な・・・!?」

彼らは皆絶句する。

そこに現れ少年が一体誰なのかを知っているからだ。

「いつからいたのかしら??」

仮面をつけて顔は見られない美奈が尋ねる。

「お前がここに来るときからずっとだ」

「まさかね・・・」

自分が気づかなかったことに疑問を覚える。

これくらい目立つ姿なら気づかないはずもないはずなのにここに来るまでに彼のことを見つけられなかった。

少年はゆっくりとホルダーから自動式拳銃を出す。

その肩には緑色の虫がふわっと止まっていた。

「任務を遂行する」

冷たく冷酷に宣告する少年。

緑色の虫が拳銃と同化する。

「まさかこんなところであなたと戦うことになるとはね・・・」

美奈はそういうものの、妹の香奈がいなければ力の半分しか出せない。

そんな状態で彼と戦えるとは思っていなかった。

だから何とか皆がなるべく傷つかない状態で逃げられないかと思考をめぐらす。

そして目の前の少年の名を言う。

「かっこう」

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　０

薬屋大助は現在机に突っ伏していた。

かれこれ放課後になってから1時間以上は滝沢の噂話についての意見を延々と聞かされていたのだった。

彼と同じく机でげんなりとしている樽川。

興味心身で彼の話を聞きに来たのはいいが、さすがに聞き飽きたのだろう。

しかしそんな彼らを無視して滝沢はまだ話を続けていた。

「全くこいつはマニアックすぎるんだ」

げんなりと大助はと呟く。

それを小さく首肯して肯定を示すのは樽川と後ろの南だった。

彼らもまた今日の夜中に滝沢と向日川の提案である無人の館探検に行くメンバーである。

行く気などなかったものの、滝沢たちの熱心さに押されていやおうなく承諾させられてしまった。

「しかしあそこに出るって幽霊。あそこで殺された人たちのだろ？？そういうの自縛霊・・・て言うのかな？？」

樽川が興味もなさそうに言う。

そうなのかと頭をかしげる。

ここにはいない美奈と香奈に今日学校に集合するように伝えろと大助は無理やり押し付けられた。

彼女たちは行く気はないといい、帰宅していたのだが滝沢はそれでも彼女たちを連れて行きたかったのだ。

「やっぱり仲間がたくさんいたほうが楽しいだろう」

そんな勝手な理由からだった。

仕方なく美奈と香奈のいる家に向かっていた大助。

繁華街をぶらぶらと歩いていた。

そんな中で大助はある人物を見つける。

その人物は男にも女にも見える子供だった。

ニコニコと笑いながらこちらを見ていた。

少年は先ほどまでだるそうな顔をしていたが、それは一瞬にして引き締まった表情へと変わる。

殺気がこもった目。

子供を睨みつける。

「なぜここにいる・・・」

少年はゆっくりと近づきながら語りかける。

「なぜお前がここにいるんだ。・・・ウメ」

対照的に子供・・・ウメは笑みを絶やさなかった。

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　１

目の前には特環殲滅部隊のハルキヨにいつもくっついて回っている子供・・・ウメだった。

彼らは横切る人々から浮いた雰囲気をかもし出していた。

「お久しぶりですね・・・かっこうさん」

名前ではなく特環のコードネームで呼ばれたことに眉間にしわがよる。

「お前は何してるんだ??ウメ」

にらみを強めながら聞く。

「そんなに睨まないでくださいよかっこうさん。ぼくはただハルキヨさんに言われたとおりあなたに会いに来ただけですから」

「ハルキヨだと??」

その名前を聞いて疑問に思う。

ここは中央支部ではなく、東の管轄地域だからだ。

なぜ自分たちの管轄地に彼らが来ているのか。

「魅車のやつ差し金か??」

魅車八重子・・・特環中央支部副支部長の女性。

なぞが多く、不気味な存在であった。

「まあ、そんなとこなんですが。話を戻すとかっこうさんは裏山の館について知ってますか??」

「ああ」

館のうわさ・・・特環の局員たちが次々と欠落者になっているというものだった。

油断のならない虫憑きだとして自分が送られてきた。

そしてその虫憑きの監視役として高校に潜入した。

「やつのことか・・・」

ため息交じりの言う。

「かっこうさんは正体が分かるんですか!?」

ウメは驚いたように聞いてくる。

熱心に聞いてくるために話してやった。

自分がそいつの正体を聴かされて同じ高校に潜入していること。

そいつが強力な虫憑きだということ。

しかしそれには条件があり、弱点でもあること。

そいつのあとを追っている最中だったということ。

それに関してはウメは申し訳内という顔をした。

そいつは今日の夜も現れるということ。

それらを聞いたウメは頭を下げて感謝していた。

「早速ハルキヨさんに伝えます。色々ありがとうございました」

そういうと小走りで人ごみにまぎれていった。

背が低いためにすぐに大人たちの体に隠れてしまった。

「急ぐか・・・」

かっこう・・・薬屋大助は再び美奈と香奈の家に向かい始めた。

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント。評価待ってます！！

しばらく進んでいくとなにやら周りを気にして歩いている美奈を見つけた。

大助はすぐに出て行き、滝沢に言われていたことを伝えようとしたが様子がおかしかった。

周りには大勢の大人たち。

帰宅途中のサラリーマンや買い物の途中の主婦や親子。

そんな中、美奈は集団から抜け出して人気のない道へと入って行った。

大助も不審に思い、後をつける。

歩いていくとついたのはしんっと静まった工場だった。

すでに仕事が切り上げられて人はいなかった。

彼女が声を出すと陰から数人の仮面をかぶった男たちが現れた。

「むしばねか・・・」

大助に映っているのはむしばねの会合だった。

話される内容は聞き取れないが、彼らの表情が色々と変わっていることが見て取れた。

そしてふと彼女・・・美奈と視線があった気がした。

すると彼らはすぐに戦闘準備に入っていた。

どうやらばれたようだった。

ここは運よく人気もないので多少暴れても気づかれることはない。

大助は持ってきていた特環のコートを着てゴーグルをつける。

ホルダーには自動式拳銃が。

そしてゆっくりと彼らの前に現れる。

そこには仮面をかぶった人たち。

むしばねがいた。

大助・・・かっこうの任務は監視と例の虫憑きの殲滅だった。

「任務を遂行する」

拳銃にかっこう虫を同化させる。

肉体強化された体で高く跳躍する。

男たちは虫を出して正面から突っ込んでくる。

「かっこうを殺せ！！」

多くの虫憑きたちから忌み嫌われるかっこう。

悪魔とののしられるかっこう。

それは仕方のないことだった。

自身の夢のため、目的のために目の前に立ちふさがる敵は誰であろうが欠落者にしてきた。

一斉に向かってくる虫たちを空中で体をひねりかわしたり、虫を足場に軌道修正をしたり。

それらに向かってかっこう虫が同化した拳銃から緑色の弾丸が放たれる。

それらが虫たちの体を削っていく。

それに呼応するかのようにむしばねたちは苦しみを覚える。

ふとかっこうに向かって鉄鋼が飛んできた。

それを腕で殴り、叩き落す。

飛んできた方向に目を向けるとそこには仮面をかぶった女が立っていた。

しかし彼女の虫らしきものはなかった。

「特殊型か・・・」

歯噛みするかっこう。

彼女が触れると手に吸い付く鉄鋼。

それを軽々と持ち、かっこうに向かって投げてくる。

いくら強化された肉体だからといってあんなものを受けたら打撲だけではすまされない。

弾丸のごとく飛んできた鉄鋼を今度は拳銃で撃って粉砕する。

しかしそんなことをお構い無しに次々と投げてくる。

虫を殺し、欠落者にするしかしないかっこう。

しかし消して人を殺すことはしなかった。

それは今までであったり、これからもだった。

特殊型である彼女を欠落者にすることは彼にはできなかった。

虫が姿を現さないからだ。

地面に着地するとむしばねたちが逃げていくのが見えた。

拳銃を発砲し、一人を欠落者にする。

しかしすぐに上から鉄鋼の雨が降ってくる。

地面に槍のように突き刺さる。

「ちっ！！」

舌打ちをしながら回避し続けるかっこう。

しかしすでにほかのものたちは避難してしまっていた。

するとそれを確認したのかその女も逃げて言った。

「くそ！！まて！！」

かっこうが叫ぶも止まる気配はなかった。

追う事もできたが追ったからといって彼女を欠落者にするすべを彼はもっていなかった。

戦いが去った工場にはかっこうが一人ポツリと立っていた。

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　２（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　３

香奈は姉の美奈を置いて一人家に帰宅していた。

「お姉ちゃん・・・」

心配そうに外を見る。

姉はむしばねの提示報告に言って来るといってわかれたのだ。

最近特環との戦闘が多くなっている。

二人で力を合わせればどんな虫憑きにも勝てる気がしていた。

もちろんあの悪魔にもとも思っていた。

自分たちむしばねを苦しめ続ける特環。

その中でも数多くの仲間たちを欠落者にしているのは・・・かっこうだった。

多くの恨みを買う悪魔。

もちろん香奈もその一人だった。

茜色に染まる空を眺めていると遠くから人影が家々の屋根を飛んでいた。

なんだろうと目を凝らしてみてみると。

「お姉ちゃん??」

美奈だった。

それも仮面をかぶったままの状態で家に近づいてきた。

急いで香奈は窓を空けるとそこから美奈が入ってきた。

よほど急いでいたのか肩で息をしていた。

「待ってて。今水持ってくるから」

そう言って香奈は急いで下に水を取りに行った。

棚からコップを取り出し、水道から水を出した。

もう夏であるから氷も入れておいた。

2階の部屋に戻るとすでに姉の美奈は着替えを終えていて、私服姿だった。

「はい」

冷たい水が入ったコップを手渡す。

「ありがとう」

そう言って一気に飲み干した。

香奈は椅子に座り、反対側の椅子に座る美奈を見つめる。

「それで・・・一体何があったの??」

あまりに急いで帰ってくるために、美奈の身になにかがあったのは自明だった。

その質問に美奈は顔色を悪くする。

よほど悪い情報だったのだろう。

しかし覚悟を決めて聞かなければいけなかった。

しばらく沈黙が流れた。

茜色に少しずつ黒みが混じってきた。

カラスが鳴く声が響く。

「聞いて・・・香奈」

俯いたまま美奈が言う。

香奈は何も言わずに聞き耳を立てる。

「レイディー・バードが死んだわ・・・」

「え・・・」

それは彼女にとっても最悪のものだった。

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　３（後書き）

コメント・評価待ってます。

レイディー・バードが死んだ・・・。

それはむしばねたちにとっては最悪の危機だった。

それも殺したのは自分たちの最悪の敵・・・かっこう。

「あいつ・・・」

歯噛みするほど悔しかった。

自分たちが倒すべく敵特環。

その中の一人で最強の虫憑き。

「それでさっきそのかっこうと戦闘があったの」

まさかの情報だった。

怪我はないようでそれほど激しい戦闘ではなかったと感じていた。

私服のスカートをぎゅっとつまむ美奈。

「さっきまた一人欠落者になっちゃったよ・・・」

顔は見えないがないているのが香奈には分かった。

声に嗚咽が混じっていた。

仲間をいくら増やしてもそれと同じくらいの数の仲間が欠落者となっていく。

中には成虫化しそうになったものもいて、そのときは美奈で涙を流しながら欠落者とした。

必死で自分たちの手で居場所を作ろうとしていた。

その夢を特環は切り裂いていく。

その後美奈は新たなリーダーにかつて特環を壊滅に追い込んだふゆほたる・・・スノウ・フライが任命されたことを伝える。

はじめは香奈も美奈と同じく喜んでいたが、そのスノウ・フライ自身にリーダーとしての素質があるのか話が進むにつれて不安になっていった。

するとしたからインターホンの音がした。

美奈は涙で目が真っ赤だったため香奈が出ることになった。

急いで階段を下り、玄関に向かう。

そしてゆっくりと戸をあけるとそこにいたのは。

「薬屋くん・・・??」

薬屋大助がそこに立っていた。

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　４（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢燃やす者　ハルキヨ　ＰＡＲＴ　３

目の前には双子の姉妹、周りにはむしばねの少年少女たち。
そして今お互いに背中を預けているのは。
「久しぶりだな・・・かっこう。あの後よく立ち直れたな」
「黙れハルキヨ・・・。今はその話をしている暇はない」
いらいらしながらかっこうは言う。
今はあのことを話している暇はない。
「ウメはどうした??あいつも来ているはずだが??」
「あいつは別行動だ。魅車のやつからお前が館に向かったことを言われたからな」
ちっと舌打ちをするかっこう。
またしても中央支部に踊らされているのだった。
「それにしても結構な人数いるじゃねえか」
見渡す限り人に埋め尽くされていた。
窓の外。

玄関の扉を開いた向こう側。
左右のドアが開かれた奥。
階段の上。
そして自分たちの目の前。
クラスメイトのはずの双子の女の子。
しかし今は自分たちの敵。
「色々雑談しているとこ悪いけど」
「こっちはいい加減危険因子は処理しておきたいんだ」
そう双子が言うと。
「全く久しぶりに暴れられるぜ」
興奮を抑えられないというハルキヨ。
赤い火の粉が舞っていた。
「さっさと終わらせる」
かっこうの肩に乗っていた虫が拳銃と同化する。
「「かかれ！！」」

一斉にかかってきたむしばねたち。

時代遅れの館を舞台に戦闘が始まった。

夢燃やす者　ハルキヨ　ＰＡＲＴ　３（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　３（前書き）

いよいよ3巻も大詰め。
感想・評価お待ちしております。

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　３

双子の掛け声とともにむしばねたちが一斉にかかってきた。

「かっこう！！雑魚どもは任せたぞ！！どうせお前はアマチャンだから特殊型は殺せないだろう？？」

「な！？」

ハルキヨの言葉に返す言葉がない。

ハルキヨは一直線に双子に向かっていった。

そのハルキヨを通さんとばかりにむしばねたちがかかっていく。

「くそが！！」

かっこう虫と同化した拳銃の銃口から緑色の巨大な弾丸が次々に放たれる。

「！！」

悲鳴が出ずに虫を殺されたものたちが次々に倒れていく・・・欠落者となっていく。

明かりがかすかに照らすこの館の中に銃声が響き渡る。

「かっこう！！」

一人の少年が後ろからかっこうめがけて迫る。

彼の手には虫のものか鎌が握られていた。

それを振り回し、かっこうを攻撃してくる。

強化された脚力で回避する。

まともに食らうのはいくらかっこうでも危険だった。

しかしその一閃を潜り抜けて間合いに入ったかっこうは。

「邪魔だ！！」

そう叫んで強化された腕力で鎌を叩き割る。

少年は悲鳴を上げてうずくまる。

虫は完全には死んでいないが、相当のダメージを受けていた。

倒れた仲間を見て怒りをあらわにする面子。

叫びながら突っ込んでくる。

しかし飛んで火にいる夏の虫。

マガジンを取替え連射された弾丸が次々と虫たちを粉砕していく。

それでも止まらないものたちの攻撃を上に跳躍して回避する。

足場が腐っているためにすぐに移動しなければいけなかった。

なにやら槍が飛んできた。

そこには蜂のような虫を持つ虫憑きがかっこうめがけて攻撃していた。

当たっては何があるか分からないために回避する。

目の前には常に数人の虫憑きがいた。

「邪魔だ！！」

弾丸を飛ばし、虫を殴り潰す。

そのたびに目の前で欠落者が倒れる。

仲間の欠落を目にしてもそれでも戦いをやめないむしばねたち。

かっこうは心の中で叫んでいた。

お前たちの敵は俺達ではないはずだと。

もっと身近なところにいるはずだと。

しかし声にならない叫びを聞くものはいない。

かっこうめがけて迫り来るむしばねたち。

「いい加減にしろ！！」

わずかに咆哮したかっこう虫。

その口からは先ほどとは比べ物にならないくらいの大きな攻撃が放たれた。

それを危険だと感じ取ったときにはすでに遅かった。

迫るむしばねたちは緑の閃光に巻き込まれ、虫を粉砕され、外へと投げ飛ばされた。

2度と夢を思い出すことはないだろう欠落者と化して。

むしばねの殲滅に成功したかっこう。

2階の部屋からは大きな爆発音と、ハルキヨのものだろう赤い炎が舞い上がっていた。

それを見てもかっこうは行かなかった。

言ったところで特殊型を殺すすべを持たない彼にできることはここで結果を待つだけだったからだ。

夢燃やす者　ハルキヨ　ＰＡＲＴ　４

ハルキヨの手からは炎が繰り出される。

その炎が朽ちた壁を貫いていく。

「どこ狙ってるのかな??」

「魔人と言われてても所詮はこんなもん??」

双子はハルキヨの炎をひらりひらりとかわしていく。

お互いにプラスとマイナスの電気を使い分け、引き合ったり、反発しあったりしている。

さらに当たりに散らばったものに電気を流し投擲したり、自らの電気で攻撃したりと変化でハルキヨと抗戦していた。

「ちょろちょろ動くな!!」

炎を投げるの全く当たらない。

「「死ね!!」」

プラスとマイナスの電気が合わせられた攻撃がハルキヨに向かって飛んでくる。

「プラズマか!?」

紫色の電気がビーム状に向かってくる。
跳躍して回避しようとしたが。
「ぐっ！？」
足が床から離れなかった。
まるで足と床が磁石のようにくっついてしまっていた。
動けないハルキヨの胸を紫色の電流がつきぬけた。
「ぐが！！」
体中に痺れと痛みが走る。
当たった数センチのところだけ特環のコートに穴が開いていた。
大方の衝撃は防いだがそれ以上は突き抜けてしまったようだった。
「残念でした」
「あなたはここ私たちのテリトリーでは勝つ事は不可能」
勝ち誇った笑みを浮かべる双子と対照的に明らかに怒りをあらわにするハルキヨ。
こうも一方的にやられたことが気に食わなかった。
「今にほざいてろ！！」

そう言って再び炎を出して双子に迫る。

双子は同じ電気で反発試合、回避する。

すぐに一方の美奈へと炎を投擲する。

「お姉ちゃん！！」

マイナスの電気を帯びていた美奈に向かって香奈がプラスの電気を放ち、引き寄せる。

そのためハルキヨの炎は空振りに終わる。

もう何度目であろうか。

もはや舌打ちも面倒になってきた。

「あぶなかった～。ありがとうね香奈」

「無事でよかったよお姉ちゃん～」

お互いに無事を喜んでいる。

それほど余裕があるのだ。

「確かに少々やかいだな・・・火種2号指定の紅蓮と蒼青」

再び炎を出しながら言う。

ふふっと笑みを浮かべる双子がいた。

夢燃やす者　ハルキヨ　ＰＡＲＴ　４（後書き）

コメント・評価待ってます！！

現在第６巻を執筆中でありますが、皆さんにどのキャラが出て欲しいか募集をとりたいと思います。期間は１週間です。たくさんの回答待ってます。

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　５（前書き）

募集待ってます！！

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　５

自分たちが虫憑きになったのはいつだっただろうか。

ふと魔人との戦闘中に思う双子。

あの魔人として恐れられているハルキヨを一方的になぶっている。

ふと思い返してみる。

あれは確か中学に入学してからだった。

もともと元気が取柄の姉美奈と少し引っ込みじあな妹香奈。

入学後しばらくしてから性格から香奈がいじめに遭った。

そのときはすぐに気づくことができた。

それを知った美奈は切れていじめていたグループを殴り倒した。

もともと運動神経がいいことから護身術から武道などを会得していた美奈。

グループの男子生徒を病院送りにしてしまった。

しかしそこからだった。

まず病院送りにしたために美奈が謹慎処分となった。

その後その生徒たちの親が家に文句を言いに来たのだ。

あれくらいのことはいじめには入らない。

そんなことを言ってのけたのだった。

親は必死に謝っていた。

その時香奈はそれを聞いてないていた。

美奈は必死に香奈を慰める。

そして親たちが帰宅すると親に呼ばれてしかられた。

なんであんなことをしたのかと。

あんなことをさせるためにやらせたのではないと。

母親は泣きながら言った。

父親は怒りをあらわにして美奈の頬を力いっぱいひっぱたいた。

そして延々と説教が終わると次は香奈の番だった。

殴られて意識が薄くなっていた美奈はそこに捨てられるかのように放置されたまま香奈の説教を聴いていた。

なぜあれくらい我慢できないのか。

そんな弱虫に育てた覚えはない。

そんな罵詈雑言を延々とはき続けた。

香奈はただ泣いて聞いていた。

美奈はそんなに言わなくてもいいだろうと思った。

そして一通り終わるとようやく解放される。

双子は自分たちの部屋に終わると抱き合って泣いた。

なぜ自分たちがけがこんな目にあわなければいけないのか。

被害者は自分たちなのに。

そして思ったのだ。

自分たちを苦しめる人間はみんないなくなれと・・・。

そのときだった。

真っ暗な空間に教会のようなものが現れたのだ。

そして招かれるかのように中に入っていく。

その後のことは全く覚えていない。

気がついたら自分たちが虫憑きとなっていた。

そして彼女たちが最初に思ったのは。

自分たちは力を得た。

自分たちを苦しめるやつらを懲らしめる力を得たと思ったのだ。

彼女たちが最初にとったのは父親の殺害だった。

仕事ばかりで自分たちとの時間を取ってくれなかった父親。

たまにいれば説教ばかりの父親。

暴力を平気で振るう父親。

そんな父親に嫌気が差していたのだった。

下におりると母はしごとで家を留守にしていたようだった。

父親はビールを飲みながらテレビを見ていた。

彼女たちが来ると一瞥するもすぐにテレビへと視線を戻す。

「ねえ、お父さん」

美奈が冷たく言う。

ん??っとめんどくさそうに体をひねる。

しかしそんな父に向かって電気を食らわせる。

死なない程度の電流。

一瞬意識を失ったのだろうか、白目をむいた。

体を痙攣させながらこちらを睨んでくる。

明らかに恐怖を感じているという眼をしていた。

目の前の娘たちがいきなり虫憑きとなって自分に攻撃してきたのだから。

「な・・・お前たち・・・一体これはどういうことだ・・・」

まだ痺れで呂律がうまく回らないのだろうか。

転がっている父親を見下しながら。

「うるさいんだけど・・・」

引っ込みじあな香奈とは思えない冷たい一言だった。

その言葉に父親も愕然としていた。

電流で強化した腕力で父親の胸倉をつかんで壁に貼り付けにする。

必死に謝ってくる父親だったがもはや彼女たちには聞こえていなかった。

そこからは拷問だった。

死に至るぎりぎりの電流を流され続けられ、意識を失いそうになる

とやめられる。

それの繰り返しだった。

もはや謝ることもできなくなった父親。

そんな変わり果てた姿を悪魔のように笑いながら作業を続ける双子。

最後は一気に限界値の電流を流して殺害した。

感電死だった。

母親は帰ってくるなり父親の変わり果てた姿を見て泣き叫んだ。

何もなかったかのように双子も泣いた。

警察にも連絡したが結局犯人は捕まらなかった。

犯人は目の前にいるというのに。

それからだった、むしばねという団体とあって仲間になり、その実力を代われてリーダーの座に就いた。

それから性格が姉の美奈と似るようになった香奈。

だからこんな連係プレーができるのだった。

そんな回想を終えると魔人・・・ハルキヨはこちらを睨んでいた。

「お前らの夢など俺の知ったこっちゃないが・・・」

先ほどと比べ物にならない炎が現れる。
彼の実力を測り間違えたのかと恐怖を覚える双子。
「その夢を燃やさせてもらうぜ」
にやりと笑みを作る。
そして向こう側からゆっくしと近づいてくる足音が聞こえた。
そしてドアの向こうからやってきたのは。
「俺達は自分の夢を守るために他人の夢を踏み台にしている・・・そうだろ??」
ハルキヨはそこに現れた少年に尋ねる。
双子は恐怖していた。
そこに現れたのは右腕を完全に虫と同化させた少年だった。
「かっこう」
下で戦闘していたはずのかっこうが現れたのだった。

夢燃やす者　美奈・香奈　ＰＡＲＴ　５（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　４

目の前ではハルキヨがようやく本領発揮というところに来ていた。

双子はそれを見て完全にビビッていた。

「下は片付いた。あとはお前だけだ」

「そんなバカな！！」

美奈が叫ぶ。

あれだけの大人数をたった一人で片付けたのだから。

中には相当の手誰もいた。

「嘘じゃない。現に俺はここにいる」

無感情な言葉を返す。

「というわけだお前ら・・・。とっととお前らも父親のところに行け」

巨大な炎を二人に向かって投げる。

それを回避すると壁が吹き飛ぶ。

爆風で双子は壁に叩きつけられる。

「「うっ！！」」

その隙に一気に間合いをつめるハルキヨ。

その手には炎があった。

「お姉ちゃん！！」

香奈が姉の危険を察して叫ぶ。

それを聞いて急いで反撃に出る。

しかし。

「弱いな！！」

電気の槍が炎にかき消された。

「くっ！！」

火種2号指定の彼女たちは二人で一つだった。

つまり片割れだけでは力を発揮しきれないのだ。

香奈が電気で引き合おうと使用も叩きつけられたことで背中を痛めていた。

そんな間にハルキヨの炎が美奈を飲み込んでいた。

「あああぁぁぁぁぁぁつぁぁぁぁ！！」

虫が具現化しない特殊型。

ハルキヨの炎が虫と共に美奈をも焼き尽くす。

美奈の悲鳴が響く。

「いやあぁぁぁぁぁぁ！！」

香奈がハルキヨに向かって電気の槍を投げる。

しかしどれも緑の弾丸によって粉砕される。

かっこう虫の口から煙が出ていた。

「手は出さなくていいんだぜ？？かっこう」

槍を粉砕したかっこうはハルキヨの言葉に意を返さず銃を下ろす。

しかしそこに現れたのは多少の煤で黒くなった美奈だった。

死んでいるようには思えなかった。

というよりも待ったの無傷である。

かっこうは何が起きたのかさっぱり理解できないでいる。

「ハルキヨ・・・お前、何をしたんだ？？」

低い冷たい声でたずねる。

それにハルキヨは高ぶった声で言う。

「あぁん??ただ内側を焼いてやっただけのことだ。そういう力があるのさ・・・特殊型にはな。だから内側にある虫だけを殺し、お前のように人は殺していない」

それを見て腰を抜かしている香奈に向かってハルキヨが近寄る。

「ああ・・ああ・あああぁぁ」

首を横に振りながら言葉にならない悲鳴を出す。

そんな彼女を見ながらハルキヨは炎を出す。

「すぐに姉の元に行かせてやるよ」

そう言って非常にも彼女に炎を投げる。

無抵抗に香奈は炎に包まれた。

「殲滅完了か・・・」

それを見ていたかっこう。

いい気分ではなさそうだった。

それを察したのか。

「そんなことでいちいち悩んでたら最強の名が泣くぜ??かっこう」

「うるさい」

吐き捨てるように言い残し、かっこうは外へと出て行った。

「事後報告でもしますか」

ハルキヨはコートから携帯を出して中央支部へとかける。

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　４（後書き）

感想・評価待ってます！！
募集のほうもよろしくお願いします！！

「ハルキヨ？？」

携帯がなったので出てみると殲滅に出向いていたハルキヨからだった。

「それでどうだったのかしら？？」

『まあ、何とか殲滅には成功した。ちょっと派手にやったから警察も来るかもしれない』

「そこはこちらで何とかするわ。気にしないで」

『かっこうも来ていやがったがお前知ってたんじゃないか？？』

「もしそうなら？？」

『少々痛い目にあってもらうかもな』

「今回はあちらと連絡とってなかったから知らなかったわ。でも仲良く殲滅に協力し合えたんだからいいんじゃないかしら？？」

『お前は俺にけんかを売っているのか？？』

「冗談よ。それよりこの後は特に仕事はないから自由にしていてもいいわよ」

『それは助かるな。俺にもやりたいことがあるからな』

「やりたいこと??」

『お前は知らなくてもいい』

そういうと一方的に電話が切られた。

するとパソコンにメールが届き、そこにはハルキヨからの今回の報告書が書かれていた。

それを軽く目を通すと近くにいた局員にそれをコピーさせて上に持ってくようにつたえた。

彼女は部屋を出て地下へとエレベーターで移動する。

最下層につくとそこには小さな部屋が強化ガラス越しにあった。

そこには得体の知れないものがいた。

「くすくす。実験開始ね」

不気味な笑みを作りながら言う。

後ろには研究班らしき白衣を着た者たちがいた。

彼らは研究室に入っていく。

一体ここで何が行われているのかはまだ誰も知らない。

夢燃やす者　魅車　ＰＡＲＴ　４（後書き）

コメント・評価待ってます！！
募集のほうもよろしくです！！

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　５（前書き）

とうとう完結『夢を燃やすもの』！！
次回『夢導く戦士』です。
あとさらに第６巻は『夢集まる遊覧船』に変更になりました。
コメントいただければ次回作への参考になります。
では！！

夢燃やす者　大助　ＰＡＲＴ　５

任務を終えたかっこう・・・大助の元に電話が来た。部屋についてからすぐに来たので出ることができた。
「もしもし??」
『あ、お疲れ様ですかっこうさん』
向こうからは元気な女性の声がした。五郎丸柊子だった。
「むしばねを殲滅して、ターゲットもハルキヨのやつが殲滅した。あいつの能力魔そこが知れない」
『依然長くいたかっこうさんででもですか??でも特殊型を殲滅する力を持つんですからまた厄介な力ですよねー』
電話の向こうからも緊張した声が聞こえてくる。
「それで今日はなんですか??」
『ああ、そうですそうです。かっこうさんには今日を持って今の任務から降りてもらいます』
「まあ、ターゲットがいなくなったからな」
『次の任務なんですが、鵬沢市に行ってください』
「おい、そこってまさか・・・」
『そうです。彼女の傍にいてあげてください。彼女もかっこうさんに会いたがってましたよ??』
「そうか・・・」
なにやら懐かしそうな表情になる。
『彼女と同じ学校にも通ってもらいます。そういうことでお願いしますね。あと詳しいことは後々お伝えしますので携帯に電源入れて置いてくださいね』
「了解」
そう言って電話を切った。この部屋ともお別れだった。別に特別な愛着があったわけではない。
「準備するか」

のろのろと次の任務へ向かうべく準備を始めるのだった。

（完）

夢導く戦士　プロローグ（前書き）

今日から始まります第４巻『夢導く戦士』。
感想・評価待ってます！！
また募集もまだ継続中でありますのでどうかよろしくお願いします。

夢導く戦士　プロローグ

雲ひとつない晴れ渡った空。向こうに見えるのは小高い山々。そして反対側を見れば海が見えた。海の近くにあるホラント市の隣にある蒼陽市。蒼陽市にむかって一台のベスパが走っていた。しかし燃料を指し示すメーターはすでに空になりつつあった。ここまで走ってくる間になかなかスタンドを発見できなかったのだ。のろのろと向こうに小さく見えるスタンドらしき建物に向かうベスペ。

「むむ、そろそろまずいことになりそうだね」

ベスパに乗っている少女が情けないメーターを見ながら唸る。口にくわえられているあめをなめながら周りの景色を見渡す。

「なかなか風情があるところじゃないか」

道端には花が咲き誇っている。大分時間はかかったが何とか燃料切れの前にスタンドに着いた。

「いらっしゃいませ」

元気よく若い男性が出てくる。しかしその男性はベスパに乗っている少女の姿を見て不思議に思う。

「これで入れられるだけの燃料を入れてくれたまえ」

そう言って少女はポケットから小銭を男性の手に乗っける。

「は・・・はぁ」

あっけに取られる男性。なぜならたかが原付バイクの燃料タンクを満タンにできない彼女の懐に同情しているから、彼女の独特なしゃべり方に戸惑ったから、ヘルメットとゴーグルをしているのは義務だから言いとして、棒つきあめをなめながらの運転はどうかと思った。それに彼女の背中にあるのはどう見てもホッケー競技で使われるスティックだったからだ。その中でも群を抜くのが快晴でありながら彼女が着込んでいる黄色いカッパだった。そんなことを考えているうちにあっという間に補給は終わっていた。どう見ても心細い量だった。

「ここは自然にあふれているねー」
手入れをしている男性を見ながら少女が言ってきた。
「山に囲まれてるからね。道路にある花も全部市で管理してるんだ。なんでもあれが売りらしいからね」
スタンド近くにもある花畑。色とりどりの花々があった。
「隣のホラント市は海が近いからね。ここは対の存在なんだ」
市のほうに目を向けながら男性は言う。
「それより君は一体何をしてるのかな??」
奇妙な服装に言葉遣い、さらに寂しい財布状況。こんな状態でできることなどほとんどないのではと思っていた。
「うん??色々なところを回ってるのだよー。いわゆる一人旅ってもんだよー」
まさかの答えだった。
「こんな時世に一人旅??」
「何かおかしいかい??」
「あー、いやー、なんでもない」
おかしいだろう。晴天時にカッパを着込んで、バイク運転に棒つきあめ、おまけになぜかホッケースティックを持ち歩いているのだから。誰も一人旅をしているのだとは信じてくれはしないだろう。
そんな男性の意図を汲み取ったのか。
「ボクのことを含め、まだまだ君の知らない世界というものがあるのだよー」
よいしょとベスパにまたがると少女はエンジンをかける。ぽかんと呆けている男性に向かって。
「そのことをよく覚えて起きたまえー」
一気に加速させたベスパが走り出す。
「何やら戦いの気配がしてくるよー」
わくわくするこの気持ちを抑えながら彼女は蒼陽市に向かう。
「今度はどんな戦士と会えるかな??」
獅子堂戌子の“スカウト”の旅。

地名蒼陽市。
開始。

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　０

狩間市から出た佑介が向かった先は蒼陽市だった。大きなリュックをしょった長身の少年が市内を歩いていた。床屋に言っていなかったのか髪はやや伸びて肩よりも長くなっている。整った顔立ち、がっちりとした体つき。周りから見れば美男子に見えるだろうが彼には誰も知らない素顔があった。虫憑きだという裏の顔があった。

「桜架市まではまだまだか・・・」

去年のクリスマスに虫憑きに夜激しい戦闘があった。そこに行けば少しは虫憑きについて知ることができると思っていた。さらに特環やらむしばねといった意味の分からない組織もあるらしく、それらも知りたかった。車が多数往来していて、現在通勤量が多くなっている。

「朝飯でも買いに行くか」

腹の虫が大きくなったために近くのコンビニに向かった。コンビニに着くとふとあのときのことを思い出す。

「確か・・・あの時も朝飯買いに来てたんだよな」

いじめられていた女の子を助けたあの日。その子はもういない。心に二つの穴が開いていた。これは彼が付き合ってきた少女たちがいた場所だ。しかしぽっかりと空いていた。晴れ渡り、夏が近いためか温かい日だったが心は冷え切っていた。中に入り、手当たりしだいパンを購入していく。パックのジュースも購入して会計を済ませ、外に出る。すると目の前に奇妙なかっこうの少女が立っていた。近くには原付バイク。口には棒つきあめがくわえられていて、一番奇妙なのは黄色いカッパをこの晴れ渡る空の下で着ていることだった。何だこいつはと思った矢先、少女のほうが先に口を開く。

「君は虫憑きだねー」

「な！？」

彼女から見れば分かりやすいくらいの動揺を佑介は見せた。佑介自

身ばれたのかと狼狽する。しかし佑介にしか聞こえないくらい小さい声で言ったために周りには聞こえていない。
「君からは戦士としてのいいセンスを感じるよー」
「戦士??」
何を言っているのかといぶかしげに佑介は彼女を見る。明らかに年下に見える少女。まだ若干の幼さを残しているが芯の強さを感じた。自分よりも修羅場を潜り抜けてきたことを無言の彼女から発せられるオーラが伝えていた。
「着いてきたまえー。君は力はあるがまだ虫憑きについて知らなさ過ぎるねー」
きびすを返して勝手なことを言いながらベスペにまたがる。
「何おかしなこと言ってるんだ??一体お前は・・・」
佑介の言葉が言い切られる前に。
「ボクの名は獅子堂戌子。君と同じ虫憑きで戦士だったスカウトマンさ」
ポケットからあめを出して口に含む。
そして佑介が手荷物コンビニの袋を指差して言う。
「話す代わりにお代はその朝食でもいただくとしようかなー」
それが佑介と戌子の出会いだった。

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価・募集待ってます！！

夢導く戦士　戊子　ＰＡＲＴ　０（前書き）

とうとう６０話か・・・エンディングまでの構想は完成していますのでこのまま突っ走ります。まだまだ出ていないキャラもいますからね。ＢＵＧのほうからも出します。もちろんあのキャラも・・・。それでは夢導く戦士を引き続きお楽しみください。

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　０

誰もこないような小高い丘に来ていた二人。戌子は佑介から袋をかっぱらうと中に入っていたパンの袋を破ってかぶりついた。
「ちょっとまて！！そのアンパンは俺が食べようとしていたんだぞ！！」
「なんだよー、こんな菓子パン一つくらいくれたっていいだろー？？それくらいの甲斐性を見せておくれよー」
「うぐ・・・」
それを言われると反論できなくなる。仕方なく袋からカレーパンを取り出してかぶりつく。しばらく無言でお互い朝食を食べていた。
最後のパックジュースを飲み干すと戌子は佑介に向き直り口を開く。
「君は虫憑きについて何を知ってるのかな？？」
突然の質問。少し考え込む。
「虫憑きになるのに夢が関係するってことと戦闘で虫を殺せば人間が動かなくなるってことくらいか？？あとむしばねとか特環とか意味の分からない組織があるって聞いたこともあったな」
佑介はここまで来る間に仕入れた情報から回答する。
「まあ、触りくらいかなー」
何か残念なものを見るような目をしながらいう。それには少し佑介もへこむ。
「虫は１０年くらい前から突然現れたものだー」
戌子は空を見つめながら放し始める、どうやら始まりのことを言っているようだ。
「最初は3匹しか居なかった。でもその3匹は人の夢を喰らい、虫憑きにする力があった」
茜を虫憑きにしたのもその3匹のうちの1匹だということかと思った。
「虫憑きになるには夢がなければいけない。どんな夢だと思うかね

ー??」

突然振られた話題。

「ええっとー・・・なんだろ??何かになりたいとか??将来こんな職業につきたいとかって言う・・・夢かな??」

「そんなもんじゃないんだよー。もっと身近でそれでも彼らにとっては大きな夢・・・」

少し表情が暗い。彼女にも何かしらの夢があるのだろう。それを日々追い求めてここまで来た。

「戌子??」

「ほー君はちゃんと私の名前を読んでくれるのかー。感心感心」

「はあ・・・」

どうやら彼女は友達から別の呼び名で言われているようだ。さっきから「わんこと言うな」やら「あいつはまったく」やら誰かに怒りの矛先を向けているようだった。

「それより話を進めてくれないか??」

「おおっと済まないねー」

咳払いをしてから話を進める。虫憑きとは１０年くらい前から現れた存在だということ。最初は3匹だけだったこと。

それらは人の夢を食らうと言うこと。虫は夢を食らう代わりに力を与えること。夢を食い尽くされると死ぬということ。虫を殺されると欠落者という感情も夢もないただ生きているだけの存在となること。

「まあ、例外はいたんだけどねー」

なにやら意味深めなことをボソッと言っていた。特環というのは特別環境保全事務局の略称らしく虫憑きとなった少年少女たちを保護する組織らしい。しかしそのことには佑介は納得できなかった。そいつらのせいで茜は死んだのだから。

「どうしたんだい??なにやら顔色が悪いようだが」

あのときの光景を思い出してしまっていた。自分たち二人を見下しているあの悪魔の姿を。

「いや・・・大丈夫だ」
佑介がそういうとさらに話が進む。むしばねとは特環と敵対しているレジスタンスらしい。彼らは彼らなりに虫憑きたちの居場所となろうとしているようだ。しかし特環からしてみれば邪魔な存在らしく、むしばねからしてみれば特環も邪魔な存在らしい。だからお互いにいがみ合っているようだ。一通りの話は済んだようだ。戌子はすっくと立ち上がる。佑介は考えていた。これから何をするべきか。先ほどの話から考えると、始まりの3匹を殲滅するのが手っ取り早いようだ。しかしその3匹がどれだけの力を持っているのか、全く予想できない。すると後ろから何かが迫る感じがした。明らかな殺気を込めたものだった。背中に悪寒が走ったので急いで佑介は回避する。すると先ほどまで佑介が座っていたところに大きな穴ができていた。
「何しやがる・・・」
佑介はにらみながらそこに立つ影に言った。煙の先にはホッケースティックを地面に叩きつけている少女がいた。ゆっくりと持ち上げ佑介に向かって突きつける。
「戦士なら・・・」
戌子は先ほどまでの表情を一変させ、戦う戦士の表情へと変わる。
「戦え!!」
佑介の右腕に黒い虫が止まった。

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　１

目の前の少女がいきなりホッケースティックを振り回してきた。回避は成功したが先ほどまで佑介がいたところは大きくへこんでいた。そして彼女は戦えといった。なぜいきなり知り合ったばかりの二人が戦わなければいけないのだろう。

「戦士だからに決まってるじゃないかー」

戦士といわれても全く自覚がなかった。確かにここまで来る間に特環の局員と戦ってきた。訓練も受けていない自分はただ闇雲に虫の力に頼って振り回してきたものだった。

「君の力量を知りたい」

そう言って構える。ふわりと黒い虫が佑介の方に止まる。

「同化型かー。また粋のいい生徒に会えたものだー」

なんとも嬉しそうに言う。佑介は道端に落ちていた木の棒をつかむ。それと同時に右肩に止まっていた虫が右腕全体と同化し、化け物じみた腕となり、木の棒は漆黒のロッドと架す。

「うーん、殺気がびんびん伝わってくるよー」

「ルールとかあるのか？？」

「そんなのはないよー。忠雄互いが戦い、先にひざをついたほうが負けってことで」

そう言い終わると戊子は跳躍しスティックを振りかぶる。重力による下降の勢いそのままに叩き込んできた。

「ぐぅ！！」

ガギン！！っと言う硬いもの同士がぶつかり合う音がする。お互いの武器がぶつかり、火花を散らす。組み合ったままの状態からスティックを旋回して横やりの攻撃してくる。それをしゃがみ、強化された腕力でアッパーを放つ。しかしその左拳に足をかけられそのまま顎を上に蹴り上げられる。

「ぐがあ！！」

後ろ向きに吹き飛ばされる佑介は、何とかばくちゅうで態勢を整える。強いとしか思えなかった。今までの局員相手だったら今のはクリーンヒットしていただろう。しかしそれを逆に利用された。まだ余裕綽々という感じだった。

「どうしたんだい??もう降参かい??」

明らかに挑発している戌子。

「まだまだまだぁぁぁぁぁ!!」

ロッドを回転させ遠心力を使って叩き込む。回避され、地面は陥没する。そして上からは再び冗談に構えられたスティックが振り下ろされる。

「背中ががら空きだよー」

「ちっ!!」

攻撃を何とか回避するもすぐに襲い掛かってくる。あの自分の背丈位もあるスティックをまるで木の棒のよう振り回してくる戌子。その表情には戦うことに至福の喜びを感じるという笑みが浮かべられていた。

「甘いよー」

そう言ってスティックが叩きつけられる。それを回避できずにロッドで受け止める。足が地面にめり込む。力負けしているのか??っと焦りを覚える。冷やあせがどばどばと流れ出ては背筋を凍らせる。一体何度殺されそうになったか。戦い続けてもう2時間は経っていた。肩で大きく息をする佑介とは違ってまだまだ余裕という戌子。無駄な動きがないために無駄な体力も使わないのだ。

「無駄な動きが多いねー。それがなくなれば君は・・・彼のようになれるかもねー」

「え??彼のように??」

いったいだれのことを言っているのだろうかと思う。

「そろそろ決着を付けようではないかー」

スティックを持つ手に力が入る。

「いいだろう・・・決着をつける!!」

握り締めたロッドを回転させ遠心力を作り出す。向こうでは跳躍して上段に構える戌子の姿。

「「おおおぉぉぉ！！」」

お互い叫び、武器と武器がぶつかり合う。バギン！！っという武器が折れる音がした。よく見ると極限まで強化された佑介のロッドが戌子のスティックを真っ二つにしていたのだった。防ぐすべを持たない戌子に向かって再びロッドを叩き込もうとする。

「俺の勝ちだ！！」

一気に振り下ろす。

しかし佑介の振り下ろしたロッドは戌子に届かずに、代わりに腹に戌子の拳がめり込んでいた。

「ぐが？？」

何が起きたのか分からないまま、後ろに吹き飛ばされる。そして地面に叩きつけられ、膝立ちで、これ以上は立ち上がれなかった。

「ボクの勝ちだー」

どうだ参ったかと言わんばかりに需要の少ない胸を命いっぱいに強調して言ってくる。

「ちくしょう・・・」

ずきずきと痛むあばらを押さえて佑介はその場に寝転んでしまった。

「君をボクの生徒として認定するよー。君をもっと強くしてあげよー」

「ハハハ・・・それはよかった」

獅子堂戌子による“生徒”相場佑介の“戦士”としての教育。

開始。

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　THE　OTHER　PART　0

とある喫茶店に数人の初年少女たちが座っていた。一人は大人びた女の子。長い髪を後ろまで伸ばしている。テーブルにはアイスコーヒーが口を付けられずに乗っていた。その隣にはアホ毛が特徴的な少女がいた。肩で切りそろえられた髪。まだまだ幼さが残り、かわいいの部類に入る。

「はぐはぐ。やっぱり甘いものはおいしいです」

テーブルにはもう４つ目のパフェに手を出していた。

「そんなに食べるとおなかを壊しますよ??」

口についたクリームをハンカチでふき取ってあげながら言う。

「いいのいいの。おいしいものは今こそ食べておかないとね」

「それを聞くと自分が近いうちに死ぬと言ってると同じですよ??」

「はうぅぅ!!ごめんなさいー!!違いますー」

小さな体をさらにちぢこませて謝る。

「何やってんのや??そんなことしてへんで早く近況報告してくれへんかのー」

ぼさぼさ頭の少年がけだるそうな顔で言う。黒縁眼鏡をつけて、一見まじめそうな少年だ。

「まあまあ隆俊そういわない。玲奈はお楽しみを味わってればいいんだよ」

特にいじられた形跡のない茶髪の少年が言う。

「はーい。玲奈行きまーす」

「どこいくんやまったく・・・」

頭を抱える少年。

「それで??あれから会えたのですか??涼平」

涼平という茶髪の少年に聞く。

「そうだな紅音。さっき会ったよ・・・」

それを聞いて皆が涼平に注目する。

手で顎を押さえる涼平。
「久しぶりに会えたよ・・・浸父に」

夢導く戦士　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！
募集もまだやってますのでドンドンお願いします！！

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　２

「しぬうううぅうっぅうぅ！！」
いつもはこんなハイテンションにはならない落ち着いた青年である佑介だがこの時ばかりはそうは言ってられなかった。後ろから迫るベスパに追い掛け回されかれこれ3時間。あの戦闘から5分も経たないうちにランニングを開始させられた。それも平日だからか人の少ないランニングコース。右腕に虫を同化させて走り続けていた。確かに同化させれば飛躍的に運動能力が高まるが、それでもこの3時間という時間は異常だった。何も水分補給無しで延々と同じコースを走り続ける。いい加減飽きてきていた。
「もっと別のところを走るとかないのかー」
「特殊型ならまだいいけど君みたいに同化型となればどうすることもできないからねー。こうして人気のないところで走るしかないのだよー」
走りながらも始まりの3匹について話してくれた。
“大喰い”・・・分離型の虫憑きを生み出すもので、見境なく夢を食べることからそういわれるようになったらしい。
彼女から虫憑きにされるものが一番多いらしい。
「茜はその大喰いから虫憑きにされたんだな・・・」
走りながら物思いにふける佑介。
「気を抜くでないぞー」
戌子が後ろからスティックを振り回してくる。あんなのに当たったらしゃれにならない。
「うおおおぉぉぉぉぉ！！」
再び走り始める。
“神父”・・・戌子のように特殊型の虫憑きを生み出すものらしい。人に絶望を与えてからその夢を食らうというなんとも嫌なやつらしい。しかし絶望のうちで抱く夢って一体なんなのだろうかと思う佑

介。ちらりと戌子を見てもまったく絶望しているようには思えなかった。
「なんだいボクに何かついてるかい？？」
スティックを振り回しながら迫る戌子。
「まさかボクに一目ぼれしたわけじゃないよね」
何を言ってるんだとあきれてしまった。
「すまないがボクにはすでに気になる奴が1人いるからねー。君のように素質はあっても実力が備わっていないやつとは違って彼は最強だからねー」
「そんな虫憑きがいるのか？？」
「彼は最強の虫憑きだ。彼は本当の敵を知っている」
「本当の敵・・・？？」
「そんなことよりもさっさと走りたまえー」
「うおおあああぁぁぁ！！」
再び全力疾走を始める。
“三匹目”・・・同化型・・・つまり佑介のように虫憑きと虫が同化して力を得るような虫憑きを生み出す。
その実態を見たものはまだいないらしい。知られているのはその人の近くにいるものに取り付き、そしてその親しいものの夢を食べて虫憑きにするらしい。その後は三匹目とその虫憑きとなったものの記憶がなくなるらしい。
「だから舞華が俺のことを・・・」
あのときのことを思い出すと胸が痛んだが、そんなことが理由としてあったのかと納得できた。
「同化した状態で常に戦っていることをイメージしていれば虫の力を完璧に使いこなせることができるのだー」
楽しそうに言う戌子。それと対照的に必死の形相で走る佑介。
「だからきりきり走りたまえー」
「わーあぁぁぁぁ不幸だーあぁぁぁぁ！！」
今日も佑介と戌子のマンツーマンの指導は続く。

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　２（後書き）

コメント・評価待ってます！！

「今日もやってきました喫茶店。喫茶店といったら・・・パフェでしょ！！」
そう言って玲奈は頼んできていたパフェに幸せそうにぱくついている。
「まったくこれで何皿目なんや？？」
隆俊があきれた口調で言う。目の前にはパフェの入っていた容器が山のように積み上げられていた。
「もう玲奈ったらまたクリームつけちゃって」
そう言って優しくふき取ってあげる。えへへっと幸せそうな笑顔を見せられると隆俊もこれ以上は何もいえなかった。
「僕たちのやるべきことは分かっているはずだね」
涼平が皆を見渡しながら言う。真剣な目で三人を見る。
「僕たちはあのかたがたのために虫憑きを増やさなければいけない。増やすことが僕たちの役割」
「毎回おいしいものだったらいいのだけどね」
「私神父の趣向嫌いー。だってあれ嫌な味にしか感じないんだもん。それよりだったら三匹目のほうがいいな」
「ワイは神父の趣向がいいとおもっとるんやけどなー。あの独特な味がまたたまらへんのや。まあ玲奈のようにお子茶魔にはまだ早いかもしれへんけどな」
「ぶー、玲奈子供じゃないもん」
よしよしと紅音が玲奈の頭をなでてやる。するとへりゃりと弛緩している。
「ほれ見ろ子供やないか」
はっと気がつくと隆俊をぽこぽこかおを真っ赤にさせて叩いている。それを見てげらげら笑う隆俊。
「私は何でもいいけるかしら。まあ分離型を生み出すから大喰いと同

じなのかも」
「ふとらんようにきいつけやー」
「何か言ったかしら??」
「すんまへん」
まるで蛇に睨まれたかえるのようになってしまった隆俊。
「それじゃあ今日も楽しい食事会にしようか」
そういうと4人は立ち上がり、店を後にした。

夢導く戦士　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　１

目の前には右腕を異様な形に変形させた少年が走っている。人間が出せるスピードではない。ベスパ最高速度を出してようやく追いつけるのだ。

「まだ走るのか??」

うんざりした顔を見せる青年。ふと手元の時計を見るとすでに４時間は延々と走っているのだ。

「そろそろ終わりにしようかー」

そういうと青年はようやくかーという感じで地面に崩れる。

さすがにはじめてこれだけ走るのだから体力は限界だろう。

「疲れた・・・これを毎日やるのか??」

ぐったりとした青年が聞いてくる。

「むふふ、そうだー。これを毎日続け、ぼくとの戦闘訓練を組めば君はまさしく強い戦士になれるはずだー」

「死ぬー」

「だったら今死ぬかー??」

あっさりと恐ろしい言葉を口にする戌子。恐ろしい少女だと佑介は思う。すっかり空は茜色に染まっていた。ランニングコースの近くには公園があり、そこにある自販機でジュースを２本購入する。両手に持って戻ると、戌子に向かって一本投げてよこした。

「今日のお礼」

「たったジュース１本とは安いな君はー。もう少しフランス料理フルコースとかできないかなー」

「そんなことしてたら俺の財政は破綻する」

「僕の財政はもう破綻してるけどねー」

「それは戌子の自己責任だろ??もう少し考えてお金使わないと」

「そう言われてももうこれしかないのだよー」

そう言ってポケットからなにやらじゃらっと音がした。戌子の手に

は１０円玉が２枚と１円玉が５枚乗せられていた。まったくこれでよく一人旅を使用などといったもんだと佑介は飽きれを通り越して尊敬してしまった。とは言うもののベスペの燃料は雄介の授業料からとられている。それに２日に１回の割合のために佑介の持ち金も悲鳴を上げている。しかし、強くなるために多少の犠牲は仕方がないと我慢していた。

「ところで戌子はどこに泊まるんだ??知り合いとかいるのか??」

宿でも探しに行こうと立ち上がった佑介は聞く。

「俺も知り合いいないから宿探しに行くけど」

そんな時戌子はじっと佑介の事を見ていた。微動だにしないのは少し恐怖だ。

「なんでそんなに俺を見るんだ??」

「・・・」

「なんでそんなに目を潤ませてるんだ??」

「ウルウル・・・」

「まさか宿もないとか??まあ・・・金がないからな」

「・・・」

「鬼教官のお前が小動物のまねしても違和感あるだけだぞ??」

「それは聞き捨てならないなー」

ゆっくりと立ち上がる戌子。

しかし体中に殺気をまとっていた。

佑介自身、言わなきゃよかったと後悔している。

「覚悟しろー」

「ぎゃあぁぁぁぁぁ!!」

佑介を絞め技で拘束する戌子。このあと断末魔の叫びが平和な蒼陽市に響き渡り、戌子の宿もとるということで技から解放された佑介はぐったりと、とても宿を探す体力は残されていなかった。

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　THE　OTHER　PART　2

暗い蒼陽市を一人闊歩している。
「・・・」
俯き加減で歩くそのものは男か女かも分からない。それが子供か大人かも分からない。傍を通る大人たちの横を通っていく。帰宅する車の数は少なく、その代わり酔っ払いを乗せていくタクシー数は多かった。蒼陽市に夜が来ていた。真っ暗な空。漆黒に染まる空。その黒が一体何を意味するのか。
「絶望・・・それは極上の美味を併せ持つ・・・」
謎の人物の声は低く、何かすべてに絶望しているようなものだった。コンビニには少年少女たちがたむろしている。今このときが楽しめば言いという彼ら。そんな彼らには夢というものはあるのだろうか。しかし謎のものにはそんなことは関係なかった。まるでターゲットを絞るかのようにあるのかどうか分からないめで彼らを見つめる。視線を感じた少年たちはいい金づると思ったのかこちらに近づいてきた。
「よう・・・どこの誰かしらねえがちょっと金かしてくれねえか？」
高校生だろうか、着崩したワイシャツにどこかの高校の刺繍がされていた。後ろでは少女たちが笑っている。胸倉をつかみ顔を近づける少年。にらみを付けられた謎のもの。
「絶望・・・それは人が直面する大きな壁」
「あぁ？？何言ってんのこいつ。ばっかじゃねえ？？」
そう言って突き飛ばす。よろよろと後ろに後退する謎の人物。すぐに2人の男子に殴られた。しかし悲鳴を上げたのは。
「ぎゃあぁぁぁぁぁ！！」
「イテエェェェ！！」
男子生徒2人が手をつかんで悶絶していた。女子生徒は何が起きた

のかまったく分からないという顔だ。その手からは血が流れていて、手首から先がなくなっていた。

「きゃあぁぁぁぁ！！」

女子生徒たちは悲鳴を上げてその場を去っていく。2人の男子生徒はそんな彼女たちを見て叫んでいる。助けてくれと。

必死で叫ぶもまったく聞き入ってくれていない。そして彼らの目の前には謎の人物が立ちふさがる。周りを見渡しても誰もいない。まさに捨てられた状況だった。彼らに残されたのはたった一つのもの。それは。

「絶望・・・」

仲間に捨てられたという絶望が彼らを蝕む。死という恐怖が彼らの思考を奪う。もはや言葉すら満足につむぐことができていない。ただ子羊のように震えている。謎のものはゆっくりと近づき言う。

『貴様らの仲間はもういない』

『貴様らは捨てられたのだ』

『貴様らにはもう仲間はいない』

ただぶつぶつと言葉をつなぐ。急速に彼らの顔から生気が抜け、絶望だけが移る。

『貴様らを誘おう』

目の前にはいつの間にか大きな教会が現れていた。さっきまではコンビニがあったのにとは考える思考回路を彼らは持ち合わせていなかった。ただふらふらといわれるがままに中へと入っていく。そして大きな扉がバタンと閉められた。ローブを脱ぐとそこには茶髪の少年がいた。

「それでは御食事の時間であります・・・神父様」

神殿の中では絶望という名の夢のご馳走を堪能している謎の少年がいた。そして少年たちはばたりとコンビニの前に倒れた。そこにはすでに大きな教会など跡形もなく消えていた。

夢導く戦士　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　２（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　３

とある旅館に宿をとった佑介と戌子。はじめは二つの部屋を取りたかったのだが戌子が無理やり一つに予約してしまった。まあ、お金がピンチだったために助かったには助かったのだが。そんなわけで一日の疲れを取ろうと風呂に入っている現在。

「ふー・・・いい湯だ」

ちらほらと大人や親子連れがいるくらいの風呂。広々とつかることができる。風呂場では子供たちがはしゃいで走っている。その子たちの親だろうか、周りの人の邪魔になるからと注意していた。同い年の人はどうやらいないようだった。まあ、いてもいなくてもどうこうするつもりはないのだが。以前は長湯なんてできなかったが基本佑介はなが風呂派なのでゆっくりとつかることができた。一人出ては一人入ってくるという風呂場。それでもいっぱいにはならないために体を伸ばして堂々と占領している

「体中が気持ちー・・・」

つかれきった体に染み渡る温泉成分。しかしそんな平和な雰囲気をぶち壊す事件が起きる。突然露天風呂がある外から爆発音がする。

「な、なんだ??」

いきなりのことに佑介も慌てている。ほかの客も悲鳴を上げながら脱衣所へと走っていく。お年寄りもいたために佑介はタオルを腰に巻き、誘導に専念する。

「こちらです。慌てないでください」

客が慌てないように、旅館の係員が来るまで指揮を執っていた。ようやく来たときには皆が着替え終わっていた。

「慌てないで避難してください。こちらです」

係員の指示に従い客はゆっくりと移動を開始する。そんな佑介は今は浴衣姿。そんなとき更なる爆発音が風呂場のほうからした。次は窓ガラスが割れる音も一緒にだった。どうやら何かが近づいている

のか、爆発が大きくなっているのか。バタバタと誰かが近づいてくる音がした。がらりと脱衣所の戸が空けられた。
「虫が現れた。君も一緒に来たまえ―」
そこに現れたのは佑介と同じく浴衣姿の少女だった。
「戌子・・・それは本当か??」
「詳しいことは走りながら言うとしよ―」
そういうと戌子は背を向けて走り出していた。佑介も遅れじと急いで外に出るそのときのれんの木の棒を持っていった。一体外で何が起きたのか。なにやら得体の知れない不安に襲われながらも佑介は走っていた。

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　３（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　２

爆発音を聞き、すぐに虫が現れたことを察知した。同じく風呂につかっていた戌子はすぐに脱衣所に走り、着替えを済ませる。
「まったく浴衣で来たのは失敗だったなー」
ホッケースティックを持ってくるときでさえ奇異な目で見られていたので、あの姿でここまで来ていたら一体どんな趣味をしているのかと思われていただろう。別にここに居座るわけではないためにそれでもよかったのだが、佑介がそれだけはやめろとうるさかったので仕方なくだった。スティックを担ぎ、男湯の脱衣所を一気に空けるとそこには着替え終わった佑介がいた。
「ついて来たまえー」
そう言って走り出す。後ろからは棒を持った佑介が追ってくる。
「一体どうなってるんだ??いきなり爆発したりしてさ」
「どうやらあいつがこの地に来ているようだー」
「あいつ??」
戌子の言うあいつとは一体なんなのか。まったく見当のつかない佑介。ただ背中を追いかけることしかできなかった。しばらく走っていた。周りは花に囲まれ、それを踏んでいくのは気がひけた。２人が踏むたびに千切れた花々が空に舞い、風に流される。それを横目で見ながら走り続ける。爆発音が近づく。遠くではそのたびに花が塵と化していっているのだろう。一体誰が何をしようとしているのだろう。
分からないことをただ想像するしかできない佑介。まったく自分はこの世界のことを知らない。
「そろそろお出ましかなー」
戌子のその言葉と同時に前方で大きな爆発が起きた。
「ぐっ！！」
爆風で後方に飛ばされた佑介。すぐに虫と同化して何とか空中で体

勢を立て直す。
「何が起きた??」
大きな爆発でできた花畑だったところの大きな穴。そして目の前には戌子が何者かと対峙していた。その人物は真っ黒なローブをかぶって顔が見えないものだった。戌子がホッケースティックを構えた。そうなればやつは敵だということははっきりしていることが佑介にも分かった。
「久しいねー。こんなところで会うとは。気配は感じてたんだよー」
謎の人物に向かって話している戌子。この土地にいることを知っていたのだ。しかし謎の人物は何も言わない。ただ2人を見ているだけだ。
「ここで君を殲滅させてもらうよ・・・」
そして戌子は憎しみを込めた声でその人物の名を言った。
「浸父!!」

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　２（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　４

「浸父・・・」
その名は戌子との特訓の中で聞いた名前だ。始まりの３匹のうちの１匹。特殊型の虫憑きを生み出すもの。人々の絶望という名の夢を好物とするもの。佑介は漆黒の虫と同化する。右腕は化け物と似たものになる。その手に握られていた棒は同じく漆黒のロッドと化する。極限までに強化されたロッドの耐久は最高峰だった。風がなびいたとき、戌子と佑介は同時に神父に向かって迫った。そんな神父のローブ下からは団子虫のようなものが飛び出してきた。
「こんなもの！！」
そう言って佑介はロッドを叩きつける。すると砕け散った虫が爆発したのだ。粉々となったところで爆発したので規模は小さかったが爆風で飛ばされる。
「ぐおおお！！」
浴衣を左半身吹き飛ばされた。とっさに体を反転させていたために虫には爆発の影響はなかった。少しの火傷で済んだ。
「先ほどの爆発を見ただろー。あれはこいつの仕業だー。ここまでのことから学べ―」
そう言いながら戌子はホッケースティックを振り回し、浸父に向かって叩きつける。それを虫でガードする浸父。虫を叩いた戌子は舌打ちをしながらすぐに後方へと避難する。するとすぐに爆発が起き、花が飛ぶ。
「面倒な力を持つねー」
花畑を疾走する戌子と浸父。そのたびに花が舞う。浸父の虫が戌子に向かって飛んでくる。それを掻い潜り、叩き込む。ぐちゃりと嫌な感触が戌子の手に伝わる。ローブの下から虫たちの破片が飛び散る。
「！！」

虫を下に隠してガードに使っていたのだった。それを叩き潰した破片が戌子に向かって飛んでくる。小さな小爆発が次々と起こる。掻い潜った戌子の浴衣も所々飛ばされていた。

「いいいいいいぬこ??そそそそれは??」

「なんだよー。せっかく見せ付けてやってだー少しは喜びたまえー」

「こんなときに喜んでられるか!!」

ちらちらと吹き飛ばされた部分から見える肌。なんともいえないこの状況。

「そそそれよりこいつを何とかしなきゃいけないんじゃないか??」

「まーそうなんだけどねー」

なんとも余裕名戌子。それと対照的に慌てている佑介。ふらふらと立ち上がる浸父。ローブの奥の顔はまったく読めない。しかしローブ下からはうじゃうじゃと虫たちが出てくる。ゆっくりと二人の周りを取り囲む。

「これはちょっとやばいんじゃないか??」

「こんなのはへのカッパさー。戦士からすればへっちゃらさー」

「なんとも頼もしい戦士だな」

「そういう君も戦士になってもらわなければいけないのだよー」

にやりと笑う戌子。まったくと嘆息する佑介。このときも虫たちは2人ににじり寄っていた。

「近距離からの攻撃だと相打ちが関の山だな」

先ほどからの戦いからして二人の戦いでは必ず傷を負ってしまうのが見えていた。

「それならこれを使いたまえー」

そう言って戌子がどこからか取り出したのは。

「自動式拳銃・・・??なんで戌子がこんなものを??お前こんなの使わないだろう??」

「それは後で話すとしよー。まずは君がそれで邪魔なやつを吹っ飛ばしてくれればいいのだー」

「つまり俺にあいつまでの道を作れといいたいのか??」
「そういうことだー。分かってるじゃないかー」
「でもこれなんかでできるってのか??」
訝しげに見ていると右手に異変が起きた。
「なんだこれ??」
いきなり拳銃を取り込んだかと思うとロッドがもとの棒に戻り、虫の顎が銃口となったものが出来上がった。重量感は見た目ほどまったくなく、しっくりと手になじんでいた。
「やはり睨んだとおりだよー」
「何がだ??」
「そんなこといってる暇はあるのかー??」
えっと戊子の言葉に反応すると後ろから虫たちがいきなり飛び掛ってきたのだ。2人は左右に転がるように交わす。今度は何も衝撃をくわえていないのにいきなり爆発した。次々と連鎖的に爆発していく。しかしとうの浸父はまったく微動だにしない。一体何を考えているのかと不審に思う。そんなことを気にしているうちにも次々と虫たちは襲い掛かる。
「このやろおおぉぉぉぉ!!」
右腕の銃に力を込める。すると唐突に自分から何かが剥がれ落ちるのを感じた。何か嫌な感じがした。しかしそんなことを今気にしている暇はない。浸父に向かうところには多くの虫がいてそこから襲い掛かってくる。それらに向かって銃口を向け、一気に砲撃する。漆黒の弾丸が砲撃され、目の前の虫たちを粉々にする。もはや粉に近い状態であるためにぱちぱちと何かがはじける程度しか爆発が起きなかった。更に浸父に向かって銃口を向け砲撃する。
「くらえぇぇぇぇ!!」
再び漆黒の弾丸が浸父めがけて飛んでいく。虫たちを粉々に打ち砕き、浸父に直撃する。後ろにローブが千切れながら一緒に飛んで行く。それに追い討ちをかけるかのように冗談から戊子が渾身の力でホッケースティックを叩き込む。ばぎっと骨が折れる音がした。

「ぐぎゃ！！」

顔にかろうじてかかっていたローブの奥から少年の声がした。戌子がなにやら疑い深そうな表情のままローブを剥ぎ取る。するとそこにはぼさぼさ頭の黒縁眼鏡の少年がいた。

「君は一体・・・？？」

まさかの展開に戌子は驚き、佑介は理解できないでいた。

「あいつが・・・浸父？？」

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　４（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　３

「なんだい君は・・・」
まさかの事態に戌子は戸惑いを持っていた。しかし戦士である彼女はそれを何とかうちに押しとどめ、冷静をつくろっていた。後ろでは佑介がこの少年を浸父と思っているようだ。しかし同僚からの報告では神父は倒したはずだし、姿はこんなものではないことを報告で知っている。
「残念ながらこいつは浸父じゃないようだー」
倒れた少年を突っつきながら言う。まさか自分が相手を間違えるとは思わなかった。完全に浸父であると思い込んでいた。佑介もまたまさかという顔をしている。顔色も少しよくないようだった。
「夢をはじめて食わせたようだねー・・・」
誰にも聞こえない声でいった。佑介と同じ戦闘スタイルを持つかつての同僚・・・背中を預けあった相棒・・・そして自分が・・・。
「まさか・・・そんなわけないよー」
頭を振って霧散させる。そして再び少年を見る。スティックで仰向けにさせ、腹を叩く。一気に空気を吐き出された少年はむせ返しながら意識を取り戻す。
「がほがほがほ・・・」
激しく咳き込み、何とか呼吸を整えようとしている。
「それじゃー君は誰なのか吐いてもらうよー」
スティックを突きつけながらいう。少年は戌子を睨みつけている。
「く・・・くそ」
舌打ちをする少年。
「特環ではないようだし・・・むしばねでもない」
少年はただ睨みつけているだけで何も言わない。
「吐きたまえー」
背中を思いっきり叩かれた。

「がは！！」
やりすぎなんじゃないかと思うくらい思いっきり叩いていた。
「ちょっと戌子これはやりすぎなんじゃ・・・」
「君は黙っていてくれたまえー」
スティックをこちらに突きつけられ、佑介は踏みとどまる。
「そういうテメエは特環やか？？」
二人に向かっていってくる。
「この青年は違うが・・・僕はそうだねー」
「戌子・・・おまえ・・・」
「なんだー？？そのおびえた目はー」
佑介は思い出していた。赤浜市で舞華と自分を襲ったのは確か特環だった。さらに狩間市で茜を欠落者にしたのは特環のかっこうという少年だった。そして自分を鍛えてくれるといった少女・・・獅子堂戌子もまた特環の一員だったのだ。ガチャリと戌子に向かって銃を構える。それは無意識のうちの行動だった。今までのことが入り混じって思考が追いつかない。
「何で黙ってたんだ・・・？？」
「別にいわなくてもいいだろー？？君に何があったかなんてボクにはかんけーないからねー」
がたがたと震えるからだ。
「君に何があったかは知らないけど、それはすべて君が弱いからおきたことだ」
カッと目が見開かれた。
「俺が・・・弱いから・・・？？」
「そうだ君が弱いから君が今こうして立っているのだ」
いつに間にか銃を下ろしていた。ここで戌子を撃っても何も残らないと思ったからだ。それに弱いのは事実だった。
「こうしてみると多くのものを失ってきたようだねー」
それは事実だった。大切な人を二度も失った。だから願った、大切な人の笑顔を守りたいと。それが佑介の夢だから。

「しかし君は弱いためにそれを守れなかったようだねー」
図星だった。彼女たちの笑顔を守れなかった。
「さて君とのおしゃべりはまた後でだ・・・それよりもこいつから色々聞きださなきゃいけないんだ」
戌子は仰向けの少年を睨んでいた。

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　３（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　５

目の前で少年が戌子から尋問を受けていた。
「君はなぜぼく達を襲ったんだい??」
「てめえらは知らないやろうな。ワイらの存在を」
「君達の存在だって??」
「テメエらのような頭の固いやつらは目の前で起きてることしか対処できねえやろうな」
「さっさと吐きたまえー」
「ぐは!!」
再び戌子がスティックを叩き込む。背中を打たれた少年は痛みを必死で我慢している。
「おい戌子あまりやりすぎると・・・」
「甘いなー君は。だからボクになんて負けるんだー」
佑介の言葉をさえぎって戌子が口を挟む。しかし異常な強さを持つ戦死である戌子が自身をなんてよばりすることに違和感があった。
「それで??君たちは一体何者だい??」
「創虫会・・・とでもいっておこうかいな」
「創虫会??なんだいそれは??」
「んなことというわけないやんけ。仲間を裏切ることになるわ」
「もう少しいためる必要がありそうだねー」
「んなものワイらはいくらでもうけてきたで??」
そういうと戌子は何度も何度も叩き込んでいた。しかし少年のほうも必死で耐えていた。まるで何かを待つかのように、暗闇のかなたをじっと見ていた。
「よく耐えるね君ー」
「よわっちい攻撃食らってもへでないで??」
「ほぅ・・・まだそんな減らず口が叩けるようだね・・・」
目が据わった戌子が再びスティックを振り上げる。そこに突然教会

の鐘がなる音がどこからか聞こえてきたのだ。それを聞いた戌子ははっと周りを見渡す。明らかの先ほどとは違う顔つきとなっている。明らか敵意をむき出しにしている戦士の姿。

「来てくれたんやな・・・」

「一体何が・・・??」

喜びに満ちた少年の顔。

すると花畑が真っ黒な闇に覆われた。

そして三人の目の前に現れたのは。

「きょ・・・教会??」

鐘が鳴り響く真っ黒な教会だった。

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　５（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　４

目の前には大きな漆黒の教会が現れた。それには見覚えがある。どこか遠い過去に見た記憶がうっすらと。しかしはっきりと覚えていること。それが現れたということはやつもいるということだった。

「浸父・・・」

そうつぶやき、唇をかみ締める。倒れていた少年が立ち上がり、教会へと走り出す。

「待ちたまえー！！」

戌子もそれを追って中にはいる。

「おい、待てよ！！」

慌てて佑介もその後を追ってはいる。中は真っ暗で何も見えなかった。中には佑介と戌子の２人しかいなかった。そして二人の目の前にはローブを着た人物がいた。真っ黒なローブ。先ほどの少年が身に付けていたものと同じものだった。

『我が子よ・・・こうして会えるとはまた何たる偶然よ・・・』

低い男の声だった。しかしどこかで聞いた声に近いものでもあった。

「なぜ生きてるのか不思議だねー。勘違いだったけど、先ほどの少年と戦ったときもおまえの気配を感じたときは疑問に思ってたよ」

戌子は淡々としゃべる。しかし佑介はなぜ生きているのが不思議だというのかが理解できなかった。

「おまえはボクの同僚に殲滅されたはずだけど」

『あのアリア・ヴァレイの子供のことか。我は本体を明かさぬ存在。やつが殲滅したのは我の欠片』

「そういうことか・・・。ということはこの世界にはまだまだおまえの欠片が多く存在しているのか??」

『そうなるだろう我が子よ』

「おまえの子供成り下がった気はない！！」

一気に叩き込みに走る戌子。しかしその前にローブ下からは芋虫み

たいな虫が大量に戌子に襲い掛かる。
「伏せろ!!」
そう叫ぶ佑介は瞬間的に銃を発砲する。戌子は地面に身をかがめると、その頭上を漆黒の弾丸が飛んで行き、芋虫を粉々に砕いていく。そしてわずかにできた隙間を通り、浸父に向かって叩き込む。しかしそれをあざ笑うかのように交わす。追撃を虫でガードする浸父。反撃を試みようとするもその虫を佑介が後方射撃で撃退する。戌子は後ろを気にせずに前へ前へと進撃する。
『我が子よ・・・貴様に絶望を・・・』
「ふざけるな!!」
そう叫ぶと一気に叩き込む。しかしその渾身の一撃は何かの手によって阻まれていた。戌子のスティックを誰かが防いでたのだった。その人物は戌子も知っている黒いコートとゴーグルを身につけていた。
髪は立てられており、特徴としては頬の絆創膏であろうか。手には拳銃と同化した緑色の虫・・・かっこう虫がいた。戌子の前にいたのはかつて背中を預けあった少年。戌子が最強の戦士として尊敬する少年だった。その少年を佑介も知っていた。少年は前の戦いで茜の虫を殺し、欠落者にしたのだから。その時はあまりの力の差に戦うことはできなかったが今はそんな彼に対する恐怖はなかった。そして2人は同時にその少年の名を言った。
「「かっこう・・・」」

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　４（後書き）

コメント・評価待ってます！！

かっこうが目の前に現れた。体が震える。しかしそれは恐怖ではなかった。また彼と会えたことから・・・彼と戦えることからの武者震いだった。彼と戦う理由があった。なぜあの時茜を欠落者にしたのか。なぜ虫憑きは戦わなければいけないのか。しかし現れたのは彼だけではなかった。かっこうの姿がすぐに消えたのだった。しかし戊子には見えているようだ。そして佑介に見えているのは。

「舞華・・・茜・・・」

かつて彼が愛した少女たちだった。ただぼんやりと彼のことを見つめている。

「なんでおまえたちが・・・」

「佑介・・・」

舞華が佑介に近づく。

「なんで生きてるの・・・？？」

「え・・・」

まさかの言葉だった。確かに自分は一度死んだ。しかし起き上がったときにはすでに虫憑きになっていた。そして舞華から自分との記憶が抜けていることから舞華が虫憑きだったということが分かった。しかし今なぜ自分のことを覚えているのだろうか。まったく理解できなかった。そしてさらに茜も一歩前に出る。

「佑介・・・」

その声はひどく冷たいものだった。そしてその声でいわれた言葉もそうだった。

「なんで助けてくれなかったの・・・」

「ああ・・・ぁぁああ・・・」

思わず後ずさりしてしまう。しかしその後を虚ろな瞳でしたから覗き込んでくる２人。じりじりと近づいてくる。

「なんで生きてるの・・・」

「なんで助けてくれなかったの・・・」
「なんで・・・」
「なんで・・・」
とうとう壁まで追い詰められた。顔面蒼白で二人を見つめる佑介。
「俺は2人の笑顔を守れなかった・・・。俺は2人との約束を守れなかった・・・。俺は2人を殺したも同然だ・・・。俺が責められるのは当然だ・・・。すまなかった!!俺のせいだ!!全部俺のせいなんだ!!」
二人に向かって絶叫する。許してくれと懇願する。
もはやそこにはただ過去の失敗を責められ崩れ落ち、小さくなった青年がいるだけだった。

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　６（後書き）

コメント・評価待ってます！！

後ろからは佑介がなにやら絶叫している声が聞こえてきた。
しかし今はそれにかまっている暇はなかった。
浸父を守るかのように自分の前に立つのがかっこうだからだった。
「これで僕に絶望を与えようってのかー??」
『我が子よ・・・貴様に絶望を・・・。アリア・ヴァレイの子はすでに落ちた・・・』
アリア。ヴァレイの子・・・それが佑介のことを示していることを戌子は察知していた。
「彼を甘く見ないでくれたまえー」
戌子はスティックを肩に抱えて言う。
「そしてボクの前にかっこうが現れたことに理由は簡単さ。僕が望んでいることに便乗したのだろう??それを根こそぎぶっ壊そうと」
『この中では貴様らの・・・心が我には見える』
『誰が・・・何を望み・・・何を欲し・・・そして何に恐怖するのか』
「僕にとってはかっこうで、彼にとっては・・・なんなんだろうね」
何もない空間に向かって必死に謝り続ける佑介。
完全に術中にはまりつつあった。
「かっこう・・・君の視界にぼくがいるかは分からない・・・」
目の前のかっこうは何も言わない。
ただ戌子を見つめているだけだ。
「戦闘部隊からはずされ・・・そこから官位をずるずると下げられた僕が君の視界に入ってるかは分からない・・・」
そして戌子もまた笑顔でかっこうを見つめながら言う。
「ボクはただ君の背中の後ろで・・・一緒に戦っていたかったんだ。最強の戦士の背中を守れる相棒として・・・」
するとかっこうの姿がぼんやりとしてきた。

それと同時に神父が苦々しげに言ってくる。
『我が子よ・・・なぜ平然としていられる・・・』
『我が子の畏怖する・・・対象が現れたはずだ』
「かっこうはボクにとって畏怖する対象でなく、尊敬する対象なのだー」
完全にかっこうがいなくなったことを見計らって戌子は叫ぶ。
「こらーこんなところでおびえていたら彼女たちに申し訳が立たないのではないかー」
それを聞き取ったのかおびえながらも顔を上げる佑介。
「い・・・いぬこぉ・・・」
涙でぐちゃぐちゃとなった顔。
戦士の姿ではなかった。
しかし瞳はまだ死んではいなかった。
申し訳なさの反対の次こそはという覚悟。
それだけはまだ死んではいなかった。
「戦え!!」
戌子が叫ぶ。
「怖いか??悲しいか??辛いか??逃げたいか??」
佑介に向かって叫ぶ。
「だったら戦え!!戦って戦って戦い抜くのだー」
激を飛ばし続ける。
「立ちたまえー。そしてこれからはじめるぞー」
よろよろと立ち上がる佑介は怪訝そうな顔。
「一体・・・何を??」
にやりと笑って戌子は口を開いた。
もう自分がここにい続けるわけには行かない。
素質がある彼を今すぐにでも戦士として独り立ちさせなければいけないと思っていた。
いつもなら地獄の特訓を続けなければいけないが、今日の戦闘でまた新たな力を得ることができたことで上出来と思っていた。

そしてこれから行われるのは自分が言い渡す最後の指令だった。

「佑介！！最終試験を行う！！」

教会の鐘が鳴り響いた・・・。

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　５（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　７

最終試験を言い渡された佑介は唖然としていた。
特訓開始初日から最終試験である。
こんなことがあっていいはずがないと思った。
反論しようとも思った。
しかし戌子の瞳は本気だった。
佑介に有無を言わせぬ強さを持っていた。
それだけ多くの修羅場を潜り抜けてきたのだろう。
「わかった・・・」
よろよろと歩き出す。
目の前にはまだ2人の姿があった。
先ほどとかわらずに佑介を見ていた。
目を背けたかったが必死で見つめ返した。
「ごめんといっても許されることじゃないかもしれないけど・・・」
佑介は今度ははっきりとした意志で言う。
「次こそは叶えてみせる!!“大切な人の笑顔を守る”という俺の夢を!!」
すると2人の姿が薄くなってきたのだ。
徐々に消えていく二人。
ただそれを見つめているしかできなかった。
そして最後の二人は笑っていた。
あのときの笑顔でいてくれたのだ。
分離していた漆黒の虫が再び佑介の右腕と同化する。
持っていた拳銃を飲み込み、同化して巨大な大砲と化する。
そして戌子の前に近づいた。
「この戦いで君に判定を下す・・・。まあ、頑張りたまえ」
そういうと戌子は後ろに下がったのだ。
無言の戌子から、これは君一人で倒したまえとむちゃくちゃな注文

を感じ取っていた。
しかしこれから強くなるにはそうでなければいけないとも感じていた。
「遅くなったな・・・浸父」
『アリア・ヴァレイの子か・・・』
「俺が誰の子かは関係ないが・・・」
ゆっくりと顔を上げ、浸父を視界に入れる。
「はじめようぜ・・・最終試験!!」
漆黒の虫の口の中にはすでに大きな力が溜め込まれていた。

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　７（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　８（前書き）

今回はかなり長くなりました。
もうあとの２巻の書きだめができているのでほかの開始しようかと迷ってますが、まずはこの作品を完結させることにします。
では続きをどうぞ！！

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　８

ドゴオォォォンっという大きな音が響き渡る。
それの後にびちびちという嫌な音が前のほうで聞こえた。
あたりには虫たちの残骸が散らばっていた。
奇襲としてはなった一撃を予感していたかのように浸父は虫を使ってガードしたのだった。
しかしすべてを防ぎきれなかったようで、ローブが衝撃波で千切れていた。
「はぁぁぁ！！」
さらに連続で弾丸を放つ。
それを虫で防ぎながら反撃してくる。
フリーである左からの攻撃は交わすことしかできず、なかなか近づくことができない。
「ぐあ！！」
芋虫の牙が佑介の左肩に食い込む。
それに連動して体当たりを繰り出したり、背中に牙をつきたててきた。
激しい痛みに耐えつつ、それらを強化された腕力で叩き殺す。
背中と左肩から赤い血が流れていた。
深くはないが背中をやられたのは痛い。
さらに左からの攻撃をかわすのには限界があったのだ。
しかし浸父は待ってくれない。
一気に片をつけようと虫たちが襲い掛かる。
「ぐあああぁぁぁ！！」
悲鳴のような叫びを出しながら力を込める。
「くううう！！」
それと同時に激しいめまいも佑介を襲う。
しかし何とか耐え、それを放ち虫たちを撃退する。

煙の奥から攻撃してきた虫たちを跳躍してかわす。
「左にも武器があれば・・・」
歯噛みしていると後ろから戊子の檄が飛ぶ。
「悩むよりだったらやってみればいいじゃないかー」
それを聞き無言であたりに落ちていた棒を拾う。
力を込めると再び違和感に襲われる。
しかしそれと同時に左手に握られていた棒がいつものように漆黒のロッドとなったのだ。
それをしっかりと握り締め、再び突撃を開始する。
『おろかな・・・。みすみす殺されにはいってくるか・・・アリアの子よ』
「俺が死ぬんじゃねえ!!おまえが死ぬんだ!!浸父!!」
そう言って前方の虫を銃で破壊し、左から来る虫にはロッドでなぎ払い、打ち砕く。
「はあぁぁぁぁ!!」
再び力を込める。
そして違和感を覚え、銃口の中から大きな砲撃が放たれる。
それは一気に虫たちを破壊し、浸父を飲み込む。
大きな爆発音とともに蔓延する煙。
どうやら教会の後ろはほとんど破壊されたようだった。
そして破壊された教会の瓦礫からむくりと起き上がる浸父。
ふらふらであることから限界が近いことを察知した。
「これで終わりだ!!」
そう叫ぶとロッドをやりのように投擲した。
矢のように飛ぶロッドはまっすぐに浸父の胸に突き刺さった。
『我が子よ・・・これは我の欠片に過ぎない』
『我を殲滅など・・・夢のまた夢・・・』
『我はまた多くの絶望を与え続け、喰らい続ける』
『我が子よ・・・』
しかし途中で言葉が切られる。

それと同時に再び砲撃が飛ぶ。
浸父の体の半分が吹き飛ぶ。
虫の顎からは煙が出ている。
いつの間にか神父の目の前に佑介が立っていた。
「殲滅が夢だと・・・??」
ゆっくりと顔に向けて銃口を突きつける。
「俺がおまえを殲滅してやるよ・・・その始まりの3匹とやら全部を含めてやってもいい」
『愚かな者よ・・・』
「俺はおろかさ・・・。まだ誰の笑顔も守れないやつだからな・・・」
自嘲しながら話す。
「でも俺は誓ったんだ・・・“大切な人の笑顔を守る”ってな。だからそれを邪魔するおまえらを絶対に殲滅してやる」
そう言って佑介は弾丸を放つ。
爆発とともに、神父の体は跡形もなく消えうせた。
それと同時に教会にひびが入り始めたのだ。
「いったん引き上げだー」
後ろで見ていた戌子が一足先に外へと避難していた。
「ちょっと待てよ戌子―!!」
佑介は急いで外へと駆け出す。間一髪で崩れに巻き込まれることはなかった。肩で息をする佑介。激しい戦闘の後に全力疾走、さらに虫の力を使いすぎたのだった。そんな疲弊しきった佑介の前に戌子が立った。
「何だ・・・戌子??」
にっこりと笑った戌子は佑介に向かって宣告した。
「最終試験、対象者相場佑介、合格!!」
それは佑介がようやく戦士としてのスタートに立ったことと戌子との別れを意味していた。
「戌子・・・ありがとう」

それを感じていた佑介はただ感謝するしかなかった。

夢導く戦士　佑介　ＰＡＲＴ　８（後書き）

コメント・評価、ドンドンお願いします！！

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　９（前書き）

いよいよこの巻も完結です。
たくさんのコメントをいただけると嬉しいです。
それでは本編をどうぞ！！

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　９

浸父の欠片殲滅と佑介の試験合格から一夜明けた今日。２人は宿を後にしていた。現在は蒼陽駅に来ている。佑介はこのまま電車で移動することとなっていた。まだ向かう先は決めていないが。そして荷物を地面に置いた佑介の前にはベスパに乗った獅子堂戌子の姿があった。あったときと同じ奇妙な格好をしているが、そこはあえて突っ込まないでおいた。

「これから戌子はどこに行くつもりなんだ??」

「隣街のホラント市というところに行って見ようと思うよー。あそこは海があるからねー」

「ということはここでお別れだな」

「そうだねー。君はまだ戦士としての道を歩み始めたばかりなのだから気を緩めるではないぞー」

「分かったよ」

ベスパにエンジンがかかる。そして始発時間が近くなったことを知らせる音楽が鳴る。

「忘れるなー。どんなことがあっても敵には消して背は見せずに」

「戦え!!っだろ??忘れないよ」

「それならいいのだー」

名残惜しいが話を続けていれば時間がいくらあっても限がなさそうだった。

「君という戦士がこれから訪れるだろう大きな戦いで成果を残してくれればボクは嬉しい限りだ」

「わかったよ・・・頑張って始まりの３匹を殲滅してみせる」

「僕が特環だったことを話せずじまいだったね」

「あいつを許すつもりはないが、一発分殴ることで我慢してやるさ・・・。本当はそんなことで気が晴れるわけないけど」

「君なら彼が何と戦っているのかが分かるかもしれないなー」

「何かと??始まりの3匹とかじゃないのか??」
「それは君自身が見つけたまえー。それじゃあまたいつか」
そういうとアクセル全快で戌子は去っていった。
「分かった・・・おれ自身の力で見つけてみるよ・・・」
そして佑介は乗るはずである電車に乗り込んだ。彼のたびはまだ始まったばかりである。戦士としてのたびもここから始まる。電車が戦士を乗せて次の戦地へと誘う。そしてこれが獅子堂戌子と相場佑介が会った最後だった。その頃獅子堂戌子はホラント市に向かって走っていた。
「潮のいい香りがしてきたよー」
それと裏腹にベスパの燃料はすっからかんであった。
「あっちゃー佑介に頼んで入れてもらえばよかったかなー」
時間がなかったためにスタンドによってなかったのだ。
「まあ、スタンドが小さく見えるからあそこまでなら大丈夫だろう」
そう言ってベスパに鞭打つ。
獅子堂戌子のスカウトの旅。
蒼陽市編終了。
ホラント市編開始。
「戦いがボクを呼んでいる」
獅子堂戌子を乗せたベスパが今日も行きのいい戦士の卵を求めて走り続けている。

（完）

夢導く戦士　戌子　ＰＡＲＴ　９（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　プロローグ（前書き）

第7巻が始まります。
新しいキャラも登場します（キャラ崩壊大丈夫かな?:?）。
そんなわけでコメント待ってます!:!

夢集う遊覧船　プロローグ

青い海、蒼い空、白い雲。目の前には無限に広がる蒼い海と空があった。潮の香りを風が運んできて、鼻腔をくすぐる。きれいな砂はまだというのに誰一人いない。どかっと腰を下ろしてリュックを下におく。ちょうど流れ着いた丸太があったのでそれに座っている。あの日の戦いからもう1ヶ月が経っていた。転々と街を旅してまわったが有力な情報はなかった。しかし昨日到着したこの街で面白いものを見つけた。

『便利屋“きらり☆”』

そこであった少女五十里野きらり。彼女への相談で何とかうまくいきそうだった。

『虫憑きの最近の事件を調べて欲しい。そして特環かむしばねがどこにいるのか知っているなら教えてほしい』

そういう注文だった。前者さえできてくれればそれでいいともいってておいた。後者もコンプリートしてくれれば万歳者だが。

「しかしどこにいるんだろうね・・・むしばね」

ため息をつく佑介。きらりに場所を教えてもらい、さあそこへ向かおうと思った矢先にきらりの友達だというやつに強引に連れてこられたのだった。

「あのやろう・・・到着早々どっかへ行きやがって・・・」

車でここまで送ってもらったのはよかったが投げ捨てられて、本人はどこかへ消えてしまったのだ。

「金持ちだからってこんな扱いはよして欲しいもんだぜ・・・」

赤瀬川七那・・・それが佑介をここまで運んできた少女の名前。どうやらむしばねとの関係を持つ少女らしく、定期的に会っているようだった。金持ちだからスポンサーかとも思っていた。波が来るか来ないかぎりぎりのところに立ち、砂に木の棒で文字を書く。

「コアトル・コアトル・パラ・エミレ」

きらりとあったときに広めてほしいといわれたものだった。これが大好きだったなき友達が居るそうだ。その子も虫憑きとなり、大好きな人と一緒に死んだということだ。聞いたときにはなんて悲しい結末だと思った。しかしきらりは彼女たちは幸せだったといった。悲しみ以上の幸せ。彼らは夢を叶えたのだ。

「俺も叶えなきゃな・・・」

あの戦いのときに再び宣言した自分の夢。

“大切な人の笑顔を守る”

その夢を叶えるために獅子堂戌子という特環の局員に鍛えてもらった。あっという間だったが以前よりも強くなれた気がしていた。波が強く押してきて、書いた文字を消していった。それでもまた書く。そして波に消される。それを何度か繰り返していると後ろから男の声がした。

「あんたが客人か??」

振り向くとそこには1人の少年が立っていた。髪を上に立てている少年。

「そうだけど・・・君は??」

「むしばねに所属するものだ。まあ、アイジスパとでも呼んでくれ」

アイジスパという少年はどうやら使いとしてきてくれたようだった。しかしめんどくさそうにしていることから無理矢理いってこいといわれたのだろう。

「俺は相場佑介って言うんだ。よろしく」

手を出して握手しようとしたが、背を向けられた。

「行くぞ・・・スノウが待っている」

「分かった・・・」

佑介はアイジスパについていき、森の中へと消えていった。

夢集う遊覧船　プロローグ（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　０

森の奥にある山小屋の中に、虫憑き立ちの集まった組織が隠れていた。彼らはむしばねと呼ばれるもので、虫ちきたちの居場所を作ろうとレジスタンスとして虫憑き立ちを捕まえていく特環と争っていた。

この組織のリーダーであるのはスノウ・フライという人物である。その人物というのはまだ見るからに中学生ではないかと思えるくらいの少女だった。

彼女の名前は杏本詩歌。分離型の虫憑きであり、秘種１号指定をされている最強クラスの虫憑きである。彼女がここまで強いと見られるのはかつて彼女が始めて虫憑きとなったとき、殲滅しようとした特環を半壊状態へと追い詰めたためだった。

しかしそんな彼女は自身の虫に夢を食い尽くされそうだったためにもはや抗う力はかつてなかった。そしてそんな彼女の前に現れた特環局員。それは少年だった。どこにでもいるような感じの少年で、しかし詩歌はなぜかその少年が自分と似ていると感じた。

「だれ・・・？？」

もはやいつ夢を食い尽くされてもおかしくない状態だった。ひどく弱りきっていて、抗う力はもう残されていなかった。

「かっこう」

少年はそうただ機械的に言ってきた。すると少年は唐突に尋ねてきたのだ。

「お前の夢は何だ？？」

これから殺されるのだと思っていた矢先のことだった。あっけにとられてしまったが、素直に答えが出てきた。

「私がいていい場所が欲しい」

これは心の奥底から言った答えだった。自分には自慢の姉がいて、周りからいつもちやほやされていた。両親もそんな姉に詩歌よりも

期待を寄せていた。自分はおまけだったのだ。
しかしそんな姉は詩歌を妹として本当に優しくしてくれたのだ。
そんな時詩歌は本当に嬉しかった。たくさんの思いだがある。
そんな詩歌が虫憑きとなり、迫り来るトラックから友達を守ろうと虫を出してしまったところから彼女の人生は変わってしまったのだった。否虫憑きとなったときから変わってしまっていたのだ。
そして少年と会った。吹き荒れる吹雪の中、ほかの局員たちは耐えられずに退避するか、無謀に突っ込んで欠落者となったこの死の空間を立った1人で歩いてきたのだ。
そして詩歌の答えを聞いた少年が一瞬びくりと反応すると口を開いた。
「俺の夢と似てるな・・・」
「そうなの??」
「ああ・・・」
少年の夢もまた自分の居場所が欲しいというものだった。彼にどんな過去があるのか分からない。しかし彼と自分は似ていると感じた。しかし自分はもう限界だった。だったら食い尽くされる前にするべきこと。
すっと詩歌は少年に向かって自身の虫である真っ白い蛍を差し出した。
「だったら私の夢もあげるね。私はもうだめだから・・・。私の夢もあなたの夢の傍においてあげて」
少年は呆気にとられていたが、しかし決心したかのように頷いた。
「分かった。俺はあきらめない。だから・・・」
一瞬ためを作って少年は言った。
「だからお前はまた夢を思い出せよ」
少年が笑っているように見えた、蛍に向かって自動式拳銃を向ける。手が震えていた。少年も怖いのだと思った。しかし少年の肩に止まっていた緑色の虫が拳銃の銃口に止まり、どうかをはじめる。
引き金が引かれ銃口から緑色の弾丸が放たれ、白い蛍は木っ端微塵

に砕けた。その瞬間詩歌は何も考えられなくなり、視界が真っ暗となった。

「スノウ。別の客人だ。七那が連れてきたっていうやつだ」

「どうぞ」

そう言って中に入ってきたのは髪が肩より伸ばされ、ワックスでいじられた髪を持つ青年だった。顔は整っているが目つきが鋭かった。

「君がスノウ・フライと言うの??」

青年が詩歌に近づいてきた。するとすっと手を出して。

「俺は相場佑介というものだ。まあ、虫憑きだ」

にっこりと笑いながら青年は詩歌に握手を求めてきたのだ。

「今日が佑介さん。私がむしばねのリーダーをさせていただいてますスノウ・フライと言います」

「これはご丁寧にありがとう」

詩歌と佑介はがっちりと握手を交わした。

「それでお前はなぜここに来た??」

突然となりに立って待機していた少年アイジスパが佑介に訪ねてきた。振り向き、口を開く。

「そうだね・・・簡単に言うと虫憑きについて調べていたらいろんな単語に行き着いてね、その1つのむしばねというのがどういうものか知りたくなったから来た」

青年は真剣な眼をして言う。

「俺は始まりの3匹を殲滅するために・・・そして自分の夢を叶えるためにひとり旅をしている」

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　０

佑介がここにくることになったきっかけはとある少女との出会いだった。獅子堂戌子と別れてから佑介は電車でいくつもの駅を越えて旅を続けていた。降りた町で何とか虫憑きについての情報が欲しいと色々歩いているととある張り紙に目が言ったのだ。

『便利屋きらり　悩み事などを承ります』

それだけなら利用しなかっただろう。しかし次の文章・・・小さかったが確かに書かれていたのだ。

「虫憑きに関することも承っています・・・だってえええぇぇぇ！？」

思わず叫んでしまう。運よく周りには時間帯もあってか人が少なかった。しかし思わぬ収穫である。まさかこんな平和な街に虫憑きがいるなんて思えなかった。でも場所を選ばずにでてくるからみなから恐れられているのだろうと思った。髪にはその便利屋までの地図も書かれていたために形態で検索し、それにしたがって移動した。しばらく歩くと小さな事務所みたいなものが見えてきた。看板には確かに『便利屋きらり』と書かれていた。戸をあけると中はきれいに清掃されて真っ白な空間となっていた。しんとしていて人がいるとは思えなかった。すると後ろから人の気配がした。振り向くとそこにはなぜか。

「ナース？？」

「はい？？」

そこにはナース服を着た少女がいたのだ。身長差は２０センチくらいあるためか少女は下から見上げる状態だった。ここは虫憑きのことも扱っていると聞いたというと少女は首肯する。

「あなたは虫憑きですか？？」

「まあね、ちょっといろいろ事情があって今は一人旅中なんだ」

「そうですか。まずは中に入ってから聞きましょう」

そういわれて２人は中へと入っていく。ソファーに座った佑介の前

にはお茶とお菓子が置かれた。少女も佑介の前に座りまずは自己紹介をしてきた。

「私の名前は五十里野きらりと申します。このように便利屋きらりを営んでおります」

簡単な自己紹介、佑介もまた自分の名前と自身が虫憑きであることを告げた。しかし少女・・・きらりはまったく驚くこともなかった。その理由を聞くとなんでも自分の前にも虫憑きとしてここにきた少年がいたそうだ。それにアルバイトをしていた少女もまた虫憑きだったらしい。しかしその二人はもういなく、今は一人で切り盛りしているようだ。

「それで今回はどのようなご用件で??」

「虫憑きに関してもっと知識が欲しい。それとできれば特環、もしくはむしばねの居場所を教えて欲しい」

「分かりました、それでは期限はどうしますか??」

「それは終わってから連絡をもらえればいいよ。これ俺の番号だから」

そう言って佑介は紙をすっときらりに渡す。

「分かりました。それでは完了しだい連絡させてもらいますね」

「それはそうと支払いは終わってからなの??」

「御代は要りません・・・ただこの言葉をもっと広めてあげてください。友達がよく言っていました言葉なので」

そう言ってきらりは佑介にその言葉を告げる。佑介はその後事務所を出て街へと入っていく。

「コアトル・コアトル・パラ・エミレ・・・か」

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

「まったくこの前は飛んだ失態だったわね」
「仕方あらへんやん。あいつら相当のうでやったで??おかげで腕1本いかれてもうたで」
隆俊が動かなくなった左腕をさす。ここはとあるレストランの一角を4人の少年少女たちが陣取っていた。テーブルの上にはそれぞれの飲み物が入ったコップが置いており、その一箇所には山のようなパフェの容器が置かれていた。商品を持ってくるウェートレスは困惑顔。それを見ているほかの客もあんぐりとそれをカッ食らっている少女を見ている。そんな四方八方からの視線をものともせずに食べ続ける少女。そんな少女にあきれたのか隆俊が話しかける。
「あんま食いすぎんといてや。太るで??」
「はぅ、それはあんまりですぅ。でも私って食べても太らない体質らしくって」
「それはまったく栄養になっておらんちゅうことやな」
じろじろと体を眺める隆俊。恥ずかしそうに体をよじって隠そうとする玲奈。
「あんまりいじめてくれるなよ隆俊。これからもっと虫憑きを生み出してもらわなきゃいけないんだから。玲奈は分離型には欠かせないんだ」
「いくら大喰いとつながっているからってあんまり玲奈に無理はさせられないわ」
「それは分かってるさ。きつくなったらそれまでって言うことだね」
「それは使い捨てってこと??」
「虫憑きを生み出せなくても護衛としてつけることはできるさ。間、彼女にその気があればだけど」
悪魔の笑みを絶やさない涼平。それを苦々しげに見る紅音。その話が聞こえていなかったのか玲奈はひたすらパフェを食べているし、

黙っている隆俊はそれを聞いていたものの興味はないようだった。
彼らは創虫会。虫憑きを生み出す始まりの3匹の媒介役として己の体を提供している。つまり彼らの体をそこにいなくても始まりの3匹の意識と能力を発揮することができるのだ。そのため彼らには強力な力がある分、それだけ夢を喰われる早さも尋常ではなかった。しかし彼らにもそれぞれ抱いている夢がある。その夢のためなら何でもするという並々ならぬ覚悟彼らに力を与えたのだ。以前の蒼陽市では2人の虫憑きによって隆俊が大きなダメージを受けた。浸父がじきじきに出てきたものの、腕一本奪われた挙句に、意識を吹き飛ばされたのだった。そんな結果をある程度は予測していたが完敗ということは予測できなかった。そのためまた多くの虫憑きを生み出すべく、彼らがいないこの場所に移動してきたわけだった。
「まず今やることはわかってるよね」
涼平が隆俊について濃いと目で言うと残った2人に紙を渡す。
「僕らは今からむしばねに直接あってくるよ。彼らに生み出した虫憑きたちを保護してもらえれば助かるからね」
「あら、以前レイディーに言ったときは軽くあしらわれたじゃない。それでもまた??」
「ああ、それでもまた・・・さ」
お代を置いて外に出て行った。

夢集う遊覧船　ＴＨＥ　ＯＴＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　１

きらりと接触してから1週間が過ぎた。
まだ難航しているようでもう少し待って欲しいといわれた。
佑介自身まだこの街に用があったので気長に待っているといっておいた。
そんな佑介が来ているのはすでに破壊された跡と化した発電所だった。
なんでもここで激しく戦闘があったようだ。そのことをきらりに聞くと涙ながらに語ってくれた。自分の仕事を手伝ってくれていた少女と自分が世話していた少年が戦ったのだと。そしてその戦いは引き分けだったらしく、その少年たちは力尽きて死んでしまったらしい。しかし生き残った少年は再び戦いの地へと帰っていったのだとか。
しかし少年は死んだのに少年は帰っていったというのが理解できなかった。
そのことを詳しく知ろうとするも少年から口止めされているようでこれ以上はいえないだそうだ。仕方ないのであきらめることにした。
所々大きな穴が開いている。そして真っ二つになっている発電所。
よほどの力が使われたのだろう。
肩に止まった漆黒の虫がぶるりと震えた。それほど強い虫憑きがいたのだ。あたりを散策してみたものの、虫憑きに関するものはこれといって何もなかった。
致し方ないと思い帰宅の途につく。今彼が泊まっているのは小さな旅館だった。格安であるためにいくら泊まっても金には困らなかった。
　翌朝携帯にきらりからの連絡が入っていた。どうやらむしばねたちの足取りをつかんだそうだ。急いで着替えを済ませて便利屋きらりへと足を運ぶ。

すると事務所の前に立派な車が止められていた。まったくどこの金持ちだと思っていると事務所の中からきらりともう一人の少女が出てきた。いかにも金持ちだという服装。
「やは。こいつがきらり、あなたに相談したって言う虫憑き??」
「うん。七那だったらむしばねがどこにいるか分かるかもって思ったから連絡したんだけど」
「まあね。私はあいつらのスポンサーみたいなものだからね」
くるくると日傘を回しながらしゃべる少女。佑介が近づき紹介を受けるときらりの知り合いらしく、あの赤瀬川グループの社長だということを知った。そんな彼女によると彼女はむしばねとつながりがあり、今日も定期的な会合に行くということだった。そういうことで佑介もついていくことを打診した。
「あなた・・・特環関係かしら??」
まさか・・・という顔をした。
自分は虫憑きになってから特環から逃げている身である。
ここまで来るまでに何度も戦って、逃げてきたのだ。
蒼陽市では獅子堂戌子という特環関係者から鍛えられたが・・・。
しかしそのことだけは控えておいた。後々面倒なことになりそうだからだった。
「違う・・・といっても信じてもらえるとは思っていない。しかし、俺はむしばねにあって今起こっていることを知らなければいけない。自分が虫憑きであること意外は素人同然なんだ」
「やは!!だから虫憑きを保護するむしばねに以降っていう考えってわけ??」
「そういうことだ。だからこのとおりだ。俺をそこに案内してくれないか!!」
頭を下げてお願いした。
こんなときは自分が年上で彼女が年下ということはまったく関係なかった。
ただどんな手を使ってでも知りたいことを知ろうとする。ただそれ

だけだった。
いきなりのことにきらりも七那も驚きを隠せなかった。しかし佑介の覚悟を感じたのか仕方がないという顔をして了承した。その代わりの条件もつけて。
「条件??」
「そう条件。今から言う条件を必ず満たすの」
「分かった。ならその条件とやらは??」
彼女の指定した条件は以下のものだった。彼女とむしばねたちが参加する豪華客船でのパーティーに自分のボディーガードをするというものだった。
いつ虫が現れたり特環が現れたりするかもしれないし、さらに彼女は虫憑き出はないために護衛が必要だった。それぐらいならできると踏み了承を示した。
にやりと笑う七那は自身の乗ってきた車に乗るように催促した。どうやらもう時間が迫っているらしかった。
「それじゃあ色々とありがとうな、きらり」
自身は行かないことを伝えてきたきらり。そんな彼女に感謝する佑介。彼女はただ笑顔で頑張ってくださいといってくれた。そして彼女にお返しできるのはただある言葉を広めることだけだった。
「コアトル・コアトル・パラ・エミレ」
きらりと佑介の言葉が重なった。その瞬間にアクセル前回で車が発進した。すぐにきらりの姿は小さくなっていった。

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価お待ちしております！！

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　１

目の前にいる青年は自分よりも年上である。
その瞳には力強さがあった。
そんなことを詩歌は佑介から感じ取っていた。
まだ回りは警戒しているようだが詩歌はすでに警戒を解いていた。
彼は敵ではないと。
「それにしても今度のその海上パーティーというのには出るのか？？スノウ」
アイジスパが壁に寄りかかった状態でたずねる。
彼も詩歌が佑介のことを警戒していないと踏んで口を開いたのだった。
「あんまり目立ちたくないわね」
なみえは反対の意見を持っていた。詩歌のよき理解者であり、詩歌と並んでむしばねの中でも強さは上のほうだった。
もと特環ということで彼らが現れないとも限らないことを踏んでいたのだ。
しかしなぜむしばねの皆が行くか行かないかで迷っているのかには理由があった。
つい前に手紙が置かれていたのだった。
その中には人数分のチケットが同封されており、中には手紙もあった。差出人の名前というよりは組織名が書かれていた。
特環でもむしばねでもない。
第３勢力からの手紙だった。
「その創虫会・・・て言うのか？？俺達と手を組みたいって言うやつら」
「創虫会だって！？」
突然佑介が叫ぶ。それに誰もが驚いた。一番驚いたのは目の前に座っていた詩歌だった。

「どうしたんですか??佑介さん??」
創虫会・・・その言葉を聞いて一気にあのときの記憶が蘇る。
あれは獅子堂戌子との訓練が終わってから旅館に泊まったときのことだった。
突然の襲撃だった。
何とか撃退したがその時知ったのは彼らが始まりの3匹と関係を持っているということだった。
「まさか・・・創虫会について何か知ってるの??」
恐る恐る聞いてくるなみえ。
それにただ機械的に頷くしかなかった。
それを見たむしばねたちはざわっとざわめいた。
そしてアイジスパが佑介の胸倉をつかんで。
「言え。おまえが知っていることを・・・ここで洗いざらいはくんだ」
突然の行動に慌てる詩歌と叫ぶなみえ。しかし彼には聞こえていなかった。
危険因子がむしばねに入り込んだのなら彼が皆を守るしかなかった。
だからこのような行動にでたのだった。
「俺は・・・創虫会のやつと戦闘を行った」
「なんだと・・・」
「奴らは始まりの3匹とのつながりがある」
「な!?」
その言葉が一番衝撃的だったようだ。
アイジスパが思わず手を離してしまった。
それほかのものも同じであった。話されたところで襟首を直し、話を続ける。奴らは自分たちとなんら変わらない少年少女だということ。彼らも虫憑きだということ。しかし決定的に違うところは彼らが始まりの3匹の媒介役であるということ。
そんな話聴いたこともないという顔のむしばねたち。
しかし現に見たものが話をしている佑介なのだ。だから信じるかど

うかは彼らしだいだということだった。
「俺は浸父とやらと戦った。なんとも面倒な力を使ってきたから俺は危うく脱落寸前だったけどな」
　あのときは戌子がいてくれたために佑介は脱落することを回避することができた。
浸父が見せた己の中にある恐れ。人の心に漬け込むという浸父らしい戦いだった。
最後は殲滅に成功したが、あのときの違和感がなんだったのかは知らない。
「それでも彼らが接触してくることに変わりはないわけよね」
「スノウ・・・お前はどうしたいんだ??やつらの用意するところにみすみすいくというのか??」
「分かりません・・・。でも彼らがなぜ無視憑きを増やしているのか・・・それだけでも知らなければいけないと思うんです。どうしてみんなに辛い境遇に陥れようとするのか・・・」
なみえアイジスパは詩歌に判断を任せるということだ。
その詩歌も彼らと協力を結ぶかはいざ知らず、なぜ虫憑きをふやすのか・・・それが知りたかった。
「私たちもスノウの意向に従うわ」
「右に同じー。その男の話に信憑性があるかは知らないけどー」
　艶のある黒髪をした少女のハレシンスと場違いなほどに派手なフリルつきの服装とメイクをした少女ルシフェラだった。
彼女たちは佑介を見て言う。
「商売ごとだったら僕に任せてよ。『売り手よし・買い手よし・世間よし』の3方よしで何とかするから」
　金銭的な面を管理している丁屋弐兵衛。
その会場パーティーは七那のように金持ちがおおく集まるものだったのだ。原始の虫憑きを買い取るのに一躍買った彼だから、またなにかのオークションでその手腕を発揮しようとしているのだ。ななの言うには今回は大きなオークションはないということでその力

を発揮する機会はあるかは分からないが。
「それよりもどうするのよ?? あなたたちの動向しだいでは私と彼だけで行くことになるけど」
七那は詩歌の前に座る佑介をさしながら言う。
佑介をここまで連れてくる代わりに護衛としての条件をつけたのだ。
そして決心したのか詩歌は立ち上がる。
彼らに宣言するかのように決断を言う。
「これより私たちむしばねも、その会場パーティーに参加します」
詩歌は創虫会との接触を決めたのだった。

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　２

佑介がむしばねと接触してから数日後、七那の用意した衣装に着替えて送迎用の車に乗って、遊覧船乗り場へと急いだ。
佑介はなぜか白いタキシードをきこんで七那の護衛につくことになった。
ほかのむしばねたちも思い思いに選んだ衣装を着ていた。
女性人はいつもは着れないからか大胆なものを選ぶものがおおく、詩歌はためらっていたが興奮した女性人に捕まって着せ替え人形と化していた。
それを遠めで見ていたアイジスパ。
まったく緊張感をもてないのかと呆れ顔であったがまんざらでもなさそうだった。
参加することになったのは七那の外に佑介・詩歌・なみえ・アイジスパ・弐兵衛・チェーファー・ハレシンス・ルシフェラであった。
弐兵衛などはオークションが今か今かと興奮を押させられていなかった。
車に揺さぶられること小１時間。ようやく港が見えてきた。
皆と近くに車が停車され、降り立つとそこには巨大な遊覧船が停泊していた。それに乗り込んでいくはでスーツを着た人々。どうやら家族ずれが多いらしく、交流パーティーであることが予測された。
「それじゃあこれから乗り込むけど、あんたたちはそっちでやることをしてよね。私はこっちで色々やることがあるから。あと佑介はわたしの傍にいること。分かった？？」
「分かったよ。それが今回の条件だったからな」
「分かってるならいいのよ」
笑顔で言うと歩き始めたので、佑介たちもそれに続いて行く。
創虫会から送られてきた招待状を見せるとすんなりと通してもらうことができた。

階段を上り、乗り込むとそこには広いデッキいっぱいに置かれたテーブル。
そしてその上に置かれたご馳走からデザートの山。最初に乗り込んでいた招待客たちは早速食事を取りながら会話を楽しんでいた。
中には子供もいて好きなものをとっては食べていた。
乗り込んだ七那は後ろの佑介たちに向き直り。
「私はこれから話し合いに参加しなきゃいけないけどあなたたちはここで適当に食事してて。約束の時間まではまだあるんだからね。あと佑介、さっさと来なさい」
「分かってるよ」
引っ張られながらも行ってくると言い残し、引きずられるように連れて行かれる佑介であった。残されたむしばねたち。
詩歌は何をすればいいのか1人あたふたと周りを見ていたが、なみえが取ってきた料理を載せた皿を渡しながら。
「まずは腹ごしらえしましょう?まだ時間はたくさんあるし、あなたの護衛は私たちがするから」
その隣にいるアイジスパも軽めの料理をたしなんでいた。
ほかの3人弐兵衛・ハシレンス・ルシフェラ・チェーファーは皿いっぱいに料理を載せてはがっついているところだった。
日ごろぎりぎりの会計をやりくりしてみなの食事を取れるようにしている弐兵衛。
今日ぐらいは腹いっぱい食べさせてあげたいと思う詩歌だった。
「この料理、持ち帰られるかな?」
なみえに料理の山を指しながら言う。隠れ家で待っているほかの仲間たちにも少しは持っていってあげたいと思ったのだ。
なみえも言うと思ったという顔を作って待っててといい、近くのウェートレスに聞いていた。どうやらいいらしく、容器を用意してもらった。
詩歌は笑顔でその中に次々と詰め込んでいくが、あっという間に山のようになっていた。それにはさすがのなみえもアイジスパも呆気

に取られてしまっていて、詩歌にどうしたのかと聴かれてようやく正気に戻ったくらいだった。
「スノウ・・・？？これは少しとりすぎじゃないかしら」
「えええ？？そうでしょうか？？みんなにたくさん食べてもらいたいと思ってたらこんなになっちゃったんですけど」
「それは別にいいんだがこれを持ち帰るのは少し重労働になるな」
「これをさらに入れるものを貰ってこなきゃね」
「ごめんなさい・・・」
謝りながら瞬としてしまう詩歌。
そんな詩歌を優しく慰めるなみえ。アイジスパに言ってさらに入れる大きな箱を貰ってくるようにした。貰ってきた箱にすべてつめ終わると何とかなったことに満面の笑顔を見せる詩歌とそれを見て安堵するなみえとアイジスパ。
そんな海上を進んでいるこの遊覧船に向かっている数機のヘリがあることをまだ彼らは知らなかった。

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　２（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　２

アイジスパとなみえの計らいで何とか待っている皆へのお土産ができた。そのことで詩歌は嬉しく思っていた。次巻が刻一刻と近づいているために、徐々にみなの顔にも緊張が走り始めていた。周りでは虫に菅家のないものたちがパーティーを謳歌している。潮風が髪をなでる。そしてとうとう時計の針が４と１２を指したときだった。突然証明が薄暗くなったのだ。ざわめく参加者たち。すると一番上のデッキにスポットライトが当てられた。そこにいたのはいかにも司会者ですといわんばかりにビシッと着こなした青年だった。

「皆様、本日はこのパーティーにご参加くださりまことにありがとうございます。私司会者を勤めさせてもらいます沢渡恭平と申すものであります」

どうやら彼が今回のパーティーの主催者であるようだった。見たことはないがこれほどの人を呼ぶことができるのだから相当なお金持ちなのだろうと詩歌は思っていた。しかしこのパーティーのメインイベントがあると七那から聞いてはいたがなんなのかと詩歌自身も楽しみにしている。ほかの仲間も詩歌の近くで待機し、司会者のほうを見ている。以前彼らからの連絡が来る気配はない。

「それでは早速イベント開始です。今回はオークションを行わせていただきます」

「来たよオークション！！」

「弐兵衛！！落ち着きなさい」

オークションだということで興奮した弐兵衛が騒いだことになみえが注意した。しかし弐兵衛の目はらんらんと輝いて、何が商品なのかと楽しみにしている。そして沢渡の後ろから現れた少年少女たち。その間に連れられているのは小学生くらいの男の子だった。

「ご覧ください。この少年は今や日本全国を恐怖のそこに落としております虫憑きといわれる存在です」

その言葉に会場はざわめく。それは恐怖であり興奮でもあった。しかし詩歌たちは違っていた。自分たちと同じ境遇の虫憑きを商品扱いするなんて許せないという怒りだった。そんなしい形を上から見ている少年と目が合った。その少年はにやりと笑いまるでこっちにこいといっているみたいであった。向こうからは七那と佑介が走ってくるのが見えた。佑介の顔は戦士のものとなっていた。

「やは！！何か面白いことになってるってわけでもなさそうね」

ここは空気を読んだ七那。むしばねたちから怒りが感じられたのだ。それは佑介も同じであった。

「スノウ・・・あの４人は創虫会のメンバーだ」

「本当ですか！？」

「あの赤毛のやつの顔を見たときがあるからな。ほかの３人走らないけど」

「ということはあいつらの目的は一体・・・」

「簡単なことだ。あいつらが生み出したんだろうさ、あのガキは」

「おそらくは。そして近くにおいておきわけに行かないからむしばねに明け渡そうという算段。むしばね側には七那の赤瀬川グループがついてるからな」

「やは！！最初からあいつらの手の上で踊ってたってわけね」

七那の言うとおりであるためにアイジスパは歯噛みする。しかしこのままあの少年をほおって置くわけにはいかなかった。このままほかの参加者にわたると何をされるか分からない。

「なんとこの少年の力はこのとおり、今しがたついた傷を瞬間的に治してしまうというものなのです。これは怪我だけでは中内からを使えば病気までも治してしまいます」

その力に興味がわいたのか次々と買い取り値を叫びだす参加者たち。それを見て青年は愉悦の笑み。少年は困惑した顔で青ざめている。自分がこれからどうなってしまうのか分からないという恐怖だ。

「こんなやつらが相手だったら私が簡単に買いとってもいいけど・・・」

七那は詩歌を見る。詩歌は何も言わないが今回は七那の力は借りないと目でいっていた。他のメンバーも同じであった。これは自分たちに突きつけられた挑戦だからだ。
「今回は傍観させてもらうわ」
「ありがとう七那」
「やは！！私は何も感謝されることはしてないわ」
そういうと七那は再び参加者の中に入っていった。佑介も追いかけるようにして走っていった。
「それでは皆さん」
詩歌は仲間に向き直り言う。
「これからあの少年を助けに行きます。力を貸してください」
アイジスパたちは笑顔で頷いた。

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　２（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　３

詩歌たちむしばねは走っていた。
少年がいるデッキには階段を使って上るしかなかった。
彼らが走って向かっている間にもオークションは続けられている。
さすがの弐兵衛もあれに参加することはためらわれた。
今彼らにあるのはあの虫憑きの少年を助けるということだけだった。
しかも能力はここにいるチェーファーと同じ回復系。
彼が特環に捕まえばどれだけ便利もの扱いされるか。それだけは阻止しなければいけないと思っていた。
「ここを上っていけばデッキに着くはずだ」
先頭を走るアイジスパが言う。
後方にはなみえがいて、後ろの警戒に当たっていた。
後ろから折ってくるものたちはいないことから、これも彼らの思惑通りというわけだと詩歌は思った。
一気に上り終えて、デッキへ出る扉をアイジスパがけり開けた。
バアアァァンっという大きな音とともに扉が開けられる。
そこにはまだ観衆のほうを見ている青年と少年。こちらを見ている創虫会の４人がいた。
青年のほうはまったくこちらに興味はないらしい。
「よく来てくれましたね・・・むしばねの皆さん。今日のパーティーは楽しんでいただけていますか??」
「ええ、まあまあってとこかしら。あなたたちがいなければもっと楽しめたかもしれないわね」
「アハハ、それは失礼しました。ところでお話があるのですがよろしいでしょうか??」
「私たちは今その少年を助けに来たんです。お話はまた後でということで」
詩歌たちが創虫会の４人を横を通る。

彼らは何もすることなく彼らを通していった。
青年に近づいたアイジスパは肩に手を置く。
「なんでしょうか??今は忙しいので後にしていただけますか??」
「こいつを放してもらおうか。こいつの力は戦いに利用される」
「これは商品ですよ。勝手に決めないで欲しい。欲しいならばそれなりの額を出してもらわなければいけませんね」
その言葉を聞いてびくっと震える少年。
ニヤニヤと見ている青年。
それを見てアイジスパは怒りに震える。
場是金持ちはこうやって虫憑きを便利なものとしか見ないのだろうかと。
確かに七那も以前はそうだったが今では打ち解けて仲間同士である。
下のほうでは高額な額を叫んでいる。
いい加減に我慢の限界だった。しかしその瞬間少年が。
「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
いきなり悲鳴を上げたのだ。
驚く青年は少年に突き飛ばされて後ろに転ぶ。
一体何が起きているのか理解が追いつかないむしばねたち。
少年の体がいきなり現れた虫によって取り込まれ始める。
「おやおや成虫化ですか??こんなところでされてしまえば甚大な被害が出ること必至ですね」
人事のように言う少年。
完全な成虫かではないものの、これを放って置けば甚大な被害が出るのは間違いなかった。
何人かは見たことがある。
成虫化されればいさえることの困難さが。
最悪全滅する可能性もある。
今は必死に精神を保たせるしかない。皆は虫を出現させ、何とか無視の体力を落とそうと攻撃を始める。しかし少年の無視の攻撃は異常なものだった。

触れるものを以前の姿に戻す・・・つまり木ならそのまま木の板だけに戻してしまう。
時間を逆送させていたのだ。
その光景に冷や汗を流すむしばねたち。
決死の攻撃も尋常ではない回復力でまったく効果がない。詩歌はそんな攻撃を掻い潜って少年の元へと走る。
「この虫かなりやばいんじゃない？？」
白い光線を放たせるなみえが叫ぶ。
同じく攻撃するアイジスパにも焦りが募る。
ただ闇雲に体力と夢を消費するだけである。しかし彼らは今詩歌が少年を説得に言っていることは知っていたし、きっとうまくやると信じているのだ。だから詩歌に被害がいかないように、そして一般の客にいかないように攻撃していた。しかし無視の攻撃がなみえに向かって振り下ろされる。
攻撃を諸共せずに迫る腕。
「逃げろぉ！！なみえ！！」
アイジスパの叫びよりも早い。
迫る虫の腕。しかし突然その虫の腕が木っ端微塵に粉砕された。
何事かと前のほうを見るとデッキの手すりに立つものがいた。
化け物のような腕を持ち、そこには虫の顎の銃口から煙が舞い上がっていた。
夜の月光を浴びるその姿はまるで。
「死神・・・」
死黒虫と同化した佑介がそこに立っていた。

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　３（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　３（前書き）

第８・９巻のタイトルが決定しました。
『夢咆哮す悪魔』・『夢刈り取る死神』です。
いよいよ最終局面に入ってきたこの作品。
最後までお付き合いしていただければ幸いです。
それでは本編をどうぞ！！

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　３

突然の爆発音に反応して上を向くと異様な光景が映し出されていた。
それを見た佑介と七那はただ呆然とするしかなかった。
彼らにとって成虫化は初めてのことだったので何が起こったのか理解するのに遅れたのだ。しかし危険なことが起こっているというのだけはすぐに分かった。
上ではむしばねたちが戦闘を開始していたのだ。自分も虫憑きとしていかなければいけないと直感した。
「七那・・・俺」
「やは！！行きたいの？？でもこれじゃあ契約違反よね」
「・・・しかしあれを止めなければみんな危険な目に遭う」
「そう？？なら追加条件。この私に被害がないようにしなさい。それなら行っていいわよ」
「分かったよ・・・」
嘆息しながら苦笑いをして方に止まった死黒虫と同化する。
すると化け物のような腕と化し、鋭い爪が出現する。
それを見た人々はまた騒ぎ出す。しかし今はそんなことに気を取られている暇はない。
すぐに懐から拳銃を取り出し、それを同化させる。
大きな砲弾を構えた佑介は一気にデッキの手すりに飛び乗り、今にもなみえを攻撃しようとする腕に標準をあわせる。
「うおおぉぉぉぉ！！」
銃に力を注ぎ込む。またいつかの違和感がしたが何とか踏みとどまる。そして虫の顎から漆黒の銃弾が放たれる。
それが虫の腕を木っ端微塵に粉砕する。
「大丈夫か！！」
「助かったわ」
立ち上がったなみえがお礼を言う。

破壊された腕がゆっくりと回復し始めていた。
これはヤバイと思う佑介。しかし打つ手はない。
今は詩歌に任せるしかなかった。
そうとわかればやることは被害拡大の死守だった。
銃だと弾がもったないと思った佑介は近くの手すりを破壊して漆黒のロッドを作り出す。
弁天のように振り回すと一気に跳躍して頭から叩き割る。
大ダメージだったのか大きな悲鳴が響く。
振り回してくる腕を受け止めてそのまま叩きつける。
ほかの虫憑きたちも必死の攻撃。
次々と回復よりも早い攻撃でダメージを与える。
それは少年にも影響が出ていた。
苦しむ体を抱きしめて唸っていた。その少年を抱き寄せる詩歌。
優しく話しかける。
「君の夢はなんなの??」
「お姉ちゃんの怪我を治したい」
どうやらかれは高校生の姉がいて、その彼女が陸上部のエースらしい。
しかし彼がちょっとしたことで危険な目に遭いそうになった。
それを助けるために身を投じたのだという。
運よく2人とも助かったが、姉のほうは足に大怪我を負ってしまい、部活ができなくなったらしい。
そのことを何も言わなかったが、自分のせいだとずっと悩んでいたようだ。そして願ったのだ。
“お姉ちゃんの怪我を治したい”
そしたら虫憑きになっていたようだ。
自分に力で怪我が治せると知った少年はすぐに姉の元に行き、直したという、
しかし虫憑きを見た姉と両親は顔色を変えて自分を化け物扱いしたのだ。

それがショックで逃げ出し、途方にくれていたところを青年に拾われたという。そしてここに連れてこられたということだ。
自分の夢を叶えたい一新だった少年。
それは自分たちと同じだと感じていた。そしてここにはいないあの少年と同じだと感じていた。
詩歌は優しく抱き寄せる。
「君は夢を叶えたんだよ??だから何におびえることはないんだよ??」
詩歌は語り掛けるように優しく言う。
「私たちがついてるよ??君の味方だから怖がらなくてもいい」
すると少年から不安の色が抜け始め、それに呼応して虫の動きもおとなしくなる。そしてゆっくりと小さくなる。その虫がゆっくりと少年の元に戻ってくると姿を消す。
それと同時に少年も疲れが一気に出たのか学理と眠っていしまった。
それを慌てて抑える詩歌。
規則正しい小さな寝息を見せる少年を見てよかったとつぶやいた。
しかし悪魔の脚本はまだ終わっていなかったのだ。デッキの下から再び叫び声が起きたのだ。
急いでみてみるとそこに新たな虫憑きが誕生していた。
それも2人・・・。
そして上空には。
「あ・・・あれは」
詩歌は知っていた。
あのサングラスをした女性のことを。
アイジスパたちもその光景を見ていた。そして叫ぶ。
「大喰い!!」

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　３（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　THE　OTHER　PART　1

その同時刻、海上を数機のヘリが飛んでいた。
中には黒いコートと白いコートを着込んだものたちがいた。そして数メートル先には海上は進んでいる遊覧船が合った。しかしそれからは黒い煙が出ていることから何か事件が起きていることは確かだった。しかし彼らがやりに行くのは人命救助ではなかった。
「上空に大喰いの反応があります。さらに虫憑きが2人。そしてむしばねたちもいます」
「おいおい聞いたか??今回の任務は暴れ放題だぜ??」
「ちょっと霞王さん??慌てなくても敵は逃げませんよ」
「これが慌てないで要られるか寧々。俺の血が騒ぐってもんよ」
霞み王という少女は白いコートを着てわくわくした表情でいる。
そんな様子を見ている少年少女がいた。
「紅・・・じゃない月姫はこの前の大きな任務から帰ったばかりだけど大丈夫なの??」
「火巫女・・・心配してくれてありがとう。ちょっと休んだからもう大丈夫だよ」
それでもまだ疲れの色は隠せない月姫。しかし収集されたのだからそれなりに全うしなければいけない。そしてみなの視線は1人の少年へと向けられる。
一見平凡な顔付きで、特徴的なのは絆創膏があるくらいだろうか。
しかし虫憑きたちから畏怖されている存在である少年・・・かっこう。
彼はただ向こうに見えてくる遊覧船を見つめていた。
そこにいるだろう、自分と約束をした少女。
その約束を今まで忘れたときはなかった。
あきらめようとしたときにはいつも彼を奮い立たせてきた約束。
かっこうの心には自分の夢と彼女の夢とが同居していた。

彼女と戦うのは心苦しい、しかし戦闘は必死であり、それよりもまず大喰い・・・始まりの3匹を殲滅することがかれにとって最優先事項だった。
彼の肩には緑色のかっこう虫が止まる。そしてとうとう真下には遊覧船が見えた。
一気に飛び降り始まる少年たち。
降り立つといきなり現れた彼らに驚く人々。
「アーあーうるさいやつらだな」
「まあまあ霞王さん。こんなことでいちいち怒ってたらきりがありませんよ」
「それにしてもだな寧々。これはうるさすぎる」
周りを見ながら戦闘中だということを確認する。そして上空には大喰いの姿があった。それをかっこうは苦々しげに見つめる。
当の大喰いは愉悦を含んだ笑みを見せる。
「あらあらかっこうちゃん、また私の邪魔をしにきたのかしら??あの時千晴ちゃんの夢を食べられなかったことはショックだったわ」
「ふざけるな。これ以上お前の好きにはさせない」
「ふふ、ここには愛しのあの子もいるのよ??そんなところで戦おうって言うのかしら??」
「今はそれは関係ない。俺はお前を殲滅するだけだ。お前らは虫憑きを回収しろ!!」
かっこうは叫ぶとほかの局員たちは急いでその虫憑きとなった少年たちのところへと向かった。
「おいおいかっこう、お前だけにいいところは取らせないぞ」
「かっこうさんは少し休んだほうがいいですよ。マーカー使いでの闘いの傷はまだいえてないんですよ??」
「そんなこと関係ない。目の前の戦いに集中するだけだ」
そう言ってホルダーから拳銃を取り出す。
かっこう虫と同化させると右腕が完全に同化した。
多くの虫憑きたちから夢を奪ってきた悪魔が光臨したのだ。

「だいく・・・かっこうさん、あまり無理しないでね」
「こいつのことなんてほっとけ火巫女。どうせそこらでくたばるだろうさ」
「そんなこと言わないでよ月姫くん」
「え??ああ、すまない」
火巫女に怒られ思わず謝ってしまう月姫。
「遊びじゃないんだ。気を引き締めろ」
いらいらした口調で言うかっこう。ここでなんとしてでも大喰いを殲滅して分離型の虫憑きたちを救いたちと思っていた。
すなわちあの少女を救うことになるのだ。
「行くぞ!!」
勢いよく飛び上がったかっこうに続く特環局員たち。
かっこうとスノウ・フライが出会うのにそう時間はかからなかった。

夢集う遊覧船　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価待ってます！！

少年の件は一件落着したものの、更なる虫憑きが生まれた。
そして上空には大喰いの姿が、その姿を見て顔をしかめるむしばねたち。
対照的に喜びを浮かべる創虫会。
そして上空から白と黒のコートを着たものたちが振ってきたのだ。
そして最初に降り立った少年は佑介が絶対忘れないだろう少年の姿だった。
彼はむしばねたちに野知られており、そして彼の姿を見た瞬間表情が青ざめた。
眠っている少年を後ろに下げるアイジスパ。
詩歌に戻るように言うなみえ。
そしてこちらに気がついたのか一っ飛びでデッキの手すりへと飛ぶ。
現れた少年の姿はまさに悪魔だった。
「かっこう・・・くん??」
詩歌が少年の名を呼ぶ。
「かっこうくんが何でこんなところに!?」
突然現れた少年に驚く詩歌。しかし少年は詩歌のことを見るとなぜか頬が緩んだのだ。
まるで懐かしい人物に遭ったかのように。しかしすぐに真剣な顔へと戻る。
上を見ると大喰いがまさに食事を終えたところであった。
下ではどうやら2人の虫憑きを捕獲したようだった。
そして残ったかっこうの任務は大喰いの殲滅だけであった。
「スノウ・・・今はやつにかまう必要はない」
「そうよ、今はまだ戦力が足りなすぎる」
アイジスパとなみえの言葉に押されるかのように詩歌はデッキを後にした。

階段を下りると通路には創虫会のメンバーが3人いた。
1人はどこかへ言ったのだろうかと詩歌は思う。しかし。
「さっきの女はどうした。あいつが大喰いの媒介者か??」
佑介は1歩前に出ていう。
正解なのか、リーダーの少年は笑顔になる。
そんなことはどうでも言いと感じた佑介はさらに続ける。
「あれは本物の大喰いじゃないな??あのときの浸父ってやつもそうだったように。お前だろ??この前俺達を襲ったのは」
片手を失っている少年に話しかける。
目が合うと苦々しげに視線を返してきた。
どうやら正解らしい。
リーダーの少年が詩歌に近づき言う。
「それではスノウさん??これからわれわれと手を組んでいただき、生まれた虫憑きたちをかくまってもらえますでしょうか??かつてレイディーさんにも話を持ちかけたんですけどね・・・断られたんですよ。あの時はショックでしたよ。あのむしばねリーダーのレイディー・バードが虫憑きを捨てるだなんて・・・」
少年はまさに絶望したという顔をしていた。しかし詩歌にはなぜ莉奈が断ったのかはうすうす感じ取っていた。確かに無視憑きを保護して彼らの居場所を作ってあげたいのは変わらない。
しかし創中会がなそうとしていることはなんだと考える。
虫憑きを自分たちの食事のためだけに生み出す・・・便利な道具としか考えておらずに終わればむしばねに丸投げ。それでは無慈悲に欠落者としていることと同じだった。
彼らから日常を奪い取っているのと同じだった。
きっと莉奈はあの時戦ったはずだと詩歌は思った。
戦って彼らに逃げられたのだと。
そして莉奈がなき今再び交渉してきたのは自分が弱いからであり、弱体化したむしばねなら何とかなると思っていたのだろう。
しかし自分だってこのむしばねを守っているのだ。みすみす売り渡

すわけにはいかなかった。
「今回の件ですが・・・お断りします」
「・・・なんですって??」
少年の表情が怒りに染まった。
それを見たアイジスパとなみえが詩歌の前に立つ。
少年の背中から大きな腕が現れたのだ。
虫のものらしい。
ほかの三人も同じく虫を出していた。
片腕のない少年はどうやら特殊型らしく、しかし何かを媒体にして空中に浮く物体を作り出していた。もう1人の少女は目の前に金色に輝く虫を出していた。
姿形は蜂のようだが。
「交渉決裂やな・・・」
「ここは以前と同じく、死んでもらわなければいけませんね・・・」
殺気をかもし出す少年たち佑介も死黒虫と同化した。
リーダーの少年の後ろからは大きな蜘蛛が現れた。
「それでは狩の時間です・・・」

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　４（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　かっこう　ＰＡＲＴ　０

今まさにかっこうの目の前には大喰いが存在していた。
すでにかっこうは虫と同化していて半身を虫と一体化していた。
下では局員たちが所定位置についた頃だった。
となりに白いコートを着た少女が現れる。
「おい、かっこう。船での戦いなんてあの時以来じゃねえか??懐かしいよな、あん時はハルキヨもいたんだから」
「おい霞王・・・今はその話をしている暇はないぜ??」
「ちょっと喰らい昔話に花を添えたっていいだろ??あいつだってまだ眠ってるんだからな」
「・・・」
「無言かよ、しかしまったくなんでこんなところに大喰いが現れるんだかな」
それにも何も言わないかっこう。
ただ彼には目の前の大喰いを殲滅することしか頭になかった。
それは霞王も同じでかつて戦い、コテンパンにされたという屈辱があった。今度は負けねえとにやりと笑みを作って言う。
「かっこうちゃんに霞王ちゃん。生憎だけどもう食事は終わっちゃったの。ちょっと遅かったかしらね」
大喰いが挑発するように言う。
大喰いの能力を知っている局員たちはうかつに手が出せない。
自身が生み出した分離型の虫の力をすべて使えるという厄介なものだった。
多くの客はすでに救命ボートで脱出しているために大きな戦いとなってもよかったのだ。
「ターゲット　ロック　オン。発射(シュート)!!」
千莉が大喰いに向かって熱線を発さしたのだ。
紅夏月もまた分離した虫からレーザーを発して後方からの攻撃を始

めた。
それを大量発生させた虫によって防御する。
ほかの局員はその虫を倒そうと攻撃を続ける。しかし時たま発せられる、分離型の紅夏月の虫の攻撃で局員たちを撃退している。
自分の虫の攻撃を使われそれで局員がやられるのは嫌なものだった。
「発射！！」
次々に虫を撃退するもそのあとにまたすぐに生まれてくるためにきりがない。
「うぜえぇぇえ！！」
霞による大きな爪を振りかざして霞王は一気に虫を切り裂いていく。
ぶちぶちという嫌な音をまったく意に返さずに爪を振るう。
勢い余って足場も破壊していしまう。
下でも激しい戦闘が起きているのか床が揺れていた。
大喰いは紫色のりんぷんを出す羽を開いて次々と分離型の虫の力を使ってくる。
それはかつてかっこうが戦ってきたものもあったし、まだ見たことのないものもあった。
必死に力をためる。
一撃で倒さなければならない。
そのためにはまたあの雪を使われればなんともならない。
雪の力で威力が半減されれば以前と同じ結果になり、かっこうの戦闘員としての寿命を短くするだけとなってしまう。しかし大喰いはかっこうの思惑を読み取ったかのように笑みを作ってスノウ・フライの力を発動させる。
破壊の雪・・・虫だけを破壊する恐ろしい能力で、かつての特環を壊滅に追い詰めた力だった。
だからといってここで引くわけにもいかなかった。
霞王も恐れを抱かずに猛然と突き進み、雪を切り裂く。
わずかにできる隙間、霞王はわずかに削られたことで顔には苦痛の

色を出していた。
そんなわずかな隙間もすぐに消滅し、千莉と紅夏月がレーザーと熱線でこじ開けようにも小さな穴をいくつも作るくらいしかできない。
これではかっこうの最大出力の攻撃だできない。
当たったとしてもまた方向と威力を半減されてしまう。
そんな時下の床を突き破って現れる姿がいた。
ドガアアァァァンっという大きな音とともに現れたのはその手にロッドを持った青年だった。
「ハァハァ・・・やっとくたばったのか??ん??」
額からは真っ赤な血を流し、肩で大きく息をしている青年・・・相場佑介。
特環局員が見たのは右腕を漆黒の腕を持った化け物だった。

夢集う遊覧船　かっこう　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　５

詩歌たちむしばねは創虫会との戦闘が激化していた。
創虫会の紅也の攻撃は小型爆弾であり、それはあらゆる物質を媒体として作り出すものだった。
それを投擲されて散り散りにされていた。
現在詩歌はなみえ、弐兵衛とともに行動していた。
「ドないしたんやむしばね。逃げてばかりじゃあワイらには勝てへんで??」
挑発するように言う紅也。
しかしなみえは冷静に考える。
ここで一気に片をつけてあのリーダーの涼平というやつを倒しに行かなければいけなかった。
そのためにはここを一気にかたをつける必要があった。
激しい戦闘で素手の船は沈みそうだったのだ。
それには詩歌の力を使うほかなく、ここで体力を温存し、リーダーと戦うことも考えられた。しかし今涼平と戦っているのは佑介だった。
自分から戦いを挑み、奥へと走っていったのだ。
激しい戦闘音は彼らのもので間違いなかった。
「スノウ・・・悪いんだけどここであなたの力を使って欲しいの」
「おい、なみえ!!あのリーダーや朗を倒せるのはスノウぐらいだ。僕たちであいつを倒せばいいことじゃないのか??」
なみえの発案に反対する弐兵衛。しかし詩歌ははっきりといった。
「私が行きます。佑介さんだけに負担はかけられません」
今きっと1人で戦っているはずである佑介。
そんな簡単に終わる相手ではないことは百も承知だ。
だからこそ少しでも早く助けに行かなければ行けなかった。
そのために自分が役に立つならそれをしないわけにはいかなかった。

その代わりしばらくは戦闘できないのだが、それは皆がカバーしてれくれる。
そう信じていた。
「分かったわ。そのあとのカバーは私たちがやるから」
「しょうがないな。スノウが言うんだから僕たちは従うしかない」
「ごめんなさい。私のわがままに付き合ってもらって」
「何言ってんのよスノウ。私たちはあなたを認めてあなたを支えるためにいるんだから」
「もっと僕たちを頼ってよ。信じてくれてもいいんだ」
笑顔で言ってくれる二人。こんなに力強い仲間が自分にはいるのだと改めて感じた。
そして詩歌の手に純白の蛍が舞い降りた。
ふゆほたる・・・1号指定の中でも最強に近い力を持つ虫。
「少しだけあなたの力を貸してね」
『壊れて・・・』
ふゆほたるから詩歌の声と思われる声が聞こえる。
ゆっくりと立ち上がり紅也と対峙する。
紅也はようやくという顔をして爆弾を投擲する。
『消えて・・・』
とたんに降ってくる白い雪。
それが爆弾を詩歌に届く前に破壊していく。
それを見て驚愕する紅也。
雪は次第に範囲を広げる。
雪が紅也に降りかかると突然苦しみだす。
特殊型とはいえ、破壊の雪に触れることで虫に影響がでるようだ。
「ぐあぁぁぁあ!!ぎぃぃぃぃぃ!!」
見えないはずの虫がだんだん形を崩していく。
それを紅也は苦しみながら見ているしかできない。
片手を失った今でも必死に夢を持ち続けた。
“自分をいじめるやつはみんな消えてしまえ・・・”

それがかつて小さかった頃の彼が抱いた夢。
転校続きでなかなか友達ができずにいつもいじめられて泣いていたあの日々。
自分を庇ってくれる人も対象にされるのが怖くて敵に回る。
そんなことが続き、心は崩壊寸前だった。
決定的なのが机に花瓶を置かれ、まるで彼がいないように学校生活が送られたことだった。
教師もそれにまったくの無関心。
とうとう彼は切れた。
切れてそのいじめていたやつを病院送りにした。
それを止めようとした教師に突然現れた塊を投げつけて爆発で足を吹き飛ばした。
それを見たものは彼を化け物だといった。
それに切れた彼は学校ごと爆破した。
生存者は1人。
紅也だけだった。
警察から逃げるために転々と街を歩いた。しかし小学生の彼にも限界があり、とうとう道端で倒れた。
消え行く意識の向こうに現れた1人の影。
少年だった。
肩には同じく虫がいた。
ああ、こいつも虫憑きなんだとようやく仲間に会えたことに安堵した。
その少年が言った。
自分と一緒に来ないかと。
一緒に始まりの3匹の元に行こうと。
そういったのだ。
そのときは仲間ができたことで浮かれていた彼は即答した。
行くと。
そして今日まで4人の仲間ができた。

たくさんの虫憑きを生み、そのたびに夢を食らってきた。
そんな自分が今まさに欠落しようとしていた。
そこにあるのはただの恐怖。
恐怖だけだった。
『壊れて・・・』
さらに威力が増す雪。
向こうではその力を使う少女がいる。
杏本詩歌・・・むしばねリーダーであるスノウ・フライ。
紅也はうめいた。
「夢を・・・なくしたくない・・・」
それを聴いた詩歌ははっとした表情になった。
少し雪が弱まった。しかし紅也にはもう戦う力は残されていなかった。
そんな紅也に詩歌は話しかける。
「あなたの夢は何??」
こんなときに何を言ってるんだと思ったが最後ぐらいは付き合うかと思い言ってやった。
「俺をいじめるやつはみんな死んでしまえ・・・そんな小さな夢や」
「いい夢だね」
そんなことを言ったのだ。
それは本心かどうか分からないが、彼女はそれをいい夢だといったのだ。
普通の社会ではふざけるなと罵倒されるようなものだというのに彼女は違った。
「私も一度欠落者になってるの・・・」
それを聞いてありえないと思った。しかしそういう少女は今しっかり土地に足をつけて立っている。
「夢は何度でも思い出せる・・・。だから」
詩歌は笑顔で言った。
「あなたもまたいつか・・・自分の夢を思い出してね」

それを聞いた紅也ははっきりと自分の虫が消えたことを感じた。
最後に聞いたことは夢を思い出してねっと言うものだった。
絶対に思い出してやるで。そう思いながら紅也は欠落者と化した。

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　５（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　４

蜘蛛と同化した６本の腕をロッドで流しながら戦闘を続けている佑介と涼平。あたりはくもの巣と穴だらけであった。背中から生える腕は鋭くことごとく壁に穴を開ける。その腕を叩いても潰れることなく佑介の攻撃を跳ね返す。

「まったく気持ち悪いやつだな」

「そういうあなたこそなんですかその化け物のような腕は」

お互いの姿は異様なものだ。片や背中からくもの足を腕として生やした少年。もう片方は漆黒の鋭い爪を持った腕。その手には長いこれまた漆黒のロッドが握られている。お互いの攻撃が激突し、はじき合う。わずかな隙をついて糸で佑介の足を取って床に叩きつける。

「ぐは！！」

背中を思いっきり打った佑介。からめとられた糸を振り回され、壁やら天井に叩きつけられる。そのたびに振動するほどのゆれが起き、爆発音に近い大きな音が響く。良平はぐったりとした佑介にチャンスとばかりに殴りかかる。逃げられない佑介はロッドを振り回し、それをそらそうとするも掻い潜った爪が横っ腹をえぐる。激しく流血する。しかし糸をロッドで断つと立ち上がり、漆黒の腕から浮き出た骨をつかむとそれをロッドと同化させる。激しくめまいを感じたが何とか持ちこたえる。ロッドは漆黒の槍と化した。

「はぁ・・・はぁ・・・いい加減にしやがれ」

「しぶといですね。まだ立っていられるなんて」

「まだ俺は夢を叶えてないんでね・・・はぁはぁ・・・まだ死ねないんだよ」

そう言って槍を構えてつっこむ。それに向かって爪を立てた６本の腕が襲い掛かる。しかしその腕をやりでなぎ払うと爆発音が起きて腕を吹き飛ばす。それを見て驚愕する涼平。それと同時に苦しむ。どうやら虫の体を破壊されたことでダメージを食らったようだ。し

かしとうの佑介も同じであった。先ほどの一撃で一気に何かが削げ落ちたのを感じた。それと激しい目眩。お互い大きなダメージを受けていた。何とか立ち上がる佑介。しかしまだ腕一本を失っただけの涼平。どちらが優勢かははたから見ても一目瞭然だった。

「すごい威力ですね。しかしそれは反動も大きいようだ」

「畜生・・・」

振れれば粉砕できるくらいの威力を持つ漆黒のやりだが、そのたびに何か大切なものがなくなっていく。諸刃の剣であった。しかし佑介にはそれで一気に片をつけるしかなかった。ふらふらと足元がおぼつかない。いつ倒れてもおかしくない佑介を支えているのは夢だ。大切な人の笑顔を守りたいという夢。まだ叶えていない夢をあきらめられるわけなかった。

「そろそろ増援が来る頃ですか??それは厄介ですね」

一体何を言っているのか分からなかったが、むしばねたちがこちらに向かっているということだろう。漆黒のロッドがまがまがしく黒い光を発する。その瞬間爆音を響かせ佑介は再び攻撃に転じる。こんなところで足踏みしている暇はないと思ったのだ。あたりは狭い通路であるからかわすことは不可能だった。何とか腕で防御するが今度は一気に3本を吹き飛ばした。一気に夢が剥がれ落ちる2人。それでもお互い止まらない。

「うおおおぉぉぉぉ!!」

「はあぁぁぁぁっぁぁぁ!!」

槍と腕が激突する。そのたびに漆黒の光が不気味に光る。闇が夢を覆い尽くしていく。それでも止まらない二人。雲の腕の爪が佑介の背中を引き裂く。激痛に顔をゆがめながらも槍を別の足に叩きつける。それは漆黒の闇に飲まれて霧散する。爆発によって2人は再び距離がとられる。足を追ってひざをついたのは佑介だった。頭がボーっとしてまともに立てない。片や良平もほとんどの腕を失いもはや崩壊寸前。残った足から鋭く意図が吐き出され、それが佑介の四肢を貫く。激しく悶絶する佑介。力を使ったために連続して攻撃で

きない涼平。しかし目は死んでいない。じりじりと距離をつめて、一気に叩こうとしていた。ふらつく体に鞭打って槍を杖代わりにして立ち上がる佑介。もはや一撃打てるかどうかの状態だった。

「アハハ・・・まさかここまでやるとはね・・・槍使い・・・否ハンター??」

「何のことだ??誰のことを・・・言っている??」

「忘れたのか・・・??お前は俺を殺そうとしただろ??」

いつのことを言っているのだろうかと思った。第一彼とあったのは今日が初めてだった。つまり彼は勘違いしているのだ。涼平はただ虚ろになりつつ目で佑介を見ていた。まるで宿敵に会えた事を喜ぶ笑みを作っている。残った腕をぎちぎちと鳴らして言う。

「あの時僕は虫憑きになったばかりだった・・・。赤牧市に逃げてきて、少しは落ち着けると思っていた・・・。でもそれはすぐに壊されたよ・・・君によってね」

涼平はただ淡々と過去のことを思い出しながら話す。かつての彼もただの虫憑き立ったことが感じられた。しかしなぜ彼がここまで歪んでしまったのか。

「本当に絶望したよ・・・せっかく自由になれると思ったのにってね・・・」

自嘲的に笑っている。戦闘になったとき、それだけ彼とその槍使いとの戦闘力はかけ離れていたのだろう。

「そして君との戦闘で僕はあっけなくまけたよ・・・。でもきみったら急に苦しみだすんだからね・・・ある意味助かったよ。病院近くだったから病気もちだったのかな??それから残ったのは君に対する恨みだけだった・・・」

話を聞いている間に大分呼吸を整えることができた。思いっきり力を使えるのも残り少ないことを感じていた。ここで決めるためには一気に槍で同化した虫を殺すしかなかった。力を込める。そして何かが崩れていく。

「ぐがぁぁ・・・」

ぐらりと視界が揺れる。しかしここで気を失ってはいられない。気を持って槍を構える。槍には漆黒のオーラがあった。涼平もここで決着をつけるという顔であった。過去に負けた槍使いに復讐する・・・それだけを見ている目だった。

「行くぞ槍使い！！僕はあのときより強くなった！！」

「はあぁぁぁぁっぁ！！」

お互いに走り出した。涼平は鋭い爪を光らせた一本の腕を構え、佑介は漆黒の槍を構える。そしてお互いの武器がぶつかり合った。爆発によって2人は吹き飛ばされる。爆煙が晴れるとそこには倒れた二人の姿があった。しかし決定的に違ったのはすでに涼平の目には生気が宿っていなかったことだ。血だらけの佑介が槍を杖にしてふらふらと立ち上がる。その顔には勝利の喜びはなく、ただ疲れと虚しさが残っていた。しかし彼の頭に響くのはただ戦えという言葉だけ。夢を守るためにはほかの夢を踏み越えていかなければいけない。それは分かっていることだが。

「すまない・・・」

欠落者となった涼平へいう佑介。すると向こうから詩歌たちむしばねが走ってきた。戦闘が終わりふらふら野雄介を見てすぐにチェーファーに手当てをさせた。チェーファーも仕方ねえといって力を使って傷を癒してくれた。完全ではないものの、まだ戦闘できるくらいには回復した。槍を持って立ち上がる。

「虫憑きは夢のためにほかの虫憑きを倒すしかないのか・・・」

当たり前のことだが無意識につぶやいてしまった。しかしそれに答えたのは。

「そうですね・・・でもそれだけじゃないですよ」

「スノウ・・・どういうことだ??」

佑介の独り言に答えたのは詩歌だった。疲れた顔で聞いてくる佑介を見て言う。

「虫憑きの夢はつながっているんです。だから欠落者にしてしまったらその人の夢も一緒に持つことになるんですよ。私もかつてはそ

うでした。たった一人で虫に負けそうになっていたときに前に現れてくれた男の子がいたんです。その男の子は私に夢を聞いてきました。それに私が答えると自分と同じだといってくれました。それを聞いて私はこの男の子になら自分の夢をあげられるって思ったんです。その男の子は今でも私の夢と一緒に自分の夢を叶えようとしています。だから佑介さんもその人の分の夢も持つということなんです。けして夢を踏み越えているわけじゃないんですよ」

それだけで十分だった。自分の心には自分の夢以外の夢もあるということが分かったからだ。それはとても重いことだ。それでも進み続けるしかないと思った。こうしてまだ夢を見続けられるから・・・。

「ありがとう。おかげですっきりしたよ」

詩歌はよかったと笑顔になった。佑介はきっと天井を見て槍をそれに向けて投擲した。すると爆発が置き、天井は外につながった。やるべきことがあった。

「俺はこれから大喰いを殲滅してくる!!」

そう言って床を陥没させて飛んだ。一気に外に出るとまさに戦闘の真っ最中だった。そして季節はずれの雪が降っていた。空を見上げればそこに大喰いの不気味な笑みを浮かべた姿があった。落ちていた槍を手に取り叫ぶ。

「お前を殲滅する!!大喰い!!」

佑介と特環の共闘が始まろうとしていた。

夢集う遊覧船　佑介　ＰＡＲＴ　４（後書き）

コメント・評価お願いします！！

夢集う遊覧船　かっこう　ＰＡＲＴ　１

突然床が爆発したと思ったら底から現れたのは異様な腕を持った青年だった。どうやら戦闘後ということでぼろぼろだった。しかしその目からはまだ戦士としての闘志は失われていなかった。

「お前は・・・」

かっこうはその青年に見覚えがあった。あの時は確か自分が特別収集されたときのことだったことを思い出していた。激しく自分に敵意を見せていた青年。理由は知っていた。恋人を欠落者にしたのだから。そんな彼も虫憑きだったのだ。

「相場佑介・・・久しぶりだな・・・かっこう」

睨みつけながら言う佑介。そんな2人のやり取りを聞いていた霞王が尋ねる。

「おいおいかっこう、こんなやつと知り合いだったのか」

「勝手にこいつなんかと知り合い関係って言うなよ女。かっこうとは最悪の出会いしかしていない」

「んだとクソヤロウ。俺さまは今かっこうに聞いてるんだよ」

「そいつの言うとおりだ。俺はそいつの恋人を欠落者にした」

「よく・・・覚えてるじゃないか。かっこう」

「へ？？まじかよかっこう。それは最悪の出会い方だな」

霞王はそんなかっこうを笑い飛ばす。かっこう自身はもう関係ないと割り切っているようだった。佑介も今は過去のことで言い争う事態ではないと感じていた。局員たちが苦戦しているのはこの雪だった。さらにレーザーみたいなものが雨のように雪とともに降り注ぐ。それを食らった虫たちが次々と消えて行き、局員も欠落者となる。

「発射！！」

「くらえ！！」

熱戦とレーザーが大喰いに向かって放たれるがまったく利かない。どうやら雪によって威力が半減しているようだった。横にいるかっ

こうは先ほどから何かをうかがうように大きな虫を構えている。佑介が拳銃を同化させたときと同じ形態であることから一撃で決めたいのだろうと感じた。しかし問題は雪をどれだけかいくぐれるかだった。いくら威力があっても到達するまでに半減してしまえばまったく無駄になってしまう。すなわち雪を一瞬だけ消せばいいのであった。

「かっこうよ・・・」

「なんだ??」

不意に話しかけるとぶっきらぼうな返事が返ってきた。集中しているところを邪魔されたからだろう。しかしこれからやろうとしていることはかっこうとの共闘になる。それだけは言っておかなければいけないと思ったのだ。

「貸し一つで協力してやる・・・」

「何をするつもりだ??」

かっこうの返答にはしっこくの槍を見せ付けてそれを答えとして返す。それを見たかっこうの目が見開かれたのは間違いなかった。力を槍に込める。何かがまた崩れていく・・・それが夢であるとようやく認識できた。だがまだいけるとも確信していた。漆黒の槍にオーラが舞う。それを大喰いめがけて投擲した。

「うおおおぉぉっぉぉぉぉお!!」

叫びながらも槍を投擲する。

「あら、あのときのアリアに横取りされた子じゃない。まさかかっこうちゃん同様に私に歯向おうって言うのかしら??」

「それ以外の答えがあるって言うのかよ」

「でもあなたの攻撃もここまで届かないわよ??」

雪に押されて失速する。しかしそこで大きな爆発が起きた。それには誰もがおどきの表情になる。槍が触れていた範囲の雪がかき消されたのだ。やりはそのまま墜落して船に突き刺さり、デッキに大穴を明ける。佑介の槍によってできた大きな隙間はちょうど大喰いを捉えられるくらいのものだった。かっこうは間一髪いれずに放つ。

「うおおおぉぉぉぉぉ！！」

あまりの衝撃にとうとう船が真っ二つになった。先ほどの佑介の槍による穴がかなりのダメージを与えていたようだ。格好の放った弾丸はまったく雪に触れることなく大喰いに命中した。大喰いは絶叫を上げながら塵一つ残らずに消し飛んだ。しかしばたりとデッキに落ちてきたのは大喰いではなく創虫会のメンバーの１人紅音だった。さらに彼女はすでに欠落者と化していた。まさかの出来事に呆然とするかっこうたち特環局員たち。どういうことだと叫ぶ霞王。疲れでふらりと倒れこむ火巫女と彼女を抱きかかえる月姫。彼らも動揺は隠し切れていなかった。さらに追い討ちをかけるかのように船が沈没し始めたのだ。すでに特環局員が創虫会のメンバー全員の捕獲を終えていた。そして下からは階段を伝って詩歌たちむしばねたちが上がってきた。すぐに捕獲に乗り出そうとした特環局員たち。

「やは！！助けに着たわよー」

海のほうからクルーに乗った七那が来ていた。どうやら脱出してからすぐに連絡して来てくれたらしい。しかしそこまで行くに詩歌たちは局員たちを掻い潜らなければいけない。しかし力を酷使しすぎた彼らに戦う力はほとんど残っていない。それでも詩歌を守ろうとしている彼ら。

「ここは俺に任せろ！！おまえらは先に行け！！」

佑介が局員たちの前に立ちふさがった。

夢集う遊覧船　かっこう　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価お願いします！！

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　６（前書き）

ムシウタ～夢見るものたち～夢集う遊覧船いよいよクライマックス！！

次巻夢語れぬものです。

それでは本編どうぞ！！

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　６

佑介が詩歌たちむしばねの前に立ち、局員から逃がそうとしていた。
その手にはテーブルから持ってきたのかナイフが握られていた。しかしそれもすぐに同化して、ロングソードに変わった。
異様な武器に局員たちはたじろぐ。
今にも沈没しそうな船は大きく揺れていた。
上空にはヘリが数機着ていて特環の局員が避難している様子もあった。
「皆さん早く言ってください。私はあとで行きますので」
詩歌は叫んで皆を七那のいる船へと急がせる。
今まさに局員と佑介が戦っていた。
向かってくる虫をロングソードで真っ二つに叩ききったり、突きで貫いたり舞うように次々に局員たちを欠落者にしていた。
早く捉えろと叫ぶ声もあるがまったくそれどころではなかった。
月姫のレーザーを左手にあるロッドで防ぎ、霞王の攻撃の爪をロングソードで組み合って防ぐ。
「何だこいつ強いじゃないか？？久しぶりに暴れられるぜ！！さっきの大喰いの腹いせだ！！おまえ知ってたんだろ！？」
「こいつは危険だ！！捕獲して連行しろ！！」
「ターゲット　ロック　発射！！」
次々に繰る出される攻撃を何とか掻い潜る。しかし多勢に無勢。
徐々に押され始める。しかしそれでもよかった。
もう詩歌が乗り込めば彼らに捕まってもよかった。
次は特環で情報を収集しようとしていたのだ。
「佑介さん！！もう大丈夫ですからあなたも乗り込んでください！！」
詩歌が叫ぶ声が聞こえた。波が荒れてきた。雨が降り注ぎ、足場がぐらつき立っているのもきつくなってきた。

「俺は特環にいく!!お前らとはここでお別れだ!!」
「そんな!!何でですか!?」
「俺にはまだ情報が少ない!!特環にならいろいろあるはずだ!!それに槍使いについても気になるからな!!」
それを聞いたかっこうと霞王が反応したのが見えた。
やはり彼らにはかなりの情報があるのだろうと確信した。
おとなしくなった佑介を局員たちが連行していく。
その顔には笑みがあった。
「ここでさよならじゃない!!また明日だ!!」
局員と一緒に減りに乗り込む佑介。そして次の瞬間大きく船が傾いた。
足場が悪くなっていたために詩歌はあめで滑らせ、反対側のデッキに滑っていき、立ち上がり様の突風と船の傾きによって体に無重力が生まれた。
何が起きたのかに気づいたときには詩歌の体は船から投げ出されていた。
「スノウ!!」
それを見たむしばねたちは叫びながらそっちへと向かおうとするも波が強くてとてもじゃないがいけない。しかしそんな詩歌にものすごい速さで向かった影があった。
「おい待ちやがれ!!」
霞王がその影に叫ぶ。しかしその影はまったく聞く耳を持たずに詩歌の元へと走る。
そしてデッキから飛び詩歌を抱き寄せる。
その影の正体を知った詩歌はただその名をつぶやいた。
「かっこうくん・・・」
2人の虫憑きは荒れ狂う海の中へと消えていった・・・。

（完）

夢集う遊覧船　詩歌　ＰＡＲＴ　６（後書き）

コメント・評価お願いします！！

夢語り得ぬ者　プロローグ（前書き）

今日から新刊が始まります。
遊覧船から海へと落ちていった二人。
一体どうなったのでしょうか??
正体を知られたくないかっこう・・・薬屋大助。
そしてとなりにいるのは杏本詩歌。
夏の海での２人の短いバカンスは一体どうなる??

夢語り得ぬ者　プロローグ

いつだったかの風景を見ている。
電車をはさんでお互いを見ている。
どこか懐かしい風景だった。
「あれは・・・」
ぼんやりだが思い出してきた。
少女とは5年前に会ったのだ。
あれは確か、雪が降る冬だっただろうか。
何かにおびえるように、何かに負けてしまったかのように座り込んでいた少女。
それが彼女との始めての出会い。
「あのとき・・・」
自分は黒いコートを着ていた。
その時ぼろぼろだったような気もする。
ひどく疲労していたかもしれない。しかし何かをしなければいけなかったような気がする。
「あの子と・・・」
夢は何かと聞いた気がする。そして彼女は言った。
“私がいていい場所が欲しい”
その時自分と同じだと感じた。
それを素直に言えた気もする。
その少女から何かを貰った気がする。
その手にあるのはなんだっただろうか。
「む・・・し」
白く輝く蛍・・・。
それだけだっただろうかと疑問に思う。
もっと大きく、重く、それでもとても大切な何か。

それを今までずっと心の中においてきた。
彼女と再びあったときのあの胸の高まりは。
彼女と歩いたあの道での会話。
彼女と見たパレード。
彼女を待ち続けたプラネタリウム前。
「　　」
誰にも聞こえないうめき声。
再び思考のなみに誘われる。
そして彼女と再び会ったのは船の上だった。
あの時と浜たちが場所で船の上で戦った記憶がある。
そのときも少女が居たような気がする。
すると不意に自分の額に冷たい布が当てられたのを感じる。
それの感触で目が覚める。
どうやら自分は眠っていたようだ。
下はなぜかござが引かれていて、額にはぬれタオルがあった。
そしてと奥から聞こえてくる波の音と、人々の楽しそうな声。
そして一気に記憶が戻り、意識がさえる。
「！！」
目の前に少女がいたのだ。
それも夢の中で見ていた少女。
船の上で着ていたドレスではなく、ラフな私服姿。
自分がおきたことに気がついたようで嬉しそうな顔をしている。
そして彼女が自分の名前を呼んだ。
「気がついたんだ・・・かっこうくん」
杏本詩歌・・・スノウ・フライがそこにいた。

夢語り得ぬ者　プロローグ（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　０

どれくらい眠っていたのだろうか。いつの間にか服は脱がされて私服となっていた。しかし特環のゴーグルだけははずされていなかった。なぜか走らないが、それだけは避けたかった。まだ、彼女に自分の正体を知られたくなかったのだ。彼女と再会するのはクリスマスでいいと思っていた。そのときまでに必ず始まりの３匹を殲滅する。そう心に誓っていた。起き上がり目の前の少女に向き直る。

「おはよう、かっこうくん。ずいぶん眠っていたんだよ？？」

「そうなのか・・・」

あたりを見渡すとどうやらここは海の家だった。外では人々が家族連れや恋人同士で騒いでいた。そんなかっこうと詩歌のいるテーブルに水の入ったコップとカレーライスが置かれた。誰だろうと思い振り返るとそこには小さな男の子が立っていた。女の子のような顔の小学生くらいの少年。ニコニコと笑顔を見せてお盆を後ろに持ってかっこうを見ていた。こいつは誰だと思ったら。

「この子は小原和真くんです。私たちを助けてくれたんですよ」

少年は何も言わずにぺこりと頭を下げた。かっこうもそうかとつぶやいて、そのあとにありがとうとぶっきらぼうに言った。数馬はそれを聞いてにこっと嬉しそうに笑う。それを見て詩歌も笑う。かっこうはずっと何も食べていなかったことで空腹だったのでさっさとカレーに口を付けていた。一通り食事が終わってからかっこうは詩歌に話しかける。

「俺はどれくらい眠っていたんだ？？」

「ええっと・・・丸３日かな？？服は数真くんのお父さんのお古を借りてるの。着替えさせたのも数馬くんだよ」

恥ずかしそうに顔を赤らめる詩歌。一体どうしたのだろうかと思うかっこう。それにしてもここはどこだろうと思うのだ。船から詩歌を守るために海に飛び込んだはいいが、そこから一体どうやってこ

こまで来たのか記憶にないのだ。無我夢中だったのはかすかに覚えているのだが。詩歌に聞いてみても彼女は海に投げ出されてから気をうしなってしまい、気づいたらここに来ていたらしい。

「気分はどう??」

突然後ろから話しかけられた。そこには真っ黒に日焼けした高校生くらいの少女がいた。水着の上に私服を羽織っている状態で現れた彼女。どうやらここ海の家の娘らしい。ということは先ほどの数馬とは姉弟ということだった。

「私はここを営んでる小原飛鳥。高校1年だよ」

おかげさまでと返す詩歌。話によると彼女が朝の店前の掃除をしていたところに、弟の数馬が岸辺に人が二人流れ着いているといって走ってきたので慌てて駆けつけたらしい。その時いたのがかっこうと詩歌だった。特環のコートを着込んだ夏だというのに冬の格好をしているかっこうと、どこかのパーティーにでも行っていたのかと思うドレスを着た詩歌がいたのだ。

「あの時は本当にびっくりしたよ。だって前日の夜嵐だったじゃない??よくそんな中生きてこられたなって思ったの」

確かにあの時はひどい嵐が起きていた。ここまで操作が回っていないってことは特環のほうもまさか自分が死んだのではと思ったのではないか。そんな考えをも浮かんできた。詩歌にもむしばねのリーダーとしての責任がある。彼女がいなければあそこも身動きができないだろう。そしてあの時現れた新たな同化型の虫憑き。圧倒的な力で大喰いの使ってきた詩歌の破壊の雪を吹き飛ばしたのだ。自分と同じ同化型で、武器を使用する新たな虫憑き。あの後特環のヘリにおとなしく乗っていったことから局員として入隊させられるだろうとかっこうは思っていた。

「どこから来たのか分からないけど、帰る場所が見つかる間はここにいていいから。その代わりそのぶん働いてもらうけどね」

それはそうだろうなと思う詩歌とかっこう。しかしいい加減かっこうもゴーグルをはずさなければ不思議がられるだろう。サングラス

でもあれば詩歌に自分が薬屋大助だということはばれないだろう。
そう考えて、売店でやすい黒のサングラスを購入した。それを詩歌に隠れて鏡に映りながらかけてみた。賭ければ分からないという感じだったのでこれで行こうと思った。しかし万が一でも絶対にばれてはいけなかった。
それから昼ごろになると人々がぞろぞろと入ってきて、注文が多くなった。かっこうと飛鳥で料理を作り、数馬と詩歌で料理を運んでいた。始めは教わりながらの調理だったが、次第にこつをつかめば簡単だった。しばらくすると向こうから詩歌の小さな悲鳴が聞こえてきた。なんだと思い支払いのところから顔を出すとどうやら大学サークルで着ているようなチャライ男たちにナンパされているのだった。ヤバイと思ったかっこうはすぐにエプロンをかなぐり捨ててそこに向かう。詩歌は手を惹かれて嫌がっているが如何せん、相手は大学生なので力ではまったく勝てない。今にも連れて行かれそうな状況だった。それを数馬は何もできずにおろおろするばかりであったが。
「嫌がってるだろ??離してやれよ・・・」
低く、冷徹なかっこうの声で言う。突然現れたかっこうの姿に詩歌は驚いているようだが、嬉しそうだった。
「ああん、何だテメエ??この子のなんなの??」
「こいつは俺の・・・彼女だ」
「かっこうくん・・・」
意外なかっこうの言葉にびっくりしている詩歌だが、それでもまんざらではなかった。なぜか彼に言われるとここにはいないが桜架市であった少年・・・薬屋大助に言われているのと同じ暖かさを感じたからだ。でも格好と付き合うことになれば彼と二股になってしまうのではと心の中ではくすりと笑っていた。かっこうの睨みにびびった学生たちはひるみながらも抵抗しようとしたが、手元にあったグラスを片手で粉々にしたことからビビッて逃げてしまった。
「やっと帰りやがったか・・・。それよりグラス一個だめにしちゃ

ったな」
そう言って飛鳥の元に行き、謝っていた。飛鳥は仕方ないといい、特に言及することもしなかった。しかしそれではだめだと財布からそれに見合ったお金を取り出して渡した。
時間が過ぎたところで客の数も少なくなった。皆また遊びに行っているのだった。
「かっこうくん・・・さっきはありがとうね」
詩歌は隣に座ってサイダーを飲んでいるかっこうにお礼を言った。先ほどは忙しくなり、言いそびれていたのだ。かっこうは当たり前のことをしたまでだと思っていた。というよりもあの時は薬屋大助として自分の好きな人に手を出されるのは嫌だったのだ。それは言わないが。
夕方になるとどこの家も店じまいするようだ。かっこうと詩歌もそれの手伝いをした。どうやら今まではアシカと数馬の2人だけでやっていたようだが、かなりの重労働だった。それが終わると4人は並んで飛鳥たちの家に上がらせてもらうことになった。

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　１

かっこうと詩歌が発見されて、飛鳥たちに家で過ごすようになってから1週間が過ぎた。ゴーグルの機能はすべて壊れていたために特環との連絡はできなかった。しかし電話を使って連絡はできたのであの日から何があったのかを知りことができた。こっそりと夜中に電話を持って外に出た。秘密裏の特環の番号を手馴れた手つきで押す。数回コールがあると。

『はいはいこちら特環東中央支部のまいまいちゃんです。こんな夜遅くに誰かなってこの声はかっこうさんですか!?どこに行ってたんですか皆さん心配してたんですぅきゃふって噛んじゃいませんよ??ぎりぎりセーフでスまいまいちゃん!!気を取り直してかっこうさんどうしましたか??』

「俺がいなくなった後の特環の動向が知りたい」

『最近のですね??ええっと・・・まずかっこうさんがスノウさんと一緒に海に消えた後は一時退却命令が出ています。海が荒れてどうしようもなかったんです。翌日捜索反などが出向いて捜したのですがなかなか見つからずに、3日間の捜索で打ち切られました』

それなりに嫌われている自分の創作をしてくれていたのかと思うかっこうだが、すぐに考えを改める。あれは正すノウ・フライ・・・詩歌を見つけるために過ぎなかったのだと。

「内部での動きは??」

『うう・・あれは大変だったんですよ??まず霞王さんがわざわざ東中央に出向いてきて、俺との約束を切ってかってに死にやがってと切れていました』

まったく勝手に自分が死んだ風に言うなと心の中で毒ついた。しかしまだあの約束を覚えているということは勝手に死ねば幽霊になっても戦いを申し込んでくるかもしれないと笑ってしまう。

『火巫女さんが自分で探しに行くといって聞きませんでしたね。月

姫さんが危ないから行くなといって必死で止めようとしましたが、あの海だから死んでるかもって行ったら火巫女さんと霞王さん、寧々さんが切れて月姫さんを気絶するまで暴行したんですよ??あれは見ていてぶるぶるでした。ほかの男性陣もかっこうさんの死亡説は禁句にしていました。死にたくないからですね』

いろんな理由があるが、まだ自分を待っていてくれる人もいるのだと、顔には出ないが心の中で笑ってしまっていた。月姫にはご愁傷様といってやりたいものだと思った。

『あとCさんも大変でしたよ。あらゆる情報網にアクセスしてかっこうさんを見つけ出すって血眼になってましたから』

その様子を想像してみる。確かに彼女ならできるであろうと思った。しかしなぜそこまでしてくれるのだろうとかっこうには分からなかった。

『皆さん心配していましたがかっこうさんからの連絡で生存していることがわかりました。これで一安心ですね』

「そっちからの迎えはいつごろ来るんだ??」

『色々と問題がでてきてますのでもう少しかかりそうです。見積もって1週間ですね』

「そうか・・・分かった」

しかしかっこうにとってはまだ話は終わりではなかった。懸案事項が残っていた。それはまいまいも発していたようで。

「かっこうさんが聞きたいのは例の捕獲された同化型の人のことですね??」

話が早くて助かると思った。あの時いきなり現れた青年。右腕にかっこうと同じように同化させて戦っていた。使っていた武器は漆黒のやり。能力はかつての相棒と同じだったが、威力が桁違いだった。それによって大喰い・・・実際は違ったが殲滅するのに一躍かっていた。間違いなくあの時始めてあったときよりも強くなっていたのが感じられた。その虫憑きが特環に捕獲された。簡単には欠落者にしないだろうし、逆に利用するのが大きいだろうと思っていた。

『あの人なら今頃戦闘訓練していると思われます。かなりの手誰ですね。火種3号の月姫さんでも苦戦してます』
だろうなと思うかっこう。あれだけの先頭センスがあるのだから月姫では相手にならないだろう。よくて霞王だと思った。それでも足りないのなら特環には自分しかいないと思った。戦闘訓練をしていると言うことはその青年も正式に特環に入ったということだ。それなら何らかのランクづけがされるはずである。
「その虫憑きのランクはどうなったんだ??」
しばらく電話との間に沈黙が流れる。たっぷり1分を使ってからまいまいがおもむろに口を開いた。
『立った今正式に決まったようです・・・彼はコードネーム『死神』。火種1号指定の虫憑きです』
立った今ここで最強の虫憑きがまた生まれた。

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　１（後書き）

コメント・評価いただければ幸いです！！

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　０

詩歌　ＰＡＲＴ　１

　詩歌とかっこうが飛鳥たちと同棲してからさらに１週間が過ぎていた。
そろそろ局員が来るだろうとかっこうは思っていたが、事は簡単には終わりそうになかった。
おかしいということに気がついたのは詩歌だった。
あり日の夕方帰宅した和真の表情がさえないのだ。
はじめは疲れているのだと思っていたが、それがずっと続いたことに不振に思った詩歌は思い切って聞いてみることにしたのだ。
「顔色が悪いけどどうしたの？？」
学校に言っていない詩歌とかっこうは海の家の手伝いをしていた。
店じまいということで、かっこうと帰宅した飛鳥は片づけをしていた。
話しかけるとチラッと詩歌を一瞥するも、すぐに下を向いてしまう。
和真はしゃべれないのだ。
過去に何があったのか知らないが、よほどのことなのだろうと詩歌は思っていた。
「学校で何かあったの？？」
はっとした表情で見つめる。
それで詩歌は学校で彼に何かが起きているのだと思った。
詳しく聞くのは彼の心に入り込むことなので迷ったが、ここで聞いておかなければ後悔するかもしれないと思い聞いてみた。
しゃべれないので紙に書いたのだ。
そこにはいじめにあっている。
そう書かれていた。
いつごろからなのかと聞くと。
小学校に上がってからだという。

理由はいくつか予想できた。
まず和真はしゃべれないのだ。
意思疎通がうまくいかない彼がいじめられてしまうのは想像に難くなかった。
次に両親がいないということ。
何が彼らにあったのかは知らないが、参観日になっても彼のもとには誰も来ない。
寂しさを募らせているのだろうと思った。
震える手で書く和真を見ていられなかった。
鉛筆で書かれた文字が涙でにじんだ。
瞳にはいっぱいの涙があふれていた。
詩歌はただごめんね、辛かったよねというしかできなかった。詩歌に抱き寄せられ、胸の中で声も出せずに泣いている和真。
一体どれだけ苦しい思いをしてきたのだろうか。
言いたいことも言えず、ただ流されるだけ。
居場所がここにしかない彼は学校ではどんな気持ちでいるのだろうか。
話しかけたい、一緒に遊びたい、笑いたい、怒りたい、泣きたい、
そして・・・帰りたい。
そんなことを考えているのではないか。
そんなことを自分の胸の中で鳴いている和真の頭をなでながら思う詩歌。
「――」
何かを言うように口を動かす。
しかし悲しいことにそれは言葉にならない。
しかし詩歌は彼の伝えたいことを感じわずかながらに感じ取っていた。
“伝えたい!!”
何を伝えたいのか。
文字では伝わらない言葉に隠された不思議な力。

伝えたいのに伝わらない。
そんなもどかしさの中で和真はいつも過ごしているのだ。
そして和真が持つそれは・・・夢。
声を出して誰かに何かを伝えたい。
それが和真にとっての夢だった。
そんな2人を外から窓越しに見ていたかっこうと飛鳥。
飛鳥は表情を曇らせ、それにかっこうは気づいていた。
しかしあえてそれには触れることはしなかった。

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　０（後書き）

総合評価１００ポイントどうもありがとうございます。
完結までお付き合い願えれば幸いです。
コメント・評価待ってます！！

夢語り得ぬ者　和真　ＰＡＲＴ　０

小学６年生の和真は姉の飛鳥と一緒に登校する。
飛鳥は途中で反対側の高校に向かうために和真と別れる。
言ってきますと飛鳥は手を振って学校に向かっていく。
「――――」
届くはずのない和真の言葉。
遠くなる飛鳥は聞こえていないようだった。
“いってらっしゃい！！”
６年前からなれたつもりだった。
しかしそうだからこそ気づかないところで傷つく心に気がついていない。
ちくちくと痛む胸の痛みはなんだろう。
そう思うくらいで特に気にかけない。
和真は今日もひとりでとぼとぼと学校に向かう。
　教室に入るとまず目に付くのはいつものごとく、机に乗った花の入った花瓶だった。
机に端ねやら消えろやらと和真を誹謗中傷する言葉ばかりが殴りかかれていた。
さらにそれはカッターなどで彫られたものであるために消すことができない。
後ろでは固まったまま見ている和真をくすくす笑いをして見ているクラスメイトたちがいる。
また胸がちくちくとした。
しかし和真は無視した。
これは６年前から変わらないこと。
よくめんどくさがらずに律儀にやるものだと寒心するところまで来ている。
死んで欲しかったら殺してくれ。

そんな風に思ったときもあった。
しかし和真は残る飛鳥にどれだけの悲しみを与えてしまうのだろうかと考えたときに、そう思うのはやめた。
授業の予鈴がなり、生徒たちは自分の机に座る。
先生が入ってきて授業が始まる。
まったく数馬に立ちするいじめを黙認している担任。
“助けて・・・”
悲痛な和真の助けを呼ぶ言葉は無残にも教師に届くことはなかった。
ただ淡々と進む授業。
姉が必死に働き、両親が残した遺産で学業ができている今。
飛鳥は卒業が近く、就職する気でいた。
海の家は続けるつもりでいて、和真が切り盛りするということになっていた。
そんな静寂な教室の中でもいじめは続けられている。
消しゴムをちぎったものを和真に向かって投げてくる。
これもずっとやられてきたことだ。
最近は消しゴムが哀れに感じてならなかった。
紙に何かを書いて紙ヒコーキにして投げる生徒もいる。
たいてい書かれているのは無口やら死ねやらといった言葉だった。
まったく紙の無駄だということがなぜ分からないのだろうかと思うようになっていた。
さらに給食でもそれは終わりはない。
配膳では和真の皿には食べきれないほどの量が盛られる。
教師が尋ねるとその生徒は和真が食べてくれるという嘘をつく。
そうなんだといって戻ってしまう教師。和真が社べえれないことで確認しないのだ。
“気づいてよ・・・”
耐えられているように見えて危険な状態だった。
仕方なく全部食べきる数馬だが、かつては食べすぎで保健室に駆け

込んだときもあった。
そして放課後は彼らに呼び出されて誰もいないところでの暴力だった。
顔はなく、腹ばかりを狙うリンチ。
咳き込む暇さえなく延々と続けられる。
かつてはアバラを折ったりもしたときもあった。
無数の傷を負った状態でふらふらと立ち上がる。
声がでないために泣き声もでない。
大人の助けもない。
ふと思うことがある・・・。
“自分はこのよに存在しているのか・・・”
とぼとぼと帰宅する和真。
今は飛鳥だけではなく、居候しているかっこうと詩歌もいる。
彼らに気づかれないように気丈に振舞う和真だった。

夢語り得ぬ者　和真　ＰＡＲＴ　０（後書き）

コメント・評価待ってます！！

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　１（前書き）

海斗「和真たちに何が起きたんでしょうね？？」
かっこう「しらねえ、だが和真が危険だということには変わらない」
詩歌「かっこうくん・・・それってどういうこと？？」
海斗「それでは本番行きまーす！！」

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　１

夏だということで平日からやってくるお客も少なくない。
詩歌とかっこうはそれぞれ水着に上着を羽織るという格好で海の家でのアルバイトに勤しんでいた。
かっこうが調理場で料理をして、詩歌がそれを運んだり、注文をとったりする。
時計を見るともう午後になっていた。そろそろ和真が帰ってくる頃だと思う。
しかし先日の出来事が忘れられずにいた。
泣きながらいじめられていることを告白してくれた。
和真が寝静まった夜に飛鳥にも話してみた。
飛鳥は嘆息して詩歌からことのあらすじを聞いていた。
やっぱりかとつぶやく。
「やっぱり声がでないのには理由があるんだよね？？」
飛鳥は否定もしなければ高低もしない。
しかし何かしらの理由があるはずだと思った。
ふと飛鳥が顔を横に向けると、その先には仏壇があった。
いつもは開いていないために分からなかったがそこには二つの写真盾があった。
そこにちょうどかっこうが戻ってきた。
なにやら電話で話していたようだ。
特環との連絡だろうと詩歌は思う。
「あれは・・・もう６年も前になるのかな・・・」
ポツリポツリと飛鳥が話し始めた。
かっこうもなにやら重苦しい雰囲気に気がついたのか、黙って胡坐を書いて話を聞くようだ。
「私がまだ中学に上がる前なんだけど・・・私たちの両親もここを営んでいたの・・・」

飛鳥たちがまだ小さいとき両親はまだ健在だった。
同じくここを切り盛りしていて、毎日が笑顔に包まれていた。
しかしとある夏の日。事件は起きたという。
酒を飲んでよった男たちが喧嘩を始めたのだ。
殴るけるなどの暴力が乱れ飛び、ほかの客も危険だということで離れていった。
父親は止めたが正義感が強かった母親のほうは喧嘩を止めようと男たちのところへ向かっていった。
しかしそこでも口論になり1人の男が母親を殴ったのだ。
その弾みでテーブルの過度に頭を打ち付け、そこからは血が流れ出した。
当たり所が悪かったらしい。
向こうでは騒ぎを聞いてきていた客が慌てて電話で救急車を呼んでいた。
ヤバイと感じたのか男たちは逃げようとしていた。
それを切れた父親が止めて殴るケルの暴行を行ったのだ。
もはや頭に血が上って視界が狭くなっていた。
男たちは悲鳴を上げながら逃げようとして元暴力団の父親から逃げられるものはいなかった。
もはや海の家は血の海が広がり、地獄絵図となっていた。
父親の後ろで倒れていた男の1人が立ち上がり、叫び声を上げながら近くの鉄パイプで頭を殴ったのだ。
ぐしゃりといやな音が響いた。頭から血を流し、ひざから崩れる父親。
それを見ていた飛鳥は悲鳴を上げた。
「嫌あああぁぁぁぁっぁぁ」
血の海をわたって倒れた母親と父親をゆする。
しかし2人ともまったく反応しない。
「起きてよ・・・起きてよ・・・」

泣きながらゆする飛鳥の横では自分がしてしまったことにおびえる男がいた。
その仲間も殴られた箇所から血が出ていたりと、軽い怪我では済んでいなかった。
周りからはやばいんじゃないかという声がしきりに聞こえる。
近くの交番から警察官がやってきてこの絵図を目の当たりにしていた。
思わず顔を背けてしまう警察官。
男たちには事情説明をしてもらうためかそこで待っているようにと名前と住所を記入させて待たせていた。
「災難だったね・・・お父さんたちは今病院に搬送されたからあとでおじさんたちと一緒に行こうね」
ぽんと肩に手が置かれる。びくっとしてしまうがその手が警察のものだと分かって安堵する。
そこに警察署からも応援が来て女性警官につれられて和真の元に来た。
何が起こったのかまったく分からないという状態のように見えた。
話しかけようとしたら和真の様子が本当におかしいと思った。目が虚ろで焦点が合っていなく、カチカチと歯を鳴らし、からだは小刻みに震えていた。
意識がなかったのだ。
「和真!?和真!?」
必死に話しかけるもまったく反応を見せない和真。
ヤバイと感じた女警官はすぐにパトカーに乗せて病院へ搬送させた。
「――――」
目を覚ました和真に気がついた飛鳥は急いで話しかける。
しかし口をパクパクと動かすだけで言葉が出てこない。
ヒューヒューと空気が抜けていく音だけだ。
自分の異変に気がついたのかのどを押さえる。
口を動かしてみるもまったく声がでない。

鳴きながら飛鳥に抱きつく。
涙は出ているのに・・・大きく口を開けて泣き叫んでいるのに・・・。
声がでない。
　担当医に呼び出されて事情を説明された。
どうやら和真は両親が目の前で殺されたことに大きなショックろ受けてそれで声がでなくなったという。これは心の傷なので、どうしようもないという。
これればかりは自分の力で乗り越えなければいけないというのだった。
それからしばらくは落ち込んで暗い表情だった和真も立ち直って笑顔を振りまくようになった。
しかしそれは嘘の仮面であり、その裏ではいつも泣いていたのだ。
両親がいないこと。そして声がでないために意思疎通ができないためにいじめの対象とされた。
傷にさらに塩を塗りこむようないじめ。
和真はもはや悲鳴を上げられないくらいに痛めつけられているのではないかと飛鳥は思った。
「という風に私たちには両親がいない。それが和真にとってはいじめの原因になったのね・・・」
ため息をつく飛鳥。
彼女も心底疲れているのだろうというのが感じ取れた。
そして怪訝そうな表情で聞いていたかっこう。
彼はまた別のことでその話を聞いていたのだろう。
また明日もいじめられるのだろうかと思うと胸が張り裂けるかのように辛かった。

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　１（後書き）

海斗「つらそうですね・・・」
かっこう「俺も似た境遇だったな。理由が違えどいじめはあった」
詩歌「かっこうくんに??」
かっこう「でも姉さんがいてくれたからよかったけど・・・」
海斗「シスコン??」
かっこう「なわけあるか!!あいつがブラコンなんだ!!」
詩歌「かっこうくんのお姉さんの名前ってなんていうのかな??」
かっこう「千晴・・・」
詩歌「あの人が!?」
海斗・かっこう「知り合い!?」
海斗「てなことでここで切らせていただきます。コメント・評価待ってます!!」

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　２（前書き）

海斗「さあ、とうとう昨日大台の１００話を突破しました。今日とうとう１０１話目。そろそろエンディングが見えてきました泉海斗です」

かっこう「呼んでる人はまだわからねえだろう??勝手に進めるな」

海斗「すんません。執筆のほうも滞りなく進んでいます。ネタバレになるんでここで話しませんが・・・」

かっこう「分かったからさっさと本編を始めろ」

海斗「ちょっと拳銃向けないで!?それでは始まりまーす」

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　２

昨日の話を聞いて、一つだけ疑問に思っていた。
もしかすると和真も虫憑きになるのではないか。
正直あれだけの経験をしたならばなる確率も高い。
ここまで何も起きていないことが不思議だった。
あれだけの光景を見て絶望を感じなかったのかと思う。
聞いていてまさか浸父でも現れたんじゃないかと思った。
しかし実質彼はまだ虫憑きではなかった。
まだあのときはかれに見入られるほどの夢ではなかったのだろうか。
カシュッと缶ジュースのふたを開ける。
鼻に匂ってくるジュースのにおい。
果物のにおいが鼻腔をくすぐる。
「このままスノウ・フライの観察がいつまで続くか・・・」
まだ迎えの局員が来ないために詩歌を観察するという任務が課せられているかっこう。
今頃新しく局員になった彼も採集試験の真っ最中だろうと思う。
１号指定を受けたくらいだからまだなぞが多い。
自分を同じ同化型の虫憑き。すなわち三匹目・・・アリア・ヴァレイの近くにいたということだ。
後ろからジャリを踏む音がした。
バッと振り返ってみるとそこにはお盆に昼食のおにぎりを乗せた詩歌が立っていた。
顔中にご飯粒をつけていることから何度も作り直したのだろう。
初めて彼女に料理をさせたときには大変なことになったので、代わりにかっこうがやることになったのだ。
それから少しずつ練習するようになって今ではおにぎりくらいはまともに作ることができるようになった。
「お昼にしよう。かっこうくん」

笑顔で話しかける詩歌にああとぶっきらぼうに言う。
本当はかっこうじゃなくて薬屋大助として彼女と話したい。
しかしまだ約束の日じゃない。
だからまだ薬屋大助と杏本詩歌はあってはいけないのだ。
「前よりはうまくできたんだ。食べてみて」
恥ずかしそうに勧めてくる。
手ごろな大きさのおにぎりにはしっかりとのりまで巻かれていた。
一体何が入ってるのやらと思いながら一口食べてみた。
それをじっと見ている詩歌。
塩がちゃんと利いていて、中身は今朝の残りの鮭だった。
確かに腕は上がっていると思った。
うまかったのだ。
「うまいよ・・・」
かっこうの口調でぶっきらぼうに言う。
本当は薬屋大助として明るくはしゃぐくらいにおいしいと言いたいのだが。
言えないことのもどかしさが心に募る。
なぜかあれだけ特環にいたときは体中を襲っていた痛みが詩歌といると嘘のように消えていた。
一体なぜだろうかとふと思った。
「よかった・・・私も食べてみよ」
そういって自分の口に運ぶ。
小さな口でもぐもぐと食べる姿はなんともかわいらしかった。
隣にいるのがなぜ薬屋大助じゃなくてかっこうなのだろうか。
彼女の目にはまったく別人に見えるだろう。
自分を知っているのは特環局員・・・かっこうでも薬屋大助でも同じく接してくれたあの子はもうここにはいない。
「かっこうくんはもう少ししたらここからいなくなるの??」
「ああ。ほかの局員が繰ればお前の観察という任務も終わる。俺は戻ってやるべきことをする」

「かっこうくんの夢は自分の居場所が欲しい・・・だったよね」
「ああ、それは今も昔も変わらない。でも・・・」
「でも??どうしたの」
どことなくかっこうが疲れているように見えた詩歌。
それは体力的なものではなく、精神的なもの。
幾多物戦いを抜けてきたのだから当然だろうと思った。
それでもここのところの彼を見ていると普通の同い年の少年にしか見えなかった。
しかし彼は虫憑きたちから忌み嫌われる最強の虫憑きで悪魔。
どんな孤独感を感じ続けてきたのだろうか。
「なんでもない。それよりあの少年からは眼を離さない方がいいな。虫憑きになってもおかしくない経験をしている」
「もし虫憑きになったときはどうするの??」
少し黙るかっこう。
彼は任務には忠実だ。
きっと特環に捕獲させるだろうと思った。
「そのときは・・・捕獲するしかない」
どことなく辛そうな顔を覗かせた。
その顔にはなぜ虫憑きが生まれるのかということがかかれているように感じた。
始まりの3匹という存在がある限り途絶えることのない虫憑きの誕生。
かっこうもそれは知っているはず。
それなのになぜそのような顔をするのか。
そしてなぜそこまでして強くあろうとしているのだろうか。
「どうしてかっこうくんは戦うの??」
なぜそこまでして強くあり続けるのだろうか。
そうふと思ったのだ。
潮の匂いが風に乗せられて漂ってくる。
波が規則的な音色を奏でる。

「・・・始まりの3匹を倒すため。そうすれば明日から虫憑きは生まれない。そうすればみんな居場所を失わずにいられる」
それを聞いて確信した。
かっこうは消して皆から夢を奪っているのではないということ。
自分たちとはまた違ったやり方で、それも虫憑き立ち全員の居場所を作ろうとしているのだ、守ろうとしているのだ。そのためにかっこうは強くあり続け、戦い続ける。
「それならお前はなぜ戦い続ける??」
唐突にかっこうが聞いてきた。
自分が戦う理由。
それは莉奈から受け継いだむしばねの皆を守り、虫憑きたちの居場所を作るため。
そういうとそうかと呟いた。
莉奈の名前がでたとき明らかに反応していた。
葉芝市での戦いで莉奈は成虫化した虫に耐えられずに命を落とした。
最後まで彼女の傍にいたのは毛嫌いしていたかっこうだった。
しかしその戦いのさなか、莉奈はかっこうが片思いしていた薬屋大助だということを知る。
そして死ぬ間際はかっこうではなく薬屋大助に抱かれながら死んでいった。
彼らが虫憑きで鳴く普通の男子高校生と女子高校生として出会っていれば普通に引かれ、普通にしゃべり、普通に付き合い、普通に笑っていられただろう。
ただ虫がいるかどうかでこれほど変わってしまうものだろうか。
虫・・・それがどんなものなのか。
ただ夢を喰らい、力を与えるだけのものなのだろうか。
出てこない答えを必死に探すことでしか、自分たちは前に進めない。

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　２（後書き）

海斗「長かったですね・・・今回ワード３ページ分ですからね」
かっこう「詰め込みすぎたんじゃねえか??」
海斗「いろいろ書きたいことがあったんですよぉ」
詩歌「かっこうくん・・・なんだか疲れてるよね」
かっこう「気にするな、これは仕方がないんだ」
海斗「虫憑きも大変ですね・・・。あ・・・講義のレポート書かなきゃ・・・」
かっこう「何枚あるんだ??」
海斗「・・・３枚。しかも提出日みんな同じ」
かっこう「かっこう!!」
詩歌「わわわかっこうくん!?何でいきなり拳銃と虫を同化させるってきゃー」
かっこう「早く終わらせて来い!!」
海斗「ぎゃー!!それではまた明日!!コメント・評価待ってます!!おいおい、まじで打つな!!」

夢語り得ぬ者　飛鳥　ＰＡＲＴ　０（前書き）

海斗「いよいよ話も中盤ですね」
かっこう「今日は俺の出番ないだろ・・・」
海斗「そんなに落ち込まないでくださいよかっこうくん」
かっこう「うるさい！！」
海斗「ぎゃあああぁぁぁ！！拳銃向けないんで！！」
詩歌「ええっと・・・本編スタートです」

夢語り得ぬ者　飛鳥　ＰＡＲＴ　０

夏の暑さにくわえてこの雨。
じめじめしてセーラー服が肌にくっついてくるのが鬱陶しかった。
飛鳥は担任に呼び出されて会議室に向かっているところだった。
進路について話がある。
それが担任が呼び出した理由だった。
飛鳥には大学へ行くお金がない。
海の家で稼ぐお金は残っている遺産の少しでものたしになればいいと思ってのことだった。
両親はそれ以外にも仕事をしていたために何とか生活は保てていたが、海の家とアルバイトだけではまったく足りなかった。
それに和真が高校まで行くために必要なお金も稼がなければいけなかったのだ。
彼自身は中学卒業後は働きたいといっているが、さすがに中卒で取ってくれるところは少ない。
最低でも高校は出ておいたほうがいいというのが飛鳥の考えではあるのだが。
「失礼します」
明かりがついた教室には先に来ていた教師が座って待っていた。
時間は5分くらい早いが始めるということだった。
大学に進学できるくらいの学力があるのにもったいないという教師。
しかし前からも言っているとおり、自分にはそんなお金はなく、１人の弟を高校まで行かせるためのお金が必要だという理由で就職を強調する。
頑として進学を受け入れない飛鳥。
彼女の過程状況を知る担任だから仕方ないと折れるしかなかった。
これから本格的な指導に入るといわれて教室を後にする。
彼女を待っていたのか、クラスメイトたちが話しかけてくる。

彼女たちのおおくは進学を希望していて、今も勉強に勤しんでいる。
夏の最後の思い出としてみんなで海に以降と計画していたらしい。
それなら自分が営んでいる海の家がある海がいいのではないかと提案すると即決定された。
「それより飛鳥の家に居候してる男の子・・・かっこうくんだっけ??本名なんていうの??」
「ううーん、本人も教えてくれないんだよね。かたくなに拒んでるって感じ??」
「名前聞かれちゃまずい理由があるのかな??」
「一緒にいた詩歌は教えてくれたんだけどね。詩歌は知り合いらしいけど、名前までは知らないって言ってる」
友達にかっこうと詩歌のことを話していた飛鳥。
言った当初から彼女たちはあってみたいと興味心身だった。
飛鳥地震の知りたいことだった。どことなくぶっきらぼうにしているが、本当は優しい少年なのではないかと思っていた。
それに何も言わずに仕事を手伝ってくれている。
アルバイトだと思い、給料を渡そうとしても、居候している身だからそれは受け取れないといわれた。
「ただの居候くんではないね。何か隠していると私は推理するわ」
推理小説の受け売りみたいなポーズをするクラスメイト。
確かに何かを隠しているように感じると飛鳥も思っている。
「それにしても海に2人で打ち上げられていたって言うのはどこからか逃げてきたって言う愛の逃避行みたいでいいですよねー」
なにやらファンタジーの世界の入り込んでいる子もいる。
それもありえると思う。
詩歌のほうはどこかのパーティーに行くときのドレスを着ていたのだから。
「飛鳥―、かっこうくんの特徴って何??」
「んー、よく考えてみるとそれといった特徴ないね。頬にある絆創膏くらい??」

「どこにでもいる平凡な男の子ってこと??」
「うん。でもなんだか普通じゃないって言うか、なんていうか不思議なんだよね。不思議っていうと詩歌もそんな感じかな??」
なぜかかっこうのことを思うと胸がどきどきする。
まだあって1ヶ月も経っていないというのに。
「あれー??飛鳥顔が赤いよー。もしかして恋??」
「かっこうくんに??きゃー」
「なな何言ってんのみんな??そんなことないよ!!」
必死に否定する飛鳥だが顔が赤いのでまったく説得力がない。
それをさらにからかわれる。
「それで今度の土曜日でいいかな??飛鳥のところに行くの」
「もう!!それなら大丈夫だよ。天気もいいって予報だから」
「水着何着てこー。ていうか運動してないから太ったかも・・・」
「大丈夫よ。まだ1ヶ月しか経ってないから」
そんな他愛もない話をしている4人。
飛鳥はこの後おきることにまだ気がついていなかった。

夢語り得ぬ者　飛鳥　ＰＡＲＴ　０（後書き）

海斗「体中が蜂の巣であります泉海斗です」
かっこう「コイツは人間ではないと確信したかっこうだ」
海斗「痛いよまったく！！というかまたフラグ立ててるよね？？かっこうくん」
かっこう「しらねえ」
海斗「そう言ってまら白をきるつもりかい？？まったく特環でもフラグボンボンの君がね・・・。いつか後ろから刺されるよ？？」
かっこう「刺すならあいつがやりうる・・・」
海斗「ああ・・・あの子ね」
詩歌「かっこうくん？？何はなしてるのかな？？」

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　３（前書き）

海斗「海ですね・・・」
かっこう「海だ・・・」
海斗「海と言ったら水着の鑑賞」
かっこう「変態か??」
海斗「かっこうくんだってもう視線がほら・・・」
かっこう「ぬあ!?馬鹿やろう」
海斗「何で怒るとすぐ拳銃ぶっ放すかな!?」
詩歌「ええっと・・・始まります」

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　３

朝から気温が高い日だった。
汗で服がへばりついたのが嫌だったので朝風呂に入ることにした。
すっきりしたところで朝食の準備がちょうど終わったところだった。
「おはよう、かっこうくん。昨日は暑かったね」
かっこうの前にシャワーを浴びていた詩歌。
うっかりサングラスを忘れるところだったために慌てた。
「ああ、おはよう」
いつものようにぶっきらぼうに返す。
飛鳥と和真にも挨拶をして皆で朝食をとった。
今日は土曜日で休日名ために多くの客が来るということで朝早くから海の家に向かった。
「あ、おはよー飛鳥。もしかして後ろにいるのがかっこうくんと詩歌ちゃん??」
海の家の前にはすでに3人の女子が立っていた。
飛鳥の友達だった。
「おはよーみんな。待った??」
「そんなことないよ。さっききたとこだから」
そういってよくある会話を果たして中へと入る。
中には着替え室が5つあり、男女共用であった。
鍵はかかる野で一応は大丈夫なのだが。
中に入ると友達三人はバッグを持って着替えに走る。
飛鳥たちはすでに家で着替えを終えていたために、調理の準備を始めていた。
「今日私友達と遊びに行くんだけど、少しの間任せててもいいかな??」
飛鳥がお願いと手を合わせて頼み込んできた。
まいったな・・・。それがかっこうの心の中の声だった。

多少はできるようになったがまだ飛鳥ほどうまくはできない。
飛鳥は大丈夫だとは言うが。それでも不安なものは不安なのであった。
「今後受験とかで忙しくなるから・・・。少しでもみんなと思い出が作りたいんだ」
少し寂しげな顔をして言う。
特環の局員でさまざまな学校にもぐりこみ、監視をしてきたかっこうだが。
思い出などはまったくとはいえないがなかった。
思い出として残っているのは今は永い眠りについている少女を含む3人の友達と遊んだ中学時代。
そして昨年のたった数ヶ月だが今は亡き少女の絵を見て、それに感動し、語り合った高校時代。
「それも立派な思い出か・・・」
「え??」
「いや・・・なんでもない」
こんな悪魔と呼ばれる自分にも思い出はあるのだ。
始まりの3匹を倒し、クリスマスにもう一度彼女と会い、それからたくさんの思い出を作っていく。
まだまだやるべきことが山のようにある。
飛鳥だって離れ離れになる彼女たちとの思い出くらい作りたいだろう。
だったらこんな不器用な自分が彼女にしてあげられることは・・・たった1つしかないだろう。
「分かった・・・。店のほうは俺と和真、それに詩歌で何とかする。だから飛鳥はみんなと思い出作りを楽しめよな」
彼女と会っていなければこんなことを言うことはなかっただろうなと、変わってしまった悪魔の自分に噴出しそうになった。
「ありがとう!!」
はじけるような笑顔でお礼を言う飛鳥。

きっと楽しい思い出ができるだろう。
そうかっこうは思っていた。
このときまでは・・・。

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　３（後書き）

海斗「どうでしたかね??かっこうくん」
かっこう「うるさい・・・」
海斗「ちゃっかり鑑賞していたよね??で??どうだった??」
かっこう「・・・いいんじゃねえか??」
詩歌「かっこうくん??何見てたのかな??」

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　４　（前書き）

海斗「いよいよ戦いが始まりそうですね」

かっこう「厄介だ・・・。俺がどれだけ後本気でたたかえるか分かってるのか??」

海斗「分かっていてもやめらえない。それが小説を執筆するということ、二次創作ということ」

かっこう「てめえ!!ぶっころす!!」

海斗「ギャー、デジャビュ??」

詩歌「ああもう、またですか??ええっと、始まります」

海斗「ギャース!!」

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　４

歓声を上げながら飛鳥たちは海へと走り出していった。
残ったかっこうたちで家の切り盛りをするべく、準備に入っていた。
どれくらいの時間がたったんだろうか。
仕込が終わってからふと時計を見るとすでにお昼に差し掛かっていた。
早いなと時間のながらの早さを感じるかっこう。
こんな間にも虫憑きは生まれて、むしばねがそれを保護しようとし、特環と衝突する。
それの繰り返しがなされているのではと思う。
彼らがまだ本当の敵を知らない。
自分たちが倒すべくはむしばねでも特環でも。
新しい創虫会でもハルキヨたちでもない。
それがなんなのか。
知っているのは自分を含めた5人だった。
だったという風に過去形なのはすでにレイディー・バード・・・立花莉奈が他界しているからだ。
彼女は最後の最後で本当の敵に気がつくことができた。
そしてもう1人は生きているが、永い眠りについている少女。
かっこうがふゆほたる・・・詩歌を欠落者にした任務以外で最も苦戦した任務の対象だった少女・・・一之黒亜梨子。
今は亡き元相棒の獅子堂戌子の代わりとしてかっこうの背中を預かった少女。
不死の虫を封じ、かっこうたちに大喰いを倒させるために自ら眠りについた。
”また、明日ね“
その言葉はまたいつか会えるということを予兆しているようだった。
きっと会える。

そう信じてかっこうたちはまだ戦っているのだ。
「いらっしゃいませ」
詩歌の接客する声ではっと意識を現実に戻す。
数人の男女が入ってきていて、注文をしていた。
それを聞いて、早速作り始める。
それから何時間か海水客が途切れることなく店にやってくるために三人はてんてこ舞いとなっていた。
しかし何とかやり終えたときはほっと息をつくことができた。
「大変だったね。かっこうくん汗びっしょりだよ??」
そう言ってポケットからハンカチを取り出して、汗をぬぐってくれた。
フワリと香ってくる甘い香り。
思わずドキッとしてしまう。
「悪いな」
「んん、いいんだよ」
2人はしばらく他愛もない話に花を咲かせていた。
すると遠くからなにやら悲鳴に近い声が聞こえてきた。
「ちょっとやめてください!!」
「離して!!」
「ちょっとくらいいじゃん??俺達と楽しいことしようぜ??」
「そうそう、女の子だけじゃあ楽しみにかけるでしょう??」
眼を凝らすと飛鳥たちが大学生くらいの男たちに囲まれていた。
どうせナンパのために来ているのだろうと思った。
かたくなに断ろうとする飛鳥たち。
しかし男たちもしつこい。まったく引こうとしない。
「いい加減にしてください!!私たちはあなたたちにまったく興味はないんです!!」
「んだよこの小娘が!!」
切れたら本音が出てきた。結局からだ目当てで来ている男が大半なのだ。

手を伸ばしてくる男たちに、柔道技をかけて投げ飛ばす。その隙に逃げようとしたが、意外にも早く起き上がってきた男に捕まる。力任せに砂浜に押し倒される。ほかの友達も同じように捕まっていた。

「離しなさいよ!!警察呼ぶわよ!!」

「へへ、だったら呼んでみろよ。こんなところからいくら叫んでも届くわけないだろ??」

確かにそうだった。

ここから海の家までかなり離れている。届くかはまったく分からない。

しかし、こんな男に手を出されるのだけは嫌だった。

そんな男の手が水着に手がかかる。

性欲丸出しで鼻が伸びていた。

こんなやつらに・・・。悔しくて仕方なかった。

しかしそんな飛鳥の元に。

「――――」

なにやら小さな影が男にぶつかった。男は前のめりに倒れる。

ほかの男たちも何があったのか驚いていた。そこにいたのは。

「和真!?」

小さな和真が息を切らせてそこに立っていたのだ。

姉たちの危険を感じて走ってきたのだった。

そんな数馬の姿を見た男たちは見る見る怒りに顔が染まっていく。

「――――」

和真は声が出ない口を必死で動かす。飛鳥はそれを感じ取るもできないという。

“早く逃げて!!”

そういったのだと感じ取っていた。

向こうからはかっこうが走ってくる姿があった。

「このクソガキがぁ!!」

場きっという嫌な音とともに、小さな和真のからだは飛ぶ。

「やめて！！」
和真をかばうように立つ飛鳥。和真は鼻から血を出して涙目である。
ほかの友達は急いで逃げていたためにかっこうと合流し、海の家に走っている。
「これ以上和真をいじめないで！！」
必死にやめるように叫ぶ。
すると男たちはにやにやとした表情で飛鳥の水着に手を添える。
「だったら少し俺達の相手してくれるよな？？」
「！！」
びくっとからだが震えた。ぞわぞわと嫌な悪寒が背中を走る。しかし和真をこれ以上傷つけられないし、ほかの友達が傷つくのも見たくない。
「わ・・・分かりました」
弱弱しく言うしかできなかった。和真の顔には絶望しか映っていない。力のない自分に絶望していた。
かっこうは感じ取っていた。
今まさに虫憑きが生まれようとしていることを。
そしてどこからか聞こえてくる教会の鐘の音。
絶望を誘う教会の鐘の音。
かっこうは思わず手を握り締める。まだ生きていたのかと歯噛みする。一体どうすればやつを倒せる。そう思うしかできない。
そして急にかっこうと和真の視界が暗闇に覆われ、そして現れる巨大な教会。
海の家にいた詩歌も見ていた。一体なんなのか。詩歌は始めてみる教会。
かっこうは知っている。この教会の持ち主を。
目の前でふらふらと中へと誘われる少年に向かって必死に叫ぶ。
「行くな！！行けば、虫憑きにされてしまう！！」
しかし少年は止まらない。今少年が抱える心の闇はかっこうには分からない。

そして少年が入ってしまった教会の扉が閉められた。また1人の虫憑きが産声を上げる。
しかしかっこうはそれを唇を噛んで悔しがるしかできなかった。
そして手を握り締め、呟く。
「浸父・・・」

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　４　（後書き）

海斗「ぜーぜー、ついに登場か??始まりの三匹・・・浸父!!」

かっこう「まだ欠片があるのか・・・。本体を叩くしかないってのに、やつは一体どこに??」

海斗「きっと大丈夫!!」

かっこう「何でそんなに楽天的なんだか・・・」

詩歌「それより和真くんはどうなるの??」

海斗「あのままじゃあ・・・」

かっこう「まずい・・・」

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　２（前書き）

海斗「さあ、戦闘シーン書くぞ」

かっこう「少しはましなものを書けよな」

海斗「善処します」

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　２

いきなり目の前が闇に包まれ、大きな教会が現れた。
中に入っていく和真。
後ろではかっこうがなにやら叫んでいた。
見ただけでも恐怖を感じる教会。
うわさに聞いていたが、あれが始まりの３匹のうちの１匹浸父の教会なのだろうと思った。
特殊型を生み出す浸父。
むしばねの中にもアイジスパをはじめとする何人もの特殊型がいた。
しばらくすると教会が消えうせ、闇も消えてしまった。
ぽつんと立っている和真。
飛鳥が男たちに捕まっている。
「いけない！！」
急いで詩歌もサンダルに履き替えてそちらへと向かった。
日差しが強いために砂が熱を持っていた。
熱いと感じながらも急いで向かう。
「――――」
なにやら和真が叫んだ。しかし言葉は出てこない。
「まだなんか用かこのクソガキ！！」
男の拳が腹にめり込んだ。
しかし悲鳴を上げたのは数まではなく男のほうだった。
手からは皮膚がはがれて血が出ていた。
突然何が起きたのか分からないという飛鳥と男たち。
かっこうと詩歌は和真が何をしたのかを理解していた。
和真は虫憑きだ。
だからその力が発動しているのだ。
砂が和真の腹を防御しているらしく、さらにわずかに振動している砂はチェンソー見たいな状態だった。それに暴走していた。

「まずい・・・」
かっこうがそういうと急いで家のほうに走る。
特環のコートと自動式拳銃を取りに行くつもりらしい。
「かっこうくん!!これ!!」
詩歌が走り出そうとしたかっこうを呼び止める。
手にはコートとゴーグル、自動式拳銃があった。
ここに来る前に一応と思い、もって来ていたのだった。
かっこうは最初は呆気にとられていたが、受け取るとフット笑い、すばやく着替える。
「ありがとうな、スノウ」
かっこう虫が拳銃と同化し右腕に変化が生まれる。
感謝の言葉を残し、和真に向かって跳躍する。

暴走した和真はあたりの砂を制御できない力で操っていた。
操っているというよりも、器に小さな和真から漏れ出した力が勝手にやっていることなのだが。
「和真やめて!!」
飛鳥の必死の叫びもすでに大幅に夢を失った和真に届かない。
砂がドリルのように回転して男たちに襲いかかる。
一撃で倒すのではなく、少しづつ傷つけるというように拷問じみた光景が飛鳥の目の前で起きていた。
男たちの悲鳴が響き渡る。
ほかの海水客たちも逃げ惑っている。
あたりの砂は男たちの専決で赤く染まり、海にも流れ出した血で赤く血の海と化していた。
「――――――」
言葉にならない叫びを咆哮する。
そのたびに砂の竜巻が起こり男たちを取り囲んでいく。
すでに血を流しすぎて、意識が朦朧な男たち。
助けてくれと必死で和真に叫ぶ。

しかし和真はそんな彼らを虚ろな瞳で見下してあげていた手を下げる。
その瞬間に竜巻は一斉に男たちに向かっていく。
男たちは悲鳴を上げながら身を丸める。
ダンダンっと銃声が鳴り響く。
竜巻を巨大な緑の弾丸が貫いていく。
竜巻が消えるたびに和真が後ろにのけぞる。
特殊型とはいえ、媒体となるものに虫が宿る。
それを通して和真はダメージを受けていた。
男たちの前に着地したかっこうは速く逃げろと叫ぶ。
はっはいと言いながら男たちはおぼつかない足取りで逃げていく。
そして目の前の今にも成虫化しそうな和真がいた。
器が小さいための制御ができずに、一方的に夢を喰われているのだ。
特環での訓練を受けていれば後々は制御できるようになるだろう。
そう思ったかっこう。
そのためには早めに暴走を食い止めなければいけない。
「かっこうくん!!」
後ろにはまだ逃げていなかった飛鳥がいた。
「何やってるんだ。早く逃げろ!!」
飛鳥がいては守りながらの戦いになる。
それができたとしても、かっこうはなるべく一般人を戦いに巻き込みたくなかった。
「和真を置いてなんていけないわよ。たった1人の家族なんだから」
飛鳥たちの両親は昔同じような大学生たちによって不慮の事故でなくなっていたのだ。
これで和真もいなくなってしまえば飛鳥は一人ぼっちになってしまう。
それこそ居場所がなくなってしまうのだ。
「和真は俺が助ける。絶対に死なせたり、欠落者にはしない」
これ以上居場所をなくす人たちを見たくなかった。

かっこうの瞳にはそういう覚悟があった。
「でも・・・」
「お前がいたんでは足手まといだ。さっさと逃げろ」
そっけなく言い捨てる。
そうでもしなければいつまでも残っているだろう。
心苦しいが、そうするしか考えられなかった。
「本当にたすけてくれるの??」
飛鳥が聞いてくる。
かっこうは何も言わずにただ頷くだけ。
「分かった・・・、お願いね」
そう言って走り出す。
ようやくかと嘆息するかっこう。
少し時間がたったが、まだ大丈夫だろうと思った。
まずは和真自身を止めなければいけない。
かっこうはたたずむ和真に向かって突進した。
かっこうが迫るのを見た和真は敵とみなしたのか砂を操り捉えようとする。
それを横っ飛びにかわして再び迫る。
しかし砂が足場だということで思い切った跳躍やら移動ができない。
さらにここ全体が和真にとっては領域だった。
はっきり言えばかなりのハンデがあった。
それでも最強の虫憑きであり、悪魔の彼は負けるわけには行かなかった。
波のように襲い掛かる砂。
横も縦もだめ。
「こうなったら・・・」
右腕に力を込める、夢がはがれる代わりに巨大な砲撃が波を貫く。
貫いた先には防御手段を失った和真がいた。
そして目前に迫ったかっこうは拳銃を発砲する。
しかしそれもまた薄い砂の壁に阻まれる。

舌打ちする間にも後ろから攻撃が迫る。
仕方なく横っ飛びでかわすも、砂に足を取られて少しローブを破かれた。
そして四方八方からはドリルのように回転した竜巻が迫っていた。
まずいと考えたかっこうは回避しようと足に力を入れた。
しかし。
「しまった!!」
足を砂で捕まり、身動きが取れなかった。
そして目前に迫る竜巻。
「かっこうくん!!」
詩歌の叫び声が聞こえる。
しかしその詩歌の向かってくる姿を最後にかっこうは砂の竜巻に巻き込まれた。

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　２（後書き）

詩歌「かっこうくんが・・・かっこうくんが！！」

海斗「うん、そうだね。かっこうは飲み込まれちゃったね」

詩歌「何でそんなに落ち着いていられるんですか??」

海斗「それは次回になれば分かること。コメント・評価待ってます！！」

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　３（前書き）

海斗「かっこうが飲み込まれ戦えるのは詩歌だけです」

詩歌「かっこうくん・・・」

海斗「どうなるのか。本編をどうぞ！！」

「かっこうくん！！」
詩歌の叫びに反応したかっこうだが、砂の竜巻に飲まれていった。
「かっこうくん・・・そんな・・・」
千切れたコートの切れ端が潮風に乗って飛んできた。
絶対に信じたくない。かっこうがやられたなんて。
しかし埋もれたところにはまったく気配がない。そこには砂の球体ができており、中で何が起きているのか、まったく分からない。
虫憑きはここにはかっこう・詩歌・和真の三人しかいなかった。
しかしそのうちの１人であるかっこうが生死不明となってしまった。
かっこうと同じくらいの力を持つ詩歌だが、どうすればいいのか分からなかった。
和真は力に翻弄され、暴走しているというのは見ていて感じるのだが。
詩歌の肩辺りに現れたのは真っ白な蛍・・・冬蛍だった。
どうしよう・・・。どうすればいいのか、そればかりだった。
「詩歌・・・あなたも・・・」
後ろで詩歌のふゆほたるを見て驚きをあらわにしている飛鳥がいた。
かっこうだけではなく、詩歌も虫憑きだった。
しかし彼らは全力で弟の和真を救おうとしている。
世間一般では忌み嫌われている虫憑きだったが、飛鳥にとっては彼らが何をしたのだろうと言うことだった。
彼らは好き好んで虫憑きになったのではない。だから彼らが一般の人を傷つけるなんてことをするとは思っていなかった。
「――――」
何かを叫んでいる和真。その叫びに呼応して竜巻が発生し、詩歌と飛鳥に向かって飛んでくる。

「逃げて！！」
詩歌の叫びが早いか、飛鳥とともに逃げながら竜巻をかわす。しかし四方八方から逃げ場を奪うかのように竜巻が発生し、攻撃してくる。
「和真！！もうやめて！！」
飛鳥の叫びも聞こえないのか、竜巻の威力も数も変化がない。むしろ増していた。
「なんで・・・？？何で声が届かないの？？」
もう涙声で言う飛鳥。虚ろな数馬の瞳にはもう自分は映っていないのではと悲しくなる。
「まだ・・・まだ間に合います。かっこうくんはまだあきらめていない。私もできることを・・・」
「詩歌？？何をするつもり？？」
立ち止まり、和真と対峙する詩歌。竜巻が詩歌に標準を合わせたように迫りくる。
離れていたために飛鳥にはまったく向かってこない。
しかしこのままでは詩歌も竜巻に飲まれてしまう。
『壊れて・・・』
詩歌の声だが、また悲しみに包まれた声色。夏だというのに白い雪が降り注ぐ。それもものすごい量だった。
それに触れた竜巻が次々と崩壊していく。触れる和真も苦しみにもだえる。
「――――」
詩歌の背後から巨大な砂の波が押し寄せる。それも雪が降っていない場所からの奇襲だった。
「あ！！」
『消えて・・・』
冬蛍も反応してか、雪を降らせる。しかし消されて分裂した部分から再び竜巻が起こり隙間をぬって詩歌を襲う。
「きゃ！！」

薄手の上着を着ていたが、特環のコートのように頑丈でないためにかすっただけで千切れてしまう。そこからは血がにじんでいた。
それに夢を喰われすぎたのか、詩歌にも疲れが出てくる。
遊覧船での戦いでもかなりの力を使っていたためにあまり全力を出したくなかった。しかしこの場面で手加減はできなかった。
冬蛍からまばゆい光がうせていく。それと呼応するように雪が降るのもなくなっていく。
「――」
好機と見たのか和真は砂を操りかっこう同様詩歌も砂の球体へと閉じ込める。
まずいと思ったが遅かった。逃げるまもなく詩歌も同様に球体へと飲み込まれていった。

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　３（後書き）

海斗「ちょっと短かったかな??」

・・・

海斗「2人ともいないからどうしよう・・・」

・・・

海斗「会話つづかねぇぇぇ!!」

海斗「うぅぅさみしいよぉぉ（涙）。感想と評価待ってます!!」

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　４（前書き）

海斗「それでは閉じ込められた二人はいったい・・・??」

海斗「本編どうぞ!!」

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　４

真っ暗な空間に閉じ込められた。
たっていられるくらいの大きさらしい。
壁に触ってみるとなにやら振動しているようだった。
「イタ！！」
見えないがなにやらぬるっとした感触が手にあった。
血が出たようだ。
どうやら周りの壁は触れると怪我をするようだ。
ここで力を使えば何とかなるかもしれない。
しかし失敗すれば虫に反応して攻撃される。
今は虫を隠しているために大丈夫だが、もし攻撃されるとひとたまりもないだろう。
「かっこうくんは大丈夫かな・・・？？」
自分よりも先に閉じ込められたかっこうのいる球体からはまったく何も反応がなかった。
一体何が起きているのだろうかと心配だった。
『・・・嫌だ』
どこからか男の子の声がした。
耳をそばだてる。
暗闇の向こうからだった。
『どうして死んじゃったの？？お父さん、お母さん・・・』
まさかとは思ったがこの声は和真ではないかと詩歌は思った。
『どうして僕だけ声がでないの・・・？？』
『どうして誰も学校に来てくれないの？？』
『どうしてみんな僕のことをいじめるの？？』
『痛い』
『悲しい』
『辛い』

『消えたい』
『でもお姉ちゃんが悲しむ』
『お姉ちゃんに迷惑ばかりかけてる』
『僕っていていいのかな??』
『どうして僕には力がないんだろう』
そのほかにもたくさんの声が聞こえてきた。
きっと声を失ってからの和真の悲痛な叫びなのだろう。
なぜか詩歌の心の中に流れ込んできた。
自分もそんなときがあった。
そして虫憑きになっていた。
それから友達を助けようとしたが虫憑きだからとみなから気味悪がられた、そして特環という組織に追われ始めた。
たくさんの虫憑きを欠落者としてしまう。
そして彼女自身も限界となって、道端に座って絶望に打ちひしがれていたときだった。
そんな彼女に救いの手が刺し伸ばされたのは。
その手を出してくれたのは同い年と思える少年だった。
わずかな会話でお互いが似ていると感じた。
そして少年に残り少ない自分の夢を託す。
『お前いつか必ず夢を思い出せよ』
それが少年との約束だった。
そして今こうし立っていられるのは約束を思い出し、夢を思い出したからだ。
そんな少年と再び出会い、ここにたどり着いた。
しかしお互いに新たな虫憑きの攻撃によって防戦一方である。
こんなときにみんながいてくれたら・・・。
力強い仲間たちの顔を思い出す。
今頃何をしているだろうか。
こんな頼りない自分だけど探してくれているのだろうか。
そんなことを色々考える。

しかし今ここにいるのは詩歌1人である。
何とかしてここから脱出しなければいけない。
ドゴオォォォンという大きな爆発音が響く。
なんだろうかと思っているとさらにそれが2度3度と連続で響く。
そして静かになったかと思ったら詩歌の閉じ込められている球体が大きく揺れた。
ドゴオォォォンという大きな音が近くで響く。思わず耳をふさいでしまう。
そして何発か聞こえたあと、ガラガラと球体にひびが入り、崩れていく。
「無事か!!」
突然明るくなり、思わず眼をつぶりそうになる。
日差しの向こうに誰かがいた。
心配そうに見てくるのは少年だった。
ゴーグルの片方が壊れて裸眼だった。
どこかで見たことのある顔・・・しかし彼はこんなところにいるはずがない。
そう思うがどうしても彼と目の前の少年が重なってしまい、それが頭から離れない。
黒いコートはずたずたに千切れていて、もはや防御の役割はしていなかった。
そのためか体中に傷があり、血が流れていた。
右腕だけでなく、すでに半身、左腕まですでに同化している少年がいた。
彼の名前を呼びながら手を伸ばす。
少年はその手をしっかりと握り締めて詩歌を引きずり出す。
「かっこうくん」
かっこうは生きていた。

夢語り得ぬ者　詩歌　ＰＡＲＴ　４（後書き）

海斗「いやいや、良くぞご無事で」

かっこう「ころす・・・」

海斗「にぎゃあああぁぁぁ！！」

詩歌「かっこうくん！？そんなことしていいの！？」

かっこう「ああ、どうせこいつは人間じゃないから死なない」

海斗「そうなんだぜい☆きらりってだからってやっていいことと悪いことがあるっしょ」

かっこう「今のはやっていいこと」

海斗「我に人権をぉぉぉぉ！！」

詩歌「ええっと・・・コメント・アドバイスがありましたらお願いします」

海斗「フォオオォォオ！！」

夢語り得ぬ者　かっこう　ＰＡＲＴ　５

「うおおぉぉぉ！！」
一気にかっこうは虫にありったけの夢を食わせる。
それとともに同化の範囲が広がっていく。
とうとう左肩までもが侵食された。
　これで本気になって戦えるのも指５本で足りるくらいになったと感じているかっこう。
　考えている余裕はない。
　そう思ったかっこうは一気に引き金を引き、拳銃を連射する。
ドゴオオオォォォォンという大きな音が響き渡る。邪魔者だと判断したのかあらゆる方向から攻撃が襲い掛かる。
特環のコートをちぎっていく。
しかし少しでも早く出るために躊躇などしていられなかった。
そして何発目かの弾丸が一気に砂の壁を打ち抜く。
脆くなったところに、強化された拳を打ち付け、破って脱出する。
肩で大きく息をするかっこう。
密閉された空間で酸欠だったのだ。
あたりにはへたり込んだ飛鳥と、直立不動で格好を見つめる和真、そしてとなりに同じく球体があった。
まさかと思った。
あたりを見渡すも詩歌の姿がない。
「まさか・・・詩歌！！」
一気に血の気が引くのを感じた。
もはやそこからは無意識の行動だった。
拳銃を球体に向けて放つ。
先ほど同様の爆音が響き渡る。
後ろからは再び竜巻がかっこうを襲う。
どれだけからだが傷つこうと知ったことではなかった。

ただ詩歌のことを助けなければいけないと言うことで頭がいっぱいだったのだ。
そしてとうとう崩れた隙間に腕をつっこみ無理やりこじ開ける。
中にはいなくなっていた詩歌が立っていた。同じく酸欠だったのか、顔が赤い。
「大丈夫か！！」
かっこうが叫びながら手を伸ばし、しっかりと掴む。
「かっこうくん」
自分のことよりもぼろぼろにかっこうの心配をしてくる詩歌。
良かったと心の中で、薬屋大助として安堵していた。
しかし安堵するもつかの間、詩歌をお姫様抱っこしながら攻撃をかわす。
いきなりのことに詩歌は何が起きているのか分からないという表情。
しかし少し顔が赤いのは今の体勢だからだろう。
あらゆる方向からの攻撃をかわし、反撃を加える。
しかしかっこうの攻撃はですべて硬い防御壁によって遮断される。
「ちっ！！このままじゃ埒が明かない。それに時間もない」
飛鳥との約束を守らなければならない。
しかし相手はまったく動く気配もなければ、ここは恰好のホームだった。
それに比べてかっこうのできることは限られており、さらに足場が悪いことから動きも鈍っていた。
「どうしようかっこうくん。このままじゃあ和真くんが」
「分かってる、今それをどうにかしようと考えてる」
とはいっても何も思いつかない。
相手は説くｓｙ型であるためにかっこうが欠落者にすることはできない。
だからといってどうすればいいのかといわれると何もいえなかった。
「和真！！」
飛鳥が走り出していた。

飛び交う竜巻に襲われながらも和真の元へとたどり着く。
しかし和真の瞳は虚空を見つめるだけ。
まったく飛鳥を視界に入れていない。それでも飛鳥は話しかける。
「もうやめて・・・みんなが傷ついちゃってる」
抱きしめながら言う。
涙が頬を伝い、雫となって和真の頬へと落ちる。
“暖かい・・・”
心が壊れる思いばかりを感じていた和真に暖かい温もりが広がる。
誰かが自分を抱きしめていると感じる。
しかしそんな一馬の気持ちと裏腹に竜巻は次々と飛鳥を襲う。
からだが鮮血で赤く染まる。
それでも泣き叫びたいのを必死で我慢して和真に語り続ける。
「和真が辛いのは分かってるよ・・・。声が出ないもんね・・・。
でもそれはそうだと決め込んでるからだよ」
瞳に光が戻る。
“お姉ちゃん・・・”
自分を抱きしめているのが飛鳥だと気づく。
しかし姉の血だらけの姿を見てまた驚く。
“自分がやったんだ・・・。守りたいって思ったお姉ちゃんを・・・
”
そう思うと再び光が小さくなる。
しかし向こうから叫びが聞こえる。
「負けちゃだめだよ!!虫に負けたらお姉ちゃんを守れないよ!!」
再び光が戻る。
向こうには飛鳥同様血だらけで傷を負った詩歌が立っている。
隣にはコートを着ているが、かっこうだとすぐに分かった。
そのかっこうもコートがずたずたで、飛鳥や詩歌以上の傷が目立っ
ていた。
「お前の決意はそんなものか!?守りたいと思うなら負けるな!!
最後まで虫に抗え!!」

“虫に・・・これはみんな虫がやったの??僕が虫に負けていたから・・・”
「・・・や・・・だ」
口から言葉が切れ切れで出てくる。
飛鳥が抱きしめる力が強まる。
“負けたくない・・・”
己の中にいる虫にはっきりといった。
負けたくないと。
結局敵というのは身近にいたのだ。
なぜ気がつかなかったのか。
弱い小原和真の敵は自分であり、虫憑きの小原和真の敵は己の虫だった。
徐々に竜巻が収まり始める。
それでも弱弱しい攻撃が彼らを襲う。
まだ決定的なものがないのだ。
それは和真も分かっていた。
「大丈夫だから!!不安になることはないんだよ!!」
「いい加減に目を覚ませ!!いつまでも下向いてるんしゃねえぞ!!」
詩歌とかっこうの声が響く。
負けない・・・そう自分で決めたから。
「もうやめろぉぉぉぉ!!」
あの日両親が殺されてからぷっつりと切れてしまった声が響いた。
今まで溜め込んできた分だろうか、どこまでも響くのではないかと思えるくらいだった。
そのとたんに竜巻は霧散し、元の砂へと変わる。
そして一気に疲れが押し寄せてきて、姉の飛鳥の胸へとからだを預けた。

夢語り得ぬ者　飛鳥　ＰＡＲＴ　１（前書き）

海斗「ついにクライマックス！！」

夢語り得ぬ者　飛鳥　ＰＡＲＴ　１

あの事件から数日がたった。
特環というかっこうの所属する機関から数名が派遣されてきた。
とある少女などはかっこうの包帯だらけの姿を見てすぐに引きずって車へと押し込んだ。
「ま、待て！！ねね。まだあいつに言ってないことがある」
「言ってないってなにをですかかっこうさん??まさかスノウ・フライに愛の告白ですか??」
「何でそうなる！！そんなわけないだろ！！」
かっこうとして入っても何も感じなかったが、薬屋大助としては胸が痛んだ。
詩歌の迎えには同じくむしばねの仲間が来ていた。
アイジスパと元特環にいたなみえが来ていた。
「なみえ。詩歌を・・・スノウ・フライを頼むぞ」
「まさか特環の・・・それも悪魔と呼ばれるお前に言われるとは思わなかったわ、かっこう」
「スノウを待つやつがいる。そいつのためだ・・・」
「案外優しいのね。でも私たちはあなたを・・・特環を許すつもりはないわ」
「まだそんなことを言っているのか??いい加減に気がつけ」
「何を言いたいのか分からないけど、スノウに何か吹き込んだりはしてないわよね」
かっこうをにらみつけながらなみえが言う。
どれだけ時間がたとうがまだお互いに相容れないのだろうか。
かつてはそうではなく、力を合わせて戦ったときもあったのに。
「亜梨子・・・」
「誰の名前??もしかしてかっこう・・・あなたの恋人??」
「ばっ馬鹿言え！！何で俺があんながさつなやつを！！」

「かっこうくんにも好きな人がいるの??」
いきなり話に入ってきた詩歌。
突然のことに驚いてしまった。
「ちっ違う!!昔の・・・相棒だ」
「かっこうさん・・・まだあの人のこと覚えてるんですか??」
ねねが後ろからたずねてくる。
ひたすら前を歩き続けるかっこうの視界に入るのは同じくらい強いものたちだけ、歩いていけるものだけだった。
しかし彼女は今は・・・。
「・・・ああ。あれは俺のせいだからな」
かつて弱い自分のせいで大切な人を失った。いなくなったわけではないが、それでもいつ再び合えるか分かったものではない。
「かっこう、そろそろ出発だ。戦闘を停止させておける時間はとうに過ぎているぞ」
「分かってる。いちいち言わなくてもいいだろ」
やや切れながらも言い返すかっこう。最後に詩歌を一瞥し車に乗り込む。
「かっこうくん!!」
後ろから声がかかる。飛鳥だった。
弟の数馬は虫を制御できるようになるために、特環に送られることになったのだ。
最後の面会というわけでもあった。
「お姉ちゃん・・・」
言葉で会話をするのは何年ぶりだろうか。
それが今引き裂かれようとしているのだから、辛くないわけなかった。
弟と姉・・・。まるで自分と千晴をいているような感じだった。
千春は自分のことをずっと忘れていた。
しかし思い出すはずのない、アリア・ヴァレイと自分のことを思い出し、会いにきてくれた。

今はまたどこかに行っていて行方は分からないが生きていればまた会えるだろうと思っていた。
「元気でね・・・。待ってるから」
笑顔で言う飛鳥だが、瞳には涙があふれていた。
特環から多額の援助を貰い、大学へと進学が決まった飛鳥。
もちろん受験で見事に合格したのだ。
「今まで本当にありがとう、お姉ちゃん。ずっとお礼が言いたかった」
そういうのを最後に扉が閉められ、車が発進する。
しばらくは我慢していたが、ダムが崩壊したように涙があふれてきた。
「和真・・・和真・・・」
弟までいなくなってしまった。
これで自分は一人ぼっちになってしまう。
それはとても悲しいことだった。
「飛鳥さん、和真くんだって辛いんです。せっかく声が出るようになって、たくさん飛鳥さんとおしゃべりできると思っていたのに、自分では虫を制御できないからという理由で特環に送られる。和真くんのことも考えてください」
「詩歌ちゃん・・・」
後ろから詩歌が言うのをただ黙って聞いていた。
“生きていればまたきっとどこかで出会える”
そのとおりだと思った。
それなら今以上の小原飛鳥になっていなければ和真に顔向けできない。
たくさんの思い出を作ろう。
そしてまたあったときにはそれを惜しみなく語り合おう。
そう思った。
「そろそろ私たちも行かなければ。スノウ」
「行くぞ。皆が待ってる。心配したんだからな」

「すいませんでした。それでは飛鳥さん。またどこかでお会いできることを楽しみにしています」
ぺこりとお辞儀をしてどこか高級感あふれる車に乗り込む詩歌。
中にはワインを片手に詩歌に抱きつく少女がいた。
すぐに乗り込むと、車は走り出して、すぐに小さくなっていった。
「また会おうか・・・そうだねきっと会えるよね」
笑顔で帰路に着く飛鳥。そこには決意に満ちた顔があった。
一つの道を歩いたかっこうと詩歌。特環とむしばねが再び協力し合う日が近いことをまだ彼らは知らなかった。

ここからずっと遠くにある場所。
『出してあげて・・・誰かここから彼女を出してあげて。私の声が聞こえるなら』
とある暗闇の中で銀色のりんぷんが漂っていた。

（完）

夢語り得ぬ者　飛鳥　ＰＡＲＴ　１（後書き）

海斗「次回からは赤牧市を舞台にした主人公佑介の戦いです」

佑介『ようやく俺の出番か・・・。長かったな』

海斗「中央支部に巣食う闇・・・。黒いローブ・白い繭・魔王。そして一堂に会する狂戦士・虫憑きの王・勇者・・・。彼等がであったとき物語は見えない終末へと進む。それは最高で最悪の終末へと誘うボーイ・ミーツ・ガール・・・」

海斗「ここまで読んでくださった皆さん。どうもありがとうございます。今後の執筆に生かしたいと思いますので、コメント・アドバイスをいただければ嬉しいです。また質問なども受け付けております。それではまた明日！！」

次回予告　夢戻る銀槍

夢戻る銀槍　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　０（前書き）

海斗「いよいよ後半に入ります。赤牧市を舞台に何が起きるのか？」

夢戻る銀槍　THE　OTHER　PART　0

ここは薄暗い部屋。
　ここに、わずかに銀色に輝く眉があった。
まるで生きているかのように、ドクン、ドクンと脈を打っている。
それを観察しているのは白衣を着込んだ男たちとレディースーツの女性。
「最近になってさらに脈動が大きくなっています」
1人の研究員が女性に対して言う。
女性はそれを聞いてにやりと笑みをこぼす。
「復活が近いのかしらね」
「復活といえば??これは一体なんなんですか??」
「そうです。われわれはただ繭だとしか聞かされていません。これは一体何の繭なんですか??」
研究員たちは矢次ぎに質問してくる。
女性は・・・魅車八重子は少し考え込む。
ここで彼女のことをばらしても言いのだろうか。
この事を知っているのは、かつて大喰いと激しい戦闘を繰りひろげ生き残った凄腕の虫憑きたちだけだった。
かっこう・・・ハルキヨ・・・霞王・・・ねね。
多くの虫憑きをそろえて戦ったが彼らはまったく歯が立たなかった。
その原因の一つが今この中で眠っているだろう不死の虫だった。
そしてそれを操っていた局長もまたいまだ眠ったままだった。
そしてこの眉を一度破ってみようと実験してみたことがあったが、どんな力を駆使してもまったく効果がなかったのだ。
今もこの中で眠り続ける少女。
彼女を助けようと最後まで抗った少年。
その少年は今も彼女のことを覚えているだろうか。
覚えているはずだと魅車は言い切れる。

一つ屋根の下で暮らし、学校ではいつも一緒。
戦いでもお互いの背中を預け、戦った。
「これはまた別の側面でも面白くなりそうね」
何のことだろうかと訝しげな表情の研究員たち。
刻一刻と虫憑き立ちのベクトルが変わり始めているのは魅車自身も感じ取っていた。
むしろこれは遅すぎるくらいだった。
本当はあの戦いのあと、特環とむしばねの争いなど起こるはずがないと少し恐怖していたくらいだ。
しかし事実期間が延びた。
長すぎるといってもいいくらいだ。
その間に戦力となるはずだった戦士たちが多くなくなっていった。
かつての最強も今ではぼろぼろで、いつ倒れるかも分からない。
魔人も限界が近いことくらいは知っている。
白い少女もまた、然りだ。
そして今上で戦闘訓練を受けている青年もまた、兆候が現れ始めている。
「今から話す頃はすべて真実よ・・・あなたたちがこれを聞いてどう思うかは自由だけれどね」
くすっと笑う魅車だが、研究員たちはそれから不気味な何かを感じ取る。
しかし聞いておかなければ気がすまないのが研究に身を投じた彼らの性だ。
神妙な顔付きで頷く彼らを見て、魅車の口が開かれた。

夢戻る銀槍　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　０（後書き）

海斗「コメント・評価待ってます」

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　０（前書き）

海斗「いよいよ訓練がされている風景です」

佑介『まったく、ここには強い奴がいないのか??』

海斗「口調などが変わっているのは本編ですべて明らかにします・・・」

佑介『俺はいつもどうりだっつうの』

証明によって明るく照らされた巨大な部屋では、先ほどから大きな激突音が響き渡っていた。
なにやらもやもやとした霞が、巨大な黒い鎌と激突してはお互いを吹き飛ばしていた。
「おいおい、もっと俺を楽しませてくれよ！！新１号指定よ！！」
金髪ロングの女性と思わしき人物が壁をけって跳躍しつつ、霞によって目の前にいる青年に向かって襲い掛かる。
青年はその化け物じみた右腕に持つ、大きなカマを構えて迎え撃つ。
何度目の激突だろうか。
霞を弾き飛ばし、切り裂く。
鎌に付けられた長い鎖を振り回し、女性に向かって放つ。
「ち！！」
舌打ちをしながら交わそうと空中で体勢を変えようとするも、間に合わずに足に絡めとられる。
そのまま引き摺り下ろし、勢いそのままで向かってくる白いコートの女性に向かって青年は大きなカマを振り下ろす。
ガギィィンっという大きな音とともに、霞が切り裂かれる。
しかし鎖がいつの間にか切り離され、女性は脱出していた。
「あぶねえ！！もう少しで真っ二つになるところだったぜ」
女性が笑いながら再び距離をとるために後方へと下がる。
背中にはさらに大きな霞が現れていた。
「霞王、まだ続けるのか？？」
「ああん？？当たり前だろ！！俺はまだテメエに攻撃一つ食らわせてねえんだ！！この腹が煮え来る思い、全部ぶつけてやるぜ！！」
霞王という女性。
女性らしからぬ、罵声を上げて青年に向かって霞による攻撃を繰り出す。

しかし鎌を弁天のように軽々と回し、その遠心によって霞を切り裂いていく。
そして鎌に残っていた霞を斬撃波として霞王に向かって放つ。
「おおっと！！」
己の霞を使って放たれた攻撃をかわす。
先ほどまでいたところは大きくカマイタチにでもあったかのように切り裂かれていた。
「霞王さんも死神さんもよくやりますね。もう延々と４時間も戦闘訓練しているのに」
「霞王さんが先頭好きだとは知っていましたが、死神さんもそのような傾向があるのでしょうか??」
「それはないと思うよC。あの人はただ霞王さんに付き合ってるだけだよ」
「どっちの訓練なんでしょうかね??」
特殊防御ガラスの向こうで訓練を見ているのはねねとCだった。
よく飽きずに疲れを見せないで訓練できるなと感心する2人。
入ったばかりの死神だが、すでに火種1号指定で東中央支部であるが、訓練するなら中央支部が言いということで移動してきたのだった。
「まったくあんな荒々しく使っても壊れないんだから、私の作った武器はやはりすばらしい」
後ろからの声に振り向く。
そこには死神に武器を提供したさくらが立っていた。
中央支部に着たその日、美車から火種1号指定が使える武器を作るようにといわれた。
そして本人との対面でどんなものかと聞いたとき。
死神が使うようなカマが欲しいっと言われ、絶対に壊れない武器を作るという信念で作り上げた。
そして青年。。。死神が使っているのはそのさくらが作り上げた武器・・・死神のカマだった。

そのカマに同化した虫は死神の右腕をほぼ侵食し、爆発的な力を与えていた。
そのためか霞王はほとんど防戦一方であり、攻撃してもすべて弾き返されていた。
それが霞王の闘争心に火をつけてこんな時間になるまで戦闘訓練が続けられていた。
「おらおら、どうしたさっきまでの勢いがなくなってるぜ??」
霞による串刺し攻撃をかわし続ける死神だが、如何せん、同化しすぎて疲れが出始めていた。
さらにあの兆候も・・・。
『コロセ・・・』
頭に響くこの声は聞き覚えのない、ひどく冷たく低い声色。
それが気になって訓練に集中できていなかった。
霞王の叫びと攻撃が繰り出される。
強化された脚力で回避する。
しかしとうとう部屋の隅に追い詰められてしまった。
背中には壁だけ。
手にはカマ一つ。
目の前には槍状になった霞が無数に浮遊している。
霞王はとうとう追い詰めたという愉悦の笑みを浮かべている。
「終わりダァ!!」
一気に飛んでくる槍。
このままではやられて終了だと思った。
『蹴散らせ・・・』
無意識に左手がカマの巨大なはにのびる。
そして爪を立てて、その刃を引っかくのだった・・・。

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　０（後書き）

海斗「いよいよ本当に死神化してきましたね」

佑介『これはとある分離型の虫憑きの攻撃だ・・・』

海斗「衝撃波・・・これを使っていたのは分離型火種１号だった・・・」

海斗「コメント・アドバイス待ってます」

夢戻る銀槍　???　ＰＡＲＴ　０（前書き）

海斗「今日は一体誰なのでしょうか??」

佑介『???ってまだ登場してないやつだな』

海斗「そうですね、それにまだ姿を現していない人物」

佑介『どんなやつかはいつ判明するんだ??』

海斗「ちゃんとこの銀槍で分かります」

夢戻る銀槍　???　PART　0

目の前に映るこの光景は一体なんだろうと思った。
自分と同い年くらいの少年少女たちが真っ黒に染まる空の下に集まり、空に浮かぶ女性らしきものと戦っているようだった。
いつか見たこの光景。
けして忘れるはずがないと思うが、どうしても思い出せない。
紅蓮に燃える炎を操る少年。
その少年は何やら得体の知れない黒い物体とぶつかり合う。
わずかに削っただけで、少年はその黒い集団に激突され、真下へと落下する。
それでも何度も何度もそれにぶつかっては、吹き飛ばされていたのだ。
痛くないのだろうか。
そう心配に思った。
そして次に眼に飛び込んだのは血だらけで宙に浮く女性と退治する少年だった。
ドクンと心臓がはねたのを感じた。
自分は知っている、あの少年たちを。
そして何より、真っ黒なコートを着ている少年のことは誰よりも理解しているように思えた。
誰なのよと思い出せないことに腹立たしく思う。
少年の後ろには銀色の槍を持った少女がうずくまっている。
そしてさらに後ろには少女が2人、肩を寄せ合って震えていた。
助けてあげなきゃ。
そう自然に思えた。
しかし足が動かない。
というよりも自分は今どこにいるのだろうと思った。
この光景はどこから見ているのだろうか。

「燃やし尽くしてやるぜぇぇぇぇ！！」
炎をともした少年が何度目かの特攻をはかる。
「終わりだ！！大喰い！！」
血だらけの少年の右腕からエメラルドグリーンの砲弾が飛び出した。
しかし食らったはずの女性はまったくの無傷。
笑みもまったく絶やさない。
それを見る少年の表情は曇るばかりだ。
疲れが表れ、ひざを折ってしまう。
「あらあら、かっこうちゃん。もうおねんねの時間かしら？？」
「ちくしょう・・・」
かっこうという少年は馬鹿にされたことにいらだっている。しかし言うことを聞かない己の体。
「邪魔者もいなくなったし、食事の時間とでも行きましょうか？？」
少年と少女の後ろで震えている2人の少女のうちの片方に向かって語りかける大喰いという女性。
女性にそんな呼び名をするなんて最低だと思った。
しかし違和感も残った。
「恵那ちゃん・・・あなたの夢を教えて頂戴？？」
夢・・・その言葉に何か覚えがあった。
しかし、思い出せない。
「私の夢はずっとみんなと・・・」
恵那という少女が自身の夢を言おうとしたその時。
「薬屋大助なんて言うやつは存在しなかった。俺はただ友達の振りをしていただけだ。お前が勝手に俺と仲良くなっていたと勘違いしていただけなんだ」
「そんな・・・薬屋くんがいないだなんて・・・嘘だよね？？」
「嘘じゃない・・・俺は・・・かっこうだ！！」
少女の瞳から涙が溢れ出した。
友達だと思っていた少年からの一方的な拒絶。
否、きっと彼女は少年のことが好きだったのだろう。

しかしその少年からの拒絶と、それ以上にそんな存在はいないという現実・・・これは少年の嘘。
「ひどいことするわねかっこうちゃん。せっかくのお友達の夢を壊しちゃうだなんて。食事の邪魔をしたことについてちょっとお仕置きしなきゃいけないわね」
確かにひどいことをしたと思った。
しかし少年も辛そうな表情で先ほどのせりふを言っていた。
きっと彼はずっと友達でいたかったのだろう。
ずっとこの地にいたかったのだろう。
しかしそれでは目の前の女性の思う壺だと判断したので、そのような行動に走った。
さらに激しい戦いが続いた。
少年少女たちは防戦一方。
金髪の少女も後ろに仲間の2人を守りながらの戦闘で、防御しかできなくなっていた。
「おい!!かっこう。このままじゃあやばいぞ!!」
「分かってる!!チクショウ、不死の虫憑きさえ倒せれば・・・」
不死の虫憑き・・・再び聞き覚えのある言葉だった。
少年は血が流れていることなどお構い無しに、攻め込む。
やめて!!何度もそう叫んでいるのにまったく聞こうともしない。
だんだんむかむかしてくるのを感じた。
そして少年の後ろにいたポニーテールの少女が銀色に染まる槍を手に、なにやら集団を従えている男の前に立つ。
そしてまるで超のように羽が背中から生えたようにして、一匹の虫を包み込む、迫り来る黒い集団を銀色のりんぷんが消し飛ばす。
少年がなにやら叫んでいる。
少女は少年たちのほうを見て言った。
「また明日ね」
少女の顔には笑顔があった。
そして羽が完全に閉じられ、最後に残ったのは少女と、一匹の虫を

包み込んだ巨大な繭。
そしてその虫を操っていた男はまるで死んだかのように眠っていた。
先ほどまで炎を操っていた少年は世界が変わったと叫んでいた。
世界がどう変わったのだろうかと思う。
しかしその少年は詰まらなさそうだ。
まるで玩具を取り上げられた子供のような顔だ。
「つまらねえ世界だ」
舌打ちをしながら炎の少年が吐き捨てる。
血だらけの漆黒のロングコートの少年はただ、少女が入っている繭に手を置き、少女の名前を呟き続けている。
「・・・」
いつの間にか自分の意識は少年の隣にあった。
少年は自分の存在に気がついていない。
名前が聞こえてきた。
「亜梨子・・・お前がいなきゃ・・・意味ないだろ」
「!!」
思い出した。
自分が誰なのか、少年たちが誰なのか。
『かっこう・・・薬屋大助。ハルキヨ・・・世果埜春祈代。そして自分・・・私は一之黒亜梨子・・・槍使いと呼ばれた1号指定の虫憑きだ』
暗い地下最下層の部屋にある白い眉がさらに銀色の光を強めた。

夢戻る銀槍　???　ＰＡＲＴ　０（後書き）

海斗「とうとう復活ですかね」

佑介『どんなやつなんだ??』

海斗「それはかっこうととても仲がいい女の子でですね・・・」

佑介『彼女か??』

海斗「彼女候補の１人??」

佑介『あいつは一体ドンだけフラグ立ててんだ??』

海斗「おそらく特環の女性人は皆??」

海斗「何やら騒いでますがここできります。感想いただければ幸いです」

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　１

鎌の刃からはキィイインという音が響く。
それを聞いた霞王は突然頭を抑えて空中でバランスを崩し、落下する。
着地を失敗したのか、床にごろんと転がったまま、頭を抑えて悶絶している。
「霞・・・王さん」
上で見ていたねね、C、さくらもまた同様に頭を手で覆っている。
苦しそうにしている霞王だが、それでも戦闘訓練を続けようと立ち上がる。
しかし表情は真っ青で、汗がひどかった。
「まだだ・・・これ以上負けるわけにはいかねえ」
何が彼女をそれほどまでに戦いへと駆り立てるのだろうか。
「霞王、お前はもう限界だ。今日は休め！！」
上からの指示が飛ぶ。
しかし黙ってそれを聞く霞王ではない。
とことん戦闘狂であった。
「うるせぇ！！俺はかっこうやハルキヨに負けた以外にこんな新入りに負けなきゃいけねえってのかよ！！俺はまだやれる！！」
霞王は現在火種三号指定の虫憑きだ。
ランクだけでも十分強い部類に入っている。
しかし目の前にいる青年はどうか。
特環に入ったばかりで、まったく任務は無経験。
そんな青年がいきなりの火種一号指定になったのだ。
それを認める声は多かった。
それはあの遊覧船での戦闘であのかっこうの手助けをしただけではなく、大喰いの使ったふゆほたるの力を吹き飛ばすほどの破壊力を持つ力を持っている体。

それに何でも元特環で、かつてはかっこうの背中を預かっていたあさぎ・・・獅子堂戌子からの指導も受けたのだから、戦闘スキルは十分だった。
あとは特環としての戦い方、任務の遂行の仕方、戦いの中での非情さを身に付ければよいと東中央支部の支部長代理の柊子からの報告だった。
それらを身に付けるに当たっては、強者ぞろいの中央支部がいいと思われたために送られてきたのだった。
そして連日の戦闘訓練で死神は飛びぬけた強さで次々と訓練の相手をなぎ倒していった。
とうとう付き合いきれないものが続出したために霞王が抜擢された。
しかし結果はこのとおりである。
『弱すぎる・・・こんなのが虫憑きとは。ディエストロイも腕がなまったな』
死神の口から、声色は同じでも、まったく口調が違う。
というよりもこれが彼の本当の姿なのだろか。
霞王は思わず身震いする。
「2人とも訓練室からでるんだ!!」
上からは教官が叫ぶ。
うるせえと一括する霞王。
つかつかと霞王に近づく死神。
黒いゴーグルの奥からは細められ、鋭くつりあがった瞳が見えた。

「なんだよ死神・・・俺様を見下そうってか??は!!俺様はまだお前に負けたつもりは・・・」
しかし霞王の言葉がそこで切れた。
「ぐっ!!何しやがる・・・」
霞王の胸倉を掴んだ死神。
じたばたともがくが如何せん、身長差がありすぎる。
足がつかずにバタバタともがくだけだ。

蹴飛ばしたりもするがまったくびくともしない。
「離しやがれこのクソヤロウ！！」
『弱いものがごちゃごちゃ言うな。本当なら土に返してもいいんだぞ？？それよりも存在自体を消してやろうか？？』
ぞっと怖気がした。
目の前の男はそれを平然と言ってのけたのだ。
やるといえば戸惑いもなくやってのけるだろうその冷酷さ。
それは悪魔と恐れられるかっこうよりも非常かもしれないと感じた。
こいつは最強だ・・・止められるのは指5本にはいってしまうと感じた。
かっこう・・・ハルキヨ・・・槍使い・・・。
彼らがいない今、この青年を止められるのは誰もいない。
「ちくしょう・・・」
『ふん・・・最初からそうしていればいいものを。魅車！！このあとは何かあるのか？？』
「支部長に対してその態度はあんまりだと思うけどまあいいわ。これからあなたは私に愛され、そして私を愛する」
『そうなるかはお前しだいだな。まずは命令に従うだけだ』
「それならこの地をよく知っておくことね。損は無いはずよ？？」
『そうか。それなら霞王とC、それにねね。案内しろ！！』
「何で俺達がおまえなんかの案内をしなきゃいけねえんだよ！！」
しかしそんな騒ぎ立てる霞王だが。
「きゃあ！！」
「まあ！？」
「大胆だな・・・」
C、ねね、さくらがそれぞれ呆気にとられる。
「離せこのヤロウ！！変態ヤロウ！！」
『こうでもしなきゃ、お前は逃げるだろう？？』
肩に霞王を担いだ死神。
顔を朱に染めてバタバタしている霞王。

そんな霞王を連れて、死神は訓練室を後にした。

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　１（後書き）

海斗「コメント・アドバイスがあればお願いします」

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　２（前書き）

海斗「最近点数の変動が大きく内心不安な泉海斗です」

海斗「感想をいただければ著者のやる気に拍車がかかります。どうか願いします」

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　２

気がついたら訓練室を出ていたところだった。
頭がくらくらしたので、更衣室で私服に着替え、支給されていた飲み物に口を付ける。
冷たい液体がのどを潤す。
「ふぅ・・・」
霞王が目前に迫っていたところまでは覚えている。
しかしそこからまったく記憶がないのだ。
しかし体に残っている戦ったという感触。
そしてそれによる疲れ。
ドンドンと更衣室を叩く音が聞こえる。
霞王がなにやら早く出て濃いと叫んでいた。
どうやら自分が知らないうちに何かをお願いしていたらしい。
ドアを開けるとそこにはいらいらが沸点に達しようとしている霞王・・・御嶽塊アンネリーゼがそこにいた。
同じく彼女を抑えているＣ・・・堀内愛理衣とねね・・・夜森寧子が同じく私服姿でいた。
「どうしたんだ??これからお出かけか??年頃の女の子は好きだからな」
ビキッと青筋が立った音を聞いた。
次の瞬間ダァァァンという音とともに、死神・・・佑介はアンネリーゼによって壁に叩きつけられていた。
愛理衣も寧子もやっちゃったという呆れ顔である。
自分が何か悪いことでもしてしまったのだろうかとぽかんとしている佑介。
そんな佑介の胸倉をつかみ、顔を引き寄せて言う。
「テメエ・・・俺様にあれだけ恥じかかせやがったのにまさか忘れたとか言うんじゃねえだろうな??」

発言を間違えれば殺される。
そんなさっきを彼女から感じ取っていた。
ヤバイ、それが佑介の感想だった。
愛理衣と寧子に助けを求めるように顔を向けるも、頑張ってという哀れみの視線を返された。
先輩・・・とは言っても年下だが、彼女たちに見捨てられた。
そして目の前にはさっさとはけと言い寄ってくるこれまた少女。
修羅場を迎える佑介。
考えてもまったく思いつかない答え。
しかし何もいわなければきっと殺される。
覚悟を決めていうことにした。
「そういえば・・・俺ってまだこの赤牧市について知らなかったんだよな。だからみんなに案内頼んだったんだよな」
「分かってたらさっさ言えよな。たく、無駄な時間を使っちまったぜ」
舌打ちをしながら外へと向かっていくアンネリーゼ。
良かったと胸を下ろす佑介。

そんな彼に2人が近づいて言う。
「危なかったですね、死神さん」
「アンネさん怒ると怖いですからね」
「まったくだ・・・。あんなかわいい顔してるのに、どこにあんな凶悪な顔が潜んでるんだか」
「あれ??もしかして死神さん・・・アンネさんのことが??」
「何言ってんだよC。俺達はまだあったばかりだぜ??」
「それでも一目ぼれって言うのがありますよ??きっとそれなんじゃないですか??」
「アハハ、2人ともその話はもうおしまいにしようか。目の前に般若がいるからね」
え??というかわいい声を出しながら前を見るとそこには。

「きゃあ!!」
「アンネさん・・・??」
そこには話を聞いていたのだろう。
顔を真っ赤にしたアンネリーゼがもはや噴火前に火山の状態で立っていた。
どうやらなかなか来ない彼らに痺れを切らしてやってきたらしい。
そしたら聞こえてくるは佑介が自分に一目ぼれだかなんだか抜かしている話。
そんな話をしているくらいならさっさと来いと切れていた。
「このやろう!!俺様が待っててやったてのにまだこんなところでふざけたこと抜かしてやがったのか!?」
待てと叫んだがアンネリーゼの拳が止まることはない。
それを手のひらで受け止めたはいいが、そのままの勢いで2人ともつんのめってしまった。
「おわ!!」
「ぐは!!」
アンネリーゼが佑介を押し倒す形で転んでしまう。
そしてお決まりのパターン。
佑介の腹の上に馬乗りになっているアンネリーゼ。
お互い視線を向け合わせているだけで動こうともしない。
長い長い沈黙が流れる。
「あのーそろそろ降りてくれませんか??こんな恥ずかしい展開は初めてなもんで」
思わず敬語口調になってしまう。
「わわわ!!こいつが悪いんだ!!こいつが狙ったかのようにやったんだ!!俺は俺は悪くない!!」
絶対に自分の非を認めようとしないアンネリーゼ。
最後まで認めようとしなかったアンネリーゼに対してわかった俺が悪かったと頭を下げた佑介。
ようやく許しを得た佑介。

かなりの時間を食ったがようやく案内が始まったのだった。
しかしその案内がすべての運命を決めることになるとはまだ誰も知らなかった。

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　２（後書き）

海斗「シリアスからかけ離れることになります」

佑介『かなりほのぼのとしているな』

アンネ「何かおもしろいことでもオキルノデスカ??」

海斗「アンネさん、猫かぶってますね・・・」

アンネ「ああん??テメエ、ぶっ殺されてえのか!?」

海斗「わわわ、嘘です嘘です!!霞を出さないで・・・ってぎゃあぁぁぁぁ!!」

愛理衣「うわ、鮮血が飛んでますね」

寧子「早く治療しなきゃ」

海斗「・・・コメント・アドバイスがあったらどうかお願いします・・・。それが著者の願いです・・・ガク」

夢戻る銀槍　THE　OTHER　PART　1

ホルス聖城学園高等部3年の九条多賀子と西園寺恵那は中等部からの親友だ。
今日もまた2人して買い物に来ているところだった。
2人ともすでに大学への進学が決まっており、残り少ない高校生活を謳歌しようという算段だった。
しかし本当はここにもう2人の少年少女がいるはずだったのだ。
しかし彼らは3年も前の虫憑きの問題に巻き込まれ、行方をくらませていた。
薬屋大助と一之黒亜梨子。
2人とは仲が良かった行方不明の2人。
亜梨子の家に居候していた大助はまるで召使のようにこき使われていたイメージが強い。
しかし文句を言って反抗する姿がなんともかわいらしかった。
それを見ていた多賀子も恵那も面白くて笑ったのを覚えている。
「もう高校卒業なんだね」
多賀子の言葉に頷いて答える恵那。
たくさんの思い出をたくさんの友達と作った高校時代。
中学の最後は悲しみからなかなか立ち直れなかったが、また2人に会えると信じて今日までやってきたのだ。
しかし今日までまだ彼らとあったことはない。
「薬屋くんと亜梨子・・・元気かな??」
「きっと元気にやってるわよ。あの2人のことだからまた主従関係が続いてるんじゃない??」
「あはは、そうかもね」
あのときの戦いで薬屋大助はいないとはっきり言われた恵那。
ずっとみんなと遺体という夢を壊されたときは目の前が真っ暗になったのを覚えている。

しかしあの時はそうするしかなかったようだ。
あのまま自分が言っていたら自分も虫憑きになっていたと思う。
それを薬屋大助が救ってくれたのだ。
今になってようやく分かった彼の不器用なりの優しさ。
デパートに入り、衣服コーナーを回っている2人。
中にはたくさんの人々が歩いていた。
休みだからということで学生の姿もちらほらと、中にはカップルもいた。
「私もあんなふうに回りたかったな・・・」
「恵那・・・」
自分の横にあの少年がいてくれたらどれほど嬉しかったか。
きっとそうなれば亜梨子との争奪戦になったかもしれないと笑えた。
「どうしたの??笑っちゃって」
「え??亜梨子も薬屋くんの子と好きだったのかなって思ったの。もしそうなら争奪戦になるなって」
「そうねー、亜梨子だけじゃなくてほかにもころろとかCとかっていう子もだし、ねねとかあさぎとかも薬屋くんに好意を抱いてたって言ううわさだったよ。あと強敵ふゆほたる」
「確かに薬屋くんて地味そうに見えて意外とももててるんだよね。やっぱりいつもの徒あのかっこうて言うときのギャップがいいのかな??」
それはあるわねという多賀子。
昔話に花を咲かせながら服を買い込み、喫茶店でお茶にしていた。
「離せ!!こんな服誰が着るか!!」
「そんなこと言わないでクダサイ。せっかく私が選んだのですからキテクダサイヨ佑介さん」
「アンネさんそれはちょっと恥ずかしくないですか??」
「そうですよ・・・これはちょっと男の人には」
向こうの私服コーナーで男性が女の子たちの囲まれているところだった。

しかし少女たちには見覚えがあった。
気になって多賀子と恵那は近づいてみる。
「やっぱり！！」
多賀子の声に４人が振り返った。
すると少女たちも多賀子たちを見て目を見開いていた。
「アンネリーゼさんに寧々ちゃんに愛理衣ちゃんだ！！」
恵那が一人ひとりをみながら言う。
「久しぶりだね！！またここに戻ってきてくれたの？？」
「オヒサシブリデスネ恵那さんに多賀子さん」
「詳しいことはいえませんが、そうなりますね」
「今はこの人の案内であるいてたんです。佑介さんも早く自己紹介してください」
そう言って愛理衣に引き出される佑介。
突然目の前に現れた青年。
意外と整った顔に腰まで伸ばされた黒髪はゴムで止められていた。
ボサボサと無造作ヘアーに黒縁眼鏡。
聞いてみるとこれは伊達眼鏡らしい。
黒を基調としたラフな格好をしていた。
「俺は相場佑介。こいつらと一緒にいるということで、虫憑きだ」
九条多賀子・西園寺恵那という少女とあった佑介。
２人はアンネリーゼたちと3年前に会っていて、友達関係だったという。
「ホント久しぶりよね。元気にしてた？？」
「エエ、オカゲサマデコノトオリ」
お嬢さまことばになるとどうしても片言にしか聞こえないのは自分の耳がおかしいのだろうかと思う佑介。
「結構仲が良かったんだなお前ら。すぐにまた打ち解けられてる」
「最初に会ったときはアンネさんは帰国子女って感じだったし、あの学校の中でも一番にきれいだったんじゃない？？」

「そうね、結構告白されたんじゃない??」
こんながさつなアンネリーゼがまさかと思う佑介。
確かに静かにしていればかわいいというか、きれいだとは思うのだが。
裏の彼女・・・本当の彼女はもっと凶暴な性格だから、それを知れば近寄るのは相当のマゾッケがあるやつだと思った。
「最後に会ったのは・・・」
そこまで言うと空気が一気に醒めた気がした。
言おうとした恵那が思わず口をつぐんだのだった。
どうしたのだろうかと思う佑介だが、どうしても話しかける言葉が見つからない。
皆表情が暗い。
アンネリーゼは顔がこわばっている。
愛理衣は唇を噛んで何かを悔しがっているようだった。
「ええっと・・・みんなの出会いのきっかけはなんだったの??」
耐え切れずに聞いてみる。
すっと顔を上げた多賀子が言う。
「虫憑きではない私が言うのもなんですが・・・みんな欠陥(バグ)によって引き寄せられたんです」
「欠陥(バグ)??」
「花城麻里・・・彼女が最初の原因でした」
寧々が重い口を開ける。
佑介はそれから何か重大なことを聞いてしまったのではないかと感じ取った。
それはそれは本当に小さな欠陥(バグ)だった。
しかしそれがかっこう・ハルキヨ・レイディー・バードという最強の虫憑きを一つの道に引き寄せた。
そして彼女たちの背中を押したのは、花城麻里から虫（夢）を託された一之黒亜梨子だった。
その一之黒亜梨子と親友だった多賀子と恵那。

「かっこう・・・あいつもここにいたのか??」
「佑介さんはかっこうくん・・・薬屋くんの子と知ってるんですか??」
佑介は詰め寄る恵那に押されてしぶしぶ話す。
最初にあったときは最悪の出会いだった。
自分の彼女・・・虫憑きだったが、彼女を欠落者にされたのだ。
それから遊覧船での戦いで、大喰いを倒すのを手伝った。
その大喰いも創虫会の誰かが媒介となって表した、幻想に過ぎないのだが。
「そうですか・・・薬屋くんはまだ生きていてくれてるんですね」
良かったと安堵している恵那。
よほど心配するほどの何かがあったのだろう。
「亜梨子さんがいなくなったときの薬屋くん・・・とても辛そうだったから」
思い出すような表情。
あの冷酷なかっこうがたった一人の少女に対してそんな感情を持つだろうか。
もしあるとしたら佑介もそれを知っている。
愛・・・。
もしかしたらかっこうは無意識でも意識的にでも彼女のことを・・・
一之黒亜梨子のことを愛していたのかもしれない。
聞いているだけだと主従関係とあまりそういう関係に発展しそうにはないと思うのだが。
しかし話に出てきた不死の虫憑き・・・死んだ虫憑きの虫がその友達について回る。
そして人格が入れ替わる、不死の虫を抱いたまま、眠りについた少女。
『フフフ、いよいよ時が来るようだね』
頭のそこで響く声。
声色は佑介のそれだった。

＞助けて・・・＜
ふと後ろから聞こえてきた声。
振り返ってもそこには歩いていく人たちだけだ。
自分に話しかけたものではないのだろうと思い、向きを戻す。
どうしたのかと聞かれたがなんでもないと返しておいた。
『ヒヒ、いつまで自分を偽り続けるんだよ佑介。本当のお前は』
「うるさい」
誰にも聞こえないくらい小さな声で言う。
自分に話しかけてくる本当の自分・・・だと思う存在。
いつから彼が話しかけてくるようになったのだろうか。
思い返してみてもそれらしいきっかけは見つからない。
「お前は誰なんだ??」
『だから何度も言ってるだろ??馬鹿かおまえは』
「うるさい」
自分に馬鹿にされているのでなんだかいつも以上に腹が立った。
『いやお前は馬鹿だ。自分の虫の力を知らない。その存在の意味も知らない』
「俺の虫・・・の力や存在の意味??」
一体何のことを言っているのだと、言い表せぬ不安に襲われた。
そして気になるあの声。
助けを呼んでいる声。
きっと空耳ではないと思っていた。
それについては頭に響く声は何も言わないからだ。
「調べてみるか」
佑介は先に戻ると彼女たちに言い残し、早足で戻っていった。

夢戻る銀槍　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　１（後書き）

海斗「ちょっと長くなりましたが読んでいただけたことに感謝します。いよいよ後半に入りますが、今後もよろしくお願いします」

海斗「コメント・アドバイスお願いします」

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　３（前書き）

海斗「これと平行してまた新しいムシウタの作品を書き始めました」

佑介『相変わらず行き当たりばったりだな』

海斗「今はムシウタ熱ですからね。そちらも同じく呼んでいただければ嬉しいです」

佑介『俺の出番はあるのか??』

海斗「今のところない」

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　３

中央本部に帰ったあと、資料室にもぐり込み、時間を忘れて調べ物に走っていた。

“槍使い・ハンター・赤牧市・モルフォンチョウ・花城麻里・一之黒亜梨子”

さまざまなワードを聞き、それにそって調べが進む。

「大喰いとの戦闘・・・。かっこうのやつ、実際に戦ってたんだな」

資料だけでなく、モニターに映し出されたのは激しい戦いの爪あとを移した写真たち。

相当激しい戦闘だったのだろう、砂浜に大きなクレーターができ、海水の水面がかなり低くなっていて、周りには破壊された岩がごろごろと転がっていた。

報告書には戦闘を行った彼らではなく、魅車八重子の報告が記入されていた。

不死の虫と槍使いと繭の関係という題名で機密ファイルに保管されていた。

実際はこれを1号指定でも見ることは許されておらず、上司の許可が必要だった。

しかし佑介はハッキングに成功し、持ち出していたのだ。

そして最も知ってはならない情報を目にする。

「浸父・・・がここにいる??しかも映ってるのってまさか・・・」

暗い部屋にひっそりと椅子の座っている黒いフードをかぶった人物。

果たしてからが人間であるかどうかは分からない。

しかしその映っている人物を佑介は知っていた。

蒼陽市で戦ったときの浸父の姿と同じだった。

彼は欠片を作り出し、生き延びている。

そして本体が目の前にあるのだ。

殲滅すると言い張った浸父が目の前に映っていた。

まるでこちらの視線に気がついているかのようにじっとこちらを見ていた。
背筋が凍る感じがした。
そして別の画面には真っ白で大きな繭があった。
周りには銀色のりんぷんが舞っている。
『助けに行かなくてもいいのか??』
また頭に響く声。
『本当はもっと知りたいんじゃないか??特環の闇の部分について』
「それは・・・」
『隠すなよ。まあ、隠しても俺にはばればれだぜ??なんたって俺はおまえ自身だからな』
まったく隠し事ができなくなった今。
確かに知りたかった。
聞こえてきたあの助けを呼ぶ声。
あの中にいるだろう槍使い・・・一之黒亜梨子。
そして不死の虫。
ここにはまだまだたくさんの闇が潜んでいる。

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　３（後書き）

海斗「コメント・アドバイス待ってます！！」

夢戻る銀槍　？？？　ＰＡＲＴ　１（前書き）

海斗「覚醒まじか・・・」

夢戻る銀槍　???　PART　1

『ここは・・・??』
＞ここはあなたの虫が作り出した繭の中だよ、亜梨子＜
『その声・・・まさか麻里??』
興奮しながら言う亜梨子。
ふわふわとからだが浮いている感じがする。
動かそうにもからだがあるのかも分からないという常態だ。
そして目の前には黒い虫が。
『不死の虫・・・』
＞亜梨子はそれと一緒に永い眠りについたんだよ??覚えてない??＜
もう3年になることを聞かされ唖然となる。
戦いに敗れた彼らは一体何をしているだろうか。
またいつものように馬鹿みたいにつっこんで無茶しているのではないかと思えたならない。
＞亜梨子は誰に会いたいの??やっぱるあの奴隷君??＜
奴隷君といわれてはじめはぴんと来なかった亜梨子だが、しばらく考えていると自分にこき使われ、友達にくっつかれて赤面している1人の少年を思い出す。
『ああ、大助のやつね。今頃ふゆほたるって子に会えてるかしらね』
＞亜梨子は会いたくないの??＜
会いたいかと言われると会いたい。
しかしどうやって彼の元に行こうというのだろうか。
自分の力ではここを出ることはできず、さらに自分のせいで不死の虫が復活してしまうのだから。
『でも麻里・・・私がここから出たら一緒に不死の虫も』
＞そのときはアリスが倒せばいいんだよ＜
『でもあの時あいつはハルキヨも退けたんだよ!?私なんかが・・・

』
覚えている、あの黒い集団につっこんで何度も跳ね返された少年の姿を。
あの少年でも叶わなかった不死の虫に自分なんかが勝てるのだろうか。
いくら自分が1号指定の虫憑きだからといって。
＞大丈夫＜
麻里の言葉にはどことなく自信があった。
それがどこから来るものなのかは分からないが、それを聞いただけできっとできる気がしてきた。
まるで隣にあの少年がいてくれたときのように。
＞きっと来てくれる＜
『誰が来てくれるのよ、麻里』
気になる亜梨子は姿の見えない親友に聞いてみる。
もったいぶるかのように間を置く親友だが、ようやく誰が来るのかを言う。しかしその名はアリスを驚愕させるものだった。
＞アリア・ヴァレイ。三匹目といってもいいかもしれないわね＜
見えないが、親友の笑みがひどく不気味だったのを亜梨子は感じていた。
それに何故いなくなっていた親友の声がいまさら聞こえているのか。
今ようやく疑問に思い始めるのだった。

夢戻る銀槍　???　ＰＡＲＴ　１（後書き）

海斗「コメント・アドバイスお願いします」

多賀子と恵那は久しぶりに再会した霞王たちと最近のことから思い出話に至って話に花を咲かせていた。
多賀子と恵那はすでに受験に合格しており、同じ大学に行くということ、そして今は最後の高校生活を満喫しているところだということを話す。
彼女たちはアンネリーゼたちの本当の顔を知っているために、彼女たちもまた、腹を割って話ができた。
「たくあの大喰いやろう・・・まったくの無駄足だったぜ」
遊覧船での出来事にまだアンネリーゼは根に持っていたのだ。
彼女自身も気がついている自分にも何かしらの兆候が起きていること。
それは夢が徐々に削られているからであった。
――俺様もいよいよやばい段階か??
まだあの悪魔と決着をつけていないと思うアンネリーゼ。
あの時屋敷に土足でやってきた悪魔。
ディオレストイによって虫憑きにされた彼女。
そんな虫憑きとなった彼女を捕まえにきたのがまぎれも泣く彼女が決着を付けたがっている少年・・・薬屋大助ことかっこうだった。
そんな少年は今桜架市にある東中央支部にて怪我の治療中なのだ。
なんでもスノウ・フライと海に打ち上げられた先で虫憑きとの戦いで負った怪我らしい。
いくら最強の虫憑きとはいえ、敵の領域でたたかうとなれば楽勝とは行かないらしい。
さらに彼の身にはアンネリーゼ以上の兆候が起きており、いつ成虫化が起きてもおかしくないらしい。

そんなことが起きる前に彼を倒しておこうと思い、けが人のみである彼に決闘を申し込もうとしたが、彼を慕う少女たちに阻まれそれは叶わなかった。

――一体どれだけのやつに好かれてんだか・・・。あんな悪魔を好くなんて物好きなやつらだぜ。

そんな彼女が横を見ればそういう少女であるCこと愛理衣とねねこと寧子がいた。

2人とも久しぶりの外出ということでおしゃれに気合をいれ、さらに再会した二人との話に夢中だった。

寧子はつい最近までかっこう・・・薬屋大助の看護として付きっ切りだった。

一体防音用の壁が使われた一室で何が行われたのか。

なにやらきれいになった寧子と休む前よりもやせ細ったかのように見えるかっこうこと薬屋大助。

火巫女こと土師千莉を筆頭に少女たちが尋問したがまったく口を割らなかった寧子。

そんなことを今は露も話さない彼女だが、薬屋大助を慕っている恵那に行ったところでどんなことになるかは予想もしたくないアンネリーゼ。

せっかくだからもう少し買い物をしようと5人は席を立つ。

久しぶりに来た赤牧市のデパート。

かつてよりも大幅にリニューアルされていた。

見たこともないファッションブランドやらそれらが扱ういまどきの服。

普段まったく服については気にしない彼女たちであるために、こういう数少ない機会を有効に使いたいと思う。

色々と見て回りながら、多賀子と恵那がそれぞれ選んだ服を試着して買い物を楽しんだ。

中にはかなり露出の高いものが混ざっていたが、それはあの悪魔を誘惑するためだろうとあきれるアンネリーゼ。

お互いに火花を散らせながら購入しようとしている愛理衣と寧子。
何をしてるんだかと横を見ればそんな二人を尻目に購入しようとしている恵那もいる。
お前もかよとツッコミたい気持ちを抑える。
ほとんどを多賀子に任せていたアンネリーゼ。
ようやく購入が終わり、再び休もうと喫茶店に移ったところで中身を確認する。
「ぶ！！テメエ！！俺様に何着せようと思ってんだこのヤロウ！！」
中に入ってたのは愛理衣たちと似たような露出の高いものだった。
「あれ？？アンネさんもそういうの好きなんですね」
「私たちの見て色々文句言ってた割には、やっぱり気になってたんですね」
「一体誰のために着るのかな？？誰のためかな？？」
袋の中から出した例のものを見て愕然とするアンネリーゼをニヤニヤしながらしてやったり顔の多賀子と意味ありげな笑みを浮かべる愛理衣・寧子・恵那。
ふと思い浮かんだのは自分を今日の訓練でギタギタに打ちのめした青年だった。
自分よりも年上の青年だが、虫憑きとしては自分が先輩である。
しかしそんな経験というものをいともたやすく実力という名の力によってねじ伏せてしまった。
その後の行動には顔から火が出るくらいの恥ずかしさだったが・・・。

「あれあれ？？顔が赤いですよアンネさん」
「アンネさん・・・まさか」
赤くなっていることにつっこむ愛理衣と口を覆ってまさかという顔の寧子。
「誰々？？あの怒りんぼのアンネが気になる人って」
「誰が怒りんぼだ！！」
顔を近づける恵那につばが飛ばんとするくらいの勢いで否定する。

ハーハーと肩で大きく息をする。
たかが叫んだくらいで戦闘後と同じくらい疲れたのは何故だろうか。
さらにそんなにも分かりやすい否定をするものだからか、逆効果を与えていることにも気がついていない。
「えへへ、アンネさん。そんなにも強く否定してるってことは、い・る・ん・で・す・ね??」
アンネリーゼが叫んだために周りの人に注目されていたが、しばらくしてそれがなくなったことを確認すると小さな声で多賀子が言う。
――――こ・・・コイツキャラ違うくねえか??
ものすごい笑みを造って迫ってくる彼女におされ気味のアンネリーゼ。
その後、彼女が恵那たちも含む４人に尋問されて、涙目になったのはまたの話だ。

夢戻る銀槍　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＰＡＲＴ　２（後書き）

海斗「ＢＵＧの方同様にコメント・アドバイス待ってます」

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　４（前書き）

海斗「一つの闇に触れる・・・」

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　４

カツカツと靴と床がぶつかる音が暗い廊下を反響する。
今は夜中の零時を回ろうかとしている時間だった。
歩いているのは特環の東中央支部の黒いコートを着た青年だった。
なぜか左の頬に大きなシップを張っている。
そこが大きく腫れ上がっていることから何か大きな衝撃を受けたらしい。
あの後調べ物を終えた佑介は買い物から帰ったアンネリーゼたちと会ったのだが。
『よう、今帰ったのか??結構買い込んだな』
『えへへ、アンネさん。そんなに後ろで縮こまらなくてもいいじゃないですか』
『うるせー、これも全部お前らのせいだ』
『そうですか??アンネさんなら耐え切ると思ったんですがね。結構恋する乙女だったんですね』
『このヤロウ!!寧子、ぶっ殺す!!』
『待て!!こんなところで戦っても上に起こられるだけだろ!?』
『うおおぉぉ!!』
『ぐはぁ!!』
『アンネさん!?ちょっと何してるんですか??』
『え!?何ってうわわわわ!?』
『大丈夫ですか佑介さん??』
『うぅ、何で行き当たりで女の子に殴られなきゃいけないんだ・・・』
頬をなでるとズキンとまだ痛みが残っていた。
いきなり寧子に殴りかかろうとしたアンネリーゼを通せんぼしようとしたが拳がジャストミートしたのだ。
さらに吹っ飛んだ先の壁に激突してしばらく気を失っていた佑介。

起きた後今このようにとある場所に向かって歩いていた。
今起きている局員は少なく、任務もほとんど入っていない。
肩には大きな鎌があり、それは暗闇に鈍い輝きを見せていた。
まるで暗闇の奥からやってくる死神のごとき容姿。
ゴーグルの機能を使って暗闇を進んでいく。
――こんなことをしていいとは思わないが・・・。
――それでも俺は特環に住み着く闇を知らなければいけない・・・
と思う。
『本当は声の主を助けに行きたいんだろ??それにディオレストイを殲滅するチャンスでもある』
仲間を連れてくればもっと楽かもしれない。
『だがそうなれば上が黙ってないだろうね。特にあの女』
――魅車八重子か・・・。
どうもいけ好かない副本部長としか思っていない佑介。
露もそんなことを表情や態度には出さないが。
ゆっくりと暗い地下へと階段を下りていく。
ゴーグルの地図機能にダウンロードしていた地下までの秘密ルートをつたっていく。
途中暗証番号をにゅう録する必要があったが、ハッキングすることで入手していたものを使い、難なく通過する。
進むにつれてなにやらぴりぴりとした感触を受ける。
それが地下にいるだろう槍使い・不死の虫そしてディオレストイから発せられるものなのかと思う。
厳重に閉められている部屋が目の前にあった。
『この中なんだろ??助けを呼んでいるやつがいるのは』
「ああ」
言葉少なげに変事をすると、佑介はぐっと重い扉を開ける。
ぎぎぎぃっという鈍い音とともに扉が開けられた。
そして目の前に現れたのは、銀色のりんぷんが回りに舞っている、光り輝く繭だった。

「これが・・・この中に槍使いと不死の虫が??」
眉に近づき、それに触れてみる。
まるで羽毛のように柔らかい感触。
すると不意打ちのようにゴギンっという大きな衝撃を頭に感じた。
――な・・・んだ??いきなり頭が殴られたような・・・。
ふらつきながらも、何とか鎌でからだを支える。
『ありがとう佑介、ようやく僕も最後の寝床に行き着くことができたと思うよ』
それは頭に響くのではなく、目の前の死黒虫から発せられる言葉だった。
驚愕のためか、目が見開かれる。
――誰だ・・・お前は。
口はパクパクと動くだけで、声が出ない。
ゆっくりと近づく死黒虫が鎌にとまり大きく変化する。
それが腕まで侵食し、同化する。
『ここからは俺に任せておきな。お前はそうやって見える光景を焼き付けておけ。本心を隠して逆のことをしようとしているアマチャンが』
――ふざけるな・・・。これは俺のからだだ。
必死に抵抗しようとするも、まったくからだが動かない。徐々に薄れていく意識。
『まだお前の質問に答えていなかったな。聞こえているかは分からんが、俺は死をつかさどる虫・・・アリア・ヴァレイ。さあ、行くぞ虫憑きの王』
そういうと方に持っていた大きな漆黒の鎌を構える。
刃の周りに黒いオーラを纏う。
それは・・・。
『憎しみ・・・怒り・・・悲しみ・・・嫉妬・・・独占欲・・・恐怖・・・不安・・・。すべては黒々しい闇』
ありとあらゆる負のエネルギーを操る虫憑きの王。

それらを一体に集めた釜を振り下ろす・・・助けを求める少女のいる繭に向かって。
ズバンと真っ二つに切られた繭。
魅車の話では、どんな手段でも切り開くことができなかった繭である。
中には何かを大事そうに抱えたまま眠っている少女がいた。
写真で見た姿よりは年が経っているからか成長した姿だった。
フワリと降りてきたモルフォンチョウ。
＞やはり来てくれたのね・・・アリア・ヴァレイ＜
超から少女の声が聞こえる。
その声を虫憑きの王・・・アリア・ヴァレイは知っている。
かつて自分が宿っていた1人の医者の卵の男を通して話をしたことがあるからだ。
＞先生は・・・元気?? ＜
超の周りに浮かぶ闇がかげながらの少女の姿を形作る。
花城麻里だった。
少女の言う先生とはかつて彼女の担当だったものであり、そのときのアリアの所有者だったものだ。
彼女が死に行くとき、彼は彼女の夢を食べた。
一命をとりとめた彼女。
しかしそのときアリアは先生から離れるはずだった。
だが彼女の病気は治ることがなかっただけでなく、アリアもまた先生からも離れることがなかった。
それは初めてのことだった。
それからしばらくして彼女はハンターとして不死の虫憑きを探すようになった。
からだが持たないこと、寿命が残り少ないことを知りながらだ。
そして彼女に初めての友達ができたのもその頃だ。
一之黒亜梨子。
昔からの由緒ある家柄の少女だった。

そんな彼女がひょんなことから麻里と友好な関係を作るようになり、親友になった。
そんな中でも麻里はハンターとしての行動をやめようとしなかった。
先生の忠告も聞かずに毎夜病院を抜け出した。
そしていよいよその目標を達成できないまま、死にに行こうとした。
しかしそのとき彼女が選択したこと・・・それは親友であるアリスに己の虫を預けたのだ。
天使の薬と悪魔の薬・・・どちらも選べないことから彼女は死んだ後も虫に宿って亜梨子のそばにいた。
そしてその後のことは・・・アリアは知らない。
『先生は・・・行方不明だ。最後にとある視まで1人の少女を虫憑きにしたっきり、彼とはあっていない』
申し訳なさそうに言うアリア。
徐々に影が鮮明なまでにその頃の少女の姿を作り出す。
あの頃と同じ姿の花城麻里。
麻里はそうとただ呟く。
＞また女の子を虫憑きにしちゃったんだ。まったくあの先生もなんだかね＜
『アハハ、そうだね。まったく困った先生だったよ』
懐かしそうに言うアリアと麻里。
「ううん・・・」
ふと彼らの後ろで誰かが唸る声がする。
振り返ると机に寝かせて、佑介の特環のコートをかけていた亜梨子が目を覚ましたのだ。
それは3年越しのお目覚めだった。
特徴的なポニーテールが揺らしながらむくりと起きる。
半開きの眠そうな目をこすり、自分にかかっているコートを見ると目を一気に見開く。
「大助は!?」
開口一番が特環最強の悪魔・・・かっこうこと薬屋大助の名前だ

った。
目の前にいる青年・・・佑介の姿をしているが中身はアリア・ヴァレイ。
そしてその隣にいるのはかつての彼女の親友であった少女だ。
死んだと思っていた少女がそこにいる。
幻かもしれないが、あまりのことに口を開けたまま静止している。
麻里はそんな亜梨子を見つめて微笑む。
病室で話していた頃と変わらないあの笑顔で。
「麻里！！」

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　４（後書き）

海斗「いやいや、ようやくタイトルのとおりになりましたね」

佑介『まったくなんだあの女は??』

亜梨子「何よ。あんたみたいな知らないやつになんだ呼ばわりされたくないわね」

海斗「まあまあ、これから仲良くなればいいじゃないですか」

夢戻る銀槍　亜梨子　ＰＡＲＴ　２

目の前にあの頃と同じ姿の少女がいた。
病室であったとき、少しひ弱そうな印象を受けた少女だ。
「麻里・・・」
亜梨子はそんな少女の名前を懐かしそうに呼ぶ。
＞亜梨子、久しぶりだね＜
麻里もまた懐かしそうに微笑む。
「どうしてここに??それに・・・私」
いきなりの環境の変化に戸惑っているようだった。
『戸惑うことも無理はない。でもここは君の住んでいた赤牧市にある特環中央支部だ』
アリアが佑介の声で言う。
「あんたは??」
『コードネームは死神。君と同じ火種１号指定の虫憑きだよ』
その言葉にまた驚く亜梨子。
彼女が眠る前にいたのはかっこう、ハルキヨ、レイディー。バード、そして自分の４人だったはずだ。
しかし今目の前にいる知らない青年は自分と同じ１号指定だという。
『とはいえ今は彼のからだを借りてるんだけどね。本当の名前は・・・アリア・ヴァレイ』
にやりと笑うアリア。
「あんたが・・・始まりの３匹のうちの１匹??」
後ろに下がりながら警戒態勢に入る亜梨子。
寝起きだというのにまったくからだは鈍っていないようだ。
そのてにはいつの間にか金属棒が握られていた。
そしてかつては大喰いによって虫憑きにされた彼女だが、現れていたモルフォンチョウがその棒に同化する。
＞そんな・・・どういうこと??＜

ありえない事態にアリアも無言で唖然とし、麻里はたじろいでいる。
先端をアリアに向けて言う。
「さあ、おとなしく殲滅されなさい」
――おいおい、いきなりかよこの女の子。一方的過ぎるだろ??
今となって意識を取り戻しつつあった佑介。
アリアの視点から亜梨子を見ていた。
アリアはというと、のど元に槍を突きつけられ、ごくりとつばを飲み込む。
――おいおいアリア!!これは一体どういうことだ??
『どうやら宿主が目覚めたようだね。それに、そろそろあいつが来る』
「あいつですって??誰よ」
――そうだ、誰なんだ??
佑介と亜梨子が同じことを聞く。
すると後ろの暗闇が続いているであろう廊下から靴が床と当たる音とするするという何か布がこすれる音が聞こえてきた。
フウッとアリアが嘆息する。
『アーア来ちゃったよ俺が一番嫌いなやつ。あいつは俺を殺そうとしてるんだよね』
ドアは佑介が閉めていなかったために開けられていた状態である。
暗闇の奥から現れたのは3人だった。
1人は女性だった。
にたりと甘ったるい感じの笑みを浮かべている。
『仕方ない・・・ここからはお前の出番だよ虫憑きの王・・・。お前の力はあんなものではないだろう??』
まるで挑発するかのように言いながら、アリア・ヴァレイは意識を佑介・・・死神へと返す。
「んっと・・・やっと戻ったか・・・」
いきなり口調が変わったのか、アリアも麻里も驚いていた。
「改めて、俺は特環東中央支部所属、火種1号の死神。分け合って

ここ中央支部に来ている」
2人ともはあとかはいとかときょとんとしている。
「自己紹介は終わったかしら??死神ちゃんに・・・槍使いちゃんまで??それにそこにいるのは・・・死んだはずよね??花城麻里ちゃん・・・いえ、ハンターちゃんといったほうがいいかしら??」
「魅車・・・あんた何しにここへ??」
「何をしにって??ほらあなたたちの後ろにいる不死の虫がそれを物語ってるんじゃないかしら??」
すると魅車の後ろから男が現れた。
それは佑介が写真でしか見たことがない人物であった。
しかし亜梨子は違った。
彼女は3年前の戦いで彼と戦い、そして彼の虫である不死の虫とともに眠りについてのだ。
「皇崇・・・あんたも起きたの??」
「貴様も少しは成長したんではないか??女らしくなった」
特環局長の皇崇だった。
そして彼の方にはクマムシがいた・・・不死の虫だ。
そして彼らの隣にいるのは、亜梨子は知らないが、佑介は忘れるはずがないものだった。
黒いぼろぼろのローブを羽織り、フードの隙間から見える顔はまるで老人。
いくつもの欠片を破壊してきたが、やつからはそれ以上のまがまがしさを感じた。
そう、佑介が探していた始まりの3匹のうちの1匹・・・。
「浸父・・・」
そう呟いた佑介の顔は最高に喜びを表現した生き生きとしたものだった。
そしてどがぁぁっぁあんという大きな音とともに天井が破壊されてきた。
なにやらうえでは聞こえていなかったが大きく警報がなっていた。

そして彼らの目の前に現れた少年。
よいしょと立ち上がるとほこりで汚れた服を叩いてきれいにする。
そこには見覚えのあるホッケーステイックを持った少年が立っている。
なにやらへらへらと軽薄な笑みを浮かべているがまったく隙がなかった。
それにあたりを見渡し冷静に状況を判断しているようだ。
「ひは！！んで・・・ここが戌子が言っていた特環ってとこか？？」
どうやら服装からして特環ではなさそうだが、むしばねでもなさそうだ。
それに気になる人物の名前・・・。
――あの少年・・・確か今戌子って・・・。
かつて自分にたった1日だけ訓練をしてくれた人物であり、浸父の欠片を一緒に倒した人物でもある。
『お前・・・誰だ？？』
低く、特環のゴーグルの置くには赤く光る赤外線。
そして温和な自分を押し殺し、冷徹非情な死神になる佑介。
そのとき押し殺していた素の佑介が出てくる。
雰囲気が冷たくなったのを感じたのだろう亜梨子も一歩下がる。
佑介を見つめたままおびえた表情になる。
今の彼からはあの特環最強と呼ばれたかっこう以上の殺気が出ているのだった。
警戒しているのは亜梨子だけではない。
目の前に現れた少年もまた、そして皇崇もまた然りだった。
『もう一度言う・・・おまえは誰だ？？』
鋭利な刃物のような鋭さを持った言葉が少年に突きつけられる。
眉間にしわを寄せた少年はゆっくりと口を開く。
「塩原鯱人・・・戦士だ」
ここに獅子堂戌子の鍛えた2人の戦士が集った。

夢戻る銀槍　亜梨子　ＰＡＲＴ　２（後書き）

海斗「コメント・アドバイスお願いします」

夢戻る銀槍　鯱人　ＰＡＲＴ　０

塩原鯱人。
佑介と同じ、獅子堂戌子の生徒である。
その証拠に彼女が愛用していたホッケースティックが肩に担がれていた。
『誰だ??』
目の前の大きな鎌を持った青年が言う。
姿やきているものから特環のものだと分かる。
しかし彼から感じられるそれは自分の詩であるし獅子堂戌子よりも大きく、そして一度だけ会ったことがある、特環の少年のよりも冷たく、ゴーグルから見える瞳は鋭く冷酷さがにじみ出ていた。
「塩原鯱人・・・戦士だ」
戦士なら戦え。
それが鯱人の師である獅子堂戌子の口癖だった。
そして今彼の目の前には自分の使命でもある殲滅するべき対象・・・
浸父がいた。
そしてその浸父の隣には男性と女性・・・おそらく特環のものだと容易に予想できた。
「次から次へと私の邪魔をする子達が現れるわね」
恨めしいという感じの言葉だが、その顔には笑みがあった。
まだ彼女には手札があるのだから。
「魅車・・・だっけ??あんた一体浸父と一緒にいて何をしようと??」
亜梨子が魅車の前にいる浸父をやりで示しながら言う。
詳しいことは分からないも、始まりの３匹を殲滅するための特環が何故その始まりの３匹を擁護しているのか。
それが彼女には分からなかった。
「貴様が知る必要はない、一之黒亜梨子。お前は特環でもむしばね

でもない、ただの虫憑きだ」
「ひは！！だったら俺もだな。俺はただそこにいるクソヤロウを殲滅したいだけだ」
スティックで浸父を指す。
『我が子よ・・・貴様も我を滅ぼすというのか』
まるで自分の子供に裏切られた親のような感じをかもし出す。
実際鯱人の虫を生み出したのは紛れもなく浸父である。
「ひは！！それが俺の戌子と約束したことだからな。それにお前がいなくなればお前の被害者である特殊型の虫憑きが解放される」
彼もまたそれにうすうす気がついていた。
自分たち虫憑きに取っての本当の敵とはなんなのか。
特環か？？それともむしばねか？？
根本的に考えれば虫とは始まりの３匹に行き着く。
『それはつまり始まりの３匹さえいなければ俺達虫憑きはただの人間に戻れる』
そう言い添える佑介・・・否死神。
「それは困るのよ死神ちゃん」
魅車が言う。
困るとは一体どういうことだと亜梨子は思う。
むしろ喜ぶべきではないか、特環とはもともとそういうための組織ではなかったのか。
『お前は一体何をたくらんでいるんだ魅車・・・？？俺達虫憑きを増やして・・・それを何に利用しようと』
「貴様も知る必要はないんだよ死神。新入りの癖してでしゃばりすぎだ」
でしゃばりすぎ・・・それは色々なことを含むものだった。
勝手に資料室に入り、そこからここの機密情報を盗んだ。
そして消してきてはいけない地下へと足を踏み入れ、亜梨子を永い眠りから覚ましてしまう。
しかしそれは不死の虫憑きをも目覚めさせてしまうこととなった。

それは分離型のそれが起きたということでそれらを生み出す大喰いに力を返してしまったことになる。
ならば彼らが今するべきこと。
利害は意外なところで一致していた。
死神は始まりの3匹を殲滅する。
亜梨子もまた然り。
鯱人も同じだった
「あなたが何をしようとしているかは分からないけど、私たち虫憑きにとってそれは最悪の結末とも言っていいとおもうわ」
「ひは！！おそらくその子に言うとおりだろうな」
『虫憑きを使って国をのっとろうってか??大層な考えの持ち主だ』
虫憑きの軍事的利用。
その勝ちは計り知れない。
虫憑きとは考えてみれば歩く殺人兵器とも思われている。
だからこそ人々に忌み嫌われているのだ。
「それを知った今・・・あなたたちはどうするつもりかしら??おとなしくしてくれたら、私が今まで以上に愛してあげてもいいのだけれども」
しかし3人は魅車の求める答えとは違う答えを言う。
「会いたい馬鹿がいるから却下」
「戌子のやつにに呪い殺されそうだから却下」
『すっこんでろ』
自分の愛を受け入れてもらえなかった魅車の顔には憎悪が表れる。
引きつった笑みである。
それぞれ鎌、槍、スティックを構える3人。
『殲滅開始だ！！』
死神の宣言を皮切りに戦いの火蓋が切って下ろされた。
見えない明日を手に入れるために、始まりの3匹を殲滅する。

夢戻る銀槍　鯱人　ＰＡＲＴ　０（後書き）

海斗「コメント・アドバイスお願いします」

夢戻る銀槍　亜梨子　ＰＡＲＴ　３

おのおの武器を構えて走り出す。
戦う相手はそれぞれこと話でも分かっていた。
死神と鯱人は始まりの３匹である浸父を。
そして亜梨子は不死の虫憑きを倒すことにしていた。
「叶わぬと分かっていても貴様は俺に挑むのか??一之黒亜梨子」
「うっさいわねあんた。うちの大助のほうがまだおとなしんじゃないかしら??」
「あんな悪魔と比べられたくないな」
「大助は寂しがりやなだけよ。悪魔なんてただの嘘の仮面よ」
そう叫びながら銀色に輝く槍を突き刺す。
玉虫の大群をその輝きが増して一気になぎ払う。
しかし数が数である。
かつてあの魔人であるハルキヨをも叩きのめした虫憑きである。
寝起きの自分がそこまで通用するか。
しかし今時分がやらなければ意味がない。
なんとしてもあの少年のところに戻りたい。
戻ったら殴る蹴るのオンパレードだと考えている。
きっと涙目で怒ってくれるだろう。
しかしそれが自分なりの彼とのスキンシップだった。
彼は嫌がっていたが。
「貴様のその力・・・お前単体のものではないな??」
何を言っているのかと思う。
しかし自分が持っている虫の力は分離型のはず。
だが今もっているのは同化した槍。
つまりそれは麻里がいたときに使っていたものと同じだった。
――麻里がそばにいてくれている??
それは幻想かもしれない。

嘘かもしれない。
しかし紛れもない、花城麻里が、一之黒亜梨子の親友がそばにいてくれるからではなかと思う。
＞大丈夫だよ亜梨子、わたしはここにいるから＜
「麻里？？」
確かに頭のなかに響いてきた声は麻里のものだった。
それは紛れもなく、槍と同化した虫から発せられていた。
＞死神の力で一時的に意識をこちらに引っ張ってきているだけなの。だからここにいる私はあの時消えたまでの記憶しか持っていないの＜
死んだ人を引っ張ってくる力。
それが死神の持つ力の一つだった。
「麻里がいてくれたら心強いわ」
＞私たちは2人で戦っている。勝つわよ亜梨子＜
「死人がのこのこ帰ってきてるんじゃねえよ！！」
タマムシを再び大群ではなってくる皇崇。
亜梨子を取り囲むように向かってくる。
「うっさいわね。虫憑きが嫌いなのに虫憑きを増やそうって言うあんたのほうが頭狂ってんじゃないの！！」
同化する部分が広がる。
再び見始めた夢が欠落するのが分かる。
しかし今はそんなことにかまっている暇はない。
銀色の輝きが増し、りんぷんが飛び交う。
「はあぁぁぁぁ！！」
タマムシごと槍と叩きつける亜梨子。
大きく特環の地下室を破壊する。
危険と判断したものたちは一斉に外へと非難した。
瓦礫のなかたった一人戦いを傍観していた魅車。
「あなたたちが私の元に返ってきてくれることを信じてるわ。だってこんなに愛してるんですもの」
暗闇の廊下をゆっくりと崩壊する地下室に背を向けて消えていった。

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　５（前書き）

やっと投稿出来る・・・感想・アドバイスお待ちしております。

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　５

「はあぁぁぁ！！」
スティックを振りかざして浸父に叩きつける。
そんな単調な攻撃は簡単にかわせるし、それは予測済みだった。
しかしかわされた後に叩き込まれた外の地面は大きく陥没していた。
アキアカネが現れてはスティックへと移動する。
ここに来るまでに質量のあるものをアキアカネに変えていたのだ。
質量の変換。
それが特殊型としての虫憑きの塩原鯱人の力だった。
『滅びへと向かっている貴様らが我を殲滅できるとでも？？』
ローブの舌から芋虫がわらわらと現れる。
鋭い牙を光らせ、鯱人へと突進する。
それを見かけとは裏腹に想像以上の質量を内蔵したスティックが芋虫を肉片へと変えていく。
自らの体重をアキアカネと変え、空中へと回避する。
現在の彼の体重は零。
まるで風船のようにらだが軽かった。
彼らの前に現れているのは大きな古ぼけた教会。
これこそ浸父の力の一つである。
しかし以前の戦いで浸父のことは戌子から聞いている鯱人。
「その汚れたローブが本体だ。ローブの形をしているのは、本体となる芋虫・・・攻撃時に生み出される芋虫は、あくまで能力が具現化したに過ぎない。――能力の発動体である空に浮かんだ“教会”か本体となる芋虫、そのいずれかを殲滅すればお前は滅ぶんだったよな」
わずかだが浸父の波動に動揺が見えた。
戌子同様に洞察力が長けている鯱人はそれを見逃さない。
「ひは！！動揺したな！？それは人間が与えたものだと知れ！！」

そう言ってスティックを振り回し、漂う瘴気をなぎ払いながら、浸父のからだへと叩き込む。
グジュリという嫌な音とともに神父はその計り知れない質量を感じながら後方へと吹き飛ばされる。
もぞもぞと起き上がる神父の前に大きな鎌を持った死神が現れる。
気配なくして現れた死神。
『アリアの子か・・・。貴様が虫憑きの王』
『俺がなんだか知らないが。殲滅させてもらうぜ』
そう言って鎌を一気に振り下ろす。
突如として現れた芋虫に邪魔されて浅く切り裂くしかできなかった。
切られた芋虫は黒いオーラに飲み込まれ、消滅した。
闇・・・。
それは一種の絶望である。
『虫憑きの王よ・・・。貴様は我の力をも兼ね備えているのか・・・』
誇らしげに語る浸父。
しかしそこには畏怖するものもあった。
あらゆる虫の力を操り、そして死をも踏み越えるそれこそ虫憑きの王。
まだ覚醒途中とはいえ、死んだはずの少女の意識を汲み取りそして虫の本質を変えてしまうその力。
まがまがしいその闇のオーラ。
飲み込まれたら消滅以外の何者もないそれ。
自分以上の絶望の根源となりうるそれを畏怖する浸父。
『しかし敵様が我を超えることができようか??』
『超えるも何も、殲滅したらそういうことになるだろうな』
闇をまとった鎌が芋虫の軍勢を切り裂き、飲み込む。
隙ができたところに、後ろから隙をうかがっていた鯱人が万力のごとき力でスティックを叩き込む。
爆風がおき、それによって距離ができる。

しかしそれが隙を作る。
浸父が逃げ出したのだ。
『まずい!!ここで取り逃がしたらまたいつ会えるか分かったもんじゃない』
「ひは!!ここは速さで勝る俺が行くしかないか」
知らない虫憑きに頼むのはいけ好かないが、ここはそんなことを考えている場合ではなかった。
今このとき虫憑きの王はここに迫り来る新たななにかを察知していた。
鯱人もまたなにかを感知していた。
しかし彼にとってはそれよりも神父のほうが重要だった。
死神もまたそうなのだが迫り来るなにかの力は、鯱人では対抗できないと予想した。
「ひは!!そっちの大きな獲物はあんたに任せるぜ」
『ならそっちのクソヤロウはお前が何とかしろ。戦士ならな』
「ひは!!言ってくれるぜ、俺はただの戦士じゃないぜ??狂戦士だ」
確かにそんな感じはしなくもないと思う。
体重をゼロにした鯱人は神父に後を感知能力を使って追い始める。
そして鯱人がいなくなってから数分後、そこに現れたのは1人の少女だった。
少女・・・そう表現したいが一人の魅力的な女性だ。
大きなトランクケースを持ち、こちらを見ている。
「あらあら、ようやく魔王のお城が見つかったと思ったら魔王を守る死神に出会っちゃったのかな??」
少女は魔王と聞きなれない言葉を言った。
「あなた・・・魔王がどこにいるか知ってる??」
魔王が誰なのかも知らない自分が答えられるはずもない。
『魔王とは誰のことだ??』
その質問に呆気にとられているようだ。

目の前の少女は死神のことを魔王を守っているものだとしか思っていなかったのだ。
「魔王・・・それはここにいるはずの魅車八重子のことよ」
魅車八重子・・・その名前は自分たち特環中央支部副支部長の名前である。
そういえば先ほどの瓦礫のなか一体どうなったのだろうか。
自分たちは先に逃げ出した浸父を追って外に出たので分からないが。
『俺達の副支部長が・・・魔王だって??』
「そうよ、虫憑きを使ってなにかをたくらんでいる魔王」
確かに浸父をかくまっていることからなにかをしようと、虫憑きを軍事的に使おうとしているのではないかというのが死神の見解だった。
『それで・・・??』
風と嘆息して、少女を睨む死神。
『お前の名前は??』
くすりと笑ってトランクを開ける。
なかからは何か巨大ななにかが飛び出してきた。
それは。
『虫・・・か。お前も虫憑きだったのか』
「いいえ、これは私の虫じゃないの。友達から貰った虫。だから私を殺してもこの虫は消えない」
厄介だなと思う。
虫を殺しても目の前の少女は傷つかない。
それはいいとして目の前の虫が今まで見たこともないくらいの大きさだった。
しかしなぜか負けるという気がしなかった。
どんな強敵にでも今なら立ち向かえる・・・勝てるというなぜかそんな気がしていた。
『もう一度聞く・・・。お前の名前はなんだ??』
ゆっくりと笑みを作りながら少女は言う。

「佐藤陽子・・・勇者よ」
朝焼けの日差しがまぶしいほどの明かりを出していた。

（完）

夢戻る銀槍　佑介　ＰＡＲＴ　５（後書き）

投稿したら第７章?!完結してしまった!!
続きは書いてますので少しづつ投稿します。
それでは今年最初の投稿、泉海斗をよろしくお願いします!!

夢救う勇者　プロローグ

暗い建物が地響きを起こしながら倒壊していく。これはどうやら大きな力が暴れまわっているようだ。大きな穴ができそこから飛び出していく黒い死神と狂戦士。追うは黒いローブを来た浸父。大きな力が上でも発揮されている。やり使いと不死の戦いである。

３年も前についたと思われていた彼らの戦い。永い眠りから醒めたばかりだが白黒はっきりしようということらしい。それに不死の虫憑きは分離型。始まりの３匹の大喰いに力を与えてしまう。そうなればきっとやつを倒すために尽力しているあの少年が大変な目にあう。

それだけは亜梨子にとって嫌だった。夢でも見た彼はぼろぼろの瀕死の状態。彼だけではない、彼女の願いを聞き入れてやって来てくれた魔人もまた今自分が戦っている敵との交戦で大怪我をおってしまったのだ。そんな彼らが迷うことなく戦えるようにするため、あの時一緒に戦えなかった文ここでそれを消化するため。

復活した１号指定の槍使い・一之黒亜梨子は銀色の槍を振るい、タマムシたちに特攻する。

１人の少年は肩に師匠の遺品でもあるホッケースティックを担いで前方に逃走中の浸父を追いかけていた。自身の体重を虫に変えてゼロにすることで無重力の状態でいる。軽く踏み込んだだけでどこまでも飛んでいけそうな軽快な動き。どこに逃げようとも前方のやつ自身が生み出した特殊型の虫憑きである彼にはどこにいるのかを察知する力があった。

飛ぶついでに周りの物質からの質量を集めそれをスティックの力へとかえる。今は亡き彼の師匠。最後まで意様シック戦士として戦い抜き、そして散っていった。それを見取ることもできなかった。しかし彼が最後に見た彼女はまさしく自分が目指すべき戦士の姿。戸惑うことなく戦い続ける狂戦士。

狂戦士・鯱人は、自分の進むべき道を与えてくれた師匠のためにも今ここで宿敵を倒すと決めた。
死神の前に現れたのは魔王である。死神というの他の人が呼ぶコードネームであり、彼には知られていない名があった。虫憑きの王・・・。大きな鎖のついた釜を肩から担いでいるその姿は夢をいうよりも魂を狩ろうとしているように見える。
そして彼の目の前にいるのは大きな虫を従え、肩には小さな虫が乗っている女性だ。彼女は自らを勇者と名乗った。そしてここにいるであろう魔王を倒しに来たという。大きな虫・・・ゲニウスからはたくさんの無視や虫憑きたちの恨みが感じられた。死をつかさどる虫・・・三匹目を持つ死神はそう感じていた。
死神は攻め込もうとする勇者を敵とみなし特環を守ろうとしている。方や勇者はそこにいるであろう魔王を倒そうとしている。死黒虫・・・アリア・ヴァレイが右腕に止まり同化を始める。それが左肩まで侵食が進み、上半身をほぼ覆ってしまった。
『さあ・・・狩りの始まりだ』

夢救う勇者　鯱人　ＰＡＲＴ　０

中央支部があるところから数キロは慣れた廃工場ではげしい爆音が響いていた。ガラガラと建物が破壊され、その煙の中から二つの影が飛び出す。一つは始まりの３匹の１匹である浸父・・・ディオレストイ。もう一つは狂戦士・・・亡き師匠との約束を果たすために戦い続ける塩原鯱人。

「ひは！！相変わらず趣味悪い攻撃だな・・・浸父」

『我が子よ・・・そこまでして生みの親である我を殲滅するというのか』

「会うたびに言っているだろ？？俺はむかつくお前を殲滅するとな！！人の夢汚しやがって」

『我が子よ・・・今一度絶望を味わらせてくれよう』

夜であるために空は漆黒の闇に包まれていたが、さらにどす黒い何かが空を覆いつくす。そこに現れたのは大きな教会。

浸父が現れ、虫憑きを生み出すたびに現れる教会である。人の心にある絶望・悲しみ・怒り・嫉妬・欲望・痛みなど負の感情を読み取りそれを具現化させることでそのものに更なる絶望を与えるのだ。

教会を破壊するか、浸父の操る芋虫を倒すことで今までの欠片を殲滅することはできていた。しかし今日の前似るのは紛れもなく本体である。

今までどおりの戦い方で勝てるとは到底思えなかった。しかし風もなく穏やかな夜。ここで浸父を倒すことができれば自分を含めた特殊型の虫憑きは助かるのである。

誰の夢も奪わずに達成することができるものではない。しかし死なせないことはできる。体重が無である鯱人はスティックを構えて一気に間合いをつめる。

浸父がそれに向かってローブ下から芋虫を放つ。今までどおりだと思いながら、見た目以上の威力を持っているスティックを叩き込

み、芋虫を叩き砕く。
　砕けたからだから体液や肉片が辺りの地面や工場後の壁に飛び散りグロテスクな空間を作り出す。それらを浴びても戦いのなかでは彼は止まれない。頭は冷静でも心は真っ赤に燃えていた。一心不乱に神父が捕らえきれない速さで移動しては、そのからだにスティックを叩き込む。
　防御用の芋虫たちがグジュリという音を立ててはその場に肉片と化して崩れる。
『おお・・・良くぞここまで強くなった。我が子よ』
「ひは!!何感極まってるんだ??まさか涙腺弱いって言うんじゃないだろうな??」
　特殊型の鯱人の成長振りを喜びながらも、その自分の子に対して手を上げる浸父。その得体の知れない笑みに何が隠されているのか。
鯱人はその顔に向かって拳を叩き込んだ。

夢救う勇者　亜梨子　ＰＡＲＴ　０

見覚えがある場所だった。

中央支部がたまたま近かったからか、それとも運命の悪戯か。

「くっくっく、貴様とまさかこんなところで戦うことになろうとはな。覚えているだろう？？ここで貴様が私の虫とともに眠りについたことを！！」

目の前にいる皇崇が正面から退治している亜梨子に向かって睨みつけながら叫ぶ。

彼が虫を使ってどんなことをたくらんでいたのかは亜梨子には分からない。

しかし虫憑きたちにとってそれが光となることはないと、肌で感じていた。

かつてここで大喰いとの決着をつけようと計画し、最強の１号指定たちが集まって戦った。

立花莉奈が来なかったことはかなりの痛手であったが彼らが絶対に勝てると思っていた。

悪魔と呼ばれ、特環最強の虫憑きであるかっこう。

そのかっこうと同等の力をもつ魔人・・・ハルキヨ。

そして特環、ハルキヨ、むしばねを一つの場所に集めた少女・・・
一之黒亜梨子。

絶対に勝てる。

そう疑うことなく戦いに挑んでいった少年少女たち。

しかし結果は惨敗だった。

不死の虫憑きの力がこれほどまでとは思っていなかったのだ。

その不死の虫憑きを倒そうとしたハルキヨもまったく敵わなかった。

その相手が今自分の目の前にいると、あのときの戦いを思い出しながら睨みつける。

亜梨子の手には銀色のりんぷんを飛ばすモルフォンチョウが同化した槍があった。

眠りに突く前に彼女が使っていたものである。

分離型の虫憑き出会ったはずの亜梨子だが、なぜかモルフォンチョウは同化型になっていた。

さらに花城麻里の思い出の欠片も含めて・・・。

彼女が亜梨子とともに戦えるのは、虫たちが消滅するまでの残された時間である。

親友が隣にいる。

それだけで十分亜梨子にとっては力になっていた。

かつていなくなったことで戦いから逃げ出したくなったときがあった。

しかしあきらめずに戦った少年がいた。

彼はまたどこかで虫に抗いながらも戦い続けているだろう。

自分が今眠りから醒め、宿敵と対峙していることは分からないだろう。

でもこの戦いに勝ちたかった。

勝ってあの少年に会いたかった。

自分の監視役として派遣されてきた同い年の少年。

普通を極めた少年としか思えなかった存在から、いつの間にか自分を助けてくれる、誰もが麻里のことを幻想だといったことに最後まで信じてくれた少年。

大きく見えてそれでも遠い背中。

そばにいられていたと思っていても戦いとなれば足手まとい。

だがたくさんの出会いを繰り返し、今永い眠りから醒めた自分は違うといいきれた。

絶対にあいつを振り向かせる・・・そう思いやりを力強く握り締める。

銀色の光が強まる。

「今度こそ私たちの手で虫憑きたちを救ってみせる!!」

月光が亜梨子と皇崇を明るく、そして冷ややかに照らしていた。

夢救う勇者　亜梨子　ＰＡＲＴ　０（後書き）

久しぶりの投稿になります。

いつの間にか１２万アクセス・・・本当にありがとうございます。

最新刊では再び浸父との戦いで敗北必至までに言ってますからね。

今作品ではおそらくオリジナルエンドになるかもしれません。

かっこう・・・薬屋大助のヒロインは??

もう一人の主人公・・・佑介のヒロインは??

一応完結の様子はできているのですが・・・、後は戦いにおいてどれだけの虫憑きたちを出せるかということ・・・。

皆さんは誰が出て欲しいですか??

どんな虫憑きがいて、いまだに生存しているかを確かめつつ登場させていきたいと思っています。

主人公が大きく負けている様子はまだないので、そういうところも書こうかと・・・。

それがアリアフラグ??になるかも。

それはともかく、この作品は最後まで行きたいですね。

現在はリリカルなのはを中心に執筆していますが、気長に待っていてください。

それではまた次のお話で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8269n/

ムシウタ

2011年6月30日19時44分発行